

関西外国語大学大学院外国語学研究科

博士学位申請論文 2016 年

日中両言語における数字を含む四字熟語の対照研究

関西外国語大学大学院

外国語学研究科 言語文化専攻

李 叶

目 次

第一章 序論	1
I. 問題提起	1
II. 研究のカテゴリー	2
III. 研究目的	2
IV. 研究方法	3
第二章 用語の定義と先行研究	4
I. 用語の定義	4
1. 数字	4
1.1 日本語における数字	4
1.2 中国語における数字	4
2. 四字熟語	5
2.1 日本語における四字熟語	5
2.2 中国語における“四字成语”	7
3. 本論における数字と四字熟語	8
3.1 数字	8
3.2 四字熟語	9
II. 先行研究	9
1. 日本語における先行研究	9
2. 中国語における先行研究	11
3. 先行研究の検討	14
3.1 日本語の場合	14
3.2 中国語の場合	14
第三章 日中両言語における数字を含む四字熟語の対照考察	16
I. 数字「一」	16
1. 日中両言語における数字「一」の意味分析	16
1.1 日本語の場合	16
1.2 中国語の場合	17
1.3 数字「一」のプロトタイプに関する比較対照	17

1.4 数字「一」の意味拡張に関する比較対照.....	19
1.5 数字「一」の拡張的意味と等級の上下に関する比較対照.....	23
1.5.1 日中両国で等級が逆になるもの.....	24
1.5.2 日中両国で等級が共通するもの.....	37
1.5.3 まとめ	51
2. 日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の全体像.....	51
2.1 日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の出典考察.....	52
2.1.1 日本語の場合	52
2.1.1.1 中国を起源とした数字「一」を含む四字熟語.....	52
2.1.1.2 日本を起源とした数字「一」を含む四字熟語.....	53
2.1.1.3 他国を起源とした数字「一」を含む四字熟語.....	53
2.1.1.4 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「一」を含む四字熟語....	53
2.1.2 中国語の場合	54
2.1.2.1 中国を起源とした数字「一」を含む四字熟語.....	54
2.1.2.2 他国を起源とした数字「一」を含む四字熟語.....	55
2.1.2.3 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「一」を含む四字熟語....	55
2.1.3 数字「一」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	56
2.2 日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の構成考察.....	56
2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「一」の現れる位置考察.....	56
2.2.1.1 日本語の場合	56
2.2.1.2 中国語の場合	57
2.2.1.3 四字熟語における数字「一」の現れる位置に関する比較対照.....	58
2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「一」と他の数字との共起関係の考察....	58
2.2.2.1 日本語の場合	58
2.2.2.2 中国語の場合	59
2.2.2.3 四字熟語における数字「一」と他の数字との共起関係に関する比較対照....	60
3. 数字「一」を含む四字熟語の対照考察.....	63
3.1 両言語とも「一」を含み、同義・類義を表すもの.....	64
3.2 両言語とも「一」を含み、異義を表すもの.....	68
3.3 一方の言語で「一」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	73

4. 数字「一」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	76
II. 数字「二」	83
1. 日中両言語における数字「二」の意味分析.....	83
1.1 日本語の場合	83
1.2 中国語の場合	83
1.3 数字「二」のプロトタイプに関する比較対照.....	84
1.4 数字「二」の意味拡張に関する比較対照.....	86
2. 日中両言語における数字「二」を含む四字熟語の全体像.....	88
2.1 日中両言語における数字「二」を含む四字熟語の出典考察.....	88
2.1.1 日本語の場合	88
2.1.1.1 中国を起源とした数字「二」を含む四字熟語.....	89
2.1.1.2 日本を起源とした数字「二」を含む四字熟語.....	89
2.1.1.3 他国を起源とした数字「二」を含む四字熟語.....	89
2.1.1.4 佛教または仏教に関連するものを起源とした数字「二」を含む四字熟語....	89
2.1.2 中国語の場合	90
2.1.2.1 中国を起源とした数字「二」を含む四字熟語.....	90
2.1.2.2 他国を起源とした数字「二」を含む四字熟語.....	91
2.1.2.3 佛教または仏教に関連するものを起源とした数字「二」を含む四字熟語....	91
2.1.3 数字「二」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	91
2.2 日中両言語における数字「二」を含む四字熟語の構成考察.....	92
2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「二」の現れる位置考察.....	92
2.2.1.1 日本語の場合	92
2.2.1.2 中国語の場合	93
2.2.1.3 四字熟語における数字「二」の現れる位置に関する比較対照.....	94
2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「二」と他の数字との共起関係の考察....	94
2.2.2.1 日本語の場合	94
2.2.2.2 中国語の場合	95
2.2.2.3 四字熟語における数字「二」と他の数字との共起関係に関する比較対照....	95
3. 数字「二」を含む四字熟語の対照考察.....	97
3.1 両言語とも「二」を含み、同義・類義を表すもの.....	97

3.2 両言語とも「二」を含み、異義を表すもの.....	99
3.3 一方の言語で「二」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	101
4. 数字「二」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	104
III. 数字「三」	110
1. 日中両言語における数字「三」の意味分析.....	110
1.1 日本語の場合	110
1.2 中国語の場合	110
1.3 数字「三」のプロトタイプに関する比較対照.....	111
1.4 数字「三」の意味拡張に関する比較対照.....	112
2. 日中両言語における数字「三」を含む四字熟語の全体像.....	115
2.1 日中両言語における数字「三」を含む四字熟語の出典考察.....	115
2.1.1 日本語の場合	115
2.1.1.1 中国を起源とした数字「三」を含む四字熟語.....	115
2.1.1.2 日本を起源とした数字「三」を含む四字熟語.....	115
2.1.1.3 他国を起源とした数字「三」を含む四字熟語.....	116
2.1.1.4 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「三」を含む四字熟語....	116
2.1.2 中国語の場合	116
2.1.2.1 中国を起源とした数字「三」を含む四字熟語.....	117
2.1.2.2 他国を起源とした数字「三」を含む四字熟語.....	117
2.1.2.3 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「三」を含む四字熟語...	117
2.1.3 数字「三」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	118
2.2 日中両言語における数字「三」を含む四字熟語の構成考察.....	118
2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「三」の現れる位置考察.....	118
2.2.1.1 日本語の場合	118
2.2.1.2 中国語の場合	119
2.2.1.3 四字熟語における数字「三」の現れる位置に関する比較対照.....	120
2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「三」と他の数字との共起関係の考察...	120
2.2.2.1 日本語の場合	120
2.2.2.2 中国語の場合	121
2.2.2.3 四字熟語における数字「三」と他の数字との共起関係に関する比較対照...	122

3. 数字「三」を含む四字熟語の対照考察.....	126
3.1 両言語とも「三」を含み、同義・類義を表すもの.....	126
3.2 両言語とも「三」を含み、異義を表すもの.....	129
3.3 一方の言語で「三」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	131
4. 数字「三」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	135
IV. 数字「四」	141
1. 日中両言語における数字「四」の意味分析.....	141
1.1 日本語の場合	141
1.2 中国語の場合	141
1.3 数字「四」のプロトタイプに関する比較対照.....	142
1.4 数字「四」の意味拡張に関する比較対照.....	142
2. 日中両言語における数字「四」を含む四字熟語の全体像.....	145
2.1 日中両言語における数字「四」を含む四字熟語の出典考察.....	145
2.1.1 日本語の場合	145
2.1.1.1 中国を起源とした数字「四」を含む四字熟語.....	145
2.1.1.2 日本を起源とした数字「四」を含む四字熟語.....	146
2.1.1.3 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「四」を含む四字熟語...	146
2.1.2 中国語の場合	147
2.1.2.1 中国を起源とした数字「四」を含む四字熟語.....	147
2.1.2.2 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「四」を含む四字熟語...	147
2.1.3 数字「四」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	148
2.2 日中両言語における数字「四」を含む四字熟語の構成考察.....	148
2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「四」の現れる位置考察.....	148
2.2.1.1 日本語の場合	148
2.2.1.2 中国語の場合	149
2.2.1.3 四字熟語における数字「四」の現れる位置に関する比較対照.....	150
2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「四」と他の数字との共起関係考察....	150
2.2.2.1 日本語の場合	150
2.2.2.2 中国語の場合	151
2.2.2.3 四字熟語における数字「四」と他の数字との共起関係に関する比較対照...	152

3. 数字「四」を含む四字熟語の対照考察.....	154
3.1 両言語とも「四」を含み、同義・類義を表すもの.....	154
3.2 両言語とも「四」を含み、異義を表すもの.....	157
3.3 一方の言語で「四」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	158
4. 数字「四」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	161
V. 数字「五」	167
1. 日中両言語における数字「五」の意味分析.....	167
1.1 日本語の場合	167
1.2 中国語の場合	167
1.3 数字「五」のプロトタイプに関する比較対照.....	168
1.4 数字「五」の意味拡張に関する比較対照.....	168
2. 日中両言語における数字「五」を含む四字熟語の全体像.....	171
2.1 日中両言語における数字「五」を含む四字熟語の出典考察.....	171
2.1.1 日本語の場合	171
2.1.1.1 中国を起源とした数字「五」を含む四字熟語.....	171
2.1.1.2 日本を起源とした数字「五」を含む四字熟語.....	172
2.1.1.3 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「五」を含む四字熟語...	172
2.1.2 中国語の場合	173
2.1.2.1 中国を起源とした数字「五」を含む四字熟語.....	173
2.1.2.2 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「五」を含む四字熟語...	173
2.1.3 数字「五」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	174
2.2 日中両言語における数字「五」を含む四字熟語の構成考察.....	174
2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「五」の現れる位置考察.....	174
2.2.1.1 日本語の場合	175
2.2.1.2 中国語の場合	175
2.2.1.3 四字熟語における数字「五」の現れる位置に関する比較対照.....	176
2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「五」と他の数字との共起関係考察....	176
2.2.2.1 日本語の場合	176
2.2.2.2 中国語の場合	177
2.2.2.3 四字熟語における数字「五」と他の数字との共起関係に関する比較対照...	178

3. 数字「五」を含む四字熟語の対照考察.....	181
3.1 両言語とも「五」を含み、同義・類義を表すもの.....	181
3.2 両言語とも「五」を含み、異義を表すもの.....	183
3.3 一方の言語で「五」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	184
4. 数字「五」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	188
VI. 数字「六」	194
1. 日中両言語における数字「六」の意味分析.....	194
1.1 日本語の場合	194
1.2 中国語の場合	194
1.3 数字「六」のプロトタイプに関する比較対照.....	195
1.4 数字「六」の意味拡張に関する比較対照.....	196
2. 日中両言語における数字「六」を含む四字熟語の全体像.....	199
2.1 日中両言語における数字「六」を含む四字熟語の出典考察.....	199
2.1.1 日本語の場合	199
2.1.1.1 中国を起源とした数字「六」を含む四字熟語.....	199
2.1.1.2 日本を起源とした数字「六」を含む四字熟語.....	199
2.1.1.3 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「六」を含む四字熟語...	200
2.1.2 中国語の場合	200
2.1.2.1 中国を起源とした数字「六」を含む四字熟語.....	200
2.1.2.2 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「六」を含む四字熟語...	201
2.1.3 数字「六」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	202
2.2 日中両言語における数字「六」を含む四字熟語の構成考察.....	202
2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「六」の現れる位置考察.....	202
2.2.1.1 日本語の場合	202
2.2.1.2 中国語の場合	203
2.2.1.3 四字熟語における数字「六」の現れる位置に関する比較対照.....	204
2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「六」と他の数字との共起関係考察....	204
2.2.2.1 日本語の場合	204
2.2.2.2 中国語の場合	204
2.2.2.3 四字熟語における数字「六」と他の数字との共起関係に関する比較対照...	205

3. 数字「六」を含む四字熟語の対照考察.....	207
3.1 両言語とも「六」を含み、同義・類義を表すもの.....	207
3.2 一方の言語で「六」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	209
4. 数字「六」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	211
VII. 数字「七」	218
1. 日中両言語における数字「七」の意味分析.....	218
1.1 日本語の場合	218
1.2 中国語の場合	218
1.3 数字「七」のプロトタイプに関する比較対照.....	219
1.4 数字「七」の意味拡張に関する比較対照.....	220
2. 日中両言語における数字「七」を含む四字熟語の全体像.....	223
2.1 日中両言語における数字「七」を含む四字熟語の出典考察.....	223
2.1.1 日本語の場合	223
2.1.1.1 中国を起源とした数字「七」を含む四字熟語.....	223
2.1.1.2 日本を起源とした数字「七」を含む四字熟語.....	223
2.1.1.3 佛教または仏教に関連するものを起源とした数字「七」を含む四字熟語...	224
2.1.2 中国語の場合	224
2.1.2.1 中国を起源とした数字「七」を含む四字熟語.....	224
2.1.2.2 佛教または仏教に関連するものを起源とした数字「七」を含む四字熟語...	225
2.1.3 数字「七」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	226
2.2 日中両言語における数字「七」を含む四字熟語の構成考察.....	226
2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「七」の現れる位置考察.....	226
2.2.1.1 日本語の場合	226
2.2.1.2 中国語の場合	227
2.2.1.3 四字熟語における数字「七」の現れる位置に関する比較対照.....	228
2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係考察.....	228
2.2.2.1 日本語の場合	228
2.2.2.2 中国語の場合	229
2.2.2.3 四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係に関する比較対照...	229
3. 数字「七」を含む四字熟語の対照考察.....	231

3.1	両言語とも「七」を含み、同義・類義を表すもの.....	231
3.2	両言語とも「七」を含み、異義を表すもの.....	232
3.3	一方の言語で「七」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	234
4.	数字「七」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	237
VIII.	数字「八」.....	243
1.	日中両言語における数字「八」の意味分析.....	243
1.1	日本語の場合	243
1.2	中国語の場合	243
1.3	数字「八」のプロトタイプに関する比較対照.....	244
1.4	数字「八」の意味拡張に関する比較対照.....	245
2.	日中両言語における数字「八」を含む四字熟語の全体像.....	247
2.1	日中両言語における数字「八」を含む四字熟語の出典考察.....	248
2.1.1	日本語の場合	248
2.1.1.1	中国を起源とした数字「八」を含む四字熟語.....	248
2.1.1.2	日本を起源とした数字「八」を含む四字熟語.....	248
2.1.1.3	仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「八」を含む四字熟語...	248
2.1.2	中国語の場合	249
2.1.2.1	中国を起源とした数字「八」を含む四字熟語.....	249
2.1.2.2	仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「八」を含む四字熟語...	250
2.1.3	数字「八」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	251
2.2	日中両言語における数字「八」を含む四字熟語の構成考察.....	251
2.2.1	日中両言語の四字熟語における数字「八」の現れる位置考察.....	251
2.2.1.1	日本語の場合	251
2.2.1.2	中国語の場合	252
2.2.1.3	四字熟語における数字「八」の現れる位置に関する比較対照.....	252
2.2.2	日中両言語の四字熟語における数字「八」と他の数字との共起関係考察.....	253
2.2.2.1	日本語の場合	253
2.2.2.2	中国語の場合	253
2.2.2.3	四字熟語における数字「八」と他の数字との共起関係に関する比較対照...	254
3.	数字「八」を含む四字熟語の対照考察.....	256

3.1	両言語とも「八」を含み、同義・類義を表すもの.....	256
3.2	両言語とも「八」を含み、異義を表すもの.....	257
3.3	一方の言語で「八」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	258
4.	数字「八」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	261
IX.	数字「九」	269
1.	日中両言語における数字「九」の意味分析.....	269
1.1	日本語の場合	269
1.2	中国語の場合	269
1.3	数字「九」のプロトタイプに関する比較対照.....	270
1.4	数字「九」の意味拡張に関する比較対照.....	271
2.	日中両言語における数字「九」を含む四字熟語の全体像.....	273
2.1	日中両言語における数字「九」を含む四字熟語の出典考察.....	273
2.1.1	日本語の場合	273
2.1.1.1	中国を起源とした数字「九」を含む四字熟語.....	273
2.1.1.2	日本を起源とした数字「九」を含む四字熟語.....	274
2.1.1.3	仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「九」を含む四字熟語...	274
2.1.2	中国語の場合	274
2.1.2.1	中国を起源とした数字「九」を含む四字熟語.....	275
2.1.2.2	仏教または仏教関連のものを起源とした数字「九」を含む四字熟語	275
2.1.3	数字「九」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	276
2.2	日中両言語における数字「九」を含む四字熟語の構成考察.....	276
2.2.1	日中両言語の四字熟語における数字「九」の現れる位置考察.....	276
2.2.1.1	日本語の場合	276
2.2.1.2	中国語の場合	277
2.2.1.3	四字熟語における数字「九」の現れる位置に関する比較対照.....	278
2.2.2	日中両言語の四字熟語における数字「九」と他の数字との共起関係考察.....	278
2.2.2.1	日本語の場合	278
2.2.2.2	中国語の場合	279
2.2.2.3	四字熟語における数字「九」と他の数字との共起関係に関する比較対照...	280
3.	数字「九」を含む四字熟語の対照考察.....	281

3.1	両言語とも「九」を含み、同義・類義を表すもの.....	281
3.2	両言語とも「九」を含み、異義を表すもの.....	283
3.3	一方の言語で「九」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	284
4.	数字「九」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	286
X.	数字「十」	292
1.	日中両言語における数字「十」の意味分析.....	292
1.1	日本語の場合	292
1.2	中国語の場合	292
1.3	数字「十」のプロトタイプに関する比較対照.....	293
1.4	数字「十」の意味拡張に関する比較対照.....	293
2.	日中両言語における数字「十」を含む四字熟語の全体像.....	296
2.1	日中両言語における数字「十」を含む四字熟語の出典考察.....	296
2.1.1	日本語の場合	296
2.1.1.1	中国を起源とした数字「十」を含む四字熟語.....	297
2.1.1.2	日本を起源とした数字「十」を含む四字熟語.....	297
2.1.1.3	他国を起源とした数字「十」を含む四字熟語.....	297
2.1.1.4	仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「十」を含む四字熟語...	297
2.1.2	中国語の場合	298
2.1.2.1	中国を起源とした数字「十」を含む四字熟語.....	298
2.1.2.2	仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「十」を含む四字熟語...	299
2.1.3	数字「十」を含む四字熟語の出典に関する比較対照.....	299
2.2	日中両言語における数字「十」を含む四字熟語の構成考察.....	300
2.2.1	日中両言語の四字熟語における数字「十」の現れる位置考察.....	300
2.2.1.1	日本語の場合	300
2.2.1.2	中国語の場合	301
2.2.1.3	四字熟語における数字「十」の現れる位置に関する比較対照.....	302
2.2.2	日中両言語の四字熟語における数字「十」と他の数字との共起関係考察....	302
2.2.2.1	日本語の場合	302
2.2.2.2	中国語の場合	303
2.2.2.3	四字熟語における数字「十」と他の数字との共起関係に関する比較対照...	304

3.	数字「十」を含む四字熟語の対照考察.....	305
3.1	両言語とも「十」を含み、同義・類義を表すもの.....	305
3.2	両言語とも「十」を含み、異義を表すもの.....	306
3.3	一方の言語で「十」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの	308
4.	数字「十」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化.....	309
	第四章　まとめ.....	314

日中両言語における数字を含む四字熟語の対照研究

第一章 序論

I. 問題提起

数字や数字を含む四字熟語(中国語においては、“四字成语”と言う。なお、本論では便宜上、「四字熟語」という表現に統一する)は人々の日常生活での成功した経験、失敗から得た教訓、科学的知識、文化的体験などを巧みに織り込んで、作り上げたもので、日本語においても、中国語においてもよく見られる。

日本のドラマに「お前、自身を売っても二束三文にしかならんけどな。」という台詞があった。しかし、中国語では「三文」ではなく、“一文不值”(一文の値打ちもない)という四字熟語で表す。また、日本語において、どこにでもいる、一般的な人のことを「熊公八公」というが、中国語では“张三李四”という四字熟語で表す。同じ意味を表す四字熟語にもかかわらず、日中両言語において異なる数字を使っているのはなぜか。それは日本と中国とともに、それぞれ独自の数字文化が内在しているからだと考えられる。とするならば、両国の数字にまつわる文化の相違点や共通点を探ることで、数字に見出してきた意義や価値、さらに伝承や宗教へと続く古人たちの意識までをも知ることができると思われる。

日中両国は一衣帶水の隣国である。両国には紀元前からの長い文化交流の歴史があるため、日中両国の文化には類似したところ、共通したところが多く見られる。そのため、日中両言語における数字を含む四字熟語においても、その意味や用法において類似しているものが多数存在している。一石二鳥//一箭双雕、三人文殊//三臭皮匠、頂門一針//当头一棒、二股膏藥//脚踏二船、四宇和平//四海升平、七步之才//七步为诗、八方美人//八面玲珑、九腸寸断//回肠九转などがその例として挙げられる。

しかし、その一方、長い交流の歴史があるとはいえ、地理的環境・歴史的背景・風俗習慣などが異なっているため、日中両国ではそれぞれの文化も形作られた。これは数字を含む四字熟語の意味や用法の面にも見られ、主に二つに分類することができる。一つは同じ数字¹を使って、異なる意味を表すもの²である。例えば、一日千金≠一日千金、一騎当千≠一马当先、七転八倒≠七颠八倒、一長一短≠一长一短、二人三脚≠二人三足、一刀兩断≠一刀两断、長舌三寸≠三寸之舌、朝三暮四≠朝三暮四、聚散十春≠十年生聚などがその

例である。

もう一つは異なる数字を使って、同じ意味や類似した意味を表すもの³である。十人十色//一龙九种、二束三文//一文不值、三日坊主//一曝十寒、武士二言//一言九鼎、遮二無二//不顾一切、四之五之//说三道四、二進三進//一筹莫展、一枚看板//金字招牌、岡目八目//旁观者清、總領甚六//傻瓜老大、六菖十菊//明日黄花、五花八门//多種多様、五湖四海//津津浦浦、乌七八糟//滅茶苦茶などがその例である。

本論では言語学的及び認知的観点と文化的観点を合わせて考えながら、日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を対照研究し、数字の拡張的意味と四字熟語の比喩的意味が如何に関連するか、または日中両国におけるそれぞれの歴史、習慣、発想などのいわゆる文化的なものが数字を含む四字熟語の意味に対して如何に影響しているか、数字を含む四字熟語は文化に如何に反映されているかなどについて究明してみたい。

II. 研究のカテゴリー

数字は単に数を表す文字と見られているが、長い時間を経て、豊富な認知的意味と文化的意味が付与されるようになった。本論ではすべての数字を取り上げるのではなく、日中両言語における「一」から「十」までの数字をめぐって、それらを含む四字熟語の分析を試みることにする。

III. 研究目的

本論では日本語と中国語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を取り上げ、言語学的及び認知的観点と文化的観点を合わせて考え、その共通点及び相違点について対照研究を行い、主に次の4点について明らかにしたい。

1. 数字は数を表す文字とし、日中両言語における「一」から「十」までの数字の意味拡張がどのようなものであるか。
2. 日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語が出典元、構成などにおいて、どのような全体像を持っているか。特に構成について、二つの数字を含む四字熟語には、これら共起する数字が四字熟語に対して、どのような新しい意味を与っているか。
3. 日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語は意味や用法において、どのような共通点、あるいは相違点があるか。
4. 日中両言語における「一」から「十」までの数字及びそれらを含む四字熟語が日中両国の文化の中に如何に反映されているか。また、日中両言語における「一」から「十」ま

での数字及びそれらを含む四字熟語の意味に対して、それぞれの歴史、習慣、発想など
のいわゆる文化的要素がどのように影響しているかについて明らかにしたい。

IV. 研究方法

本論の研究対象として、日本語と中国語における「一」から「十」までの数字及びそれを含む四字熟語を取り上げる。以下に述べる4点を踏まえて、比較対照分析を行うこととする。

1. 数字の意味的拡張は、その語彙自体、ないしは数字を含む四字熟語の意味にも影響を与えると考えられる。そのため、先ず、日中両言語における「一」から「十」までそれぞれの数字の基本義と派生義を分析する。日中両言語における「一」から「十」までの数字の意味項目について、日本語は『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005)を主に参照し、中国語は《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典（修订版）》(2001)、《现代汉语辞海（全新版）》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994)を主に参照する。それらを基にした意味項目を本論の研究対象とし、各数字について、日中両言語における基本義と派生義の異同を解明する。
2. 「出典元」と「構成」について、日本語は三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)を基にし、中国語は商務印書館の《成语大词典》第二版(2012)を基にして、日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を分類、統計し、全体像を把握する。各方面の全体像を図式化にし、比較対照図にまとめる。
3. 言語学的及び認知的観点を合わせて、①両言語とも同じ数字を含み、同義・類義を表すもの；②両言語とも同じ数字を含み、異義を表すもの；③一方の言語で数字を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すものの三つに分類し、それらが表す意味を明らかにする。
4. 以上に基づき、日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語が日中両国の文化にどのように反映されているか。また、それぞれの歴史、習慣、発想などのいわゆる文化的要素が、それら四字熟語の意味に対して、どのように影響しているかについて究明する。

第二章 用語の定義と先行研究

I. 用語の定義

まず、本論における「数字」と「四字熟語」の定義をさらに明確にする必要がある。具体的には以下の通りである。

1. 数字

1.1 日本語における数字

「数字」を論じる場合、「数」と「数詞」という二つの概念への言及は避けられない。「数」、「数字」、「数詞」、この三者それぞれの意義、相互関係を明らかにすることは重要である。

『大辞泉』(2012)では日本語の「数」、「数字」、「数詞」を以下のように解釈している。

数 : a. 物に多少に相当する観念、かず。①かず。②物が幾つあるかを表す観念。③狭義には自然数のこと。これを拡張して零、正負の整数、分数を併せて有理数と称し、さらに無理数を併せて実数という。また、さらに負の実数の平方根を表すための虚数を導入し複素数にまで拡張して、これらのすべてを数と総称。b. 事の成行き。運命。情勢。c. はかりごと。

数字 : a. 数を表す文字。漢数字(一、二、三…)、アラビア数字(1、2、3…)、ローマ数字(I、II、III…など。b. (金銭、予算、統計など)数字で表される事柄。数値。c. 幾つかの文字。

漢数字とは漢字のうち、数を表す文字。一、二、三、十、百、千、万、億、兆など。壱(一)、弐(二)、参(三)、肆(四)、伍(五)、陸(六)などの文字を用いることもある。

数詞 : 体言の一。数によって数量や順序を表す語。言語によっては数詞を品詞の一つとして立てることがあるが、日本語では名詞の一種とするのが一般である。

1.2 中国語における数字

一方、《现代汉语大词典》(2000)では中国語の“数”、“数字”、“数词”を以下のように解釈している。

数 : a. 数目。b. 几；几个。c. 用于某些数词或量词后表示约数。d. 天命；命运。e. 数学上表示事物的量的基本概念。f. 一种语法范畴，表示名词或代词所指事物的数量。

数字 : a. 表示数目的文字。汉字的数字有小写大写两种，“一二三四五六七八九十”等是小写，“壹贰叁肆伍陆柒捌玖拾”等是大写。b. 表示数目的符号。c. 数量；数目。

数词 : a. 表示数目的词。b. 数词连用或者加上别的词可以表示概数，序数，分数，倍数。

上記のように、日本語と中国語における数、数字、数詞の定義はほぼ一致している。まとめれば、「数」は数目、事物の数量などを表す語であり、主に数学分野における概念で、人間の頭の中にある極めて抽象的なものである。「数字」は文字学における概念であり、数量を表すための記号、文字である。「数詞」は数量を表す文字の「数字」に対して、主に文法上の働きが大きく、独立した品詞として数量や順序的意味を表している。

言語学において、数字は「数詞」と称されるが、言語の一部分でもある数字は人類が長期間使う過程で、極めて豊富な文化的要素が積み重なり、使用される範囲が徐々に広がつていった。数字は文化形態の一種として単なる数値の記号、あるいは数学の概念だけではなく、世界観、哲学観、宗教観、価値観、さらには審美観など、人々のさまざまな面に影響し、象徴となってきた。数字は個人の世界観の中で、大変重要な役割を果たしている。従って、数字は神秘化され、数字に対する崇拝は民族により、それぞれ異なる。本論においては言語学及び認知的観点と文化的観点を合わせて、「一」から「十」までを含む四字熟語を考察するため、「一」から「十」までは「数字」という概念を採用する。

2. 四字熟語

2.1 日本語における四字熟語

高島俊男(2009)によると、日本語における「四字熟語」という用語が定着したのは元ジャーナリストの真藤健志郎の著、『「四字熟語」の辞典・活用引用自由自在』(日本実業出版社、1985年)以降であり、特定の著名人が好んで四字熟語を用いていることも、その後、四字熟語が注目を集める一因となったという。さらに、実業家の稻葉通雄は同書が書店で平積みされているのを見て「四字の活字から成る『読む辞典』が静かに売れている」と評している。もちろんこの著以前にも「四字熟語」という語を見つけることができるが、特に決まった呼称ではなく、「故事成語」や「故事熟語」、あるいは単に「成語」や「成句」などと呼んでいた。真藤は著書を「四字熟語」とカギカッコ付きで表記し、これが暫定的に命名した用語であることを強調していたとしている。

「四字熟語」の定義を説明するため、まず、「熟語」について説明しておく。

『大辞泉』(2012)によると、

①2字またはそれ以上の漢字で書かれる漢語。熟字。「幸福」「美女」など。

②二つまたはそれ以上の単語が合わさって、一つの単語として用いられるようになったもの。複合語。合成語。

③慣用によって、特定の意味に用いられるようになった語句。慣用句。成句。イディオ

ム。「気が抜ける」「油を売る」などの類。

また、『大辞林』では、

①二つ以上の漢字の結合してできた語。「登山」、「思想」の類。熟字。

②二つ以上の単語が結語してできた語、合成語。複合語。「山鳩」、「酒樽」、「草分け」の類。

③成句。慣用句。

小学校や中学校など初等教育において、「熟語」と言えば、複数の漢字が結合して一つの語となっているものと教えられることが多い。この解釈に従えば、四つの漢字が連結した語は全て四字熟語である。これは四字熟語という語における最も広い意味とされ、二字熟語、三字熟語、五字熟語などは、これと同様に広い意味で定義されることが多いと思われる。

広い意味で漢字四文字で構成される四字熟語は無数に挙げることができる。このうち、より狭い範囲で「四字熟語」と総称されるものは一般に慣用句的に用いられるものであると認識される（高島俊男 2009）。慣用句とは複数の語が堅固に結びついた特定の言い回しのことである。一例を挙げると、「清水の舞台から飛び降りる」いう慣用句があるが、「清水の舞台」と「飛び降りる」を分けて考えてみても、「思い切って何かをする」という意味を表すということは理解できない。このような語と語の結びつきの強さを言語学では「熟合度」と言い、「魑魅魍魎」や「波瀾万丈」なども四字熟語として認識されてはいるが、これらも高い熟合度をもつ慣用句の一種とみなされ、四字が強く結びついて一つの意味になっていると考えられる。同じ四字でも、「国立大学」のような語は四字熟語として認識されにくい。それはこの語の「国立」と「大学」という一つ一つが強く意識された複合語であり、熟合度は低いと考えられるからである。しかし、四字熟語とみなすか否かは人々がどう認識するかに依存するところが大きいので、四字熟語の定義づけは難しい。

大修館『四字熟語辞典』（2004）には「四字熟語とは、漢字四字を連接せしめて一語として用いられるようになった重要な語彙」とある。ここで四字熟語における四字は漢字四字であることをわざと強調していることに関して、検討を要するが、次のようなものを中心分類し、説明している。

① 「臥薪嘗胆」「鼓腹擊壊」「四面楚歌」のように、中国の歴史的事実に由来する故事成語

② 「質実剛健」「剛毅果斷」「行雲流水」のように、後世に伝えるべき格調や内容を持つもの

③ 「單刀直入」「天衣無縫」「樽俎折衝」のように、一字一字の意味の積み重ねだけではなく知れない転義・派生義を持つもの

④ 「地盤沈下」「上昇気流」「冷却期間」のように、一見したところ普通の語彙のようでありながら、比喩的な用い方をされることのあるもの

また、現在、収録数が最も多いとされる『新明解四字熟語辞典』(2013) 三省堂では四字熟語について、熟合度がそんなに高くないと認識されるものを含め、以下のように分類し、説明している。

① 中国の典籍を典拠とする「臥薪嘗胆」「櫛風沐雨」など

② 仏典・仏教語に由来する「色即是空」「四苦八苦」など

③ 「背水之陣」「一炊之夢」など、「之」が入って四字熟語とみなされるもの

④ 「灯火可親」「先従隗歎」など、一般的には訓読して使われるが、これを音読するもの

⑤ 日本の古くからの成句・格言などからよく使われる「手前味噌」「手練手管」など

⑥ 現代社会の言語生活から生み出された「官官接待」「総量規制」など

2.2 中国語における“四字成语”

中国では「四字熟語」とは言わず、“成语”と言う。“成语”と言えば、四字で構成されるものが大多数であるが、ごく少数の例外も存在する。このため、四字に特定していいう場合、中国語では“四字成语”あるいは“四字格成语”と呼ぶ。

“成语”について、《现代汉语词典》第五版(2005)では次のように説明している。

“成语”是人们长期以来习用的，简洁精辟的定型词组或短句。汉语的成语大多由四个字组成，一般都有出处。

(訳：中国語の成語は長い間、人々に用いられてきた簡潔で短い固定的な連語或いは短句である。中国語における大部分の成語は四字で構成され、出典がある。)

『中日大辞典』(2010) 大修館書店によると、

“成语”は熟語のうち、主として四字からなり、古語でよく引用されるものである。出典の明らかなものが多い。

また、“成语”と熟語の関係について、陳・曹(2005)では、「中国語における慣用語、成語、俗語はすべて熟語と総称される」と指摘している。

“惯用语”は習慣として使われる言葉を指し、三文字のきまり文句が多い。例えば、「翹尾巴」、「穿小鞋」など。

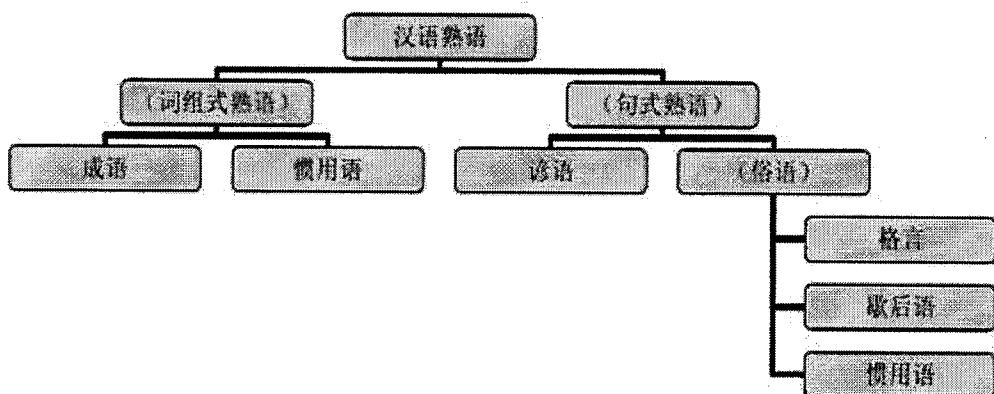
“成语”は主に固定の四文字の単語を指す。例えば、「四面楚歌」、「一衣带水」など。

“俗语”は主に話す時に使われる五文字以上の固定の言葉を指す。例えば、「横挑鼻子竖挑眼」、「陈谷子烂芝麻」など。

なお、四字の熟語と言っても、かならず“成语”というわけではない。四字の熟語と“成语”との関係について、周(2004)に次のような指摘がある。

古代の人の目からみると、中国語における四字の熟語は大きく「典雅」と「俗白」の二つに分けられる。「典雅」の熟語には歴史的背景があり、典故を求めることができ、成语と見なされ、伝えられてきたものである。一方、「俗白」の熟語は主に擬音・擬態から来ているものと、文字の重ねからなるものである。俗白的四字の熟語は一般に、編纂する人が当時いた時代に市井に流行していた固定的な短語と詞である。典故を求めるのが難しく、後世に成语と見なされず、正統的文人の著述によって伝えられたものではない。

さらに、姚錫遠(1998)は《熟语的种属地位及其定义域》において、中国語における“成语”と熟語との関係について、次のようにまとめている。



3. 本論における数字と四字熟語

本論で扱う数字と四字熟語とはいいかなるものであるかを説明する。

3.1 数字

以上の先行研究を踏まえて、本論で用いる数字の定義を以下のように定める。

本論ではすべての数字を取り上げるのではなく、日中両言語における「一」から「十」までの数字をめぐって、それを含む四字熟語の考察を試みることとする。具体的には中国語における漢字の数字“一”から“十”までの十個の数字であり、日本語における数字の

一部分をなす漢数字の「一」から「十」までとされる部分である。

3.2 四字熟語

以上、日本語における四字熟語と中国語における“四字成语”（便宜上、本論では「四字熟語」に統一）に対する類型的な捉え方、特に定義や分類に焦点を当てて、それに関する主な見解を中心見てきた。

中国語における“四字成语”に対して、日本語における四字熟語の概念や範囲規定については必ずしもはつきりせず、統一性に欠いている点は問題と言わざるを得ない。そのため、決まった類型を定めるのはなかなか難しいようである。

本論では日本語においては高島(2009)が指摘した狭い範囲での「四字熟語」を用いることとする。さらに詳しく言えば、主に『新明解四字熟語辞典』(三省堂 2013)における四字熟語の分類①番、②番、③番と⑤番を中心とする。一方、中国語においては“四字成语”という概念を採用し、統括的に「数字を含む四字熟語」という言い方を用いて、日中両言語間の対照研究を行う。

II. 先行研究

これまでの先行研究を見ると、日中両言語における数字に関する研究については主に以下のものが挙げられる。

1. 日本語における先行研究

日本語の場合、数字に関する代表的な研究として、辻本政晴(1995)『数詞の発見一言葉の謎道を歩く』、加藤良作(1996)『数詞ってなんだろう—「数える」ことの生き立ちを求めて』、郡司正勝(1997)『和数考』、伊藤宗行(2002)『「数」日本史—われわれは数とどう付き合ってきたか』、阿部猛(2006)『数の日本史事典』などがある。研究内容を見ると、語彙史、意味や用法などにとどまっていることが分かる。

また、田坂昂(1993)『数の文化史を歩く』、飯倉晴武(2007)『日本人 数のしきたり』、円満寺二郎(2010)『数になりたかった皇帝—漢字と数の物語』のように文化的視点から論じたものもある。

数字を含む熟語について、日本語における研究ではその数は少なく、あまり進んでいないようである。その中でも、数字を含む四字熟語についての研究はさらに少ないようである。今までの主な研究成果として挙げられるのは高水徹(1999)「数詞にみられる意味拡張—経験的基盤が言語に反映されることの一例」、楳咲志(2004)『数ことば連想読本』、窪塙晴夫(2011)『数字ことばの不思議な話』である。

その他、対照比較研究においては伊藤三郎(1992)「数を含む慣用句と諺一日・英比較して」『名古屋女子大学紀要38(人・社会)』が代表的だと言える。

以下にその代表的なものを簡単に紹介する。

1.1 田坂昂(1993)『数の文化史を歩く』風濤社

田坂昂(1993)は文化的、宗教的、民族的な意味を帯びた、そもそもの数にとり囲まれた身のまわりの「ラッキーセブン」や「七五三」の宮詣などについて、その由来や意味について論じている。ほとんど無意識に使っているが、背景には古来の文化的奥行きがあるとしている。田坂は日本を起点として、そうした「数」の文化的背景をグローバルな視野で捉え、文化的シンボルとしての数を日本から、さらに広い範囲にまで探索した。

1.2 伊藤宗行(2002)『「数」日本史—われわれは数とどう付き合ってきたか』日経ビジネス人文庫

伊藤宗行(2002)は少しだげさに言えば、「日本列島五千年、数の文化史」をキーワードとして、日本人と数とのかかわり合いを時代区分に従って八章立てで紹介している。古代日本数詞の起源は? 「ひい、ふう、みい」はいつ頃から「いち、に、さん」に変わったのか? 九九が日本人の常識になった時期は?などの質問について、歴史の発展という面で、縄文時代から現代まで日本の数文化の足跡を縦横無尽に追い求め、歴史の裏に隠された日本人と数との長大な物語を探り、さらに独自の視点で日本人が数と付き合ってきた数文化、数教育の変遷などを探求している。

1.3 飯倉晴武(2007)『日本人 数のしきたり』青春出版社

飯倉晴武の『日本人 数のしきたり』(2007)では数にまつわるさまざまな日本のしきたりをその由来とともに紹介している。飯倉は日本人の年中行事や日常生活の中で接する「数」に込められた「数」に関するさまざまな現象を取り上げながら、日本人の知恵と伝統を述べている。

1.4 高水徹(1999)「数詞にみられる意味拡張—経験的基盤が言語に反映されることの一例」『言語科学論集』

高水徹(1999)では言語表現としての数が他の言語表現と同様、拡張、慣用化において動機づけをもつものであり、また、その動機づけが経験的なものであるということを示している。

「数詞にみられる意味拡張—経験的基盤が言語に反映されることの一例」は認知言語学の視点から、数と身体性、及び数詞の意味拡張の具体的事例という二つの部分に分けて論

じている。具体的には数と身体性部分は数詞や数字の中では身体的な基盤とみることがで
きると論じている。つまり身体経験的な言語の動機づけが必ずしも話者にとって明らかで
あるということを意味しないということである。たとえ現代の話者にとってそれがわから
なくなっているとしても、動機づけが存在し、それに基づき慣用化され、定着したという
事実に変わりはないということが分かる。数詞の意味拡張の具体的な事例については小さな
数詞「一」を含むものと大きな「 10^n 」の数詞を含むものを例として、具体から抽象へ(量
から質へ)という拡張の方向性を指摘している。

数詞「一」は言語的な拡張を最も成し遂げており、それは我々の数えるという行為にお
いて「一」がとりたてて具体的であり、基本的であるという事実と関連すると考えられた。

「 10^n 」という日常の生活文脈においては大きな数詞の意味拡張においても、認知言語学で
一般的に認められている傾向、量から質への方向性をみることもできた。その際、置と質
の間には量が増えると一般的に質が多様になるという相関関係が存在する。この相関関係
が「 10^n 」が「いろいろ」という意味に拡張することを動機づけていることが分かる。

1.5 伊藤三郎(1992)「数を含む慣用句と諺一日・英比較して」『名古屋女子大学紀要 38(人・社会)』

伊藤三郎(1992)「数を含む慣用句と諺一日・英比較して」では、まず日本語と英語にお
ける風俗・習慣の中で重んじられてきた忌数と聖数の面から、数に対して神秘的な意味を紹
介し、これによって特定的な数を嫌ったり、あるいは吉として尊ぶという日本と英語を国
語としての各民族間の共通点と相違点について論じている。さらに、日本語と英語に
おける「一」から「五」までの数字を含む慣用句と諺を取り上げ、意味的側面から対照研
究を行っている。

2. 中国語における先行研究

中国語研究では1943年に王力が《现代汉语语法》において、数詞が独立の品詞と見なし
て以来、数多くの学者が数字に関する研究に着目してきた。20世紀末頃に、中国でも文化
言語学の研究が始まり、それとともに、数字に関する文化言語研究も盛んに行われるよう
になってきた。張德鑫の《数里乾坤》、侯繼武の《数字的故事》は多々の研究の集大成と言
えよう。叶舒宪と田大宪の《中国古代神秘数字》、吳義方と吳卸耀の《数字文化趣谈》など
の著作も注目される。

数字を含む四字熟語の研究については、言語の面から、すでに多くの成果が見られる。
韓陳其(1984)「论汉语成语中的数词」は数字を含む四字熟語の組み合わせ形式及びその特

徵などについて述べている。馬林芳(1990)「数词在成语中的一般用法与特殊用法」と賀永彬(1990)「论成语中数的模糊性」は数字を含む四字熟語に反映されているファジー性などについて述べている。また、陳璧耀(2004)『从“七葦八素”说到汉语的数词成语』と楊彬・朱曉芳(2007)「说“三”道“四”话成语」は共に具体的例を挙げ、個別の数字を含む四字熟語について分析している。陳暉(2004)「谈谈含有数字的成语」では数字を含む四字熟語の意義及び役割を述べている。賈吉峰(2004)と安美真(2005)は修士論文「数字成语研究」と「数字与汉语成语」で数字含む四字熟語について、構造、意味、語源及びレトリックなどの面から論じている。

さらに、対照研究については包央(2005)「中日数字文化漫談」、崔文博(2006)「中日数字に関する比較研究」、郎旭(2011)「日中両国における数字文化の比較研究」などが代表的研究と言える。

以下にその代表的なものを簡単に紹介する。

2.1 叶舒宪・田大宪(1995)《中国古代神秘数字》社会科学文献出版社

叶舒宪・田大宪(1995)は中国古代の神秘的な数字の象徴的意味、誕生メカニズム、人類の神話的思考の普遍的法則について検証している。神秘的数字の表層から根源的に追究して、中国古代の神秘的数字を深層から解釈し、理性的に把握するよう努めている。その過程において、特に文献の考証、解釈と考古学的研究を結び付け、文字学の研究と原初的思考の研究を結び付け、多文化にわたる同類の資料を参照し、比較、分析において神秘的数字と神話的思考の内在的な関係を認識するよう述べている。

具体的に言えば、《中国古代神秘数字》は神話的思考の変遷の過程と法則にもとづき、いくつかの主要な神秘的数字に対する研究を通じて、中国古代の神秘的数字の体系の構成と生成の法則を検証することに努めた。つまり、この種の数字の多くは十以下、あるいは十余りにすぎず、それぞれ人類の認識の発展と抽象的な数的概念の形成、変遷の重要な段階を示している。また、「十二」は太陽と月の変遷の循環周期から抽象され、「三十六」、「七十二」などは特殊な文化的要素や人為的計算による結果であり、主要な神秘的数字をふまえた組み合わせ、その派生物である。叶舒宪・田大宪(1995)において、このような数字も主要な神秘的数字として検証されている。

2.2 賈吉峰(2004)“数字成语研究”

賈吉峰(2004)は中国における数字を含む四字熟語の構造、意味、語源について説明している。具体的には数字を含む四字熟語の構造について、数字「一、二、三、五、」は成語の

中に出現する頻度が高い。数字「一、二」はどの位置にも現われ、「三」は二番目の位置以外に現れ、「五、百、万」は一番目と三番目の位置にしか現れない。また、ほかの数字は一番目の位置にしか現れないと言っている。また、数字を含む四字熟語の意味については四字熟語の特徴の一つは定型的であるが、絶対に変わらないとはいえない。従って、現代的定型構造として広く知られる四字熟語が、ほかの形式で現れる場合もあると説明している。

2.3 安美真(2005) “数字与汉语成语”

安美真(2005) “数字与汉语成语”は中国語における数字を含む四字熟語を対象としている。具体的には、まず中国語における数字を含む四字熟語の構造を考察している。また、数字を含む四字熟語における数字の基本義と抽象的な意味をめぐって、言語の面から詳しく述べている。さらに、レトリックの面から、比喩、誇張などの概念で、中国語における数字を含む四字熟語の“表达效果”についても分析している。

2.4 崔文博(2006) “日中数字に関する比較研究”

崔文博(2006) “日中数字に関する比較研究”は中日両国における数字「一」から「十」までを研究の対象とし、比較言語学の立場に立って、言語の内部と言語の外部の両方面から、数字における語彙の組み合わせ、語音の変化、数字のもつ基本的意味と象徴的意味を比較分析している。

比較した結果から、以下のことが分かる。

I. 言語の内部の比較

- ① 日本語は中国語を直接に借用したため、中日両国の数字は共に異なる組み合わせによって、数字の意味が変わる。
- ② 「一字多音」あるいは「一字多訓」である日本語の数字は「音」と「訓」の読み方によって、意味も変化する。
- ③ 両国とも字形や読音からある事情を連想させ、数字に吉凶の連想や意味を付与している。このような連想や意味は中国の数字においては似た音から、日本の数字においては同音あるいは字形から発生する。

II. 言語の外部の比較

自らの文化の背景、思惟の方式などによって、数字を使用するときの傾向が見られる。中国人の意識には偶数がよい意味を象徴する美意識が非常に根強い。一方、日本人には奇数が「陽」と思われる所以、「吉祥、幸運」の象徴と認められる。

3. 先行研究の検討

以上の先行研究を踏まえて、日中両言語における数字及びそれを含む四字熟語に対する研究は大きく三つに分類することができる。

まずは数字に対する通時的研究で、数字の語形や意味などの歴史的な変遷、即ち「数の語彙史」の研究である。

次に数字に対する共時的研究で、主に言葉と文化の視点から、数字自体及び数字を含む四字熟語が表現上果たす比喩的・象徴的な役割や、それを通じて表わされる感情や物の捉え方などを考察したものである。

さらに、数字及びそれを含む四字熟語の日中対照比較を研究テーマとして取り上げた研究である。

3.1 日本語の場合

① 通時的研究：田坂昂(1993)、郡司正勝(1997)、ドゥニ ゲージ・藤原正彦(1998)、伊藤宗行(2002)、阿部猛(2006)など

② 共時的研究(言語・文化、認知の視点から)：

飯倉晴武(2007)、高水徹(1999)、窪薙晴夫(2011)など

③ 他の言語との対照研究：主に英語との対照研究である。伊藤三郎(1992)

全般的に見ると、日本語における数字及びそれを含む四字熟語研究では通時的研究が多く、研究内容を見ると、主に日本語における数字の発展史に関する研究である。数字を含む熟語について、その数は少なく、あまり進んでいないようである。その中でも数字を含む四字熟語についての研究はさらに少ないようであり、中国語における研究より遅れている。対照研究の面においては日英の比較対照がほとんどで、日中対照が研究テーマとして取り上げられるケースは少ない。

3.2 中国語の場合

① 共時的研究

言語・文化的視点：韩陈其(1984)、马林芳(1990)、賀永彬(1990)、叶舒宪・田大宪(1995)、张德鑫(1999)、王晓澎・孟子敏(2000)、陈璧耀(2004)、陈晖(2004)、侯继武(2005)、吴义方・吴卸耀(2005)、杨彬・朱晓芳(2007)、贾吉峰(2004)、安美真(2005)など。

認知的視点：ほとんど研究されていない。

② 他の言語との対照研究：包央(2005)、崔文博(2006)、郎旭(2011)など。

以上の先行研究から見ると、中国語では比較的以前から「数字を含む四字熟語」が研究

テーマとして取り上げられている。また《数字熟語词典》(唐庶宜：2004)に見られるように、それに関する研究は進んでいる。しかし、意味、用法の側面からのものがほとんどである。対照研究においては日中対照が研究テーマとして取り上げられるケースがいくつかあるものの、これらの研究は主に数字の一つもしくは数字の二三個に絞って行われているもので、多くの数字全体を体系的に捉えているものはほとんど見当たらない。

第三章 日中両言語における数字を含む四字熟語の対照考察

I. 数字「一」



甲骨文

金文

小篆

隸書

楷書

1. 日中両言語における数字「一」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「一」の意味を調べるにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 13 項になる。

基本義：

① 自然数の最初の数

派生義：

② 同一。同じ。

③ 一つのものの全体。総体。

④ ちょっと、わずか。少し。

⑤ 最初。一番目。

⑥ 三味線で一の糸の略。

⑦ 物事の最初。

⑧ 最高、最上、首位。

⑨ 数多くの中の一つ(一人)。

⑩ 取りに足らぬ。

⑪ 不確か。ある。

⑫ 一定の期間、物事がかなりの程度で続くさまを表す。

⑬ 男子の鬚の「一」の字のような部分。

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典(修订版)》(2001)、《现代汉语辞海(全新版)》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994)を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の12項となる。

基本義：

- ① 最小的正整数

派生義：

- ② 同一。一样。
- ③ 整个，全，满。
- ④ 数量极少。
- ⑤ 第一。
- ⑥ 音阶的一级。
- ⑦ 夹在动词中间或动词和动量词中间，表示动作是一次性的，或短暂的，或尝试性的。
- ⑧ 单一，独一。
- ⑨ 专一。
- ⑩ 某一。
- ⑪ 一旦，一经。
- ⑫ 表示动作，现象突然出现。

上から見られるように、日本語における数字「一」の意味は13項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味は12項ある。これに対して、中国語における数字“一”の意味は12項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味は11項ある。

以下で日中両言語における数字「一」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「一」のプロトタイプに関する比較対照

数字「一」の意味拡張の分析を行う上で、先ず数字「一」のプロトタイプとしての意味を明らかにしておく必要がある。松本曜(2003)はプロトタイプの意味について、「複数の意味の中で最も基本的なもののことであり、基本的であるということは、最も活性化されやすいといった特徴を有する」と説明している。つまり、「一」という数字を聞いた時、人が真っ先にアクセスするものが「一」のプロトタイプとしての意味である。

数の体系の発展史の中で、最も早い時期の認知形式、すなわち数についての思考の原始的様式の記録はトーマス・クランプ(1998)では以下のように述べている。数の認知基礎は歴史上具象的なものの量を記録する必要から定義されたものである。

数字は数を表す文字である。オーストラリアある原住民の語彙には数字のシステムはないともないという観察結果がある。しかし、数に関わる情報を伝達する手段は存在するらしく、これを示す事例が少なくとも二つ知られている。第一は、「オーストラリア・アボリジニにはある予定された行事までの日数を例えば手のひらの上の異なる位置を指定することによって数え、それを指示する方法があった」こと。第二はメニンガーが「非常に初期のレベルの文化を持つ原始的な部族」と述べたセイロンのウェッダの例で、彼らは何か他のものと一対一の対応をつけてしか数えることができないことがある。この方法によって、例えばココナツに対応する数のタリー⁵をどこか安全な場所に貯えて記録することができるというのである。要するに、数字は最初は物の数を示す需要に応じて誕生し、実際の借用物の代わりとして、明示的にではなく、暗黙のうちに抽象的に物の数を記録するものなのである。この物の数を示す意味、つまり数量的意味は数字のプロトタイプと考えられる。

このプロトタイプの意味について、トーマス・クランプ(1998)では「数字はその物を数える数量的用法には二つのタイプ、すなわち主格的用法と操作的用法があり、その言語の中での要求に応じ区別して用いられるだろう。」としている。

前者の主格的用法について、数字は「最も頻繁に名詞修飾語として用いられる」とし、数字は一般に形容詞のように名詞を限定する。例えば、「N」個の煉瓦があるとすれば、論理的には数字「N」というものをすでに理解しているという前提に存在する。「N個の煉瓦」が表現するものは「煉瓦」を含んだ集合のクラスと数字「N」のメンバーの集合のクラスが交わるところである。この点から、数字は数を人々、言語、世界の相互関係を通じて創造された現実的ではあるが、抽象的な対象として取り扱うことになる。言い換えば、数は一つの抽象的概念として、異なる数的な量を表現する語としての数字なしには存在しないことになる。

後者の操作的用法では簿記の合計金額のように、その計算に数字を使い、数字と計算は密接に関連している。なお、この用法については数学領域の内容に属すると考えられるため、本論では取り上げないこととする。

本論で研究対象とする数字「一」のプロトタイプは「一」の数としての基本的な意味で、日本語では「自然数の最初の数」であり、中国語では“最小的正整数”である。

日中両言語における数字「一」のプロトタイプは同じではあるが、詳しく分析すると、強調する意味に少し違いが見られる。日本語における数字「一」の基本義を「自然数の最初の数」と解釈し、「最初」という意味を強調する。日本語における数字「一」はこの意味から「物事の最初」に拡張されるが、中国語における数字“一”は「物事の最初」という意味までは拡張されない。中国語では数字“一”的基本義を“最小的正整数”と解釈する。

“整数”は“整体”（全体）という意味を強調する。これは古代中国の哲学概念と関係があると思われる。中国には「大統一」という歴史があり、古代から数字“一” = “整体”という思想がすでに定着していたのである。楊松華(2004)は、「大統一の国家政権とは一人の皇帝、一つの政府が中国の民族を一つ、つまり全体として行政管理する」と説明している。これは秦の始皇帝の国家統一から始まった中国の統治原理である。この考え方方に加え、中国には天下のもとに生活する人々すべてが、“天下一家”というように、中国を一つの整体、一つの家と考える“大同”的理想像が働いていると言えよう。

1.4 数字「一」の意味拡張に関する比較対照

派生義②から⑥までは日中両言語においては意味は共通しているが、用法については違がある。

(1)官僚組織は近代的な、制度化されたものであるが、親分・子分によって象徴される日本の土着の組織と原理的に軌を一にするものである。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「タテ社会の人間関係」』)

訳文：官僚机构组织代表着一整套现代化的管理制度，但是，从构成原理上看，它又与日本传统的“亲分・子分”组织结构如出一辙。

(2)咱们是一家人。（『中日大辞典』大修館書店）

訳文：私たちは皆一家の者だ。

(3)贵贱不一。（『中日大辞典』大修館書店）

訳文：高いのも安いのも同じではない。

例(1)は車の通った跡を同じくするように、立場や方向を同じくするという意味である。例(2)の“一家”は同一の家族である。例(1)と例(2)はいざれも派生義②に基づいて、数字「一」の同一性を表している肯定的な例である。また、中国語における“不十一”で否定の意味を表す場合には、“不一样”と共通し、日本語に訳すと、「一ではない」あるいは「一つではない」ではなく、例(3)のように、「同じではない」と訳すのがよい。

(4)夕飯の後の一家団欒は大切にする。（『四字の熟語辞典』）

訳文：珍惜晚饭后的一家团圆。

(5)一路车马络绎不绝。(『現代中国語文法総覧』くろしお出版)

訳文：道中ずっと車や馬が切れ目なく続いていた。

(6)哪怕再苦再累，哪怕滚一身泥巴，出一身汗呢。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<轮椅上的梦>』)

訳文：疲れても、泥まみれ汗まみれになんてかまわない。

例(4)における「一家団欒」の意味は家族全員が集まり、仲良く語り合って時を過ごす意味である。構成員をもつ集合が統一体であることが数字「一」の派生義③によって表されている。中国語における数字「一」では、「一家」のような使い方以外に、例(5)と例(6)のように、一定の空間を表す“全、満”の意味を活性化させることもあり、「いっぱいの、満ちた」という意味を表し、描写性をもつ。例えば、“一路”、“一身泥巴”、“一身汗”などである。これに対して、日本語にはこのような用法がなく、「～中(じゅう)」、「まみれ」、「～だらけ」などの語で表現する。

(7)一を聞いて十を知る。(『日中辞典』小学館)(情報量の少なさ)

訳文：闻一知十

(8)我恨不得把全篇的话一字不遗漏地背出来。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<家>』)(情報量の少なさ)

訳文：僕は全部一字もぬかさずに暗誦したんだけど。

(9)慈海は女の危惧を一笑に付した。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「雁の寺」』)(笑う時間の短さ)

訳文：慈海对女人的担忧付之一笑。

(10)誰もが一目見ただけで「この男は特別な存在なんだ」と思って恐れ入ってしまうわけである。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「ノルウェイの森」』)(見る時間の短さ)

訳文：任何人觀上一眼，都会即刻察觉“此人实非等闲之辈”，从而生出敬畏感。

例(7)から例(10)までにおける数字「一」はいずれも派生義④に基づいた例である。例(7)と例(8)は「情報量」の少なさを表し、例(9)と例(10)においては、時間の短さを表している。

(11)少年时期，有次学校里搞“作文竞赛”，他意外地得了个一等奖。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<金光大道>』)

訳文：かれは少年時代、学校の「作文コンクール」で思いがけず一等賞をもらった。

(12)七月一日、工具は約束を破って、来なかつた。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「金閣寺」』)

訳文：七月一日修理工违约没有露面。

(13)勿論私は彼女の言葉を一から十まで信じた訳ではありません。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「痴人の愛」』)

訳文：当然，对她的話我也并非全都相信。

例(11)と例(12)は日中両言語における数字「一」の派生義⑤に基づく例である。順序を表す「一番目」や“第一”的意味である。また、日本語における数字「一」の意味は「最初、一番目」から「物事の最初」に拡張されているが、中国語における数字“一”は「物事の最初」という意味までは拡張されていない。例(13)は日本語における数字「一」の派生義⑦「物事の最初」に基づいて、数字「一」を物事の始め、数字「十」を物事の終わりとした表現である。「一から十まで」は始めから終わりまですべてという意味である。中国語における数字“一”はこの意味までは拡張されていないため、この数字「一」を中国語では“最初”と訳すのがよい。

ちなみに、中国語においても、“从一开始”（一から）という表現がある。

(14)事实上，那位副部长夫人从一开始就不愿意让她做手术。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<人到中年>』)

訳文：事実、あの次官夫人も最初から彼女の手術を拒否していたのだ。

(15)以洪秀全为首的太平天国英雄们，一开始就把斗争矛头直指清王朝，以推翻这一亡国腐朽的政权和建立新的农民政权为最终目的。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<我的父亲邓小平>』)

訳文：洪秀全を頭とする太平天国の英雄たちは、蜂起が起こるや闘いの矛先を清王朝に向か、この亡国の朽ち果てた政権を転覆し、新たな農民政権樹立を最終目標とした。

(16)你一来我就走。(『現代中国語文法総覧』くろしお出版)

訳文：きみがきたら私はすぐ出掛ける。

例(14)のように、中国語における“从一开始”は一つの名詞として、日本語の場合と同様に「最初から」という意味を表している。ただし、ここの数字“一”は普通の第一声ではなく、第四声で読む。ここでの「最初」の意味は数字“一”によって表しているのではなく、“开始”を通して表しているのである。数字“一”は“开始”を強調する役割を果た

していると考えられる。また、例(15)における“一开始”という表現は例(14)と似ているが、実は異なり、例(15)における“开始”は動詞である。“就”と呼応して、“一十動詞+就…”という熟語化した表現において、ある短い動作ですぐにある結果や結論に達することを表す。日本語における数字「一」にはこのような用法はなく、日本語に訳す場合は「や(いなや)」、「…するとすぐ…」などと訳しかない。例(16)も同様である。

(17) クラス一の成績。(『日中辞典』小学館)

訳文：全班第一的成绩。

(18) インダストリー、キャピトル(特定産業首都)というのは「その産業で日本一の集まり」を打っている産業都市のことである。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「日本列島改造論』』)

訳文：所谓专业城市，系具有如下特点的产业城市，即在日本拥有最佳产品的某项产业的集中地。

日本語における数字「一」の意味は「一番目」から「最高、最上、首位」に拡張され、類似性によるもので、メタファーと考えられる。それに対し、中国語における数字「一」はこの意味までは拡張されない。例(17)と例(18)は日本語における数字「一」の派生義⑧に基づいて、「最上、首位」の意味を表している例である。中国語において数字“一”はこのような意味にまでは明確に拡張されていないため、中国語に訳す場合、“第一”、“最…”と訳すのがよい。

(19) 让我闻一闻。(『中日大辞典』大修館書店)

訳文：ちょっとにおいをかがせてくれ。

(20) 深圳经济特区是个试验，路子走得是否对，还要看一看。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈邓小平文选第三卷〉』)

訳文：深セン経済特別区は一つの実験であり、この道が正しいかどうかは、もう少し時間をかけて見てみる必要があります。

(21) 他朝老人的脸上看一眼，强忍着满怀的愤怒。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈金光大道〉』)

訳文：かれは年寄の顔をチラッと見、燃えるような怒りをこらえた。

例(19)～例(21)はいずれも中国語における数字“一”的派生義⑦に基づく例である。数字“一”は動詞と動詞の間に入れて、動作が一回限りで、発生時間の短さと程度の軽さを表す。相手に動作や行為を軽く促す語感を添える。これに対して、日本語における数字「一」

の意味はそこまでは拡張されていない。例(19)と例(20)は中国語における数字“一”の前後に同じ動詞(多くは単音節の動詞)を重ねた場合の例である。例(21)は中国語における数字“一”の前が動詞、後ろが臨時の動量詞の場合の例である。この三つの例は日本語に訳した場合、いずれも「ちょっと」、「ちらっと」などの副詞を用いて表したり、「～てみる」の形で表す。

(22) 人民解放军已一字排开, 万事俱备, 只待令下。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<我的父亲邓小平>』)

訳文：人民解放軍はすでに真一文字に並んで、準備万端、命令一下を待つばかりであつた。

例(22)における日中両言語の数字「一」は文字の形から来ており、「一の形のようによつすぐ」という意味である。また、比喩的に「わき目もふらず」という意味で、「弁護士への道は、真一文字に進む」ということもあり、ここで数字「一」を使うことにより、文がより生き生きとし、魅力的なものになったと考えられる。なお、日本語における数字「一」は派生義⑬「島田鬚など男子の鬚の後ろに張り出た部分」に拡張されたから、一の形のような男子の鬚などを形容する場合、ただ漢字「一」で表現できる。例えば、永井荷風の長編小説『腕くらべ』に次のような件がある。「菊千代は漬島田の一を気にしながら色気のない大欠。」これに対して、中国語における数字“一”はこの意味までは拡張されていないため、中国語に訳す場合は例(22)のように、“一”の後ろに“字”を追加し、“一字須”と訳すしかない。

なお、その他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

1.5 数字「一」の拡張的意味と等級の上下に関する比較対照

近年、日本においても中国においても、各種能力認定試験や評価項目などが注目されるようになってきた。語学や音楽、スポーツ、さらには各種専門技術などさまざまな分野において、そのランクは多く数字で表される。スポーツの場合はタイトル奪取や大会での優勝、語学などでは試験合格、各種専門技術では試験合格の他、授与者の裁量などにより、昇級や降級が決定する。そういう制度においては等級は現在の実力の目安といえる。しかし、等級制度には世界的な基準ではなく、日中両国における共通項目試験、類似項目試験(評価)においても、等級の上下が全く逆の場合がある。例えば、日本卓球級別認定(中国乒乓球級別認定)では、日本では一級が最上級とされるが、中国では一級は最下級とされる。一

方、建築士の資格認定では日中両国において共に一級が最上級とされる。

日中両国における共通項目試験、類似項目試験(評価)の等級に対する比較研究を通じて、同じ「一級」レベルでも、日中両国において等級の上下が逆になる場合と共通する場合の両方がなぜ存在するのか。また、日中両国における「一級」が表す等級の上下と日中両言語における数字「一」の拡張義には何か関係があるのか、あるとすれば、それがどのように関わっているのかについて明らかにしたい。それを明らかにすることにより、日中両国間のコミュニケーションにおける混乱や誤解を避けることができると考える。

なお、各検定試験等の概要是それぞれのHPを参照した。

1.5.1 日中両国で等級が逆になるもの

以下の表1では日中両国において最上級と最下級が逆になる具体例を見る。この表における最上級と最下級は数字で表す。各項目の上が日本での試験(評価)であり、下が中国での試験(評価)である。

表1 等級が逆になる具体例

日中における共通項目試験、類似項目試験(評価)		
試験(評価)名	最上級	最下級
日本語能力試験	一級	五級
汉语水平考试	六級	一級
実用英語技能検定	一級	五級
全国公共英语等级考试	五級	一級
ICT プロフィシエンシー検定試験	一級	五級
全国计算机等级考试	四級	一級
ヤマハ音楽能力検定	二級	十三級
全国音乐等级考试	九級	一級
卓球級別認定	一級	五級
乒乓球运动员技术等级	九級	一級
BJT ビジネス日本語能力テスト	一級	五級
商务汉语考试	五級	一級
河川等級	一級	二級
河流等级	四級	一級

(1) 日本語能力試験と“汉语水平考試”

日本語能力試験(Japanese Language Proficiency Test、略称 JLPT、日能試)は財団法人日本国際教育支援協会と独立行政法人国際交流基金が主催し、日本語を母語としない人を対象に日本語能力を認定する検定試験である。最上級の一級から最下級の五級(旧試験では四級まであった)まで5段階のレベルがある。四級と五級では主に教室内で学ぶ基本的な日本語がどのくらい理解できるかを測る。一級と二級では日常生活の幅広い場面での日本語がどのくらい理解できるかを測る。そして三級は一級、二級と四級、五級の「橋渡し」的レベルと言える。日本語を母語としない者の場合、日本の国立大学への派遣国費留学には日本語能力試験一級が要求される(日本人がアメリカ留学に際して、TOEFLで高得点の証明を要求される場合があることと同様)。各レベルの詳細については表2の通りである。

表2 日本語能力試験認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
↑ ↓ 高 低	一級	幅広い場面で使われる日本語を理解することができる。
	二級	日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる。
	三級	日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる。
	四級	基本的な日本語を理解することができる。
	五級	基本的な日本語をある程度理解することができる。

これに対して、“汉语水平考試”(略称: HSK)は中国の教育部(日本の文部科学省に相当)が認定する国際的な中国語の語学検定試験である。中国語を母語としない学習者(外国人以外に華僑や中国の少数民族も含む)が対象である。“汉语水平考試”は一級から六級まで6段階のレベルがあり、数字が大きいほど上級(旧試験では十一級まであった)とされる。五級試験と六級試験には合否ではなく、点数のみが開示される。中国の大学では外国人留学生に対して、“汉语水平考試”的一定スコアを求めている(文系大学で五級、理系大学で四級を求められることが多い)。各レベルの詳細については表3の通りである。

表3 “汉语水平考試”認定の目安

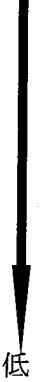
難易度	レベル	認定の目安
低 ↑ ↓ 高	一級	中国語の非常に簡単な単語とフレーズを理解、使用することができる。大学の第二外国語における第一年度前期履修程度。
	二級	中国語を用いた簡単な日常会話を行うことができ、初級中国語優秀レベルに到達している。大学の第二外国語における第一年度履修程度。
	三級	生活・学習・仕事などの場面で基本的なコミュニケーションをとることができ、中国旅行の際にも大部分のことに対応できる。
	四級	中国語を用いて広範囲な話題について会話ができる、中国語を母国語とする相手と比較的流暢にコミュニケーションをとることができる。
	五級	中国語の新聞・雑誌を読んだり、中国語のテレビや映画を鑑賞することができ、中国語を用いて比較的整ったスピーチを行うことができる。
	六級	中国語の情報をスムーズに読んだり聞いたりすることができ、会話や文章により、自分の見解を流暢に表現することができる。

(2) 実用英語技能検定と“全国公共英語等级考试”

実用英語技能検定は公益財団法人日本英語検定協会が実施する英語技能の検定である。一般に英語検定または英検と呼ばれる。英語に関する検定としては日本では最も歴史があり、最上級の一級から最下級の五級まで準一級と準二級を含め、7段階のレベルがある。試験の解答方法は4肢選択を基本としており、準一級および一級では一次試験に英作文が含まれ、三級から一級までは二次試験として英語による面接試験がある。評価については読む・聞く・話す・書くの四技能について、受験者が判断するための「英検 Can-do リスト」が用意されている。一級の合格者は「通訳案内士試験」の筆記試験のうち「外国語(英語)」が免除される。準二級から一級までの取得者は「高等学校卒業程度認定試験」の試験科目「英語」が免除となる。各レベルの詳細は表4の通りである。

表4 実用英語技能検定の目安

難易度	レベル	認定の目安
高 ↑ ↓	一級	広く社会生活で求められる英語を十分理解し、また使用することができる。
	準一級	社会生活で求められる英語を十分理解し、また使用することができる。



二級	社会生活に必要な英語を理解し、また使用することができる。
準二級	日常生活に必要な英語を理解し、また使用することができる。
三級	身近な英語を理解し、また使用することができる。
四級	簡単な英語を理解することができ、またそれを使って表現することができる。
五級	初步的な英語を理解することができ、またそれを使って表現することができます。

これに対して、中国における“全国公共英语等级考试”(Public English Test System、略称:PETS)は教育部(日本の文部科学省に相当)とイギリス海外開発省との国際協力事業として、教育部の所轄機関である試験センターとケンブリッジ大学とが共同で研究、開発した英語技能の検定である。一級から五級まで5段階のレベルがあり、数字が大きいほど上級とされる。“全国公共英语等级考试”はコミュニケーション能力を主として測定する試験とされ、ヒアリング、言語知識、読解、作文、会話などの内容からなる。教育部は各省で行われている“高等教育自学考试”的英語試験について、PETS二級及びPETS三級の試験をそれぞれ専科レベルと本科レベルの試験に代用したり、PETS五級の試験を公費派遣留学生の選考試験に利用するなど、検定試験を徐々に標準試験として普及させていくとしている。検定試験の英語レベルに対応する学校教育におけるレベルは表5の通りである。

表5 “全国公共英语等级考试”認定の目安



難易度	レベル	認定の目安
低	一級(初級)	初級中学卒業以上の英語水準
	二級(中下級)	高級中学の優秀な卒業生の英語水準
	三級(中間級)	大学で2年英語を履修した英語水準(英語専攻以外の学生)
	四級(中上級)	大学で3~4年英語を履修した英語水準(英語専攻以外の学生)
	五級(最上級)	大学英語専攻2年修了時の英語水準(英語専攻学生)

(3) ICT プロフィシエンシー検定試験と“全国计算机等级考试”

ICT プロフィシエンシー検定試験(ICT Proficiency Assessment)はパーソナルコンピュータの知識も含む、総合的な ICT(情報通信技術) 活用能力を問う試験である。任意団体の

ICT プロフィシエンシー検定協会(P 検協会)が主催しており、この団体の事務局(P 検事務局)のベネッセコーポレーションが実施・運営を行なっている。略称はP 検であり、2012 年4月以前はパソコン検定試験と呼ばれていた。ICT プロフィシエンシー検定試験は一級・二級・準二級・三級・四級・五級の6段階のレベルがあり(五級については用語についての知識を問うもので、合否判定はない)、一級が最上級とされる。一級の受験資格者は二級合格者のみとなっている。因みに2010年度までは三級以上合格で、若年者就職基礎能力修得支援事業(YES-プログラム)の資格取得が厚生労働省によって認定されていたが、認定制度が終了したため現在は認定されない。以下の表6は各級の合格目安である。

表6 ICT プロフィシエンシー検定試験認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
↑ 高 ↓	一級	目標となる人物像はICT活用によるビジネス価値の増大をリードできる「ビジネス・イノベーション・リーダー」である。
	二級	ICT活用の総合力を有し、高いレベルで、ビジネス上の問題解決ができる「ICT活用スペシャリスト」が目標とされる。
	準二級	ビジネスに要求されるICT活用スキルを有する人材になることが求められる。
	三級	入社時に要求されるICT活用スキルを有する人材になることが求められる。
	四級	ICTの基礎的な知識・技能を有する人材になることが求められる。
	五級	パソコン入門者レベルであり、パソコンやインターネットでよく使われる用語を知っている。

これに対して、“全国计算机等级考试”(National Computer Rank Examination、略称：NCRE)は教育部試験センターが主催する、教育部によって承認された全国的コンピュータ能力の検定である。一級から四級まで4段階のレベルがあり、数字が大きいほど上級とされる。受験資格として、四級の場合は三級を持っていないと受験できない。各級の詳しい説明は表7の通りである。

表7 “全国计算机等级考试”認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
↓ 低 ↑ 高	一級	コンピュータの基礎的な知識と基本的な操作能力(Microsoft Office と画像処理ソフトなど)を有するレベル。
	二級	プログラミング/事務処理ソフトが活用でき、コンピュータ言語(VB、C、C++など)と基礎的なプログラミング能力(高級言語のプログラミング、データベースのプログラミング、WEB プログラミングなど)を有するレベル。
	三級	エンジニアレベル前の段階であり、コンピュータのプロに向けた専門的な技能有するレベル。
	四級	エンジニアレベルであり、コンピュータに関する専門的な知識を持ち、コンピュータのプロとしての総合力を有し、高いレベルであらゆる問題の解決ができるレベル。

(4) ヤマハ音楽能力検定と“全国音楽等级考試”

ヤマハ音楽能力検定、通称ヤマハグレードとはヤマハ音楽振興会が総合的な音楽の力を評価するシステムとして提唱している検定制度であり、十三級から一級までの段階がある。ピアノ・エレクトーンの演奏、ギター・管楽器・その他楽器ごとの演奏、さらに五級以上で受験可能な指導者など、複数の項目で構成されている。主に、六級以下は学習者のためのもので、小学校の低学年の児童や趣味でレッスンを受けている人が対象とされている。ヤマハ音楽教室では学習の成果の段階的確認と直近の目標として利用されている。指導者の段階は指導者を目指す人だけでなく、現在教えている人、楽器店のデモンストレーター等の指導能力の検定である。指導者の段階はそれぞれの楽器の演奏グレードにおいて最低六級を保持していないと受験することができない。なお、2014年現在、ヤマハ音楽能力検定の一級試験は設けられていない。検定の詳しい説明は表8の通りである。

表8 ヤマハ音楽能力検定認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
↑ 高	二級	主な対象者：演奏家や、演奏家を目指す方 より高い演奏力をを目指す。
	三級～五級	主な対象者：音楽の指導者・専門家や、それらを目指す方



		演奏グレードと指導グレードがある。プロフェッショナルとしての専門的な音楽知識・能力取得を目指す。
六級～十級	主な対象者：音楽を学んでいる方や、趣味で楽しんでいる方 学習成果と目標を、段階的に確認し学習意欲向上へつなげていく。	
十一級～十三級	主な対象者：鍵盤初期学習者の方 日頃のレッスンの延長として、各テキストを修了した時点で、学んだこと、身についたことを確認し、次のステップへの意識を高めていく。	
音楽基礎グレード	対象者：ヤマハ音楽教室幼児科在籍生 日頃のレッスンの延長として、2年間の学習成果の確認と、今後の指針を個々に確認する。	

これに対して、中国における“全国音乐等级考试”は中国教育部試験センターと中央音楽学院が共同で実施する全国的音楽技能の検定である。検定試験は音楽基礎知識と演奏実技の二つの部分に分けています。試験の種類としては A. アコーデオン、B. ピアノ、C. エレクトーン、D. バイオリン、E. 声楽(Es. 児童声楽)、F. 二胡、G. 琵琶、H. 洋琴、I. 箏、J. 笛、K. ギター、L. チェロ、M. クラリネット、N. フルート、O. トランペット、P. 小太鼓、Q. サキソホン、R. フレンチ・ホルン、S. コントラバス、T. トロンボーン、U. ビオラ、V. オーボエ、W. バスーンがある。検定試験の等級は一級から九級(中国音楽協会が主催する音楽認定試験において、最上級では十級である。)までで、等級が上がるほど難易度が増し、九級が最も難易度の高い級となる。九级以上はプロに向けた“演奏文凭级”(プロ演奏家証明書)という言い方もある。二胡の検定試験を例とした詳細は表9の通りである。

表9 “全国音乐等级考试” 二胡認定の目安



難易度	レベル	認定の目安
低	一級	演奏の姿勢・ポーイングともに正確である。初步的なポジション移動ができる。第1ポジション・第2ポジションの音程が安定し、リズム感が良い。

高	二級	第1・2・3ポジションが自由自在に出来るようになり、音程も安定し、リズムも正確にとれる。初步的なビブラート(滑音)とポルタメント(滑音)ができる。F調(他の調と比べポジショニングがやや異なる)の音程がきちんととれる。
	三級	常用されるテクニックを比較的なめらかに使いこなせる。短・快弓はきちんと、はっきりと、弾みのある音をだせるようになり、慢・長弓はしっかりと、豊かな音色であることが条件で、さらに、ある程度完成した形で演奏をうまくまとめ上げることができる。
	四級	音程・リズムをきちんとコントロールできること。楽曲を完成された形で、流暢にまとめることができ、ポジションが飛んでも音程がしっかりとれること。音質も良く、またある一定の表現力も有しておかねばならない。
	五級	ポジションの速い移動・大きな移動、移弦などのテクニックを自由にあやつれること。両手のタイミングをあわせられること。楽曲演奏にも比較的深い表現力を有すること。
	六級	各種テクニックを比較的なめらかに使いこなせること。完璧に音楽を表現し、音程やリズムに全く乱れが見られないこと。美しい音質で人を感じさしめる表現力を有すること。
	七級	地方色・民族色に富んだ楽曲の雰囲気や難易度の高いテクニックをきちんと掌握し、深みのある演奏ができる。表現力に富んでいる。
	八級	各種テクニックを自分のものとしている。また古典に対してもある程度踏み込んだ理解ができており、深みのある表現ができる。さまざまなジャンル・種類の音楽の味わいを比較的掌握している。
	九級	全てのテクニックを全面的に使え、精神的にも成長し、どんなジャンル・種類の音楽にも確実に対応できる。協奏曲を完全に演奏でき、しかも一定の芸術性を持って人を感動させる力を有する。

(5) 日本における卓球級別認定と中国における“乒乓球运动员技术等级”

日本卓球協会によると、公認する段級は15段階とし、五級を最低位とし、一級より五級までの5段階と初段から十段までの10段階である。上記の外に名誉段位を設けることができる。

き、さらに名誉段位が初段から十段までに分かれている。この規程は日本卓球協会定款第33条に基づき、専門委員会組織規程第1条第8号の専門委員会として段級の審査施行について定め、平成24年3月21日制定、平成24年4月1日より施行されている。名誉段位は実技の成績に関わりなく卓球競技の普及、発展に顕著な功績のあった者に対し表彰及び感謝の意をもって贈られるべきものとされている。以下の表10は現在の日本における卓球級別認定の詳細である。(中国における卓球の認定は級別のみのため、ここでは日本における卓球の級別認定を説明をする)。

表10 日本卓球級別認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
高 ↓	一級	各種大会で10点取得したもの。
	二級	各種大会で5点取得したもの。
	三級	各種大会で3点取得したもの。
	四級	5回の試技にて40球(一往復を一球と数える)続けられること。選択する技はフォアハンドロング、バックハンドショート、つつつき、フォアハンドカット、バックハンドカットのいずれか二つを40球続けること。
	五級	打法を問わず20球続けることができる。相手は任意(ロボットマシンも可)とする。指導員がエラーした場合は試技をやり直す。指導員とでなく自分達同士の判定員の見ている前で行ったものも有効。
低		

点数の計算方法について、以下の表11の各大会において、男・女シングルス優勝は各大会のポイントすべてを獲得することになり、ダブルスの優勝は各大会のポイントの半分を獲得することになる。さらにシングルスとダブルス共に2位の場合は各大会のポイントの半分、3位と4位は4分の1、5位から8位の場合は8分の1の獲得となる。

表11 日本卓球認定の点数

ポイント	大会
1点	中学区都市新人戦、小学生区都市大会
2点	中学区都市大会

3点	中学ブロック新人戦、高校区郡市大会、一般区郡市新人戦、小学生都道府県大会
4点	中学都道府県大会、小学生ブロック
5点	区郡市大会、中学校ブロック、高校都道府県新人戦(小学生全国大会)、各国主催の国際オープンジュニア
6点	一般都道府県新人戦
7点	高校都道府県大会
8点	高校ブロック新人戦、全日本オールドベテラン
9点	全国医・歯・薬学生選手権、全国青年大会、全国ろうあ大会、3都道府県以上の近県大会、全国スポーツ少年団等の個人、全日本ベテラン
10点	都道府県大会、全国中学校大会、教職員ブロック、高校ブロック、学生ブロック、全日本ジュニア

これに対して、中国における“乒乓球运动员技术等级”（卓球選手の技術的レベル）として最もスタンダードなものに、“晓阳标准”（“晓阳”（曉陽）とは中国の有名な卓球のコーチ兼審判の名）がある。“晓阳标准”によると、プロの卓球認定は一級から七級まで7段階あり、数字が大きいほど上級とされる。プロは一級から七級に分かれるが、アマチュアは一級から九級に分かれている。アマチュアのランクもプロと同じように、ランクが上がるほど難易度が増し、九級は最も難易度の高いランクとなる。中国における卓球認定各級の詳細については表12の通りである。

表12 中国卓球級別認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
低 	アマチュア一級	卓球のルールを知り、ゆっくりとサーブとサーブレシーブできる初心者。
	アマチュア二級	サーブとサーブレシーブを数回続けることができる。
	アマチュア三級	回転とショートができる。
	アマチュア四級	サイドスピンとスマッシュができる。
	アマチュア五級	卓球に関する基本的な技能を有し、市ないしは区の各大会に受賞される少年業余体育学校の少年運動員、区の各大会に受賞さ
	プロ一級	



		れる卓球愛好者レベル。
アマチュア六級 プロ二級		市の各大会に1位～3位を獲得し、市の代表として省の各大会に参加する少年業余体育学校における優秀的な少年選手、会社の代表として市の各大会に参加する卓球愛好者レベル。
アマチュア七級 プロ三級		市の各大会の平均レベル。
プロ四級		市のチームにおける主力選手レベル。
プロ五級		省のチームにおける下位レベル。
プロ六級		省のチームにおける平均レベル。
プロ七級		省のチームにおける主力選手レベル。あるいは、国家のチームにおける下位レベル。
プロ八級		国家のチームにおける平均レベル。あるいは、世界中の一流選手レベル。
高 プロ九級		世界トップレベル。

(6) BJT ビジネス日本語能力テストと“商务汉语考试”

BJT ビジネス日本語能力テスト (Business Japanese Proficiency Test、略称 : BJT) はビジネスの場における日本語のコミュニケーション能力を客観的に測定・評価する試験の一つである。日本漢字能力検定協会の主催で実施されている。日本語を母語としないビジネス関係者や学生を主な対象者としている。BJT ビジネス日本語能力テストの結果は IRT(項目応答理論)に基づいた統計処理により 0～800 点で採点され、一級+、一級、二級、三級、四級、五級の 6 段階に分かれ、一級+が最上級とされる。点数と各レベルの対応関係は表 13 の通りである。

表 13 BJT ビジネス日本語能力テスト認定の目安



難易度	レベル	点数	認定の目安
高	一級+	600～800 点	どのようなビジネス場面でも日本語による十分なコミュニケーション能力がある。
	一級	530～599 点	幅広いビジネス場面で日本語による適切なコミュニケーション能力がある。



二級	420~529 点	限られたビジネス場面で日本語による適切なコミュニケーション能力がある。
三級	320~419 点	限られたビジネス場面で日本語によるある程度のコミュニケーション能力がある。
四級	200~319 点	限られたビジネス場面で日本語による最低限のコミュニケーション能力がある。
五級	0~199 点	日本語による十分なコミュニケーション能力はほとんどない。

これに対して、中国における“商务汉语考试”（ビジネス中国語検定試験）(Business Chinese Test、略称：BCT)は中国語を母国語としない人がビジネス活動をする上での中華人民共和国の中国語レベルを測定するために作られた試験である。中国政府に属する国家漢語国際推進グループ(国家漢弁)が北京大学に委託して開発したもので、中国政府が実施するHSKと並ぶ国際的な中国語試験であり、「中国語のTOEIC」と呼ばれている。“商务汉语考试”はビジネスに関する幅広い場面や日常生活、コミュニケーションで必要な中国語能力を測定するものである。ビジネス中国語検定試験は一級から五級まで5段階に分かれ、数字が大きいほど上級とされる。二級以上には成績証明書が交付される。各レベルの詳細は表14の通りである。

表14 “商务汉语考试”認定の目安



難易度	レベル	認定の目安
低 ↑ ↓ 高	一級	中国語を用いてビジネスに従事する能力がまだ備わっていない。
	二級	ビジネスにおいて、簡単な中国語を用いて、限られたコミュニケーションを行うことができる。
	三級	かなり効果的に中国語を用いてビジネスに従事することができる。
	四級	かなり上手に中国語を用いてビジネスに従事することができる。
	五級	かなり流暢、かつ適切に中国語を用いてビジネスに従事することができる。

(7) 日本における河川等級と中国における“河流等级”

日本は河川法や地方自治体の一部条例によって、川を国土交通省や各自治体が管理している。河川の等級については治水の難度や整備の重要度から判断され、一級河川と二級河川に分類される。一級河川と二級河川以外、準用河川、普通河川もある。河川の各級の詳細は表 15 の通りである。

表 15 日本における河川等級

難度・重要度	レベル	適用河川
高 	一級河川	一級水系のうち国土交通大臣が指定し、管理を行う河川。河川法が適用される。
	二級河川	二級水系のうち都道府県知事が指定し、管理を行う河川。河川法が適用される。
	準用河川	一級河川や二級河川に指定された区間以外で、市町村が管理する河川。河川法が準用されている。
	普通河川	上記以外の区間のうち、市町村が必要と認めれば条例により管理される河川。河川法の適用を受けない。
低 		

日本における「一級河川」は「一級水系」に係わる最上級の河川である。「一級水系」とは河川法に定められた日本の水系の区分により、国土交通大臣が国土保全上または国民経済上特に重要として指定した水系である。流域面積 1000 平方 km 以上の水系全てや複数の都道府県を流れる水系の多くは一級水系に指定されている。「一級河川」、「二級河川」で指定した河川の区間より上流域を「準用河川」や「普通河川」としたり、逆に上流の名称の異なる河川も含めて「一級河川」や「二級河川」に同じとして含める場合がある。従って、これらの指定範囲は実際に呼称される範囲と一致しない場合もある。

これに対して、中国における“河流等级”（河川の等級）については流れ込む支流の有無及びその支流の等級によって判断され、一級から四級まで 4 段階に分かれ、数字が大きいほど多くの支流が流れ込んでいる。中国における“一级河流”（一級河川）は流れ込んでいる支流がない河川であり、一般的に源流部の小さな川が指定されている。同じ「一級河川」であっても、日中両国における「最高」と「最低」の区別も日中両言語における数字「一」の意味拡張と一致している。各河川の詳細は表 16 の通りである。

表16 中国における“河流等级”

支流の数	レベル	河川の説明
少 ↑ ↓ 多	一級河川	流れ込む支流のない河川であり、一般的に源流部の小さな川を指す。
	二級河川	二つの一級河川が合流してできた河川。
	三級河川	二つの二級河川が合流してできた河川。
	四級河川	二つの三級河川が合流してできた河川。

以上、日本語における数字「一」の意味は「一番目」から「最高、最上、首位」へと拡張されているため、各能力認定試験と項目評価において、日本ではほとんど最上級が「一級」とされる。これに対して、中国語における数字「一」の基本義「最小の正整数」によって、中国では「一級」は最下級とされる場合が数多くあり、級が上がるごとに、そのレベルも高くなってくる。日中における共通項目、類似項目試験(評価)において、等級が逆になるのもこれが原因であると考えられる。

1.5.2 日中両国で等級が共通するもの

以下の表17では日中両国における共通項目、類似項目試験(評価)にて最上級と最下級が共通する等級の具体例を見る。この表における最上級と最下級は数字で表す。各項目の上が日本での試験(評価)であり、下が中国での試験(評価)である。

表17 等級が共通する具体例

日中における共通、相似試験(評価)		
試験(評価)名	最上級	最下級
日本料理プロデューサー	一級	三級
厨师(中式烹饪师)	一級	五級
パン製造技能士	一級	二級
中式面点师	一級	五級
自動車整備士	一級	三級

汽车修理工	一級	五級
サッカー審判員	一級	四級
足球裁判员	一級	三級
酒造技能士	一級	二級
酿酒师	一級	三級
ファイナンシャル・プランニング技能士(FP 技能士)	一級	三級
理财规划师	一級	三級
アナウンス検定	一級	三級
普通话水平测试	一級	三級
通訳技能検定	一級	二級
全国翻译专业资格水平考试	一級	三級
建築士	一級	二級
建筑师	一級	二級
鍛造技能士	一級	二級
锻造工	一級	五級
铸造技能士	一級	二級
铸造工	一級	五級
通訳技能検定	一級	二級
全国翻译专业资格水平考试	一級	三級
日本国道級別	一級	二級
中国公路級別	一級	四級

(1) 調理師、日本料理プロデューサーと“厨师”

日本における調理師とは調理師法に基づき調理、栄養及び衛生に関して調理師たるに必要な知識及び技能を修得した有資格者を指す。調理師免許試験に合格すれば、すぐに営業することができるが、腕の評定や職名の評定などはない。調理師法第8条の3において、調理師の資質向上のための調理技術に関する審査が規定されている。この審査は「技術審査」と呼ばれる。調理師法施行規則第15条によると、「技術審査」は「技術審査試験」(学科及び実技試験)により行われる。技術審査試験の実技試験においては選択した試験科目(日本料理、西洋料理、麵料理、中国料理、すし料理、給食用特殊料理など)に応じた名称、例

えば日本料理専門調理師、西洋料理専門調理師、麺料理専門調理師、中国料理専門調理師、すし料理専門調理師、給食用特殊料理専門調理師などを称することができる。ちなみに、調理師に関する資格は日本における国家資格である技能検定制度の一種で、職業能力開発促進法第47条第1項による指定試験機関である公益社団法人調理技術技能センターが実施する調理に関する学科及び実技試験に合格した者を調理技能士という。調理技能士も等級の区分がない単一等級の資格である。

一言でいうと、日本の調理師の審査に等級はなく、料理人になるための「最低」の基準を審査するのである。「調理師免許」を取得しなければ、料理店を営業することはできない。ところが、調理師免許とは別に、日本料理プロデューサーの検定には等級がある。

日本料理プロデューサーとは日本料理や和食についての専門的な知識を持ち、日本料理店の出店から経営管理、販促及びコンサルティングやメニュー開発にいたる業務まで幅広く対応できるスペシャリストである。日本料理プロデューサーの資格検定試験は一級から三級まで3段階のレベルがあり、一級が最上級とされる。三級の資格検定試験は筆記試験である。食文化・歴史(種類及び行事食)、調理法・調理器具・食材・マナー、マーケティング・開業計画・経営管理など日本料理についての基礎知識が問われる。一級と二級の資格検定試験は筆記試験と実技試験の二つに分かれる。筆記試験では日本料理の文化・郷土食、メニュー開発・和食器、販売促進・プロデュース・海外戦略など日本料理についての知識が問われる。実技試験は日本料理店の季節のイベント用チラシの制作なども含まれる。

これに対して、中国における“厨师”(調理師)には等級と職名がある。現在、“厨师”的職業資格の認定試験は“中式烹调师考试”と言い、理論と実技の二つに分かれる。点数により合格、良好と評価される。合格した者には“厨师证”が発行される。“厨师证”的正式名称は“厨师职业资格证书”と言い、中国労働部労働局の監査によって与えられる、料理人を対象にした国家資格である。試験は一級から五級まで5段階あり、“一级厨师”が最高のランクとされる。最初から上級の資格を獲ることは許されず、一級の資格を獲るには先ず五級合格からスタートして、順にステップを踏んでいかなければならない。どんなに優秀な料理人であっても、“一级厨师”的資格を得るまでには十数年もの時間がかかるとされている。“二级厨师”より上の級になると、実技だけではなく、栄養学や食材知識などの料理理論も求められる。五級から三級までは“配菜”(料理に添える野菜など)、“前菜”(前菜)などといったジャンルの内の一つから受験が可能である。

また、中国における調理師は“紅案厨师”と“白案厨师”に分かれる。日本における調理師にはこのような分類がない。“紅案厨师”とは料理全般の担当で、各種調理から、それに関する各種雑用までを担当する。一方、麺類や点心類は“紅案厨师”ではなく、“白案厨师”が担当する。“白案厨师”は“点心师”、“面点师”とも言う。

中華料理の厨房では各料理ごとに分担して料理を作っている。料理長(トップ、主厨ともいう)が一番鍋、続いて副料理長(セコンド)が二番鍋と、順番にデシャップ(厨房とホールの境)から遠い順で並んで料理を作る。この位置関係には大きな理由がある。料理長は厨房全体の動きを把握しながら作業を進めるため、一番遠いところから、背中で厨房の動きを観察して料理が段取りよくホールまで運ばれるかを全体が見渡せる厨房の一番奥で仕事を管理しながら料理を作るのである。

(2) パン製造技能士と“中式面点师”

日本におけるパン製造技能士とは国家資格である技能検定制度の一種であり、パン製造に関する学科及び実技試験に合格した者をいう。パン製造技能士検定は中央職業能力開発協会が検定試験の問題を作成し、都道府県職業能力開発協会が実施する。検定のランクは特級及び一級～二級まであり、特級は管理者または監督者が通常有するべきランクであり、一級～二級はそれぞれ上級技能者、中級技能者が通常有するべきランクと位置づけられている。検定試験は学科と実技に分かれ、各級の試験はすべて100点満点で、60点以上の得点で合格となる。以下の表18は各級試験実技部分の詳細である。

表18 パン製造技能士検定試験実技部分認定の内容

難易度	レベル	認定の内容
高 	特級	工程管理、作業管理、品質管理、原価管理、安全衛生管理、調理指導及び設備管理について行う。
	一級	水の配合割合を決定したうえで、各材料の使用量を算出する。さらに、支給した強力粉及び中力粉の2種類の小麦粉のうちから強力粉を選び、各材料の秤量を行った後、直捏生地法によって混捏、発酵及び焼成を行い、山形(イギリス)食パンを指定の型を用いて4本作る。
	二級	支給した強力粉及び中力粉の2種類の小麦粉のうちから強力粉を選び、各材料を秤量し、直捏生地法によって混捏、発酵及び焼成

低		を行い、山形(イギリス)食パンを指定の型を用いて3本作る。
---	--	-------------------------------

一方、中国では小麦粉などの軽食類を作る人のことを“中式面点師”と呼ぶ。“中式面点師”は一級から五級まで5段階のレベルがあり、最下級は“五級中式面点師”(初級麺点師)で、最高ランクが“一级中式面点师”(高級麺点技師)となる。“中式面点師”的試験は学科と実技に分かれ、100点満点で、60点以上で合格となり、経験年数により受けることができるランクも決まる。例えば“一级中式面点师”的試験を受けるには実務経験が最低でも十数年以上を有する者となっている。また、ランクが上がるにつれて出題内容も定番点心から創作点心に重点が置かれ、問題もかなり難しくなってくるので、“一级中式面点师”(麺点高級技師)はほんのわずかである。各レベルの詳細は表19の通りである。

表19 “中式面点師”検定試験実技部分認定の内容

難易度	レベル	認定の内容
高	一級 (高級技師)	成形、調理、飾り、栄養管理、設備管理、安全衛生管理及び調理指導と創作料理について行う。
	二級 (技師)	調理前の下準備、成形、調理、飾り、栄養管理、設備管理、安全衛生管理及び調理指導について行う。
	三級 (高級)	調理前の下準備、あん作り、生地作り、成形、調理、飾り、栄養管理について行う。
	四級 (中級)	調理前の下準備、あん作り、生地作り、成形、調理、飾りについて行う。
	五級 (初級)	調理前の下準備、あん作り、生地作り、成形、調理、飾りについて行う。

(3) サッカーレフェリーと“足球裁判員”

サッカーレフェリーはサッカー競技の審判を行う者である。通常のサッカー競技においては主審1人、副審2人で行われる。サッカーレフェリー資格は大きく分けると、日中両国国内・地域のサッカー協会・連盟管轄の「サッカーレフェリー」とFIFA(国際サッカー連盟)管轄の「国際サッカーレフェリー」である。

日本におけるサッカーレフェリーは一級～四級のランクがあり、一級が最上級とされる。下

位の資格を取得していることが昇格の前提となる。日本サッカー協会および都道府県協会が主管となる試合においては日本サッカー協会審判委員会が策定したカリキュラムに則った「審判員資格認定講習会」を各所管協会で受講し、認定してもらう。北海道、東北、北信越、関東、東海、関西、中国、四国、九州の9ブロックに各地域のサッカー協会があり、その傘下に各都道府県別に各都道府県サッカー協会がある。日本サッカー協会も含め協会内には審判委員会が設けられ、それぞれ管轄する審判員の上級審判員への推薦を審議する。一級サッカー審判員は日本サッカー協会が主催・管轄するサッカー競技を担当することができ、日本サッカー協会が認定する。二級サッカー審判員は地域サッカー協会が主催する試合を担当することができ、各地域サッカー協会が認定する。三級サッカー審判員は都道府県サッカー協会が主催する試合を担当することができ、四級サッカー審判員は都道府県サッカー協会を構成する支部、地区/市区郡町村サッカー協会の参加の団体、連盟等が主催するサッカー競技の試合を担当することができる。三級と四級サッカー審判員は各都道府県サッカー協会が認定する。日本における国際サッカー審判員は一級審判員(女子一級審判員を含む)の中より実績により推薦する。詳細は表20の通りである。

表20 日本サッカー審判員認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
高 ↑	一級	各地域サッカー協会の推薦が必要。 検定内容:筆記テスト、体力テスト、実技テスト。
	二級	三級取得後2年以上で、一定の実績を積んだ者。各都道府県サッカー協会の推薦が必要。 検定内容:筆記テスト、体力テスト、実技テスト。
	三級	四級取得者で一定の実績を積んだ者。四級で19試合以上(主審を半数以上)経験した者。 検定内容:筆記テスト、体力テスト、実技テスト(任意)。(実技テストは四級審判員としての実績により免除あり)
	四級	満12歳以上で心身ともに健康な者。 検定内容:講習のみ

一方、中国における“足球裁判員”(サッカー審判員)は国家級と一級～三級のランク

があり、国家级が最上級とされる。下位の資格を取得していることが昇格の前提となる。中国サッカー協会も含め協会内には審判委員会が設けられ、それぞれ管轄する審判員の上級審判員への推薦を審議する。国家级サッカー審判員は中国サッカー協会が主催・管轄するサッカー競技を担当することができ、中国サッカー協会が認定する。“一级足球裁判员”は各省のサッカー協会が主催する試合を担当することができ、省のサッカー協会が認定する。“二级足球裁判员”と“三级足球裁判员”は各区のサッカー協会が認定する。中国における国際サッカー審判員は国家级審判員の中より実績により推薦する。詳細は表 21 の通りである。

表 21 “足球裁判员”認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
高	国家级	一級取得後 3 年以上で、一定の実績を積み、大学あるいは高等専門学校卒業以上の学歴を持ち、基本的な英語力を身につけ、さらに《足球竞赛规则》(サッカー競技規則)と審判に関する規定に詳しく、主審として省の試合及び中国サッカー協会主催の試合において 30 試合以上経験した者。 検定内容:筆記テスト、体力テスト、実技テスト。
	一級	二級取得後 1 年以上で、大学あるいは高等専門学校卒業以上の学歴を持つ者。《足球竞赛规则》(サッカー競技規則)と審判に関する規定に詳しく、“职业联赛”(プロリーグの試合)の審判を担当できる 検定内容:筆記テスト、体力テスト、実技テスト。
	二級	三級取得後 1 年以上で、高校あるいは中等専門学校卒業以上の学歴を持つ者。審判長あるいは副審判長として、区の試合を担当できる。 検定内容:筆記テスト、体力テスト、実技テスト。
	三級	中学校卒業以上の学歴を持つ者。審判長あるいは副審判長として、区の試合の審判を担当できる。 検定内容:筆記テスト、体力テスト、実技テスト。

(4) ファイナンシャル・プランニング技能士と“理财规划师”

ファイナンシャル・プランナーとは顧客である個人から、収支・負債・家族構成・資産状況などの情報提供を受け、それを基に住居・教育・老後など将来のライフプランニングに即した資金計画やアドバイスを行う職業・職種、およびその職に就く者をいう。

日本におけるファイナンシャル・プランナーに関する国家資格はファイナンシャル・プランニング技能士(FP技能士)である。FP技能士とは国家資格である技能検定制度の一種で、職業能力開発促進法第47条第1項による指定試験機関(一般社団法人金融財政事情研究会およびNPO法人日本ファイナンシャル・プランナーズ協会)が実施するファイナンシャル・プランニング技能士に必要な技能に関する学科および実技試験に合格した者をいう。「FP技能士」には3段階のレベルがあり、易しい順に三級、二級、一級に分かれている。FP技能士の資格試験は日本FP(ファイナンシャル・プランナーズ)協会と金融財政事情研究会の2団体が実施しており、一度合格した資格に有効期限はなく、更新の必要もない。各級受験資格の詳細は表22の通りである。

表22 ファイナンシャル・プランニング技能士認定の目安

難易度	レベル	受験の資格
高 ↑	一級	二級技能検定合格者で、FP業務に関し1年以上の実務経験を有する者 FP業務に関し5年以上の実務経験を有する者 厚生労働省認定金融専門技能審査二級の合格者で、1年以上の実務経験を有する者
	二級	三級技能検定の合格者 FP業務に関し2年以上の実務経験を有する者 日本FP協会が認定するAFP認定研修を修了した者 厚生労働省認定金融専門技能審査三級の合格者
低 ↓	三級	FP業務に従事している者または従事しようとしている者

一方、中国におけるファイナンシャル・プランナーに関する国家資格は“理财规划师”という資格である。“理财规划师”には日本におけるファイナンシャル・プランニング技能士と同じように3段階のレベルがあり、易しい順に三級、二級、一級に分かれているが、受験の資格については区別が大きい。各級の受験資格の詳細は表23の通りである。

表 23 “理财规划师”認定の目安

難易度	レベル	受験の資格
高	一級	FP 業務に関し 19 年以上の実務経験を有する 二級技能検定合格者で、FP 業務に関し 4 年以上の実務経験を有する 二級技能検定合格者で、FP 業務に関し 3 年以上の実務経験を有し、一級研修コースの修了証書を取得している 上記いずれかの資格がある者
	二級	FP 業務に関し 13 年以上の実務経験を有する 三級技能検定合格者で、FP 業務に関し 5 年以上の実務経験を有する 三級技能検定合格者で、FP 業務に関し 4 年以上の実務経験を有し、二級研修コースの修了証書を取得した FP に関する専攻の大学を卒業した三級技能検定合格者で、FP 業務に関し 3 年以上の実務経験を有し、二級研修コースの修了証書を取得した FP に関する専攻の大学を卒業した三級技能検定合格者で、FP 業務に関し 4 年以上の実務経験を有する FP に関する専攻の大学を卒業し、FP 業務に関し 5 年以上の実務経験を有する 修士課程修了以上、FP 業務に関し 2 年以上の実務経験を有する 上記いずれかの資格がある者
	三級	FP 業務に関し 6 年以上の実務経験を有する FP に関する専攻の大学卒業相当の学歴を有する 非 FP に関する専攻の大学卒業相当の学歴を有し、FP 業務に関し 1 年以上の実務経験を有する 非 FP に関する専攻の大学卒業相当の学歴を有し、三級研修コースの修了証書を取得した 上記いずれかの資格がある者
低		

(5) アナウンス検定と“普通话水平测试”

日本におけるアナウンス検定とは「話しことば」のプロフェッショナルとして、正しく

美しい日本語の話し手になるために必要な知識と技能を客観的に審査し、証明する検定である。日本話しことば協会は、社会に影響力の大きいマスコミで活躍する全ての人が美しく豊かな日本語の使い手になるために、この「アナウンス検定」を実施している。検定試験は筆記テストとアナウンステストに分かれ、一級から三級まで3段階あり、一級が最上級とされる。以下の表24は日本におけるアナウンス検定試験各級の詳細である。

表24 アナウンス検定試験認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
高 ↑	一級	アナウンサー・司会者・俳優など、音声言語表現者としてプロフェッショナルな活動ができること。 日本語教師として外国人に音声分野の指導ができること。 日本語音声言語・共通語について広く深い知識を持っていること。
	二級	DJ・司会・リポーターなど、プロフェッショナルのアナウンサーや俳優を目指すための、基礎的な力があること。 日本語音声言語・共通語・音声表現技術について、一般的な知識を持っていること。
	三級	社内放送・お知らせ・案内・説明・報告・社内のイベント司会など、大勢の前で正しく・わかりやすく・感じよく話すことができること。 日本語音声言語について、基礎的な知識を持っていること。

これに対して、“普通话水平测试”とは中国教育部と国家言語文字工作委員会により、社会のニーズに応じて開発された国家標準化言語テストである。なお、普通话(現代標準語)とは中国において漢民族の共通語として作られた中国語のことをいう。“普通话水平测试”では発音や読み方の正確さといった発音の側面が重視され、口頭表現の規範化と発話の流暢度の向上を目指している。“普通话水平测试”は一級から三級まであり、各級はさらに甲等と乙等に分かれ、合わせて6段階あり、一級甲等が最上級とされる。それぞれ語音、語彙、語法、語調のなめらかさなどについて、誤った部分のパーセントによって等級が決まる。各等級の判定基準の詳細は表25の通りである(《普通话水平测试大纲(修訂本)》刘照雄、吉林人民出版社、1994年11月第1版。2001年2月第8次印刷参照。)。

表 25 “普通话水平测试”認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
高 ↑ ↓ 低	一級甲等	誤答率は 3%以内
	一級乙等	誤答率は 8%以内
	二級甲等	誤答率は 13%以内
	二級乙等	誤答率は 20%以内
	三級甲等	誤答率は 30%以内
	三級乙等	誤答率は 40%以内

また、《国家语言文字工作委员会关于普通话水平测试管理工作的若干规定(试行)》(1997年6月26日)第二十一条によると、中国において、各職業に必要とされる等級の規定はより細分化され、明確となった。具体的には次の通りである。

- a 師範系の教師と卒業生の普通话のレベルは最低二級でなければならない。その中でも普通话語音課の教師と口語課の教師は必ず一級でなければならない。
- b 一般の教育系の教師及び職業中学と口語表現と密切に関連する専門の卒業生の普通话のレベルは最低二級でなければならない。
- c 非師範系の高等教育機関の教師及び口語表現と密切に関連する専門の卒業生の普通话のレベルは最低二級でなければならない。
- d ラジオ、テレビなど放送方面的教学に従事する教師の普通话のレベルは最低二級でなければならない。
- e 教職資格を取得しようとする者の普通话のレベルは最低二級でなければならない。
- f 国家級及び省級のラジオ局、テレビ局のアナウンサー、キャスターの普通话のレベルは必ず一級甲級でなければならない。
- g 他のラジオ局、テレビ局のアナウンサーやキャスターのレベルについては广播電影、電視部によって別に定める。
- h その他の普通话水平測試を受験すべきもの(たとえば、公務員、弁護士、医療関係者、ガイド、解説者、公共サービスに従事するもの等)については、その到達すべき等級は地域や職業の特性によって異なるので、各省レベルの語言文字工作委員会によって確定する。

(6) 建築士と“建築師”

日本における建築士とは建築物の設計、工事監理などを行う技術者であり、一定の資格をもち免許を受けた者である。建築物の質の向上に寄与するため、建築士法(昭和25年5月24日法律第202号)によって国家資格として定められた。建築士資格は一級と二級の2段階があり、一級建築士の上位資格として、構造設計一級建築士と設備設計一級建築士の二つの資格が存在している。その他、木造建築士もある。建築士はその資格により設計監理できる建築物に違いがある。日本建築士法第2条第2項によると、「一級建築士」は国土交通大臣の免許を受け、一級建築士の名称を用いて、設計工事監理等の業務を行うものである。日本建築士法第2条第3項によると、「二級建築士」は都道府県知事の免許を受けて、二級建築士の名称を用いて、設計工事監理等の業務を行うものである。具体的には一定規模以下の木造の建築物、および鉄筋コンクリート造などの主に日常生活に最低限必要な建築物の設計、工事監理に従事する。「木造建築士」は都道府県知事の免許を受け、木造建築士の名称を用いて、木造の建築物に関し、設計、工事監理等の業務を行う者である。各級建築士の可能な業務範囲については表26の通りである。

表26 建築士のできる限度範囲

規模	レベル	可能な業務範囲
大	一級	学校・病院・劇場・映画館・公会堂・集会場・百貨店の用途に供する建築物で、延べ面積が500m ² を超えるもの 木造建築物または建築の部分で、高さが13mまたは軒の高さが9mを超えるもの 鉄筋コンクリート造、鉄骨造、石造、れん瓦造、コンクリートブロック造もしくは無筋コンクリート造の建築物または建築の部分で、延べ面積が300m ² 、高さが13m、または軒の高さが9mを超えるもの 延べ面積が1000m ² を超え且つ階数が2階以上のもの
	二級	学校・病院・劇場・映画館・公会堂・集会場・百貨店などの公共建築物は延べ面積が500m ² 未満のもの 木造建築物または建築の部分で高さが13mまたは軒の高さが9mを超えないもの

 小	<p>鉄筋コンクリート造、鉄骨造、石造、れん瓦造、コンクリートブロック造もしくは無筋コンクリート造の建築物または建築の部分で、延べ面積が30m²~300m²、高さが13mまたは軒の高さが9m以内のもの 延べ面積が100m²（木造の建築物にあっては、300m²）を超える、又は階数が3以上の建築物（ただし、第3条の2第3項に都道府県の条例により規模を別に定めることもできるとする規定がある）。</p>
--	---

一方、中国における“建筑师”（建築士）は“注册建筑师”（登録建築士）と呼び、日本における建築士の等級と同じように、一級と二級の2段階があり、一級が最上級とされる。1994年の試行を踏まえ、1995年より“注册建筑师考试”を実施している。“中华人民共和国注册建筑师条例实施细则”第十二条によると、“一级注册建筑师考试”的内容は「建築計画、敷地設計、建築設計及び設計製図、建築構造、環境計画、建築設備、建築材料及び構造、建築コスト、建築施工及び設計業務管理、建築法規等とし、試験問題はこれらの内容を数科目に区分する」となっている。“二级注册建筑师考试”的内容は「敷地設計、建築設計及び設計製図、建築構造及び設備、建築法規、建築積算及び建築施工等とし、試験問題はこれらの内容を数科目に区分する」となっている。試験は年1回実施され、試験科目は順次受験が可能であるが、一級の試験科目の合格有効期限は5年であり、二級は2年である。建築師試験の合格者は一級は全国注册建筑师管理委员会に、二級は省、直轄市等の注册建筑师管理委员会にそれぞれ登録する。登録の有効期限は2年であり、続けて登録する場合は30日以内に登録手続きを行う必要がある。各級“注册建筑师”的可能な業務範囲については表27の通りである。

表27 “注册建筑师”的できる限度範囲

規模	レベル	可能な業務範囲
大	一級	建築規模と工事内容の制限を受けずに全ての業務を行える。
	二級	1. 建築設計 2. 建築設計に関する技術指導 3. 建築物の調査及び鑑定 4. 本人が主体となって設計した建物に関する工事指導、監督

以上、中国では国が職業技能基準あるいは在職資格条件を設定し、審査検定機構が労働者の技術レベルや職業資格を評価し、合格者には国家職業資格証明書が発行される。中国国家職業資格の規定によって、技術レベルは国家職業資格一級(高級技師)、国家職業資格二級(技師)、国家職業資格三級(高級)、国家職業資格四級(中級)、国家職業資格五級(初級)の5段階に分けられる。各レベルによって、取得要件は異なり、異なる資格は国家職業資格五級なら緑色、国家職業資格四級は青色、国家職業資格三級になると赤色、国家職業資格二級は茶色、国家職業資格一級は濃い赤など、資格証の色も異なる。職業によって、国家職業資格四級(中級)と国家職業資格五級(初級)を省略し、国家職業資格三級(高級)から直接評価する場合もある。(中国《劳动法》参照)以下の表28は中国における国家職業資格認定各レベルの詳細である。

表28 国家職業資格認定の目安

難易度	レベル	認定の目安
高 ↓	国家職業資格一級 (高級技師)	技師として、3年の経験があり、完璧な技術を備え、難易度の高い問題を解決でき、技術革新や故障防止などにおいて顕著な貢献があり、後継者を育てる能力を持ち、リーダーシップが發揮できる者。
	国家職業資格二級 (技師)	中級証書を取得し、豊富な生産と実践の経験を積み、操作技能などに長け、関連する重要な技術的な難問を解決でき、中級技術者を指導する能力を備えている者。
	国家職業資格三級 (高級)	中級証書を取得後、5年以上が経過し、関連業務において10年の経験がある、または正規の高級技能訓練コースを修了している者。
	国家職業資格四級 (中級)	初級証書を取得後、5年以上の実務経験がある、または労働行政部門の規定に準ずる中級技能者向け技術専門学校及びその他の学校の卒業生。
	国家職業資格五級 (初級)	見習コースを修了した社会人または職業学校の卒業生。

中国の漢字自身は柔軟な拡張性が持っているため、数字「一」の意味が「最上」や「最下」という間逆の方向に延びている。中国における職業資格認定に関する試験(評価)においては数字「一」は「最上」の意味で、「一級資格」が高級技師資格と証明され、日本における各種試験(評価)と同じように最上級とされる。日中における共通項目、類似項目試験(評価)には共通する等級が存在するのも、これが理由であると言えよう。

1.5.3 まとめ

数字「一」は単に数量の最小を表示する記号と見られているが、実際に使われる場合には国によって、その拡張義は深く、広くなることは十分にある。日本語における数字「一」の意味は「最高、最上、首位」まで拡張されているため、日本では能力認定試験と項目評価において、「一級」が最上級とされる場合がほとんどである。これに対して、中国の漢字自身が持つ柔軟な拡張性によって、数字「一」の意味が「最上」や「最下」という間逆の方向に延び、中国における各試験において「一級」は最上級と最下級とされる場合が共に存在する。これは日中両国における共通項目、類似項目試験(評価)に表された等級の上下が逆になる場合と共通する場合の両方に存在するのが理由であると考えられる。その中に、基本義「最小の正整数」によって、中国における各試験において「一級」は最下級とされる場合が多い。また、中国国家職業資格の規定によって、職業資格認定に関する試験(評価)において「一級資格」が高級技師資格と設定されているため、中国における職業資格認定に関する試験(評価)においては「一級」が最上級とされる。

我々が各方面から両国における歴史や伝統的習慣、言語的意味や発想などを追求することにより、日中両国のコミュニケーションにおける混乱や誤解を未然に防ぐことができたり、克服したりすることができるるのである。また、これまでに見てきたように世界的な基準が現在のところはないため、今後、等級の制度について、新しい視点から世界的基準の制定を考える時期も必要ではないかと考える。

2. 日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の全体像

ここでは「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめてみる。

2.1 日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「一」を含む四字熟語が395例が取り上げられている。出典元によって分析して見ると、主に日本を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「一」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集からと、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分かれる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源とした四字熟語が137例ある。例えば、「一字千金、一決雌雄」(司马迁《史記》より)、「一旦豁然」(《大學章句》より)、「一目瞭然」(朱熹《朱子語類》より)、「一舉両失、一合一離」(《戰國策》より)、「一團和氣」(胡安國、曾恬《上蔡先生語錄》より)、「一弛一張、一成不變」(《禮記》より)、「一衣帶水」(李延寿《南史》より)、「一往一來」(《荀子》より)、「一念通天」(《周易》より)、「一枝巢林、一炊之夢」(《莊子》より)、「一治一亂」(《孟子》より)、「一狐之腋」(《慎子》より)、「一笑一顰」(《韓非子》より)、「一虛一寒」(房玄齡等《晉書》より)などである。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集を起源とした四字熟語が49例ある。例えば、「一寸丹心」(杜甫《鄭駙馬池台喜遇鄭廣文同飲》より)、「一寸光陰」(朱熹《偶成》より)、「一日千秋」(《詩經》より)、「一氣呵成」(胡應麟《詩薮》より)、「一身輕舟」(常建《西山》より)、「一竿風月」(陸游《感舊》より)、「一將萬骨」(曹松《己亥歲》より)、「一竜一猪」(韓愈《符读书城南》より)、「一朝富貴」(韓愈《短燈檠歌》より)、「一落千丈」(韓愈《聽穎師彈琴》より)、「一裘一葛」(韓愈《送石處士序》より)、「一髮千鈞」(韓愈《與孟尚書書》より)、「十年一劍」(賈島《劍客》より)などである。

(3) 伝説、劇曲及び小説などの文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品を起源とした四字熟語が13例ある。例えば、「一絲一毫」(凌濛初《二刻拍案惊奇》より)、「一波三折」(釋惠洪《冷齋夜話》より)、「一面之

辞」(西周生《醒世姻缘传》より)、「一舉一動」(《宣和遺事》より)、「一触即發」(李开先《原性堂記》より)、「一路平安」(曹雪芹、高鹗《红楼梦》より)、「一網打尽」(东軒筆錄《魏泰》より)、「粟粒一炊」(沈既濟《枕中記》より)などである。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「一」を含む四字熟語

日本を起源としたものが 16 例ある。例えば、「一長一短」(『凌雲集』⁷より)、「一味同心、一天四海」(《平家物語》より)、「忠孝一致」(吉田松陰《士規七則》より)、「鎧袖一触」(《日本外史》より)、「八紘一宇」(《日本書紀》より)、「一期一会」(《茶湯一会集》⁸より)、「一枚看板」、「一所懸命」、「一生懸命」、「一味郎党」、「一味徒党」、「一六勝負」、「頂門一針」などである。

2.1.1.3 他国を起源とした数字「一」を含む四字熟語

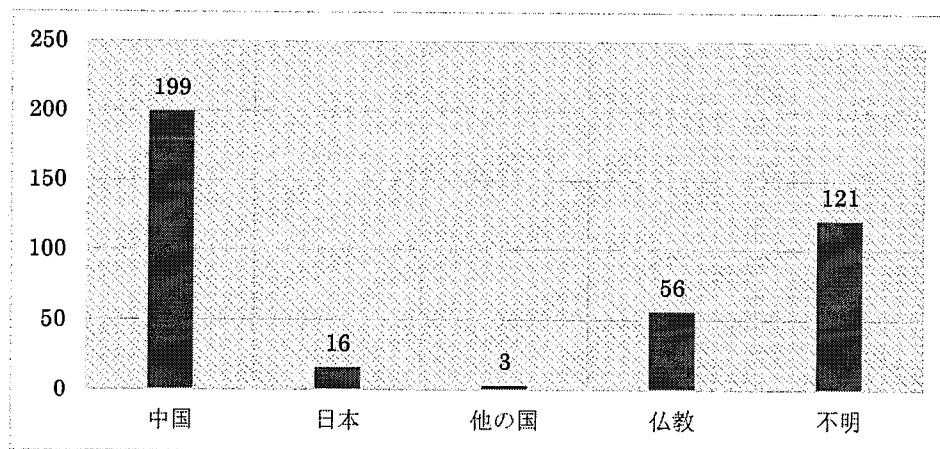
他国を起源としたものが「一石二鳥」、「靈肉一致」、「三位一体」の 3 例である。

2.1.1.4 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「一」を含む四字熟語

仏教または仏教に関連するものを起源としたものが 56 例ある。例えば、「一切有情、一切衆生」(《方廣大莊嚴經》より)、「一切即一」(《華嚴五教章》より)、「一心不亂」(《阿彌陀經》より)、「一心發起」(《歎異抄》⁹より)、「一部始終」(《私聚百因縁集》¹⁰より)、「一失一得、一得一失」(《無門關》より)、「一放一收、打成一片」(《碧严录》より)、「一殺多生」(《瑜伽師地論》より)、「一粒万倍」(《妙法蓮華經》¹¹より)、「凡聖一如」(《金剛經》より)、「一切衆生」(《報恩經》より)などである。『茶湯一会集』は仏典ではないが、茶道を出典とするものである。茶道は日本禪宗の結晶であり、禪宗の源も仏教であると言えるため、仏教からのものとした。

以下の図 1 は日本語における数字「一」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図 1 日本語における数字「一」を含む四字熟語の出典元



上からも分かるように、日本語における数字「一」を含む四字熟語の中で中国を起源としたものが 199 例あり、日本語における数字「一」を含む四字熟語の総数の 50.83% を占めている。日本を起源としたものは 16 例で、総数のわずか 4.05% を占めるだけである。他国を起源としたものは 3 例で、総数の 0.76%、仏教または仏教に関するものを起源としたものが 56 例で、総数の 14.18% となっている。また出典不明な四字熟語は 121 例となっている。日本語における数字「一」を含む四字熟語の中で、仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語も少なくはないが、中国を起源としたものが総数の約半分を占め、圧倒的に多い。

2.1.2 中国語の場合

商務印書館の《成语大词典》第二版(2012)に収録されている数字「一」を含む四字熟語は 430 例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語という三つに分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「一」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「一」を含む四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集からと、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分かれる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍からのものは 230 例ある。例えば、「一唱百和」(《荀子》より)、「一朝一夕」(《周易》より)、「一弛一张、一成不变」(《礼记》より)、「一代宗臣、一发千钧」(班固《汉书》より)、「一刀两断」(《朱子语类》より)、「一德一心」(《尚书》より)、「一得之愚」(《晏子春秋》より)、「一饭千金、一饭之恩」(司马迁《史记》より)、「一飞冲天」(《韩

「非子」より)、「一傅众咻」(《孟子》より)、「一哄而散」(沈德符《万历野获编》より)、「一壶千金」(《鹖冠子》より)、「一箭双雕」(李延寿《北史》より)などである。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集からのものは 61 例ある。例えば、「付之一笑」(牟融《有感》より)、「挂一漏万」(韓愈《南山》より)、「江天一色」(张若虛《春江花月夜》より)、「目空一切」(苏轼《书丹元子所示<李太白真>》より)、「千金一刻」(苏轼《春夜》より)、「千金一掷」(吴象之《少年行》より)、「千篇一律」(钟嵘《诗品》より)、「千载一时」(韩愈《南山》より)、「万死一生」(屈原《离骚》より)、「无一是处」(欧阳修《与王懿敏公》より)、「心口如一」(李咸用《和友人喜相遇》より)、「一寸丹心」(杜甫《郑驸马池台遇郑广文同饮》より)、「一挥而成」(朱弁《曲洧旧闻》より)などである。

(3) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは 134 例ある。例えば、「一动不动」(刘白羽《第二个太阳》より)、「一反常态」(端木蕻良《曹雪芹》より)、「一帆风顺」(李宝嘉《官场现形记》より)、「一官半职」(王实甫《西厢记》より)、「一呼百应」(天然痴叟《石点头》より)、「一技之长」(李汝珍《镜花缘》より)、「一家一计」(关汉卿《望江亭》より)、「一见钟情」(古吴墨浪子《西湖佳话》より)、「一来一往」(《渔樵记》より)、「一览无遗」(刘庆义《世说新语》より)、「一力承当」(冯梦龙《东周列国志》より)、「一廉如水」(柯丹丘《荆钗记》より)、「一马当先」(罗贯中《三国演义》より)、「一貌堂堂」(钱彩、金丰《说岳全传》より)、「一清如水」(凌蒙初《初刻拍案惊奇》より)などである。

2.1.2.2 他国を起源とした数字「一」を含む四字熟語

他国を起源としたものは「三位一体」と「一石二鳥」のわずか 2 例である。

2.1.2.3 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「一」を含む四字熟語

漢の時代に仏教が中国に伝わったが、最初は社会にそれほど影響を与えなかった。しかし、東晋、十六国の時代に入って、発展の速度が上がり、仏典の翻訳も活発になった。その後、中国文化に大きく影響し、その影響は社会生活だけではなく、言語にも与えた。中国語における数字「一」を含む四字熟語の中に、仏教または仏教関連のものを起源としたものとして、「一丝不挂」、「一切众生」と「昙花一现」の 3 例がある。それぞれの出典元は『楞嚴經』、『妙法蓮花經・譬喻品』、『妙法蓮花經・方便品』であり、いずれも仏教の經典である。

以下の図 2 は中国語における数字「一」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「一」を含む四字熟語の出典元

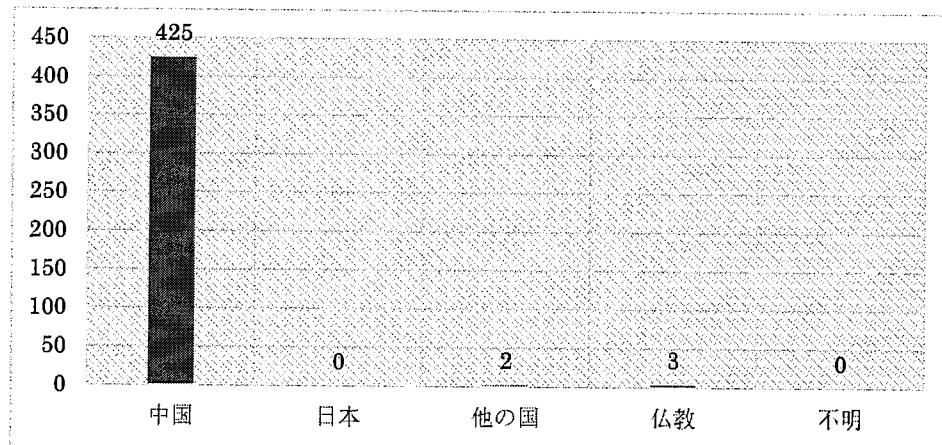


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が425例あり、中国語における数字「一」を含む四字熟語が突出して多く、総数の98.84%を占めている。仏教または仏教関連のものを起源としたものは3例、総数のわずか0.70%に留まっている。日本を起源とした四字熟語はなく、日中以外の国を起源とした四字熟語が1例のみあり、総数の0.23%である。中国語における数字「一」を含む四字熟語の出典元はほとんど中国となっている。

2.1.3 数字「一」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数字「一」を含む四字熟語は中国を起源としたもの、日本を起源としたもの、仏教または仏教関連のものを起源としたものと出典元は幅広い。これに対して、中国語における数字「一」を含む四字熟語の98.84%は中国を起源としたものである。

2.2 日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「一」の現れる位置考察

四字熟語における数字「一」の現れる位置とは四文字において、数字「一」が何番目の文字であるかということを指している。例えば、数字「一」の現れる位置が二番目のみの四字熟語とは「純一無雜」、「不一而足」など、数字「一」の現れる位置が一番目と三番目共起の四字熟語とは「一心一意」、「一字一板」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「一」の現れる位置については以下のとおりである。

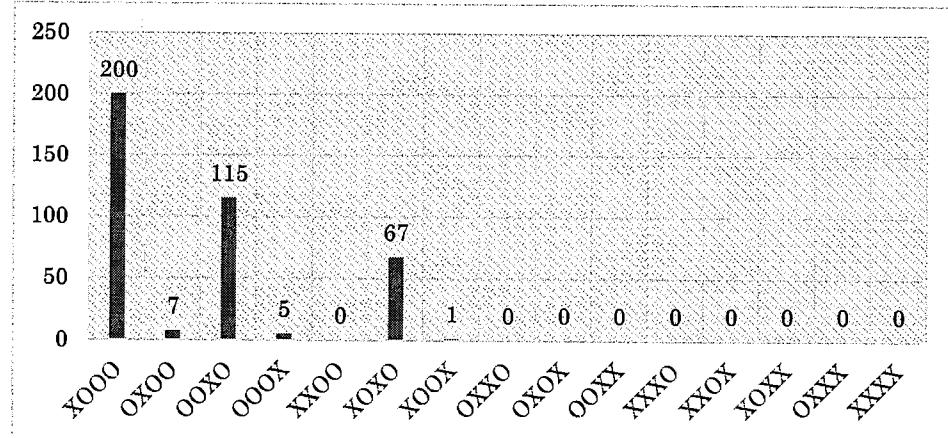
- ・一番目のみ……200例

- ・二番目のみ……7例
- ・三番目のみ……115例
- ・四番目のみ……5例
- ・一番目と三番目に共起……67例
- ・一番目と四番目に共起……1例

一番目のみに現れるものが最も多く、総数の 50.63%を占めている。数字「一」が三番目のみに現れるものが 29.11%を占めている。以下、一番目と三番目に共起するものが 16.96%、二番目のみに現れるものが 1.77%、四番目のみに現れるものが 1.27%と続き、一番目と四番目に共起するものが最も少なく、わずか 0.25%となっている。

図3に「X」、「0」によって数字「一」の現れる位置を表示する。「X」は数字「一」を表し、「0」は数字「一」以外の文字を表す。例えば、数字「一」は一番目と三番目に共起する四字熟語「一心一意」は「XOXO」と表示する。

図3 日本語の四字熟語における数字「一」の現れる位置



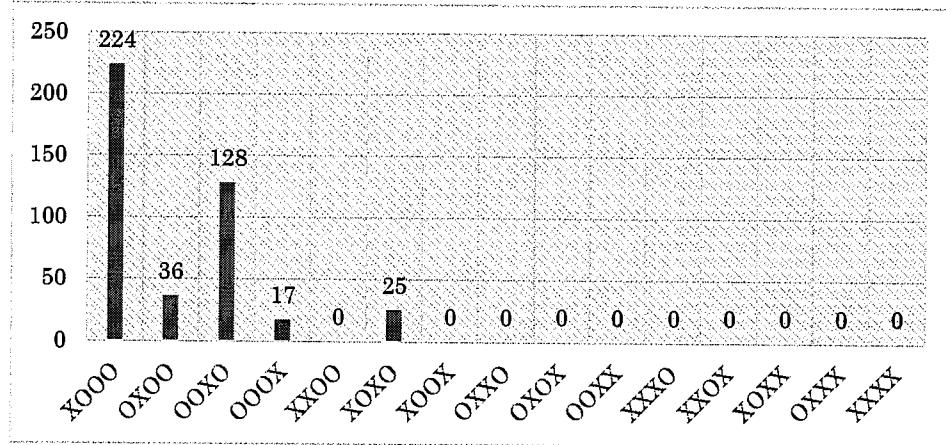
2.2.1.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「一」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……224例
- ・二番目のみ……36例
- ・三番目のみ……128例
- ・四番目のみ……17例
- ・一番目と三番目に共起……25例

個数から見れば、数字「一」の現れる位置は大部分が一番目のみと三番目のみにあり、それぞれ総数の 52.09% と 29.77% を占めており、合わせると総数の 81.86% となる。以下、二番目のみに現れるもの 8.37%、一番目と三番目に共起するもの 5.81%、四番目のみに現れるもの 3.95% と続いている。詳細は図 4 の通りである。

図 4 中中国語の四字熟語における数字「一」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「一」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「一」の現れる位置については中国語においても、日本語においても、一番目のみに現れるケースが最も多く、次に三番目のみに現れるケースが続く。これは日本語において半分以上の数字「一」を含む四字熟語が中国から伝わったことが起因していると考えられる。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「一」と他の数字との共起関係の考察

日中両言語における数字「一」を含む四字熟語には他の数字と共起するケースが少なくない。その中で、他の数字との共起関係がどのようなもので、どのような数字と共起する場合が一番多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「一」と他の数字との共起関係についての詳細を図 5 にまとめる。

図 5 日本語の四字熟語における数字「一」と他の数字との共起関係

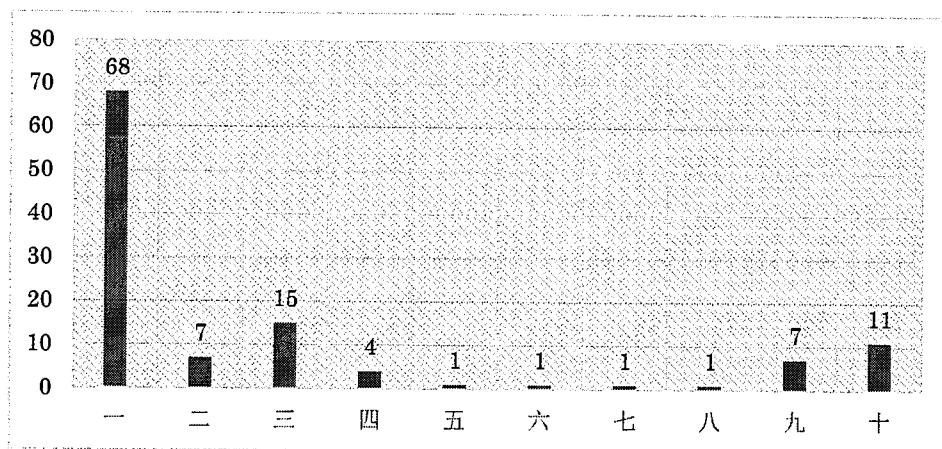


図5から分かるように、日本語における数字「一」を含む四字熟語の中には数字「一」が数字「一」自身と共に起するものが68例あり、総数の58.62%を占めている。数字「二」と共起するものが7例、6.03%、数字「三」と共起するものが15例、12.93%、数字「四」と共起するものが4例、3.45%、数字「五」、「六」、「七」、「八」と共起するものがそれぞれ1例、0.86%、数字「九」と共起するものが7例、6.03%、数字「十」と共起するものが11例、9.48%を占めている。

割合からみると、数字「一」と共起するケースが最も多く、次に数字「三」、「十」、「二」、「九」、「四」、「五」、「六」、「七」と「八」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「一」と他の数字との共起関係についての詳細は図6の通りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「一」と他の数字との共起関係

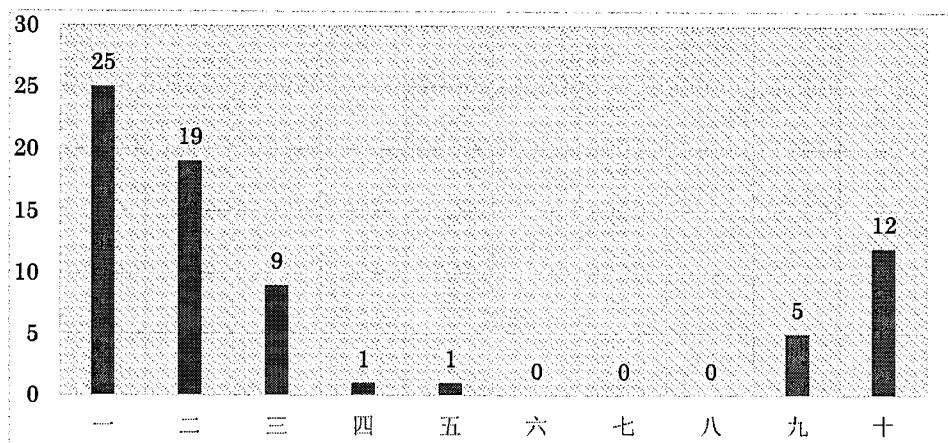


図6から分かるように、中国語における数字「一」を含む四字熟語の中には数字「一」が数字「一」自体と共に起するものが25例、34.72%を占めている。数字「二」と共起するものが19例、26.39%、数字「三」と共起するものが9例、12.5%、数字「四」、数字「五」と共起するものが1例、1.39%、数字「九」と共起するものが5例、16.67%、数字「十」と共起するものが12例、16.67%を占めている。なお、数字「六」、「七」、「八」と共起するものはない。

割合からみると、数字「一」と共起するケースが最も多く、次に数字「二」、「十」、「三」、「九」、「四」と「五」の順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「一」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは日中両言語の四字熟語において、数字「一」が他の数字と共に起して表す意味を分類し、提示し、さらに具体例もあげる。

(1) 数字「一」と共起する場合

A: 極めて少量

日：一分一厘 一木一草 一草一木 一成一旅 一杖一鉢 一琴一鶴 一裘一葛 一錢一厘
中：一針一线 一草一木 一丝一毫 一分一毫 一点一滴

B: 每…、各…、…ごとに

日：一字一句 一言一行 一拳一動
中：一兵一卒 一家一戸 一字一句 一言一行 一時一刻

C: 一つのものの全体、すべて

日：一飲一啄 一世一代
中：一生一世 一飲一啄

D: 相対する、相反する

日：一榮一辱 一虛一盈 一喜一憂 一貴一賤
中：一前一后 一東一西 一左一右 一胖一瘦 一老一少 一冷一熱 一軟一硬 一剛一柔 一香一臭 一新一旧 一暗一明

E: 同じ、類似

日：一心一徳 一徳一心 一心一向
中：一心一意 一心一計 一心一路 一心一徳 一模一样

F: 物事の対照と割合(相対する名詞或いは相關する名詞を当てはめる)

日：一夫一婦 一汁一菜 一竜一猪 一薰一蕕

中：一本一利 一薰一莸

G: 動作の繰り返し、組合せ(相対する動詞を当てはめる)

日：一張一弛 一弛一張 一往一来 一放一收 一問一答 一進一退 一闔一闢 一離一合 一合一離

中：一来一往 一问一答 一唱一和 一惊一喜 一起一落 一张一弛

H: 或いは、…したり…したり

日：一上一下 一失一得 一治一乱

中：一胜一负

I: 動作の連続(類義の動詞を当てはめる)

日：なし

中：一歪一扭 一瘸一拐 一躡一跳 一摇一摆 一躲一闪

J: 動作の繰り返し(同じ動詞を当てはめる)

日：なし

中：一闪一闪 一抖一抖 一鼓一鼓 一飘一飘 一摇一摇

(2)数字「二」と共起する場合

A: 実際の数量

日：一石二鳥

中：一身二任

B: 順序

日：なし

中：数一数二

C: 積み重ね、繰り返し

日：なし

中：一来二去

D: 列挙

日：なし

中：一穷二白 一大二公

E: 程度の高さ

日：なし

中：一清二楚 一清二白 一千二净 一差二错

(3) 数字「三」と共起する場合

A: 実際の数量

日：三位一体

中：三位一体

B: 対比する

日：一刀三礼 一唱三歎 一読三嘆

中：一唱三叹 一隅三反 一波三折

(4) 数字「四」と共起する場合

A: 全体、総体

日：一天四海

中：四海一家

(5) 数字「七」と共起する場合

A: 対比し、多いことを強調

日：一死七生

中：なし

(6) 数字「八」と共起する場合

A: 全体、総体

日：八紘一字

中：なし

(7) 数字「九」と共起する場合

A: 鮮明な対比

日：一日九遷 一日九回

中：九死一生 九牛一毛 一日九迁 一言九鼎

(8) 数字「十」と共起する場合

A: 鮮明な対比

日：一目十行 一暴十寒

中：一目十行 闻一知十 以一当十 一暴十寒

B: 最大限、極めて

日：十死一生

中：十死一生

日中両言語における数字「一」を含む四字熟語において、数字「一」と各数字が共起するケースは少なくない。日中両言語において、共に数字「一」が数字「一」自体と共に起するものが最も多い。日本語において、数字「一」を含む四字熟語は395例あり、その中で116例が数字「一」自体或いは他の数字と共に起するものである。一方、中国語は日本語より割合がやや少ないが、72例が数字「一」自体或いは他の数字と共に起するものである。しかし、四字熟語における数字「一」と数字「一」が共起する意味については中国語のほうが日本語よりさらに多彩である。中国語には一歪一扭(こっちへよろよろ、あっちへよろよろ)、一瘸一拐(足を引きずって歩く)など、二つの数字「一」が同義の動詞と共に動作の連続という意味を表す用法がある。さらに、一摇一摆(揺れ繰り返し)、一抖一抖(震え繰り返し)など、二つの数字「一」が同じ動詞と共に動作の繰り返しという意味を表す用法もある。日本語にはこれらの用法は見られない。

数字「二」と共起する例も中国語のほうが日本語より遥かに多い。共通する実際の数量を表す以外、中国語には順序(数一数二(一二を争う)など)、積み重ね、繰り返し(一来二去(往き来するうちに段々と、追い追いと)など)、列挙(一穷二白(一に貧しく、二に空白である)など)、一大二公(一に大規模、二に公有に示唆されるように、生産手段の公的所有と労働力の集団化など)、程度の高さ(一清二楚は很清楚(非常に明確である)、一干二净は很干净(きれいさっぱりする)など)のような使い方があるが、日本語においてはこのような使い方は見られない。

数字「一」が数字「三」や数字「四」と共起する場合、両言語において、その意味は共通している。数字「七」と共起する場合、日本語では「一死七生」など、対比し多いことを強調するという意味が見られるが、中国語においては数字「七」と共起する四字熟語は見られない。また、数字「八」と共起する場合は日本語においては「八紘一宇」など、全体やすべてという意味が見られるが、中国語では数字「八」と共起する四字熟語は見られない。また、数字「一」が数字「九」や数字「十」と共起する場合の両言語が表す意味は共通している。

3. 数字「一」を含む四字熟語の対照考察

日中両国は一衣帶水の隣国である。両国には紀元前から長い文化交流の歴史があるため、日中両国の文化には共通の部分や類似している部分が多く見られる。そのため、日中両言

語における数字「一」を含む四字熟語にも意味や用法において類似しているものが多数存在する。一方、長い交流の歴史があるとはいえ、地理的環境・歴史的背景・風俗習慣などが異なるため、それぞれ独特的文化も形成された。これは数字「一」を含む四字熟語の意味的用法にも見られる。ここでは以下の三つに分類し、日中両言語における数字「一」含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「一」を含み、同義・類義を表すもの、②両言語とも「一」を含み、異義を表すもの、③一方の言語で「一」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「一」を含み、同義・類義を表すもの

一石二鳥 // 一箭双雕

(23) 一石二鳥の名案。（『例解中国語熟語辞典』東方書店）

訳文：一箭双雕的好办法。

(24) 又会奉承别人，又会给自己的落后思想找借口，一箭双雕。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<金光大道>』）

訳文：ひとをおだてては自分のおくれた思想の言いわけにすんだもん、一石二鳥ね。

古代ローマに「一石で二人の敵を倒す」という熟語があり、それが“kill two birds with one stone.”という英語に訳され、日本語における四字熟語「一石二鳥」は明治時代にそれを日本語に訳したものとされている。幕末から明治にかけて、西洋からさまざまな新しい思想が大津波のように押し寄せてきた。それが、否応なく人びとを近代日本人に育てあげていったと言えるかもしれない。その後、「一石三鳥」、「一石四鳥」の言い方も出てきた。現在、四字熟語“一石二鳥”は中国語においても、極まれに見られ、日本から中国に伝わったものなのか、それとも英語から直接訳されたのかは定説が今のところ、まだないようである。

日本語で「石を利用して鳥を打ち落とす」のに対して、中国語では「一本の矢で獰猛な鷹二羽を射落とす」という意味で、“一箭双雕”という。この二つの熟語は共に一つの行為から、同時に二つの利益や効果を得ることの喻え、メタファーが働いていると考えられる。同じ意味の四字熟語として、日本語にもある「一举両得」、“一举两得”がある。これは哲伝という人物が狭い土地で困っている者を僻地の広大な場所に移し開拓させれば、“一举両得”的利益が得られると進言したという物語が由来である(唐・房玄齡『晋書・東哲伝』)。ちなみに、ドイツからイギリスに入った熟語に“Two flies with one clap.”（一叩きにて二匹の蠅を叩く）というものがある。

頂門一針 // 当头一棒

(25) 彼の忠告は頂門一針で、私を目ざめさせた。(『日本·中国慣用句対照辞典』南雲堂)

訳文：他的忠告好像当头一棒，使我醒悟过来。

(26) いざれにせよ人間性の果て知らぬ欲望に対して、見事な頂門の一針、と言えるだろう。

(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「百言百話」』)

訳文：总之，它对人的那种无止境的欲望来讲，真可谓是当头一棒。

頭の上に針を急にさされれば、思わず震えあがり、冷汗もかく。日本語における四字熟語「頂門一針」はこのように痛みを強く感じさせるように、人に忠告や教訓を与える時に使われる。厳しい警告やショックを与えるたとえである。もともとは「頂門一針」ではなく、「頂門一鍼」であった。古代からの鍼術には頂門というツボに針を刺す治療法があり、頭頂の急所に針を刺すことから、人の急所を痛烈に戒めることをいった。「頂門一針」における「針」とは病気を治療するときに体に刺す針のことである。「頂門に一針」、「頂門の一針」とも言う。

これに対して、中国語における四字熟語“当头一棒”は頭を棒で一回打つという意味である。厳しい警告やショックを与えるたとえや人の急所を抑えた痛切な戒めのたとえ以外、人に突然ショックを与える意味もある。この四字熟語は仏教から来たものである。寺の和尚は新しく勉強に来る者を受け入れる時、時々いきなり棒で一回ぶち、相手が驚いているうちに質問に答えさせ、仏教への理解度を確認したという。今は人に厳しい警告をしたり、忠告したり、突然の打撃を与えたりする時に使う。「頂門一針」を使って日本語に訳すことができる場合が多い。針を使っても、棒を使っても、この二つの四字熟語における数字「一」は共に実数の一回という意味であるが、重く感じられる。

一六勝負 // 乾坤一掷

(27) 何故なら彼のような一六勝負の賭け方では、一つ間違えばその場でお陀仏になってしまふのだから。(『中国成語へのアプローチ』風詠社)

訳文：因为像他这样乾坤一掷地下单，只要一次走眼，立马就玩完。

日本語における四字熟語「一六勝負」はさいころの目が一が出るか、六が出るかで勝負する博打のことを指し、そこから転じて、偶然の運に任せてのるかそるかの勝負をすることを指している。ここにおける数字「一」と「六」はさいころの目の一と六のことを指している。似た熟語に「一か八か」がある。「一か八か」の語源にはさまざまな説があるが、江戸時代の丁半博打に由来するという説が有力である。ここにおける数字「一」は文字の

形から出て来た暗示的意味と考えられ、丁(偶数)と半(奇数)の漢字の上半分を見ると、丁は「一」、半は「八」になる。ここから「丁が出るか、半が出るか」を「一か八か」というようになったという説であり、シネクットキが働いていると考えられる。また、カルタを使った賭博からきているという説もある。三枚のカルタを引いて合計した数の一ケタの数字の大きさを競う。九が最高で最も強い数字となる。一枚目と二枚目のカルタで一と八を引いて手元に九が揃っているとき、糸迦の十の札が来ることを願って、「一か八か糸迦十か」とつぶやいたという。

一方、中国語における四字熟語“乾坤一擲”の数字“一”は動作の一回という意味であり、“一擲”はさいころを思い切って投げることで、天下をかける意味を表している。“乾”とは、「いぬい」のことで、北西の方角を表す。“乾”に対して、“坤”は、「ひつじ・さる」で、南西の方角のことで、厳密にいえば両極端を表してはいないが、これで天地のことを指す。中国唐宋八大家の一人韓愈が漢楚の戦いを“谁助君王回馬首，真成一擲賭乾坤。”と詠んだことに由来する。漢楚の戦いは四年にも及ぶ長い戦いであり、劉邦は疲れ、項羽も苦しんだ。そこで鴻江を境にして天下を二分し、西を漢、東を楚とすると取り決めた。そのことで億万の民の生命は保たれるはずだったのである。ところが、劉邦の軍師張良と陳平は君王に馬首を回して項羽を追撃することを勧めた。そこで劉邦は乾坤一擲の勝負を挑んだのである。結果は劉邦が項羽を倒し、栄光の漢帝国を建てることができたのである。

“乾坤一擲”は漢楚の戦いの中で、劉邦は天下を賭けて、のるかそるかの勝負に出たのである。日本語には「清水の舞台から飛び降りる」という極めて日本的なものを使った熟語もある。この四つの熟語は共に結果がどうなるか検討もつかないが、運を天に任せて思い切ってやってみることを喻える。

一味徒党 // 一丘之貉

(28) 課長は部長のことをふた股かける日和見主義者だといつも非難していたが、あの人も今度の人事異動ではすごい変わり身の早さだね。もともと一味徒党だよ。(『例解中国語熟語辞典』東方書店)

訳文:科长总说部长是脚踏两只船的机会主义者,可这次的人事变动中,他也是朝三暮四、见风使舵的,原来也不过是一丘之貉。

日本語における四字熟語「一味徒党」は同じ目的をもって仲間になること、また、その仲間を指している。マイナスの四字熟語として、悪い仲間を指すことが多いが、中性的な意味で普通の仲間を表すこともある。「一味郎党」とも言う。ここにおける数字「一」は「同

一、同じ」という意味である。「一味」はもとは仏教用語であり、時・所・人は多様であるが、大海の味はどこでも同じであるように、本旨は同一で平等無差別であるといった教えであった。その意味から、「一味」は心を同じくして協力する意味や同志の意味となつたが、いつしか悪事を企む仲間の意味で用いられるようになった。「徒党」は事をもくろむために集まつた仲間のことを指し、悪い仲間をいうことが多い。

中国語で似た意味を表すものとして、“一丘之貉”がある。“一丘之貉”は《汉书・杨恽传》：“若秦时但任小臣，诛杀忠良，竟以灭亡，令亲任大臣，即至今耳，古与今如一丘之貉。”を出典とする四字熟語である。同じ丘に住む貉のことから、同類、似たようなものをたとえ、ほとんどの場合はマイナスの四字熟語として、同類の悪者をたとえている。類似性によってメタファーが働いていると考えられる。ここにおける数字「一」も「同一、同じ」という意味である。

一部始終 // 一五一十

(29) 彼はそのことが秘密だと知らないで、一部始終人に言ってしまった。（『中国語熟用成語 熟語』光生館）

訳文：他不知道那是秘密，所以他一五一十地都对人说了。

(30) 一五一十地把事情全告诉我吧。（『中国語熟語辞典』白水社）

訳文：一部始終そのことを私にお話しなさい。

日本語における四字熟語「一部始終」とは本来、書物の初めから終わりまでという意味で、そこから、成り行きの初めから終わりまでという意味となっている。ここにおける「一部」は「(書物などの)ひとまとまり・一冊」という意味である。本来「一部」という意味は分かりやすく言えば「全巻」の意味だった。釈迦の言葉を書いた「経文」が由来だということである。本来、釈迦の教えを説いた経文それを「一部」と言い、その教えを通して「全部」と理解されていたのである。経文はいくつもあり、その説いた多数の教えの「全体」から考えれば、その「一部」は「部分」であると考えられるようになり、こうして「一部」は「部分」の意味に変化していったのであると推測されたそうである。

それに類似した意味を表す中国語の四字熟語に“一五一十”がある。“一五一十”は明・施耐庵《水滸全傳》第二十五回：“这妇人听了这话，也不回言，却踅过来，一五一十，都对王婆和西门庆说了。”を出典とする四字熟語である。中国には数が多い場合、五ごとに区切つて「一五、一十、十五、二十…」数えるところから、事の始めから終わりまで、最初から最後まで全部という意味を指している。

危機一髪 // 千钧一发

(31) 一位过路的姑娘突然看见一个孩子从五层楼窗口跌下来，在这千钧一发之际，她一个箭步跑上前去，把孩子接住。（《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社）

訳文：通りがかりのある娘がふと一人の子供が五階の窓から転がり落ちてくるのを見つけて、この危機一髪の時に、彼女は飛びついてその子供を受け止めた。

日本語における四字熟語「危機一髪」は髪一本ほどのわずかな差で、危険や困難に陥るかもしれないという状況を喻えている。「一髪」は髪の毛一本のことを指している。

それに類似した意味を表す中国語の四字熟語に“千钧一发”がある。“千钧一发”は《汉书・枚乘传》“夫以一缕之任，系千钧之重，上悬无极之高，下垂不测之渊，虽甚愚之人，犹知哀其将绝也。”を出典とする四字熟語である。“一发千钧”ともいい、千鈞の重さを髪の毛一本だけで支えることから、危険窮まりない、非常に危険なことを喻えている。“钧”は中国の古代の質量の単位で、斤の三十倍にあたる。

3.2 両言語とも「一」を含み、異義を表すもの

一騎当千 ≠ 一馬当先

(32) 一騎当千のつわもの。（『中日大辞典』大修館書店）

訳文：以一当十的勇士。

(33) 是我公司一马当先，首先研制成无公害除草剂的。（『例解中国語熟語辞典』東方書店）

訳文：わが社が無公害除草剤開発の先鞭をつけることに成功した。

(34) 队长一马当先，带消防队员冲进了火场。（『例解中国語熟語辞典』東方書店）

訳文：隊長が消防士たちを従え、率先して火事場に飛び込んでいった。

日本語における四字熟語「一騎当千」と中国語における四字熟語“一马当先”、この二つの四字熟語は一見したところ似ているが、意味はまったく異なる。

「一騎当千」は「一騎当千の勇士」、「一騎当千つ豪傑」のように、一人が千人分に相当するほど強い武人や猛者などを形容する四字熟語として日本の文学作品によく見られる。もともとは武士の強さをたとえたものであったが、人並み外れた強さの意味から、武士以外にも人並み外れた能力や技術などを持つ人にも用いられるようになった。『語源由来辞典』によると、四字熟語「一騎当千」は室町時代ころから見られるようになり、中世末頃までは「いっきとうぜん」と発音するのが一般的であった。同じ意味の四字熟語に「一人当千」があり、「一騎当千」が見られる以前の仏典にも見られるため、「一人当千」をもとに「一騎当千」が生まれたと考えられる。中国語に訳すと、例(32)のように“以一当十的勇士”

と訳すのが妥当である。

これに対して、“一馬当先”には二つの意味がある。一つは先頭をきる、先鞭をつけるという意味、もう一つは率先して事に当たるという意味である。四字熟語“一馬当先”は「先頭をきる、先鞭をつける」という意味を表す場合、日本語に訳すと、例(33)のように「わが社が無公害除草剤開発の先鞭をつけることに成功した。」と訳すことができる。「率先して事に当たる」という意味を表す場合、日本語に訳すと、例(34)のように「隊長が消防士たちを従え、率先して火事場に飛び込んでいった。」と訳すことができる。急速な発展を見せる今日の中国では率先して困難に立ち向かうという意味で“一馬当先”的四字熟語が日常的に用いられている。中国語における四字熟語“一馬当先”はもとは「漢書」食貨志を出典とする“猪突豨勇”という四字熟語である。使っている動物は「馬」ではなく、「猪」である。猪のように向こう見ずに突き進む勇士を形容する。もともとは中国漢の王莽が、囚人などの中から選抜して組織した軍隊の名である。ここに使われた猪も豨(豕希)もイノシシの一種を意味しているが、現代中国語の四字熟語ではいずれもブタの意味である。また、“猪突豨勇”から形の変化した日本語の「猪突猛進」は周囲の状況などを顧みず、猪のように激しい勢いで突進することを表し、マイナスの四字熟語として使われている。

一日千金 ≠ 一日千金

(35) 一日千金なので、無駄にしないで勉強すべきである。(黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》)

訳文：时间就是金钱，应该抓紧用来努力学习。

(36) 一日千金都能散尽。(邓海建《当思如何可持续》)

訳文：一日に千金もの多くの金錢が消費される。

日本語における四字熟語「一日千金」は時間が貴重なものであることを強調している。一日という時間は千金に価するほど貴重なものであるとの喻えであり、類似性に基づくメタファーが働いていると考えられる。ここにおける四字熟語「一日千金」の意味は日中両言語における四字熟語「一刻千金」の意味と同じである。一刻が千金にも値するほど貴重であることから、よい季節や楽しいことが早く過ぎ去っていくのを惜しむことを喻えている。大切な時間を無駄に過ごしてはいけないという戒めである。「一刻」は中国語では「十五分」という時間を表す単位である。ちなみに、日本には1日を48等分する「刻」があった。すなわち、この「一刻」は30分に相当する。48等分の刻は時辰を4分割する一種の補助的単位として使用され、「子の一刻」「寅の四刻」などと呼んだ。また、一日を38等分、1

つの時辰を上中下に3分割する「刻」もあり、「子の上刻」「寅の下刻」などと呼んだ（相馬充等 2003 参照）。四字熟語「一刻千金」は宋の蘇軾《春夜》“春宵一刻值千金”を出典とし、春の夜の思いを表している。この二つの四字熟語における数字「一」は共に時間の短さを表している。

一方、中国語における四字熟語“一日千金”は人が浪費することを表している。一日に千金もの多くの金銭が消費されることを形容している。“一日千金”における数字“一”と「一日千金」における「一」とは同じで時間の短さを表しているが、二つの熟語の意味はまったく異なる。また、日中両言語において、共に「一字千金」という四字熟語がある。一字に千金の価値があるほど、すぐれた文章や文字のことの喩えで、または師の恩の厚いことの喩えである。ここでは数字「一」を使って、文字の少量性を強調している。『史記』によると、秦の呂不韋が『呂氏春秋』を発表した際、「この文章に一字でも手を入れることができた者に千金を与えよう」と言ったが、誰も直さなかつたという物語による四字熟語である。日本では淨瑠璃「菅原伝授手習鑑」に「一字千金、二千金、三千世界の宝ぞ」という台詞がある。

一陽来復 ≠ 一阳来复

(37) いよいよ一陽来復の兆しが見えてきた。（『中日大辞典』大修館書店）

訳文：漸有否极泰來的迹象。

中国語における四字熟語“一陽来復”は冬が終わり、春が来ることを表し、易占いの書である《易经》¹²における〈地雷复〉の項から一人歩きを始めた四字熟語である。〈地雷复〉には、“复，亨。出入无疾，朋来无咎。反复其道，七日来复。利有攸往。”とある。“复”には元々「戻る」という意味があり、六本の卦が上から「陰」が五つ並び、一番下に「陽」の卦が立った状態を指す。中国の昔の暦では十月がすべて陰で覆われ、その後、陽の兆しが見えてくるのが十一月である。陽の長さも冬至までは短く、冬至を境に再び長くなっていく。つまり、太陽の力が衰え、冬至で反転して再び勢いを盛り返すのである。そのため、冬至は「一陽来復の日」と呼ばれる。また旧暦の十一月を「子の月」と呼び、十二支の始まりとなる。旧暦十一月の冬至のことも「復」と呼ばれる。

一方、日本語における四字熟語「一陽来復」は中国から伝わったもので、もともとは中国語における“一陽来復”と同じように、冬が終わり、春が来ることを指していた。しかし、そこから転じて、「逆境や不運など、よくないことが続いたあとに、ようやく幸運が巡ってくる」という類似性に基づくメタファー的な意味に拡張した。例(37)のように「一陽

「来復」はメタファー的意味を表す場合、中国語に訳すと、“漸有否极泰来的迹象”と訳すのが妥当である。

一刀両断 ≠ 一刀两断

(38) 他得马上离开人和厂，跟他们一刀両断。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈骆驼祥子〉』）

訳文：彼はいまからすぐ人和をはなれなければならない。あのふたりとすっぱり縁を切るのだ。

(39) あの人は名探偵と言われるだけあるね。いったん捜査に着手したら、あれほど錯綜した事件を一刀両断に解決してしまったのはさすがだよ。（『例解中国語熟語辞典』東方書店）

訳文：他不愧为神探，一着手就把那么复杂的案子快刀斩乱麻一样地处理完了，真了不起。

日中両言語における四字熟語「一刀両断」は字面から見ると、共に一太刀で真っ二つに切るという意味である。数字「一」はひとたびという意味である。「一刀」とは刀をひとたび振り下ろしたり、斬り払ったりすることを指し、「両断」とはつながったものを断つ、真っ二つに切るという意味である。日中両言語においては相当な拡張義の違いが見られる。

中国語における“一刀両断”は古くから築き上げた関係を刀でバッサリと両断するよう、完全に、徹底的に断ち切る、きちんとけじめをつけるという強いイメージに拡張し、類似性によってメタファーが働いていると考えられる。《朱子語類·卷 44·17》には“克己者是从根源上一刀两断，便斩绝了，更不复萌。”とある。つまり、「自身に勝つとは根本から一刀のもとに真っ二つにすることで、そうすれば完全に断ち切られて、もう芽生えて来ることがない。」という意味である。

これに対して、日本語における「一刀両断」は処置が素早いことや、思い切った決断をすること、抜本的に解決することを表している。同じように類似性によってメタファーが働いているが、中国語における“一刀両断”とは異なった方向に拡張されたと考えられる。ここにおける数字「一」は動作時間の短さを強調している。中国語の“快刀斩乱麻”に近い。

一触即発 ≠ 一触即发

(40) 女朋友初见，叙述家庭的情况和自己的经历也是最经常的，一触即发的。《被忘却的》叶圣陶

訳文：彼女と初対面の時は自分の家庭状況と経歴を紹介するのが一番普通で、起こりや

すい。

中国における四字熟語“一触即发”は李开先の《原性堂記》を出典とする四字熟語である。ここにおける数字“一”は「ちょっと、少し」という意味を表し、“一+動詞+即…”は前に分析した“一+動詞+就…”という熟語化した表現と同じであり、ある短い動作ですぐにある結果や結論に達することを表す。“即”は「すぐに」という意味で、中国においては遊牧民の武器であった弓は引かれた後、手を放すと矢がすぐに放たれるというところから来ている。“一触即发”は「ちょっと触れれば、すぐに爆発する」から、二つの意味方向に拡張され、「ちょっと触れただけで、すぐに爆発しそうな状態になりかねない」きわめて緊迫した状態や状況という意味が生まれ、小さなきっかけで、重大な事態が発生するかもしれないという危険な状態に直面していることを喻える以外に、例(40)のように「物事が発生しやすい」という意味をも表すことができる。

一方、日本語における四字熟語「一触即發」は中国から伝わり、重大な事態が起こるかもしれない危険な状態に直面している意味にしか拡張されていないようである。中国語における「物事が発生しやすい」という意味の“一触即发”を日本語に訳す場合、「起こりやすい／発生しやすい」するのがよい。

一長一短 ≠ 一長一短

(41) どのシステムにも一長一短があり、日本のシステムのほうがすぐれているなどということは簡単にはいえない。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「適応の条件」』)

訳文：任何系统都有长处和短处，不能断言日本的系统比别人优越。

(42) 刚进屋，她就开始一长一短地说个没完。(『例解中国語熟語辞典』東方書店)

訳文：入ってから、彼女はくどくどしゃべり始めた。

日本語における四字熟語「一長一短」は「一短一長」ともいうが、ともに人や物事について、いい面もあり、悪い面もあること、長所もあり、短所もあって、完全ではないことを表す。ここにおける二つの数字「一」は合わせて「一………」という形で、「ある面は…ある面は…」という対比的な意味を表している。「長」と「短」は「長所」と「短所」、「よい点」と「悪い点」のことを指している。

これに対して、中国語における四字熟語“一长一短”は日本語における四字熟語「一長一短」の意味とは完全に異なり、人の話が無駄に長いこと、しつこく繰り返して言うことを喻えている。ここにおける二つの数字「一」は合わせて「一………」という形で、動作の連續を表している。

表裏一体 ≠ 表里如一

(43) 他是个表里如一的老实人。（『例解中国語熟語辞典』東方書店）

訳文：彼は裏表のない正直な人である。

(44) 农村干部的命令主义是同上级领导的缺乏民主作风分不开的。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<邓小平文选第一卷>』）

訳文：農村幹部の命令主義は上級指導者に民主的な作風が欠如していることと表裏一体をなしている。

日本語における四字熟語「表裏一体」は二つのものの関係が表と裏のように密接で切り離せないことから、そのような関係にあることを喻えている。ここにおける数字「一」は「同一」という意味を表している。

これに対して、中国語における四字熟語“表里如一”は《朱子全书・论语》“行之以忠者，是事事要着实，故某集注云：‘以忠，则表里如一。’”を出典とする四字熟語である。裏表がないこと、人の思想と言行動が一致していることを指している。相対する意味である「裏表がある」を表す場合、四字熟語“表里不一”を用いる。ここにおける数字「一」も「同一」という意味を表している。

打成一片 ≠ 打成一片

(45) 与人民打成一片，同人民建立血肉不可分离的关系。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<邓小平文选第一卷>』）

訳文：人民と一つに溶けあい、人民と切っても切れない関係をきずきあげる。

日本語における四字熟語「一日千金」は仏教用語に由来し、禅宗で座禅に没頭すること、座禅によって実現する自他・内外・心身などの諸対立が消滅し、すべてが一体となった悟りの心境から転じて、他を顧みず、一つのことを突き詰めていくことを喻えている。

一方、中国語における四字熟語“打成一片”も禅宗通史である《五灯会元》卷十五“老僧四十年方打成一片。”を出典とするが、日本語とは異なった方向に拡張され、一つに解け合う、気持ちが一つになる、思想や感情が一致していることを指している。

3.3 一方の言語で「一」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 一天四海 // 九州四海

(46) その人ならでは汚すげき官ならねども、一天四海を掌の内に握られしうへは、子細に及ばず。（『平家物語』第一卷 3 鱸）

訳文：既然是宁缺勿滥的官职，九州四海尽归其掌握之中，那就无可非议了。（申非訳）

日本語における四字熟語「一天四海」は『平家物語』を出典とする熟語であり、天下のすべて、全世界の意味を表す。ここにおける数字「一」はあるひとつの物とか範囲の全体を表している。「一天」は「全天空」という意味であり、ここから転じて、全天空だけではなく、天空とつながっている土地も含め、「全世界」の意味を表すことができるるのは空間の隣接に基づくメトニミーが働いていると考えられる。「四海」は四方の海の意であり、また、仏教用語では須弥山を取り巻く四つの外海をも指している。ここでは「一天」と並び、全世界の意味を表しており、「一天」と同じようにメトニミーが働いていると考えられる。

これに対して、中国語における四字熟語“九州四海”は卢照邻《登封大酺歌》を典故とする熟語である。“九州”とは中国全域の総称である。古代、中国全土を九つの州に分けたことに由来する雅称の一つである。この九つの州に関しては諸説あるが、一番説得力がある説は“冀、兖、青、徐、扬、荆、豫、梁、雍”という九つの州である。また、古代の中国人は中国の四方を海がとりまいていると考えた。《尔雅》¹³においては中国の九州の外に四極があり、四極の外に四荒があり、さらにその外に四海が広がっているとしている。四海は九夷、八狄、七戎、六蛮など野蛮人の居住地であるという説があったのは中国語における“海”と“晦”的発音と文字がともにそれぞれ似ており、“海”も文明の光のとどかぬ“晦”（くらい）ところであると意識されたからである。現在、中国語における“九州四海”は日本語における四字熟語「一天四海」とほぼ同じ意味で、全世界を指しており、メトニミーが働いていると考えられる。

一枚看板 // 金字招牌

(47) あの役者は劇団の一枚看板だ。（東方書店『例解中国語熟語辞典』）

訳文：这个演员是剧团的金字招牌。

日本語における四字熟語「一枚看板」は一座の代表的な役者のこと、また、多くの人の内で中心となる人物のことを喻えている。ここにおける数字「一」は「最高、最上、最好」という意味を表している。もともと指しているのは上方歌舞伎の勘亭流で書かれた外題の上に描かれた主要な役者の姿絵の一枚の大きな飾り看板で、ここから転じて、その一枚看板に描かれる役者ることをいうようになり、さらに、広く大勢の仲間のうちでの中心人物を意味するようになった。「二枚看板」は芝居などの興行で中心となる二人の出演者、ある組織などで代表となるような二つのもの、また人気や注目を集めたりするのに有効な二つの物事をいう。「一枚」の二倍を意味する「二枚」と、人の注意を引いて客寄せや自慢の種となる人や事柄を意味する。歌舞伎の看板は実際、通常八枚からなっていた。「一枚目」の

看板は「書き出し」と言われ、主役の名が書かれ、「二枚目」の看板には若い色男の役者の名が書かれることになっていた。また、「三枚目」の看板には道化役の名が書かれることになっていた。このようなわけで、また歌舞伎では美男子というと、美しく見せるべく化粧で白く塗っていたため、「二枚目」という言葉はやさ男（「優男」の字が当てられるが多い）の美男子を意味するようになり、中国語では“奶油小生”という。

これに対して、類似した意味を表す場合、中国語では四字熟語“金字招牌”を用いる。“金字招牌”は清・曾朴《孽海花》第二十五回：“玆斋部只出使了一次朝鲜，办结了甲申金玉均一案，又曾同威毅伯和日本伊藤博文定了出兵朝鲜彼此知会的条约，总算一帆风顺，文武全才的金字招牌，还高高挂着。”を出典とする四字熟語である。中国語における数字“一”は「最高、最上、最好」まで明確には拡張されておらず、高い、貴重な“金”を用いて、「最高、最上、最好」という意味を表している。目立つように金文字を彫り込んだ看板から、人に誇示する名や称号、宣伝効果のあるものを喻え、「一枚看板」と同様にメタファーが働いていると考えられる。

一帆风顺 // 順風満帆

(48) 在通往科学高峰的道路上会有重重险阻，绝不会是一帆风顺的。（《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社）

訳文：科学の高峰へ登攀する途上では、きっといろいろな困難が重なっていて、決して順風満帆のようなことはありえないのだ。

中国語における四字熟語“一帆风顺”は唐・孟郊《送崔爽之湖南》：“定知一日帆，使得千里风。”を出典とする四字熟語である。人や船が進む方向に吹く追い風を帆いっぱいに受けると、船が軽快に進むことから転じて、物事が何事もなく、順調であることを喻え、メタファーが働いていると考えられる。ここにおける数字「一」は「一つのものの全体、満」という意味を表している。

類似した意味を表す日本語の四字熟語には「順風満帆」があり、“一帆风顺”と同様にメタファーが働いていると考えられる。

緊権一番 // 发奋努力

(49) 緊権一番に勉強に励む。（東方書店『例解中国語熟語辞典』）

訳文：发奋努力学习。

日本語における四字熟語「緊権一番」は気持ちを引き締めて、油断せずに物事に向かうことを喻えている。ここにおける数字「一」は「最高、最上」という意味を表し、「一番」

は重要な場面のこと、思い切って一度ほどという意味を表している。「褲」は、日本の伝統的な下着であり、漢字は「衣」偏に「軍」と書くように、戦闘服に由来すると言われる。昔は布が高価であったことから、戦国時代では戦死者の身分は褲の有無で見分けを行っていた。「緊褲」は褲を引き締めることを指している。難しいことや大勝負の前の心構えをいう四字熟語である。

これに対して、中国語における数字“一”は「最高、最上」まで明確には拡張されておらず、「褲」と関わっている文化もないようであるので、類似した意味を表す場合、中国語では“发奮努力”などを用いる。“发奮”はやる気を出す、奮起するという意味を表している。

4. 数字「一」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

文字は文化のキャリアである。文字がなければ、記載することができず、文化を伝えることもできない。日本と中国との交流は紀元前後から始まったと言われ、最初に漢字が中国から日本に伝わってから、中国語のさまざまな四字熟語も徐々に日本に伝わってきた。漢字は表意文字であり、読み方が異なっていても情報を伝えることはできる。日中両国は共に漢字を使っているからこそ、中国から日本に四字熟語が伝わった時、加工されず、また加工されたとしても、ごく一部が加工されるだけで、人々の間にすぐに溶け込んだ。そのため、中国語における多くの数字を含む四字熟語は日本語の中にもほぼ同じ表現がしばしば見られる。それとともに、日本の文化も中国の影響を大いに受けながら、発展してきた。

叶舒宪・田大宪(1995)では「文化は文字から始まり、文字は数字から始まり、数字は一から始まった。」と述べている。

数字「一」は中国の伝統的な思想を示す重要な概念である。紀元前二二一年、秦の始皇帝が打ち立てたのはまさに史上空前の帝国であった。天地開闢よりこのかた、まず三皇・五帝と呼ばれる聖人たちが統治した時代があり、その後、夏・殷・周という三つの王朝が続いた。しかし、最後の周王朝も次第に衰微し、異民族の侵入によって都を移さざるを得なくなり、さらに独自に「王」を名乗る者も現れて、周王の権威はどんどん顧みられなくなつていった。さまざまな国が割拠しては争いを繰り返す混乱した時代が、何世代にもわたって続いたのである。それに終止符を打ったのが、「始皇帝」であった。『史記』の「秦始皇本紀」には次のような記述がある。

“朕为始皇帝。後世以计数，二世三世至于万世，传之无穷。”（訳：朕を始皇帝と為し、

後世は計を以て数え、二世三世より千万世に至るまで、之を無窮に伝えん。）

自分は「始皇帝」と名乗るから、あとは「二世皇帝」、「三世皇帝」と続け、千世も万世も永久にこの帝位と帝国を伝えていこうと考えたのである。始皇帝の帝国は彼の死後すぐさま崩壊を始め、「千万世」どころか「二世」までしか伝わらなかつたが、「二」、「三」と続けて伝えていこうと言っているところからすれば、「始」とは数字「一」のことにはかならない。

また、许慎《说文解字¹⁴》に“一，惟初太始，道立于一，造分天地，化成万物”とある。「道」は万物の本源、即ち宇宙を意味するものである。四字熟語「道立于一」とは万物の本源は「一」から生まれたのだということである。天地万物の発生と形成を指す。この思想の根本は中国における老子という思想家の考えに基づく。《老子》第四十二章に“道生一，一生二，二生三，三生万物。”とある。《淮南子·天文训》にも“道始于一，一而不生，故分为阴阳，阴阳合和而万物生。故曰‘一生二，二生三，三生万物。’”とある。ここから分かるように、数字「一」は数字の始まりであり、万物の始まりである。この意味によって、「一入再入」、「一目惚れ」、“一见钟情”、“一见如故”、“一拍即合”など日中両言語における数字「一」を含む四字熟語の意味も理解しにくくはないと言えよう。

伝統的な思想の面だけではなく、数字「一」は神話的思考においても単に数を数えるものではない。宇宙の万物は「多」の対立面として、まさに創世以前の神秘的な状態や神秘的な存在の象徴なのである。叶舒宪・田大宪(1995)によると、神話は創世以前の情況を描く時に、混沌、元氣、鷄卵、瓢箪、赤子、人体など、各種の「異形にして同質」の象徴的な意象を使うが、その象徴性について言えば、みな「一」の状態と同一か共通的なもの、すなわち、差異なく、まだ分化していない、原初的な融合体の文化、瓦解や万物の化生として表れる。分化の第一歩は通常はいわゆる「元氣剖判して、乾坤始めてさだまる」である。すなわち、擁抱して一体である天である父と地である母が離れたり、宇宙卵が二つに割れ、上の殻が天、地の殻が地になったり、瓢箪が二分して、上の瓢が天、下の瓢が地になったり、混沌としている海にいる妖怪の肢体がばらばらになったりする。混沌として存在の分解と離間に着目しなければ、数字「一」の象徴する無差異の全体やそれに特有の完全、和同、無矛盾、また四字熟語「整然画一」、「專一不二」などの価値の意味を理解することはできない。

一方、日本の神話にも「混沌から世界が発生し、日本の神は『一』から誕生した。」という記載が見られる。『古事記』の冒頭に「夫混元既凝。氣象未效。無名無為。誰知其形。然

乾坤初分。參神作造化之首。陰陽斯開。二靈為群品之祖。」という記述が見られる。「混元」とは渾沌の元となる氣である。その時は生命の兆しや、物体の形がはっきりとは見えない。名もなく、何をしているのかが誰にも分からなかった。国土が脂のように漂っていて、神々はこの原始の混沌とした「一」の状態から生まれたと語っている。

以上から分かるように、数字「一」は万物の本源であり、一つの整体ないしは全体である。そこから、「一家団楽」、「一生懸命」、「一括契約」、「一括購入」、「一期一会」、“一无所有”、“一臂之力”、“耳目一新”などというような数字「一」を含む四字熟語で「物事の全体、すべて、完全」などの意味を指すようになった。

ここで和製熟語「一生懸命」、「一期一会」と中国語の四字熟語“一臂之力”について、ちょっと触れておきたい。

「一生懸命」は、「一所懸命」が本来の形である。「一所懸命」は、「一所懸命の地(領地)」という形で、主に中世、武士間で用いられた語である。『日本国語大事典』によれば、その意味は「一所の領地で、死活にかかわるほど重視した土地。」のことである。「一所懸命」は一か所の場所で、命をかけることであり、そこから転じて、「生死をかけるようなさし迫った事態」、「命がけ」のことを意味するようになった。ここにおける数字「一」は「一つ」という意味である。それがなぜ「一生懸命」となったのか。「一所懸命」が本来の語義を離れて、「命がけのこと」を意味する言葉として広く用いられるようになってから、「一生懸命」と字を変えるに至った。つまり、「いっしょ」を「いっしょう」と長音化し、「一生をかける」が語源だと考える説が、表記が変化した理由であろうと考えられている。このことは江戸時代の淨瑠璃などに「一生懸命」の用例が多く見られることからもわかる。この「一所懸命」が「一生懸命」に変わってから、熟語における数字「一」の意味も変わってきて、「物事の全体、すべて」を指すようになった。一方、中国では「一所懸命」の領地という形がないため、そのような四字熟語も存在しない。中国語では“拼命”(命をかけて)を用いて、類似した意味を表している。

「一期一会」は、日本の茶道に由来する四字熟語である。茶会に臨む際にはその機会は二度と繰り返されることのない、一生に一度の出会いであるということを心得て、亭主・客ともに互いに誠意を尽くす心構えを意味する。「一期一会」における前の数字「一」は「物事の全体、すべて」を指し、後ろの数字「一」は回数の少なさを強調している。茶会に限らず、この茶道の中に見出されてきた理念は広く日本の日常生活の中に見出される。「あなたとこうして出会っているこの時間は二度と巡っては来ないたった一度きりのものである。

だから、この一瞬を大切に思い、今出来る最高のおもてなしをしましょう」という含意で用いられる。「一期一会」の気持ちで、お客様を大切にもてなすからこそ、毎年世界各地の観光客が日本を訪れるのであろう。このような高度なサービス精神を持つ日本文化は現在、中国社会にも大きく影響している。

これに対して、中国においては“一生二熟”（初対面は見知らぬ同士、二度目はもはや親しい仲間）という観念は心の中により深く刻まれていたようである。一度の出会いより、二度の出会いのほうを更に重視する。

中国語には「他の人に力になってやることを助“一臂之力”と言う。“臂”とは腕のことである。数字“一”を用いて、わずかな力という意味も表すが、本気になって全力で他人のため力を貸すという意味である。この四字熟語は日本にも伝わり、「一臂の力を貸す」と言う。日本語では「一肌脱ぐ」とよく訳される。「一肌脱ぐ」は字面で見ると「皮膚を一枚脱ぐ」ということであるが、実際は着物の片方の肩を脱いで肌を出すという意味である。昔、男が大仕事にとりかかろうとする際に、そのような決めポーズを作ったことから、力を貸す約束をするということを表した熟語である。「一肌」でも、“一臂”でも、体の一部分を用いて、全体的に力を貸すことを指すのはメトニミーが働いていると考えられる。ちなみに、「肌を脱ぐ」を文字のみの意味によって、中国語に訳せば、“剥你一层皮”となる。中国語における“剥你一层皮”は「やっかいなことなので、身も剥がされてしまう」という意味と「貴様の皮をはいでやる」と人を脅す意味である。人を助ける場合に使用する「肌を脱ぐ」の意味とは完全に関係がないようである。

さらに、哲学範疇からみれば、中国における陰陽思想の中核は四字熟語“一分为二”と“合二为一”である。“一分为二”とは混沌から陰陽が生まれることであり、“合二为一”とは「陰陽合一」のことである。この陰陽思想が日本の文化にも大きな影響を与えたと考えられる。中国の「太一(太陽神)」は混沌の「一」から“一分为二”的代表とする。これに対して、日本の天照大神は「陰陽合一」という特質を持っている。

ここで「太一」と日本の「天照大神」について触れる。

「太一」は、北極星の神靈化が最高神太陽神である。張(2010)では「太一」は「一」で、天と地の「二」に分かれる前に存在したものであり、混沌でまとまっている状態は「太一」の具像であると述べている。中国の漢の全盛期において、「太一祭祀」という官の行う礼樂活動があった。暮れがたから始まり翌日の夜明けに終わり、原初的な觀念において太陽の運行に似せている。この「太一祭祀」は太陽崇拜、つまり数字「一」への崇拜と

密接な関係を有すると言えよう。

一方、日本における「天照大神」は水平線から立ち上る日の出を迎える神であり、天から照りつける太陽を表す太陽の神と言われる。伊勢神宮の祭祀で大駿に「太一」の文字が大きく墨書きされたり、御神祭の幟にも大きく書かれる。これについて、吉野(1992)は天照大神のかげにひそむ「太一」神の条に、「天照大神と太一の習合」、中国の最高神「太一」が天照大神に習合し隠されたと述べている。伊勢神宮の「心の御柱¹⁵」は立てられた後も覆屋によって隠れてしまう。見ることも、触れることもできない神聖な柱とされている。この柱は精気を生み出す男根(陽根)と容易に連想できるであろう。この柱が土中に埋められている様子を考えると、柱が埋められている大地は万物の生れる母となる大地、女陰と連想できる。まさに、「陰陽合一」の形を表わしているのである。「太一」も「天照大神」も、陰陽未分の混沌たる元気の「一」に一致している。

また、神社に参拝した者は拝殿の前での「二礼一拝」が基本である。「二拝一拝」という場合もある。いずれにせよ、まずは二度深くお辞儀をし、二度手を打つ。なぜ、二度なのかについて、飯倉(2007)は「陰と陽の二対を表すとともに、古代中国より尊いとされてきた奇数ではなく、二という偶数を用いることで、神々ではなく人間が祈りに来たことを表している」と説明している。この「二」は陰陽に最後は手を合わせて「一」に祈る。また、至るところに柱のような丸い石や木が立てられ、注連縄¹⁶を引いて、「御神体」として祭る。石の柱や木は陽(男根)で、輪になっている注連縄は陰(女陰)と連想され、四字熟語「陰陽合一」になっていると考えられる。

以上から見れば、日本においても数字「一」を世界の本源、万物の始まりに見なすと考えられていることがわかる。日本の生活文化に大きな影響を与えてきた陰陽思想では数をそれぞれ奇数と偶数に分け、縁起のよい数、重要な数として捉えてきた。『古事記』に「伏惟、皇帝陛下、得一光宅、通三亭育。」とあり、「一」はいかに大切かを物語っている。大野晋(1997)は「日本国全体を念頭に置く時には、その生産の豊穣・社会の安穏を全体として支配する力があると考えられ、それに物を供える。それが記紀には天照大神として登場する。」と言っている。数字「一」は物事の一番初めの数として、奇数の一番初めとなる数として、昔から現在に至って、すぐれたものを表す数と考えられてきた。神、中心など、聖なる数として崇められ、また、太陽と月、男性と女性、昼と夜など、この世を形作るあらゆる物事を陰と陽という対で考えてきた陰陽思想において、数字「一」はその対を構成する基本要素としても尊ばれてきた。

日中両国における数字「一」は共に聖数と見られるが、日本においては、特殊的な習慣や文化によっては、「一献酒は飲まぬもの」、「一膳飯は縁起が悪い」などのように、「一」を避けている場合もある。

日本で酒を飲む際の礼儀とされている「献」は中世頃から始まった接客の作法である。「一献」とは杯に一杯だけ酒を飲むことである。しかし、これは葬儀の際の作法であり、宴席では縁起が悪いとされる。そのため、さらに酒を勧めることにより、「一献」という縁起が悪くなることを回避する。

これに対して、『礼記』によれば、中国では主人が賓客に酒をつぐことを「献」といい、賓客が主人に返杯するのを「酢」という。主人がまず自ら飲み、それから賓客にすすめて共に飲むのを「酬」という。この三種を合わせて四字熟語「一献之礼」となる。古代からの献酒は「九献之礼」が最高レベルとされるが、「一献之礼」で済ませることもでき、回避することはしない。

また、日本では「一膳飯は縁起が悪い」と言って、よくおかわりを勧められたという。なぜ縁起が悪いかについて、飯倉(2007)によると、死者に供える枕飯に通じるからであるという。枕飯とは亡くなった人が生前使っていた茶碗にご飯を山盛りにして盛り、箸を垂直に立てたものである。山盛りにするのはあの世に行つても食べるものには困らないようという願いが込められている。ここから茶碗にご飯を山盛りにすることやご飯に箸を立てること、さらにご飯を一膳だけ終わることは縁起が悪いとされた。また、葬儀の際、亡くなった人の枕元に一輪挿しの花瓶に生けた一本の花を供える習慣がある。これは「一本花」と呼ぶ。遠い地にいたお釈迦様の入滅の知らせを聞いたことに由来するといわれている。一般的には菊の花を一輪飾るが、地域によってはしきみの花を供えるところもあり、「一本しきみ」と呼ばれることがある。この「一本花」と「一本しきみ」も縁起が悪いと考えられる。

そのほか、日中両言語において数字「一」は各自にそれぞれメタファー的な意味を持っている。例えば、中国語においては、“五一假期”、“六一假期”、“十一假期”など言い方があり、その中の数字“一”は「ついたち」と定義され、それぞれ「五月一日」、「六月一日」、「十月一日」を指している。

一方、日本語における「一切れ」は日本人が食事する時、できるだけ使わないようにしているそうである。なぜかというと「一切れ」は「ひとりれ」と発音するので、「人を切れ」と連想させ、不気味で不愉快な雰囲気になる可能性があるからと考えられる。

また、日中両言語における数字「一」は本身的にメタファー的な意味を持っているだけではなく、他の数字と組み合わせる場合においても、発音などによって、メタファー的な意味が生じることもある。例えば、中国語においては、“八一四七”は“不要生气(怒らないで)”であり、“一九五”は“你找我(私を探しますか)”であり、“五一八”は“我要发(お金持ちになりたい)”であり、“一九八”は“你走吧(帰ってください)”であり、“九一八”は“加油吧(頑張ってください)”など数字の組み合わせがメタファー的な意味を付与されている。

これに対して、日本語においては「一一七」は「いいな」であり、「一七一」(災害用伝言ダイヤル)は「いない」なども同じメタファー的な用法であると考えられている。

II. 数字「二」



1. 日中両言語における数字「二」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「二」の意味を調べるためにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 7 項になる。

基本義：

- ① 数の名。一の次、三の前の数。

派生義：

- ② 二つ目、つぎ。
- ③ 同じではないこと。二種類、別のこと。
- ④ 対となる、並び称される。
- ⑤ ふたたび。
- ⑥ 三味線で二の糸の略。
- ⑦ 野球の二塁手の略。

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典（修订版）》(2001)、《现代汉语辞海（全新版）》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 7 項になる。

基本義：

- ① 数目、一加一所得的数。

派生義：

- ② 序数、第二。

- ③ 两样的。另外的。
- ④ 并称。
- ⑤ 违背，背叛。
- ⑥ 通常用于方言中，表示叱责、轻视的意思。
- ⑦ 姓氏。

上から見られるように、日本語における数字「二」の意味は7項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味は6項ある。これに対して、中国語における数字“二”的意味も7項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味は6項ある。

以下で日中両言語における数字「二」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「二」のプロトタイプに関する比較対照

日中両言語における数字「二」のプロトタイプ、つまり数える数量的概念として、意味は共通しているが、用法については違いがある。

(1) 二足す二は四です。(小学館『日中辞典』)

訳文：二加二是(等于)四。

(2) 石油罐二個持つてるので、電車やバスに乗ることをあきらめたのである。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「あした来る人」』)

訳文：由于带有两个铁筒，只好放弃电车或公共汽车。

例(1)は基本的な数の名という意味に基づいた例である。例(2)は助数詞と連用する場合である。例(2)のように、数字「二」はプロトタイプ的意味を表す場合には、普通の助数詞の前に、中国語では“二”ではなく、“两”を用いる。しかし、すべての助数詞の前で必ず“两”を用いるわけではない。以下の例(3)から例(6)を見てみる。

(3) 我叫堂倌再添二斤酒，然后回转身，也拿着酒杯，正对面默默的听着。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈彷徨〉』)

訳文：私はボーイをよんでもさらに酒を二斤注文し、それから向き直って、こちらも盃をとりあげ、向いあってもっぱら聞くほうにまわった。

(4) 朱铁汉过去有二亩地，一直都是用周士勤的牲口耕种，分的地又有一半是秋天种了麦子的，很容易对付。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈金光大道〉』)

訳文：朱鉄漢は二ム一の畑をまえまえから周士勤の役畜を使って耕していたし、分配された土地も半分は秋に麦をうえているから、やりやすい。

(5) 私はといえば、二米ほどの距離を置いて、グラウンドのベンチに一人で腰掛けていた。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「金閣寺」』)

訳文：而我则独自坐在两米开外运动场的一条长凳上。

(6) 以後、毎月二キロずつ増え、半年後には五十キロ、私としてはベストの体重になっていた。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「心の危機管理術」』)

訳文：此后，每月平均增加两公斤，半年后，体重增到五十公斤。这作为我来讲，当是最佳的体重。

例(3)から例(6)の共通点は助数詞が度量衡の単位であるということである。この場合、“二”、“两”のどちらを使ってもよい。ただし、例(3)と例(4)のように、中国の伝統的な度量衡単位(分、亩、顷、合、升、斗、石、斤など)の場合は主に“二”を用い、例(5)と例(6)のように、新しく使われるようになった度量衡単位(米、公里、公斤、平方米、立方米など)は主に“两”を用いる。

ちなみに、中国語における数字“二”と“两”は多くの場合には同じ意味を表すが、区別についてはいくつかの規則がある。

a 数学の中の“二”は“两”と言えない。例えば、一元二次方程。

b 概数を表わす時“两”を使う。「几」の意味である。例えば、过两天再说。以下の例(7)と例(8)はこの例である。

(7) 「午後は暇になる。自動車で二、三カ所桜を観に回らないか」(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「あした来る人」』)

訳文：“下午有时间。坐车去看两处樱花，好么？”

(8) 都八点了，才来这么两个人。(くろしお出版『現代中国語文法総覧』)

訳文：もう八時になったのに、たった二、三人来ただけだ。

c ペアとしての親族関係を表わすとき“两”を使う。例えば、两兄妹。

d ペアとしての事物を指す時“两”を使う。例えば、两面派、两全其美、势不两立、两袖清风。

e 固定用法としての言葉には“二”しか使えない。例えば、二等、二胡、二龙戏珠。

f ある言葉には“两”と“二”的どちらにも使える。意味も同じである。例えば、二/两虎相争、二/两人同心。

g “二”と“两”が共に使える場合は誤解を招くこともある。例えば、“二楼”は第二階を指す。“两楼”は二つの建物を指す。

h “二”と“两”は抽象的な意味を表わす。この場合は“二”と“两”は交換することができない。例えば、兩三天(時間の短さを表わす)。三天兩头(いつもの意味を表わす)。三长两短(命に関する危険さを表わす)。

i “二”と“两”は確実な数を表わし、置き換えることはできない。例えば、独一无二、数一数二、一刀两断、一举两得。など。

一方、日本語においては中国語と同じように「兩」という言葉がある。しかし、中国語の“两”的ような“三天两头”と“过两天再说”など抽象的な曖昧な数量を表わす機能がないようである。

1.4 数字「二」の意味拡張に関する比較対照

派生義②から④までは、日中両言語においては意味は共通している。

(9) 五時には新橋の停車場に行って、二等待合室に入った。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「布団」』)

訳文：下午五时，到达新桥车站后，进入二等候车室。

(10) 今天，二班的一个女同学对我说：“我真佩服你的朗诵天才。”(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈人啊，人〉』)

訳文：きょう、二組の女の子が、「あなたの朗誦の才能にはほんとに敬服するわ」って言ってくれた。

(11) 这面具引起我的条件反射，在我的第一信号系统里产生了痛楚的感觉，在我的第二信号系统里跳出了一个概念：妻子。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈人啊，人〉』)

訳文：その面がおれの条件反射を引き起こした。第一信号系に痛覚が生じ、第二信号系に一個の概念が浮かんだ—妻。

例(9)、例(10)と例(11)はいずれも派生義②の順序、二つ目を表している例である。この意味においては、時には数字「二」の前に“第”をつけ加える。特に後ろに限定される名詞の音節が多い場合においては、音節上のバランスを考慮して、前に“第”をつけ加える。例えば、“第一教研室”(第一教学研究室)、“第二机械工业部”(第二機械工業省)などとする。簡略化する時は“第”をつけず、“一教”、“二机部”というふうにする。

(12) 我张金发是共产党从火坑里解放出来的，我沒二心。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈金光大道〉』)

訳文：この張金發は共産党に泥沼から救ってもらったんだ、二心なんかねえ。

(13) 二王¹⁷門。(小学館『日中辞典』)

訳文：两旁有哼哈二将的寺院门。

例(12)における「二心」は日中両言語において、ともに「別のこころ」という意味であることが派生義③からわかる。例(13)は派生義④の「対となる、並び称される」意味を表している例である。

(14) 有死无二。(愛知大学中日大辞典編纂處『中日大辞典』)

訳文：死すとも背くことなし。

例(14)は中国語における派生義⑤の「背くこと」という意味を表している例である。それに対し、日本語における数字「二」はこの意味までは拡張されていない。

(15) おだやかだが、相手に二度と踏み込ませない堅固として響きがあった。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「あした来る人」』)

訳文：但温和中含有坚决，使得对方难以再次启齿。

(16) 只是再不会有人象她那样疼少华了，不论是多么俊俏，多么风流，多么令少华目摇神迷。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈活动变人形〉』)

訳文：ただ静珍ほどに少華を愛する者は二度と現れないだろう、どんなに美人で色っぽく、少華を魅了しようとも。

例(15)と例(16)においては「二…と」の形で後に打消しや反語を伴って、これ一つに限るの意で使い、共に日本語における派生義⑤の「ふたたび」という意味を表している例である。これに対し、中国語における数字「二」はこの意味までは拡張されず、普通は“再”を使って訳す。

(17) 这个二不愣，又捅了马蜂窝！(大東文化大学中国語大辞典編纂室『中国語大辞典』)

訳文：このおつちよこちよい、まためんどうを起こしてしまった。

(18) 这孩子有点二不愣，说话没点儿忖量。(大東文化大学中国語大辞典編纂室『中国語大辞典』)

訳文：この子はちょっとそそつかしくて、話にちっとも分別がない。

(19) 今天是丈母娘相女婿，非同一般，你别那么二不楞登的、多点头，少说话！(吉林大學汉日词典编纂部《汉日词典》)

訳文：今日は(妻の)お母さんが娘婿の品定めをなさる日で、いつもとは違います、あなたはそんなにがさがさしないで、せいぜいうなづいて、黙っていなさい。

(20) 一个二不楞登的妇人。(吉林大学汉日词典编纂部《汉日词典》)

訳文：ひとりの間の抜けた女。

例(17)から例(20)までは中国語における派生義⑥の「そしる、軽視」の意味を表している例である。方言としてはよく用いられる。“二不愣”は名詞としては例(17)のように、愚か者、そこつ者、そそつかしい者を表し、形容詞としては例(18)のように、そそつかしい、そこつである、(情況を考えないで)でしゃばりである、がむしゃらであるなど意味を表している。“二不楞登”は形容詞で、例(19)においてはそこつなさま、がさつなさま、おっちょこちよいなさまを形容し、例(20)においては間抜けであるという意味を表している。日本語における数字「二」はこの用法までは拡張されていないようである。

(21) 二上がり新内。(小学館『日中辞典』)

訳文：提高三弦琴第二弦音调的哀婉小调。

例(21)は日本語における派生義⑥の「三味線で二の糸の略」という意味を表している例である。それに対し、中国語における数字「二」はこの意味までは拡張されていないので、“三弦琴第二弦”と表現するより仕方ない。

中国語における数字“二”的拡張義⑦にあるように、人の姓として使える。《中国古今姓氏大辞典》には、“有二(貳)国，或以国为氏。”とある。この“二国”は現在の中国湖北省広水市応山県のあたりである。この“二国”的貴族において、大夫“二宗”、“二广”などという人がいたそうである。これに対して、日本において、数字「二」は人の姓として使われていない。

なお、その他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

2. 日中両言語における数字「二」を含む四字熟語の全体像

ここでは、「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「二」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめてみる。

2.1 日中両言語における数字「二」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「二」を含む四字熟語29例が取り上げられている。出典元によって分析して見ると、主に日本を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交

流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「二」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍、詩歌あるいは詩歌評論集、伝説と劇曲及び小説の三つに分けることができる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源とした四字熟語は「百二山河」（《史記》より）、「君命無二」（《左氏春秋》より）、「寡二少双」（《漢書》より）、「三心二意」（《論衡》より）など、8例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集が出てきた四字熟語は「二者択一」、「二者選一」（共に《詩經》より）、「三平二満」（黃庭堅《四休居士詩序》より）が3例ある。

(3) 伝説、劇曲及び小説などの文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品を起源とした四字熟語は「二桃三士」（《履齋示儿編》より）の1例のみがある。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「二」を含む四字熟語

日本を起源としたものは「二人三脚」、「二六時中」、「二枚看板」、「二束三文」、「二股膏薬」の5例がある。

2.1.1.3 他国を起源とした数字「二」を含む四字熟語

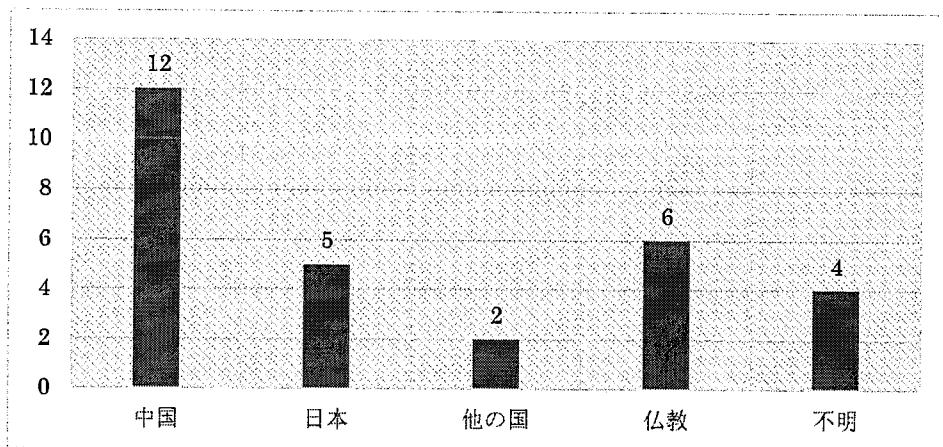
他国を起源としたものは「一石二鳥」と「二律背反」の2例がある。

2.1.1.4 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「二」を含む四字熟語

仏教または仏教に関連するものを起源としたものは「二河白道」（《觀經疏》より）、「自他不二」（《大乘仏典》より）などの6例がある。

以下の図1は日本語における数字「二」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図1 日本語における数字「二」を含む四字熟語の出典元



上の図1からも分かるように、日本語における数字「二」を含む四字熟語の中で中国からのものが12例で、総数の41.38%を占めている。以下は他国からのものが2例の6.90%、日本からのものは5例で、17.24%、仏教または仏教に関するものからのものは6例で、20.69%、そして出典不明な四字熟語が4例となっている。日本語における数字「二」を含む四字熟語の中で中国からのものが最も多く、全体の約4割を占めている。仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語も少なくない。

2.1.2 中国語の場合

商務印書館の《成语大词典》第二版(2012)に収録されている数字「二」を含む四字熟語は42例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語という三つに分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「二」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「二」を含む四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集からと、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分かれる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍からのものは「家无二主、天无二日、二姓之好」(漢《礼记》より)、「二竖为灾」(春秋《左传》より)、「十二金牌」(宋《宋史・岳飞传》より)、「市不二价、寡二少双」(漢《汉书》より)、「心无二用」(漢《刘子・专学》より)など、16例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集からのものは「二分明月」(唐《忆扬州》より)など3例ある。

(3) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「才貫二酉、言无二价」(清《镜花缘》より)、「书通二酉」(宋《太平御览·荆州记》より)、「别无二致」(現代《海涛集》より)、「接二连三」(清《红楼梦》より)、「毫无二致」(清《官场现形记》より)など21例ある。

2.1.2.2 他国を起源とした数字「二」を含む四字熟語

他国を起源としたものは「一石二鸟」の1例のみある。

2.1.2.3 佛教または佛教に関連するものを起源とした数字「二」を含む四字熟語

佛教または佛教関連のものを起源としたものは“不二法门”(元《维摩诘经》より)の1例のみである。

以下の図2は中国語における数字「二」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「二」を含む四字熟語の出典元

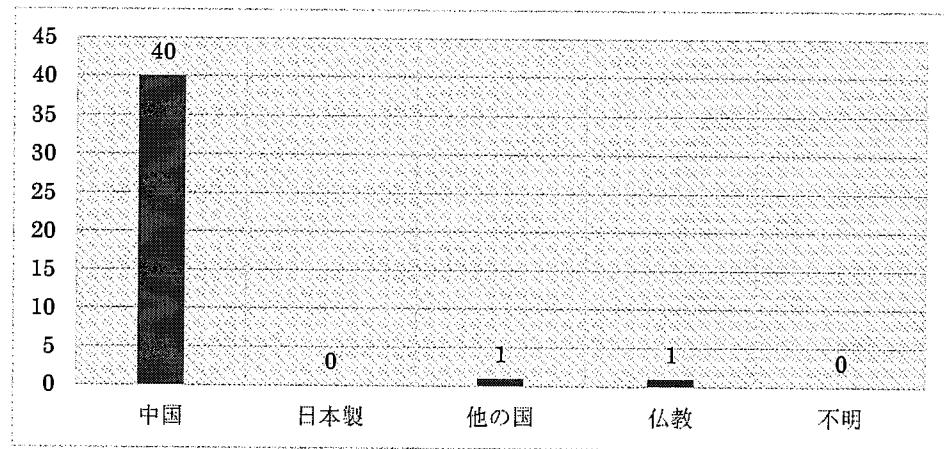


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が40例あり、総数の95.24%を占めている。以下に、佛教または佛教関連のものを起源としたものと他国を起源としたものがそれぞれ1例で、2.34%となっているが、日本を起源としたものはない。中国語における数字「二」を含む四字熟語の出典元はほとんどが中国ということである。

2.1.3 数字「二」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「二」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数字「二」を含む四字熟語は出典元が幅広く、中に日本以外の国(特に中国)を起源としたもの、日本を起源としたもの、佛教または佛教関連のものを起源としたものといろいろある。これに対して、中国のほうは中国と佛教または佛教関連のものを起源としたものしかなく、しかも中国語における数字「二」を含む四字熟語の総数の95.24%は中国を起源としたも

のである。

2.2 日中両言語における数字「二」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「二」の現れる位置考察

四字熟語における数字「二」の現れる位置とは四文字において、数字「二」が何番目の文字であるかということを指している。例えば、数字「二」の現れる位置が二番目のみの四字熟語とは「尺二秀才」、「不二法門」など、数字「二」の現れる位置が二番目と四番目に共起する四字熟語とは「遮二無二」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

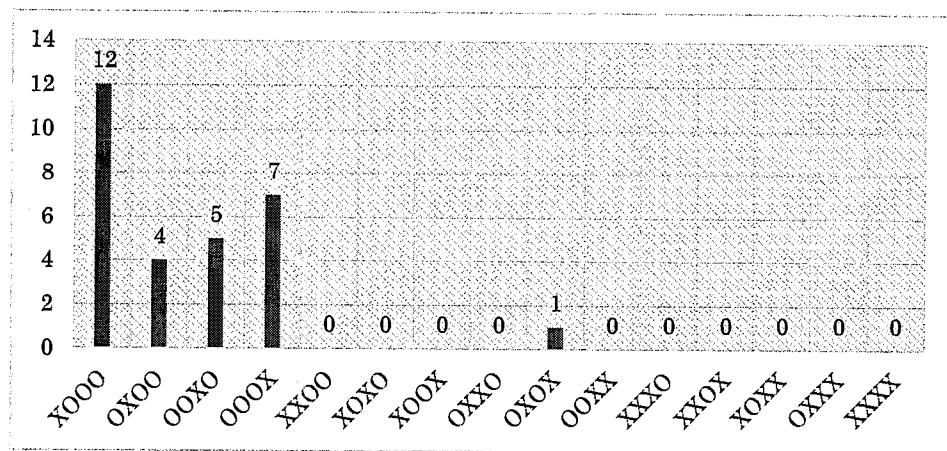
日本語の四字熟語における数字「二」の現れる位置については以下のとおりである。

- ・一番目のみ……12例
- ・二番目のみ……4例
- ・三番目のみ……5例
- ・四番目のみ……7例
- ・二番目と四番目に共起……1例

一番目のみに現れるものが最も多く、総数の 41.38% を占めている。以下、四番目のみの位置に現れるもの、24.14%、三番目に現れるもの、17.24%、二番目に現れるもの、13.79% となっている。日本語における数字「二」を含む四字熟語の中で、数字「二」は4割以上が一番目の位置に現れ、二つの位置に現れるケースはほとんどない。

図3に「X」、「0」によって数字「二」の現れる位置を表示する。「X」は数字「二」を表し、「0」は数字「二」以外の文字を表す。例えば、数字「二」は二番目と四番目に共起する四字熟語「遮二無二」は「OXOX」で表示する。

図3 日本語の四字熟語における数字「二」の現れる位置



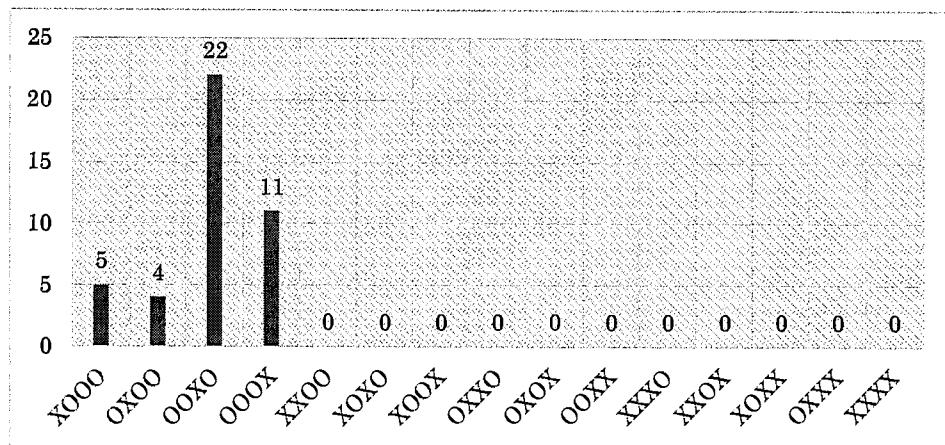
2.2.1.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「二」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……5例
- ・二番目のみ……4例
- ・三番目のみ……22例
- ・四番目のみ……11例

個数から見れば、数字「二」の現れる位置は大部分が三番目であり、総数の 52.38%を占めている。以下、四番目の位置に現れるもので、26.19%、一番目の位置に現れるもので、11.90%、二番目の位置に現れるもので、9.52%となっている。詳細は図4の通りである。

図4 中国語の四字熟語における数字「二」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「二」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「二」の現れる位置については中国語においては数字「二」が三番目の位置に現れるケースが最も多く、一方、日本語においては数字「二」が一番目の位置に現れるケースが最も多く、逆に三番目の位置に現れるケースが最も少ない。

また、日本語においては数字「二」が二番目の位置と四番目の位置に共起するケースが1例あり、これに対して、中国語においては数字「二」が二つの位置に共起するケースはない。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「二」と他の数字との共起関係の考察

日中両言語における数字「二」を含む四字熟語には他の数字と共起するケースが少なくない。その中で、他の数字との共起関係はどうなるのか、どのような数字と共起する場合が最も多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「二」と他の数字との共起関係に関する詳細を図5にまとめめる。

図5 日本語の四字熟語における数字「二」と他の数字との共起関係

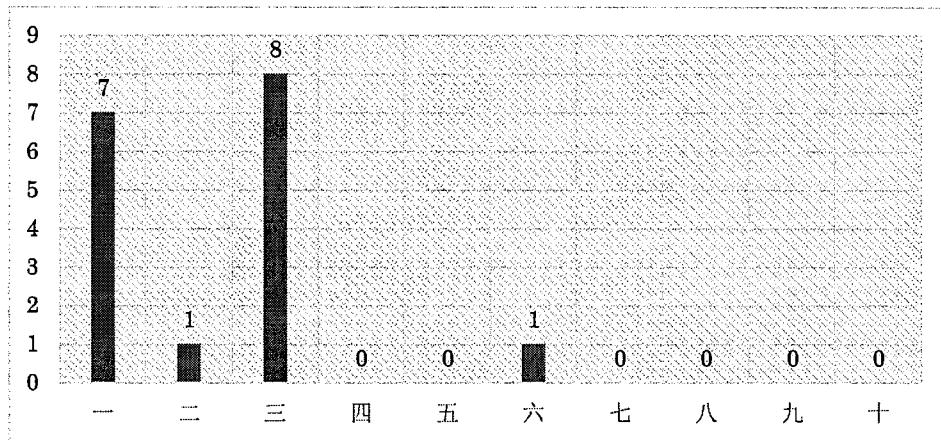


図5から分かるように、日本語における数字「二」を含む四字熟語の中には、数字「二」が数字「二」自身と共に起するものが1例あり、総数の5.88%を占めている。以下、数字「一」と共起するものが7例、41.18%、数字「三」と共起するものが8例、47.06%、数字「六」と共起するものが1例、5.88%、数字「四」、「五」、「七」、「八」、「九」、「十」と共起する

ものはない。

割合からみると、数字「三」と共起するケースが最も多く、続いて、数字「一」、「二」、「六」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「二」と他の数字との共起関係に関する詳細は図6の通りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「二」と他の数字との共起関係

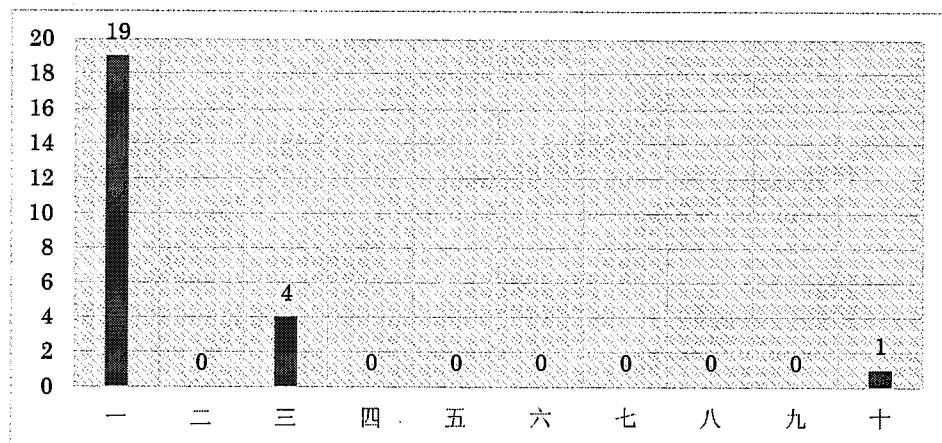


図6から分かるように、中国語における数字「二」を含む四字熟語の中には数字「二」が数字「二」自身と共に起するものはない。数字「一」と共起するものが19例で、総数の79.17%、数字「三」と共起したものが4例で、16.67%、数字「十」と共起したものが1例で、4.17%となっている。数字「四」、「五」、「六」、「七」、「八」、「九」と共起するものはない。

割合からみると、数字「一」と共起するケースが最も多く、以下、数字「三」、「十」の順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「二」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは日中両言語の四字熟語において、数字「二」と他の数字と共に起して表す意味を分類し、提示する。具体的な例もあげる。

(1) 数字「一」と共起する場合

A: 実際の数量

日：一石二鳥

中：一身二任

B：順序

日：なし

中：数一数二

C：積み重ね、繰り返し

日：なし

中：一来二去

D：列挙

日：なし

中：一穷二白 一大二公

E：程度の高さ

日：なし

中：一清二楚 一清二白 一千二净 一差二错

(2) 数字「三」と共起する場合

A：変化

日：三心二意

中：三心二意

B：すべて

日：三草二木

中：三草二木

C：少なさ

日：二言三言

中：三言二语

D：多さ、頻繁

日：なし

中：接二连三

(3) 数字「六」と共起する場合

A：掛け算の結果十二

日：二六時中

中：なし

日中両言語における数字「二」を含む四字熟語において、数字「二」と他の数字との共起関係については中国語の場合、数字「二」が数字「一」と共起するケースが最も多く、79.17%を占めている。これに対して、日本語の場合、数字「三」と共起するケースが最も多く、47.06%を占めている。数字「一」であっても、数字「三」であっても、共に数字「二」と隣接しており、数字「二」は隣接する数字としか共起しにくい傾向があると考えられる。

数字「二」が数字「一」と共起する場合については先に述べたので、ここでは数字「三」と共起する場合からを見ることとする。

数字「三」と共起する例は日本語の方が中国語より数は多いが、意味から見れば、共通する「変化」、「すべて」、「少なさ」などの意味を表す以外、中国語では「多さ、頻繁」という意味もある。例えば、四字熟語“接二连三”は次から次へと、ひっきりなしに続けることを指している。一方、日本語にはこのような使い方は見られないようである。

数字「六」と共起する例は日本語において、掛け算の結果十二という意味で、二六時中という例のみが見られる。一方、中国語においては数字「六」と共起する四字熟語は見られないようである。

3. 数字「二」を含む四字熟語の対照考察

ここでは以下の三つに分類し、日中両言語における数字「二」含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「二」を含み、同義・類義を表すもの、②両言語とも「二」を含み、異義を表すもの、③一方の言語で「二」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「二」を含み、同義・類義を表すもの

二股膏薬 // 脚踏二船

(22) あいつはあっちへついたり、こっちについたり、二股膏薬だ。(黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》)

訳文：他一会儿跟着这边，一会儿又跟着那边，脚踏二船的家伙。

「二股膏薬」は和製四字熟語である。戦国時代末期、伊達政宗が「二股膏薬」（右足の股にも左足の股にもいつの間にかついている貼り薬）と揶揄されていたように、本来はこちらの意味が主流であった。現在、そのとき次第でどちらの側にも従う、日和見的なことを指し、また、その人が定見なく、あっちへついたり、こっちへついたりする節操のない人を指し、メタファーが働いていると考えられる。ここにおける数字「二」は二つの意味であり、「二股」は内股の意であり、「膏薬」は練り薬である。内股に貼った薬は歩くうちに左

右の足にあちこちつくことからいう。また、「二股」は二人の恋人と同時交際することも表わす。様々な事象において、主に対立する二つの両方に味方するような場合もこの語が使われる。同時に交際している人数が増えると、三股・四股・五股…と数字が増えていく。タコ股(タコの足が8本あることから)、「タコ足交際」という言い方も用いられる。「二股膏薬」はマイナス的意味で使われる四字熟語である。但し、芸人が注目を集める意味で、複数の異性と交際関係にあることをこの言葉で宣伝することがある。また、日本ではかつて「二股膏薬武士(二股武士)」という言い方があった。右の足にも左の足にもいつの間にか張ってある、現代で言うなら「風見鶏」といった意味であり、大津城攻略を起源とする四字熟語だと言われる。

一方、中国語における四字熟語“脚踏二船”は明·李卓吾の《藏书》：“世间道学，好骑两头马，喜踹两脚船。”を出典とする四字熟語であり、“脚踏两船”、“脚踏两只船”とも言う。二舟に同時に足をかけている状態で、各々が勝手に進み始め、結果は火を見るよりもあきらかであろう。足で同時に二舟を踏むという意味から転じて、定見なく、あっちへついたり、こっちへついたりする節操のない人、また二人の恋人と同時交際すること及びその人を喻えている。“脚踏二船”はマイナス的意味で使われる四字熟語であり、それを行っている人を揶揄したり、馬鹿にしたりするときに使われることが多い。また、この語が進化し、二舟に同時に足をかけている姿勢から、類似した意味“劈腿”という言い方もある。

二言三言 // 三言二语

(23) 御嬢さんはすぐ座を立って縁側伝いに向うへ行ってしまいました。然しKの室の前に立ち留まって、二言三言内と外とで話しをしていました。(『中日対訳コーパス「こころ』』)

訳文：小姐立刻离开座位沿着走廊到对面去，但是在K的房间前面站停一下，室内室外又三言二语地交谈几句，这好象是刚才谈话的继续。

(24) 只用了三言二语就把道理讲清楚了。(《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社)

訳文：わずか二言三言でわけを明らかにした。

日本における四字熟語「二言三言」はちょっと、少ししゃべることを指している。日本語の「一言」は単語ひとつか、短い言葉と感じるが、「二言」、「三言」は少し単語数が多いか、少し長い言葉と感じる。ここにおける数字「二」は「二つ」という意味であり、数字「三」は「三つ」という意味であるが、合わせて「少ない」という意味を表している。意味的にはプラスでもマイナスでもなく、中性的である。また、「内儀には二言三言小言を言

われたが…」などのように、四字熟語「二言三言」と「小言」との組み合わせが多いようである。この場合、ややマイナス的意味として使われているようである。

一方、中国語における四字熟語“三言二语”は“三言两语”とも言い、元·关汉卿《救风尘》第二折：“我到那里，三言两句，肯写休书，万事俱休。”を出典とする四字熟語である。日本語における四字熟語「二言三言」と同じように、ちょっと、少ししゃべることを指している。ここにおける数字「二」と数字「三」も合わせて「少ない」という意味を表し、意味的にも中性的である。

不二之法 // 不二法門

(25) 勤勉は成功への不二之法である。(黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》)

訳文：勤奮是通向成功的不二法門。

中国語における四字熟語“不二法門”はインドの『維摩經』¹⁸から訳され、最上の方法、唯一無二の方法を指している。『維摩經』には「不二の法門とは何か」との文殊の問いかけに、維摩詰は、一言も答えず沈黙したままであったと述べられている。文殊はこの沈黙の答えに対して「大いに結構、これこそ菩薩が不二に入ることであって、そこには文字もなく、ことばもない、心がはたらくこともない」と称賛している。ここにおける“法門”とは、サンスクリット語の dharma を漢訳したものであり、原語は「自性を持って変わらないもの」を指し、それから転じて、秩序、法則、方法などを意味するようになったといわれ、シネクットキが働いていると考えられる。ここにおける数字「二」は二種類、二通りという意味であり、「不二」あるいは空、中道¹⁹として表現される考え方こそ仏法思想特有のものである。

一方、日本語において、同じ意味を表す場合、「不二之法」を用いる。「不二之法」は仏教を起源とした四字熟語である。ここにおける数字「二」も二種類、二通りという意味であり、「不二之法」はもともとは互いに相反する二つのものが、実は別々に存在するものではないということを説いている。弘法大師²⁰の不二の法の布教により、この四字熟語が広く知られた。弘法大師は真の仏教を探し求める中で、不二の法大日教との出会いが訪れ、遣唐使の留学僧として中国長安青龍寺惠果和尚のもとに赴き、密教の教義は元より、医学、薬学、工学などの様々な近代科学を修得し、教典、法具、曼荼羅²¹などの他に文化資料を携えて日本に帰国した。

3.2 両言語とも「二」を含み、異義を表すもの

二足草鞋 ≠ 二双草鞋

(26) 彼は二足草鞋を履いてる。(小学館『日中辞典』)

訳文：他一身兼任两种职业。

(27) 最近は歌手で俳優というような二足草鞋を履くタレントが多くなった。(黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》)

訳文：最近身兼歌手和演员者多起来了。

日本語における四字熟語「二足草鞋」は、熟語「二足の草鞋を履く」から省略され、江戸時代、博打ばくち打ちが捕吏を兼ねることを言ったことから、同じ人が本来は両立し得ないような二つの職業をもつことのたとえである。ここにおける数字「二」は数字のプロトタイプ的意味である。江戸時代、「ばくち²²」という、一般には禁止されていたと思われる遊びを、いつもやっている人が、そのばくちを見つけて、やめるように、管理する人となり、全く逆の立場の仕事を同時にやっていたことから生まれたものである。要するに、全く違うわらじをはくということで、全く違う仕事を同時に兼ねていることをいっており、メタファーが働いていると考えられる。なぜ、わらじなのかは「わらじをはく」という意味にはばくちをする人が取締りから逃げるために、旅に出るという意味があり、このことによる四字熟語ではないかと考えられる。「二足草鞋」はもともと矛盾する職業を兼ねることを言っていたようであるが、現代ではただ単に、違う職業を二つ持っていることにもたとえる。また、近年には「三足草鞋」という造語も出てきた。ちなみに、英語では、複数の職業を持つことを“wear two hats”（二つの帽子をかぶる）と言う。昔は職業によりかぶる帽子が異なり、帽子を見れば職業がわかつたことが由来のようである。

一方、中国語においてはこのような特別な表現はなく、同時に二つの職業を持つこと、あるいは行うことを四字熟語“一身二任”を使って表現する。中国語における“二双草鞋”は日本における「二足草鞋」のようにメタファー的意味がなく、ただ普通の「草履二足」という意を表している。

二人三脚 ≠ 二人三足

(28) 二人三脚で店を切り盛りする。(小学館『日中辞典』)

訳文：齐心协力地经营店铺。

日本語における「二人三脚」は運動会やクラスマッチなどで二人が並び、互いの内側の足首をひもで縛って固定し、二人合わせて三本の足で走る競技から、二人が歩調を合わせ、協力して物事を成し遂げようとするなどを喻え、メタファーが働いていると考えられる。ここにおける数字「二」は数字のプロトタイプ的意味である。このメタファー的な意味に

において、中国語に訳す場合には例(28)のように四字熟語“齐心协力”と訳すのがよい。

一方、中国語における四字熟語“二人三足”はただ二人が並び、互いの内側の足首をひもで縛って固定し、二人合わせて三本の足で走ることを指しており、日本語における「二人三脚」のようなメタファー的な意味を持っていない。

3.3 一方の言語で「二」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 二進三進 // 一筹莫展

(29) そんな事情で遣り繰りに困っていたところへ、この頃又シュレムスカヤ夫人の方へ四十円ずつ取られますから、この上ダンスの衣裳を買ってやつたりしたら二進三進行かなくなります。(『中日対訳コーパス「痴人の愛』』)

訳文：情况便是如此，正当我苦心维持生计的关头，又要给舒莱姆斯卡娅夫人送去四十块钱，再加上给她买跳舞穿的服装，简直一筹莫展。

日本語における四字熟語「二進三進」は熟語「二進も三進も行かない」が省略され、もともとは算盤の割り算用語に由来する。「二進」とは数字二割る二、「三進」とは数字三割る三のことで、ともに割り切れて、商に一が立って計算ができるこことを意味している。そこから、二や三でも割り切れないことを「二進三進(二進も三進も行かない)」と言うようになり、そろばんの玉が思うように行かず、計算が合わないこことを意味するようになった。また、それがうまくいかないということで、金銭的にやりくりがつかない、商売がうまくいかないという意味で用いられるようになり、後に、どうにも遣り繰りができない様子や窮地に追い込まれ身動きがとれない意味へと変化したのはメタファーが働いていると考えられる。ここにおける数字「二」と「三」は組み合わせて、少ないという意味を表している。

一方、似た意味「一つの方策も施しようがない」、「万策尽きて手も足も出ない」ことを表す場合、中国語では四字熟語“一筹莫展”を用いる。「二進三進」における数字「二」と「三」の組み合わせと同じように、ここにおける数字“一”は一つという意味であり、量の少なさを表している。“莫”は否定の意味であり、“展”は展開する、発揮するという意味である。“筹”はもともと古代、計算に用いられた木の串である。“算筹”、“筹策”ともいう。日本に伝わってから、「算木」と呼んできた。1から5まではその数だけ算木を並べ、6以上は異なる向きの1本で5を表した。詳細は以下の図を参照。

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
縦式							T	TT	TTT	TTT
横式		-	=	==	====	=====	—	—=	—==	—====

また、“筹”に関して、中国にはもう一つ有名な四字熟語がある。司馬遷「史記—高祖本紀」に由来し、劉邦²³が參謀として重宝した張良²⁴を称えた四字熟語“运筹帷幄”である。作戦を戦場から遠く離れた本營で練りながら、戦地の敵の動きをことごとく看破して勝利に導く意から、計画や謀に優れている様来形容する。この二つの四字熟語における“筹”は「算木」から、現在では「方策」を表わされるようになったと考えられる。

武士二言 // 一言九鼎

(30) 大丈夫ですよ、武士二言、どんなことがあっても守ります。(黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》)

訳文：没问题，一言九鼎，不论有什么事都会守约的。

この二つの四字熟語は共に一度言ったことを取り消すようなことはしない、信義を重んじ約束を守ることを喻えている。日本語における四字熟語「武士二言」は「武士に二言なし」から省略され、数字「二」は「別のこと、同じでないこと」という意味を表し、「二言」とは、前に言ったことと異なることを言うことであり、また、その言葉のことである。日本では昔から武士は社会的身分が高く、武士の言葉は重みをもつているとされていたので、約束はおおむね証文なしで決められ、かつ実行されると考えられていた。

一方、中国語における四字熟語“一言九鼎”において、“鼎”は古代の炊事用具で、ほとんどが円形、三足、両耳であった。最初は陶土を焼いて作ったが、後に青銅の铸造となつた。伝説によると、夏朝の大禹は九つの鼎を铸造して、全国九州の象徴としたと言われる。そのため、鼎は国家の象徴、建国の宝器として都に置かれた。その後、商が夏を滅ぼし、成湯は九鼎を商邑に遷し、周が商を滅ぼし、さらに九鼎を洛邑に遷した。“鼎”はすでに國家の象徴となっていたので、天下をとり、都を定めることを“定鼎”と言った。春秋の時代に楚王が周王室の地位を奪い取ろうと、周の国の使者に九つの鼎の重さと大きさを尋ねたという物語から国家政権の奪取を狙うことを“问鼎”というようになった。“九鼎”は国家の象徴であり、きわめて重要な国宝であるため、その後、意見に重みがあることを“一言九鼎”と比喩するようになった。

二六時中 // 一个昼夜

(31) 電車が通るようになれば自然町並も変るし、その上に市区改正もあるし、東京が凝している時は、まあ二六時中一分もないと云つて可い位です。(『中日対訳コーパス「ころ」』)

訳文：电车一通，街道马上就变，而且市区改建一新。东京太热闹了，真可说是不分昼夜。

日本語における四字熟語「二六時中」は一日中、いつも、終日という意味である。ここにおける「中」は期間を表す語について、その間ずっとという意を表す。日本においては江戸時代は終日のことを「二六時中」と言った。江戸時代は日の出から日の入りまでを昼、日の入りから日の出までを夜として、一日を昼と夜の二つに分け、さらに昼と夜をそれぞれ六つに区切り「子の刻」「丑の刻」など干支の十二刻で表していた。そのため、「二六時」では旧暦で二掛ける六で十二刻となるため一日を意味していた。同様の表現に江戸時代には一杯十二文のそばやうどんのことを「二六」と呼んだり、一合十二文の酒屋のことは「二六屋」などと呼ばれていた。また、掛け算だけではなく、遊里などでは「五郎兵衛」のような名の客を「二三」のように足し算で表して、替名としていたともいわれる。

一方、中国語において、四字熟語“一个昼夜”を用いて、日本語における「二六時中」のように一日中という意味を表す。ここにおける「昼」は太陽が地平線または水平線より上に出ている時間、あるいは日の出から次の日没までのことである。逆に、太陽が地平線または水平線から上に出でていない時間、あるいは日没から次の日の出までのことを「夜」という。ちなみに、日本語では時間帯について「昼」という場合、二つの用法がある。一つは夜に対するもので、太陽が見える時間帯すべてを指す。この意味においては中国語と共通している。これ以外に、昼から朝と夕方とを区別し、残りの時間を指す場合がある。この場合、太陽が見て以後、ある程度まで高く昇り、その日の南中高度に近くなつた時間を指す。単に“お昼”といえば、正午前後の時間だけを指す場合もあり、昼はその前後、ある程度の幅の時間を指す。昼は日差しが強く、暑いものとされる。この時間に食べる食事、すなわち昼食のことを口語では単に「昼」ということがある。

二束三文 // 一文不值

(32) 兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多を二束三文に売った。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「坊ちゃん」』)

訳文：俺哥叫来了旧货铺的人，把祖祖辈辈遗留下来的破烂家具，一文不值半文地卖掉了。

日本における四字熟語「二束三文」は「三文の値打ちもない」とも言える。「二束三文」

は二束でも三文というわずかな金額にしかならないことに由来する。「二足三文」と書くこともあり、江戸初期の「金剛草履」の値段が、二足で三文の値段であったことに由来すると言われる。「文」は昔のお金の低い単位である。「三文」という言葉は「三文判」や「三文芝居」など、安物や粗末な物の意味で使われており、「二束三文」の「三文」も実際にその金額で売られていたわけではなく、安いことを表したものと考えられる。

これに対して、中国語における“文”は旧時の銅錢を数える低い単位である。価値のないものは“三文”と言わずに、四字熟語“一文不值”を使って、同じように値打ちのないこと、非常に安いことを喻えている。“一文不值”における“一文”は銅錢の一つを指している。ここで数字“一”は少量性の特徴を強調し、非常に少ないという意味を表している。

車之二輪 // 缺一不可

(33) 知育と教育、これは車之二輪ですよ、どちらが欠けても人間はいびつになりますね。
(黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》)

訳文：智育和教育这是缺一不可的，无论少了哪一样，人就不能健康成长啊。

車の二つの車輪が進む様子をイメージする。もちろん、左右の車輪のことであって、前後という組み合わせではない。片方の車輪が回っても、もう片方が回らなければ、車はその場で空回りするだけで、進まない。日本における四字熟語「車之二輪」は車の両側の車輪は二つそろわないと役に立たないことから、二つのうち、どちらを欠いても役に立たないほど密接な関係にあることの喻え、メタファーが働いていると考えられる。

これに対して、中国語で似た意味を表す場合は四字熟語“缺一不可”を用いる。“缺一不可”は明・施耐庵《水滸伝》第二十回：“林冲道：‘只今番克敌制胜，便见得先生妙法。正是鼎分三足，缺一不可，先生不必推却。’”を出典とする四字熟語である。日本語には「車の両側の車輪」でどちらを欠いても役に立たないほど密接な関係を喻えるに対して、中国語では中国的な「鼎の三つの足」で同様の関係を喻える。両言語における四字熟語において、異なった数字、異なったメタファーを用いたが、同じ意味を表している。

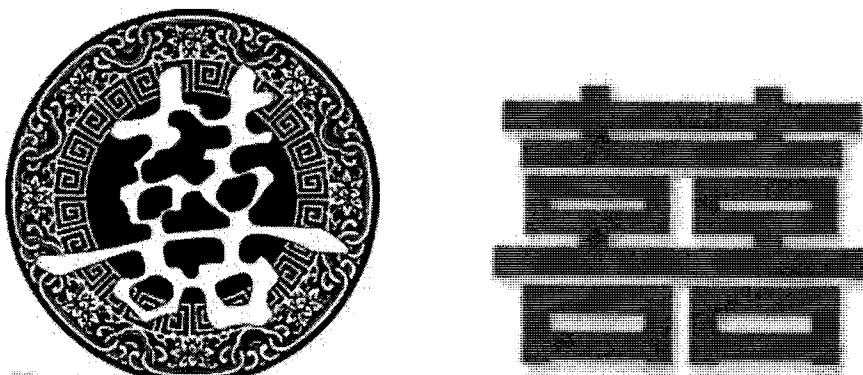
4. 数字「二」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

アメリカのミセコン大学のある言語学者がヨーロッパ及びアジアなど140種類の言語について研究した結果「一万二千年前から今日まで人間にずっと使われている単語が十五ある。そして、「二」は唯一の数字として、二位であった。」と発表した。この結果によると、「二」の強い生命力と長い歴史がよくわかる。

《淮南子・天文訓》には“一而不生，故分而为阴阳，阴阳和合万物生。故曰一生二，二

生三，三生万物。”とある。それによれば、数字の「二」は陰陽を類型とする事物の対立面の統一の法則に対する高度な概括である。この理性的な説明とするのは決して誤りではないが、抽象化された「陰陽」という類型の背後にも、かならず数字の「二」の具体的な表象があるからである。それがいかなる表象なのかはについては《黄帝内经・太素》に回答がある。“一分為二，谓天地也。”とある。この回答は「一が分かれて二になる」によって、「一は二を生ず」の真相をも説明している。分かれて生ずる「二」はもともと天と地が混沌から分化した結果なのである。また、冯友兰(2012)には“在中国思想里，阴阳的结合与相互作用产生一切宇宙现象。”とある。つまり、中国人は最初陰陽思想のため、奇数を陽数として尊んできた。しかし、その後、陰と陽は結合し、互いに影響を与え、すべての宇宙現象を形成することができると固く信じている。陰陽で万物を形成する宇宙観及び弁証思想はすべて数字「二」を基礎とし、数字「二」へ崇拜を形成した。

従って、中国語における数字“二”を含む四字熟語においてはプラス的意味を表す表現が少なくない。例えば、夫の家と妻の家のよしみは“二姓之好”、二人が心をあわせ固く団結すれば“二人同心”、二人(特に兄弟)とも有名な人を喻える場合には“二龙戏珠”、二つのめでたいことが一緒に来る時は“二喜临门”などである。“二喜临门”は特に中国的、昔から中国でおめでたい結婚式などに使われている四字熟語である。ここにおける数字“二”は二つの意味である。中国において、新婚の直前から壁、窓、門などにはよく「喜喜」を貼っておく(具体的な様子は以下の図を参照)。



“二喜”はこの二つ「喜」文字から出てきて、二つのあるいは二重の慶事という意味になっている。“临”はのぞむ・やってくるという意味合いから、四字熟語“二喜临门”は文字通りに「二つの喜びが同時に門に臨む」、「幸せいっぱいやってくる」という意味である。そんな思いが込められた“双喜临门茶”も中国における有名な工芸茶の一つである。「幸せが集まってきたそう」という吉祥な意味を象徴するため、贈り物にもよく喜ばれる。一方、

日本における盆や正月にはいざれも多く的人が動き、にぎやかになり、商売などが繁盛するということから、うれしいことや楽しいことが重なるたとえるようである。日本語では熟語「盆と正月が一緒に来たよう」に訳すこともできる。盆と正月ですべてのうれしいことや楽しいことを指すのはシネクットキが働いていると考えられる

しかし、中国語における数字“二”は常にプラス的意味を表すわけではない。中国語の方言においては数字“二”は「ばかばかしい」という意味である。例えば、“这娃儿有些二。”はその例である。ある名詞に数字“二”をつけると、貶める意味になる、例えば、“农二哥，农二”（農民），“扒二哥”（すり）、“炊二哥”（炊事員）などである。このような表現の存在は前に分析した中国語における数字“二”的拡張義「方言においてはそしる意味、軽視の意味を表す」と一致している。许慎（2004）は数字“二”について、“地之数，从偶一”と解釈した。つまり、数字“二”は数字“一”より、ちょっと見劣りがする。また、価値観によっては中国語における数字“二”でも時にはよくない印象を与える。コロンブスがアメリカ大陸を初めて発見した人であるため、後世に謳える。すると、いろいろな手段で第一を求めるために、“第一大盗”までになる人もいる。実はある意味から見ると、「第二」は「第一」より、さらに重要であるかもしれない。例えば、コロンブスの後に、もしされてもアメリカ大陸に行かなければ、コロンブスの発見は永遠に知られないままになるかもしれない。「第二」があるこそ「第一」を発展することができると言えよう。

一方、日本人は数字「二」について、中国の陰陽両極という哲学観を受けた上に、人が目、耳、腕、足などを二つずつ持っていて、対となってお互いに補完し合うことで日本の文化なりに新しい価値を創造した。この価値観に基づいて、飯倉（2007）の中で、天と地が分かれていた頃、二人の神様であるイザナギとイザナミは、協力して（対となって）日本の国を作ったが、イザナミは火の神を産んだために火傷を負って亡くなってしまった。死後、イザナミを蘇らせようと黄泉の国までやってきたイザナギは、イザナミの腐敗した死体を見て、恐怖でイザナミとの約束を破って逃げた。そして、イザナミとイザナギは離縁した。この神話が示すように、「二」は親近を示すとともに、対立をも表すマイナスの意味の数でもあると述べていた。中国における数字「二」のちょっと「一」より見劣りがしているイメージより、日本では、「二」は偶数として、分裂、別れ、対立などの意味を想起させてしまうため、日本人はあまり縁起のいい数とは思っていないようである。日本語における数字「二」を含む熟語には、中性あるいはマイナス的意味を表すものも少なくない。

例えば、上に紹介した中国語における“二喜临门”は日本語では「二手に花」と訳すこ

ともできる。「二手に花」は同時によいものを両手に入れることを喻える。右手と左手のそれぞれに、美しいもの、たとえば春のさくらや、秋のもみじなどを手にすることから生まれた熟語である。「花」は植物の枝などの先に美しく咲き香るものであり、共に美しいものを喻えられるのはメタファーが働いていると考えられる。しかし、「二手に花」はマイナス的イメージとして、一人の男性が同時に二人の女性を連れていること、独り占めすることのたとえにも用いられる。

また、瓜を二つに割ると、切り口がほとんど同じであることから、よく似ていることを喻えるのは中性的な熟語「瓜二つ」という。「瓜をふたつに割ったよう」の一部を省略した形である。もし「カボチャ二つ」などと言ってしまえば、不細工な二人を表しているとも受け止められる。長男に生れれば、むかしは当主で、天子でも大名でも主君であるが、次男として生れれば家来なのである。郡司（1997）には福沢諭吉の息子は長男を一太郎、次男を捨次郎といった。これは特別な例ではない。旗本の次男以下は「二番生」と呼ばれた。安くみられている。女でも本妻に対して妾は「お次の間」とか「二の膳」と呼ばれる。

さらに、「二歳」も同じことで、「青二才」、「毛二才」などというときの青年を罵る「二歳」には、長男の面影は外されているのである。町人が武士のことを蔑るとき、「さ(三)むらい」(侍)に足りぬとして「に(二)むらい」などという。また、「二本差し」といい、さらに落しめると「二本棒」などという。これは必ずしも、刀の大小二本だけを指すのではなく、二に「二番手」があるように、愚か者、馬鹿者の影を籠めてさえいる侮辱なのである。熟語「二階から目薬」は二階にいて、階下の人に目薬を差すことから、もどかしいこと、また遠回しすぎて効果がないことを喻え、メタファーが働いていると考えられる。ここにおける数字「二」は派生義「二つ目」という意味を指している。由来については、西沢一風『御前義経記』の「二階から目薬さす仕掛け、さりとは急な恋ぞかし」からと言われる。これは当時の花街での顔見世の呼びかけに、否定的な言い方をした冷やかし客に対し、目が悪そうだからここから目薬を垂らしてやろうと言い返す二階の芸子、さらに客の方はここにきちんと差してみせろとばかり、上に向かってあっかんべえをして見せる。このような掛け合いの構図がもともとは含意としてあったようである。中国語では四字熟語“隔靴搔痒”を用いる。靴の上からかゆいところをかくことから、もどかしい、肝心なところに届かずことを喻えている。

また、日中両言語における数字「二」は共に「並べ称される、対をする」という意味がある。中国語における漢字“双”と“对”は共に数字“二”的この意味を表される漢字で

ある。中国人は数字“二”への崇拜は“双”、“对”への崇拜となっている。そのため、「二つは対になる」という形式で吉祥のことを表す四字熟語が多い。例えば、夫婦同士と一緒に幸せな生活をすることは“比翼双飞”（鳥のように一緒に飛ぶ）、結婚お祝いや親友を訪問する時、物を送る場合は“送礼成双”（贈り物が対になる）と言う。また、“龙凤呈祥”（竜と鳳が一緒に現れると吉祥を象徴する），“鸳鸯戏水”（おしどりが水で戯れる）などの四字熟語のように、いつも二つの物の割りきれない物、また自然に対となる、情理に従って一体となる人や物あるいは事を「双」、「対」と呼んでいる。それは民族の価値観と美意識を体現している。鴛鴦は中国文化では恋人を象徴し、“只羡鸳鸯不羡仙”という表現がある。文字からの意味では仙人よりお一人のほうを羨ましいという意味であるが、実は、恋人や夫婦の仲良く常に連れ立つことを表している。

中国においては、数字“二”への崇拜から形成された「双」、「対」への崇拜が社会各方面に広がり、人々の生活の隅々まで浸透している。

詩と詞は「対偶」いわゆる対句を重視し、書道、絵画などは対称の美を求める。「対偶」は修辞法の一種類で、二つの字数が等しく、構造が似ている文は同じ意味、あるいは異なる意味を表す。例えば、唐の時代の有名な詩人白居易²⁵の『長恨歌』の中に“在天愿作比翼鸟，在地愿为连理枝。”というよく知られている詩句がある。対になる物事を通じて、愛情の真摯や恒久を謳歌したり、幸せ、円満を追求する願いを表現する文学作品は枚挙にいとまがない。これに対して、中国における詩と対比される日本語詩「和歌」は字数が奇数の形式である。

また、建築設計の面においては中国は数字“二”、「双」、「対」への崇拜が「対称好き」を表している。中国の伝統建築は都市、宮殿、寺院から民家までほとんどが「対称」という特徴を持っている。唐（2010）でも、東に仏塔があれば、西にも必ず仏塔がある。片側に亭があれば、相対する側にも同じ亭を造るのが普通であると言っている。金持ちや時の権力者の家の前の左右両側に聳えている石のライオンも必ず対であり、人に極めて穏やかな感じを与え、そしてその中から安全性を感じ取ることができる。現代の建築や配置を見れば、そこに含まれた中華民族の対になる伝統的な美意識を見出すこともできる。中国の千年の歴史を有す古都西安、旧王宮紫禁城と伝統的家屋建築四合院は左右対称の典型である。

西安の古称は長安であり、隋唐の時代には中央の朱雀門街を挟んで、左街にN坊と東市、右街にN坊と西市、坊市から構成される左右対称の条坊都市であった。紫禁城いわゆる故

宮は「外朝」と「内廷」に分かれている。南から北への中軸線に沿って並び、前三殿、後三宮、御花園はこの中軸線にあり、ほかの建築は中軸線の両側に左右対称に配列されている。民家の場合、四合院は庭を囲むようにして四面に部屋が対称に並び、一ヵ所しかない門を閉じれば遮断される構造の建物である。左右対称的な四合院の構造も中国传统崇偶文化の証と言える。

一方、日本の建造物を見ると完全な左右対称は公共建造物や高層ビルでさえあまり見られない。特に個人住宅では、西洋風なプレハブ住宅ですら、完全に左右対称なものは少ない。

非対称が強く感じられる例として、茶室があげられる。床・入口・窓のとり方などは決して左右対称とはならず、同一の形が繰り返されることもない。庭園は石や水、花、木など、自然美を不規則な形態の非対称な構図で表現している。また、宗教建築については、基本的に対称のものは厳正な感があるが、日本は宗教建築においても非対称のものが多い。法隆寺の伽藍²⁶配置はその例である。もとは中国の伝統的な中心軸をもつ左右対称だったが、焼失後の立替えではわざと左右非対称の伽藍の配置になった。

社会生活において、中国では土産を贈る時、その数量は最小限でも「二」でなければならない。お酒は二本、お茶やお菓子二箱、タバコ二カートンなど、対とする贈り物を贈るのは慶事が重なってくるという願いを託する。それを守らなければ、常識がないと疑われたり、あるいはわざと人に嫌がらせをしていると思われたりする。結婚のお祝いで窓に貼る喜の字は対となった「囍」とする。衣装から、食品、小物まで、すべて二人分を用意する。清の時代の有名な長編小説《红楼梦》第二十三回には宝、黛などの人は大观園に引つ越す日は“二二二”（二月二十二日）が選ばれるなど、中国において、数字“二”、「双」、「対」は縁起のよい数字であるということを見事に体現している。

これに対して、日本人は結婚式のお祝いに、祝儀に限らずちょっとしたもの贈るとき、「九」以外の奇数選び、数字「二」を含む偶数は避ける風潮がある。偶数は「割り切れる」ので縁起が悪いということで嫌われる。以前、日本に二千円があったが、いつの間にかほとんど見かけなくなった。バスや電車の定期券も千円、三千円、五千円などはあるが、二千円はない。

III. 数字「三」



甲骨文 金文 小篆 隶書 楷書

1. 日中両言語における数字「三」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「三」の意味を調べるためにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の7項になる。

基本義：

- ① 数の名。二の次、四の前の数。

派生義：

- ② 三つ目、三番目。
- ③ 三回、みたび。
- ④ たびたび、多い。
- ⑤ 三味線の糸のうち、最も調子の高いもの。
- ⑥ 野球の三塁(手)の略。
- ⑦ 三河国の略。

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典(修订版)》(2001)、《现代汉语辞海(全新版)》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の9項になる。

基本義：

- ① 数目、二加一所得的数。

派生義：

- ② 序数、第三。

- ③ 三次。
- ④ 多数或多次。
- ⑤ 終。
- ⑥ 特指三尺²⁷长。
- ⑦ 指历中九宫²⁸的第三宫，即东方震位。
- ⑧ 指天、地、人。
- ⑨ 姓氏。

上から見られるように、日本語における数字「三」の意味は7項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味は6項ある。これに対して、中国語における数字“三”的意味は9項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味は8項ある。

以下で日中両言語における数字「三」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「三」のプロトタイプに関する比較対照

日中両言語における数字「三」のプロトタイプ、つまり数える数量的概念として、意味は一致している。

(1) 五引く三は二です。（小学館『日中辞典』）

訳文：五減三等于二。

(2) とらの子の千円札三枚をどこかへ置き忘れてしまったからである。『中日対訳コーパス「あした来る人」』)

訳文：那举足轻重的三张千元钞票不知放到哪里去了。

(3) 全体民兵，兵分三路，解决高家的问题。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈金光大道〉』）

訳文：民兵全員を三手に分けて、大泉の家の話に片をつけるんだ！

例(1)から例(3)までは数字「三」のプロトタイプ的意味に基づいた例である。例(1)は基本的な数の名を表し、例(2)と例(3)は共に助数詞と連用する場合である。日本語における「三手」は例(3)においては三つの方面を指しているが、熟語として女性が結婚において男性に求める三つの条件をも意味する。具体的に言えば、この三つの条件が「手伝う」、「手をとりあう」、「手をつなぐ」といった「手」という字で始まるところから「三手」という。

日本語における「三手」と一見したところ、似ている中国語として、“三只手”という言い方がある。しかし、実は意味は完全に異なる。“三只手”は文字から見れば、「三つの手」

を意味するが、そのような意味で使うときは“第三只手”と“第”と共に使い、「神の手」、「見えない手」などの意味に用いられる。しかし、“三只手”のみで使うときは「スリ」という意味になる。人の手は二本しか備わっていないのが、もう一本余分にある。その手で「スリ」を働くということである。なかなかいい得て妙な喻と言えよう。しかし、中国語の“三只手”は実は外来語であり、古代ローマの劇作家プラトスの喜劇“一塙黄金”（黄金の壺）の第四場においては“第三只手”という言葉が用いられており、以後、“三只手”はこそ泥、あるいはその行為の代名詞となったという説がある。また、面白ことに中国では手を三つあわせた字“羣”（pa2と読む）を作り、“三只手”同様に「スリ」を意味する漢字である。

1.4 数字「三」の意味拡張に関する比較対照

派生義②から④までは、日中両言語においては意味は共通している。

- (4) 我家那个三小子, 昨晚上给我叨咕了半夜, 这我才明白。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<金光大道>』)

訳文：おれんとこの三男がゆうべ一晩中話してくれて、やっとわかったんだ。

- (5) 入口の事務所で父の部屋をきいて、エレベーターで三階に上がり、長い廊下を通って行く。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「あした来る人」』)

訳文：在门口的事务所问得父亲的房间号码，乘电梯上到三楼，穿过长长的走廊。

例(4)と例(5)は共に派生義②に基づいて、数字「三」の順序、三つ目を表している例である。例(4)には“三小子”と“三男”における数字「三」は共に順序を表し、「三番目の息子」を意味する。例(5)における「三階」と“三楼”は共に「三つ目の階」を意味する。ちなみに、日本語における「三階」は中国語の訳すと、“三楼”だけではなく、“三层”に訳す場合もある。では、例(6)を見てみよう。

- (6) 私の家は三階です。(小学館『日中辞典』)

訳文：我家住三层。

例(6)における「三階」と“三层”も共に「三つ目の階」を意味する。中国語における“楼”と“层”は類語である。“层”は重なったものを数える助数詞であり、フロアの数及び順序を表すことができる。順序を示す場合は“第…层”とすべきであるが、“第”は省かれることが多い。一方、“楼”は本来二階以上の建物を指す名詞であるが、“层”と同じように、助数詞としても用いることができる。ただし、“三(号)楼”は「第三番目のビル」を意味することもある。

- (7) それでは、勤労奉仕団員の壮途を送るため、万歳三唱をお願いします。(北京日本学

研究センター『中日対訳コーパス「黒い雨」』)

訳文：那么，为欢送义务劳动团员奔赴征途，让我们三呼万岁吧！

(8) 世人评论，这三起三落，使得邓小平的一生富有特别强烈的传奇色彩，令人赞叹。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈我的父亲邓小平〉』)

訳文：人はいう、この「三転三起」こそが鄧小平の一生を濃厚なロマン的色彩に染め上げ、称賛に値させたのだ、と。

(9) 不会行三拜九叩礼，你放心！(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈人啊，人〉』)

訳文：三拜九叩したりするわけないじゃないの。心配するなよ。

例(7)は派生義③に基づいて、数字「三」は「三回」という意味を表している例である。例(8)と例((9)は日中両言語における派生義④に基づいて、数字「三」は「たびたび、何度も」という意味を表している例である。例(7)における“三呼”と“三唱”は共に「三度唱える」という意味を表している。例(8)の“三起三落”と“三転三起”における数字「三」はいずれも「何度も」という意味を指しており、この二つの四字熟語は「何度も落ちて、何度も起きることによって、頻繁に変化することを形容している。例(9)における「三拜」と“三拜”は共に「何度も頭を垂れて敬礼する」という意味を表している。“三拜九叩”と“三拜九叩”における数字「九」は数字「三」の倍数であり、数字「三」と共起し、「回数が多い」という意味を強めている。この点においては日中両言語は共通している。

(10) 三下がり。(小学館『日中辞典』)

訳文：降低三弦琴第三弦一个音阶的音调(的曲子)。

例(10)は日本語における派生義⑤に基づいて、三味線の糸のうち、最も調子の高いものを指した例である。それに対し、中国語における数字“三”はこの意味までは拡張されていないため、中国語に訳す場合には“三弦琴第三弦”という字面のままに訳すしかできない。

(11) 三岁不回还。(光生館『現代中国語辞典』)

訳文：年中戻れない。

例(11)は中国語における派生義⑤に基づいて、数字“三”は“終”(ある期間の全体を示す、まるまるの)という意味を表している例である。“三岁不回还。”は“终岁不回还。”のことを指している。それに対し、日本語における数字「三」はこの意味までは拡張されていないため、日本語に訳す場合には「～中」と訳すのが妥当である。

(12) 我朱铁汉在这块蓝天黄土上活了二十一年，我没有嘻皮笑脸地哄过谁，我没有低三下四地求过谁。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈金光大道〉』）

訳文：この土地で生まれて二十一のこの歳になるまで、一度だって人におべつかを使つたり、ぺこぺこして頼みごとをしたことはねえんだ。

例(12)は中国語における派生義⑥に基づいて、数字“三”は“三尺長”という意味を表している例である。例(12)における“低三下四”は性格や態度が必要以上に他人に媚びた卑しい、やたらにぺこぺこすることを指しており、数字“三”は特定の長さ“三尺”を指しており、“低三”は三尺ほど低くすること（土下座すること）を指している。それに対し、日本語における数字「三」はこの意味までは拡張されていない。

(13) 三遊間を注意してくれ。（小学館『日中辞典』）

訳文：要注意三垒手和游击手防守范围的中间地带。

例(13)は日本語における派生義⑥に基づいて、数字「三」は野球の三星(手)の略を表している例である。例(13)における「三遊間」は野球で、三星手と遊撃手の守備範囲の中間を指している。また、熟語「三盗」もこの意味における一例である。盗塁は野球における攻撃側走者の進塁方法の一つである。三星への盗塁を「三盗」という。「三盗」は捕手から三星までの送球の距離が短いため、二盗よりも狙われにくいか、その一方で牽制を受ける二星手や遊撃手は二星ベースから離れることが多く、投手は二星牽制時に体を大きく捻らなければならぬため走者はリードを大きくとりやすい。それに対し、中国語における数字「三」はこの意味までは拡張されていない。

中国語における数字“三”的拡張義⑧には“天、地、人”という意味を指している。例えば、“三氣”は「天の氣、地の氣、人の氣」のことを指しており、“三官”は「天官、地官、人官」のことを指しており、“三皇”は「天の皇、地の皇、人の皇」のことを指している。これに対して、日本語における数字「三」はこの意味までは拡張されていないようである。また、中国語における数字“三”的拡張義⑨には人の姓として使える。中国宋の時代において、“三井”という人がいって、明の時代において、“三成志”という人がいったそうである。これに対して、日本において、数字「三」は人の姓として使われていないようである。

なお、他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

2. 日中両言語における数字「三」を含む四字熟語の全体像

ここでは、「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「三」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめてみる。

2.1 日中両言語における数字「三」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「三」を含む四字熟語が145例が取り上げられている。出典元によって分析して見ると、主に本土を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「三」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍と詩歌、又は詩歌評論集の二つに分けることができる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源とした四字熟語は「三人成虎、市虎三伝」(漢・《战国策》より)、「三分鼎足、三令五申、韋編三絶、約法三章、舌先三寸、土階三等、食客三千」(漢・司马迁《史記》より)、「三思後行、君子三畏、益者三友、益者三樂、損者三友、歲寒三友、損者三樂、堯階三尺」(春秋・孔丘《論語》より)、「三釜之養」(戦国・庄子《庄子》より)、「三豕涉河、三豕渡河」(戦国・呂不韦《呂氏春秋》より)など、72例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集を出典とする四字熟語は「三三五五」(唐・李白《采蓮曲》より)、「三千寵愛」(唐・白居易《長恨歌》より)、「三平二滿」(宋・黃庭堅《四休居士詩序》より)など、4例ある。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「三」を含む四字熟語

日本を起源としたものは「三三九度」、「三日天下」、「三日坊主」、「三月庭訓」、「三日法度」、「三種神器」、「二人三脚」、「二束三文」、「放蕩三昧」、「贅沢三昧」、「風流三昧」、「読書三昧」、「遊戯三昧」など、16例ある。

2.1.1.3 他国を起源とした数字「三」を含む四字熟語

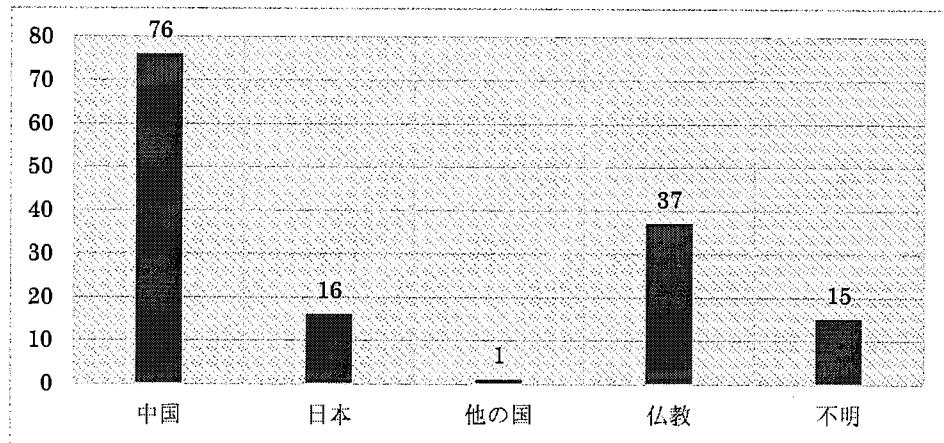
他国を起源としたものはキリスト教を起源とした「三位一体」の1例のみである

2.1.1.4 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「三」を含む四字熟語

仏教または仏教に関連するものを起源としたものは「三千世界」、「三世了達」、「三衣一鉢」、「三段論法」、「三界火宅」、「三界流転」、「三界無安」、「三界無宿」、「三業供養」、「三輪空寂」、「三輪清浄」、「三諦円融」、「三諦止觀」、「円融三諦」、「南無三宝」、「帰依三宝」、「龍華三会」、「瑜伽三密」、「三密瑜伽」、「五障三従」など、37例ある。

以下の図1は日本語における数字「三」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図1 日本語における数字「三」を含む四字熟語の出典元



上の図1からも分かるように、日本語における数字「三」を含む四字熟語の中で中国からのものが76例あり、日本語における数字「三」を含む四字熟語の総数の52.41%を占めしており、他国からのものが1例で0.7%、日本からのものは16例の11.03%、仏教または仏教に関するものからのものは37例、25.52%、また出典不明な四字熟語は15例となっている。日本語における数字「三」を含む四字熟語の中で中国からのものが最も多く、総数の約半分を占めている。仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語も少なくない。

2.1.2 中国語の場合

商務印書館の《成语大词典》第二版(2012)に収録されている数字「三」を含む四字熟語は148例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関連するものを起源とした四字熟語という三つに分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「三」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「三」を含む四字熟語は主に古代典籍、詩歌または詩歌評論集、伝説や劇曲及び小説などの文学作品という三つに分かれる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍を起源としたものは「一隅三反、举一反三、三纲五常、三纲五常、三思而行」(春秋·孔丘《论语》より)、「三寸之舌、三分鼎立、三分鼎足、三户亡秦、三令五申、三十而立」(漢·司马迁《史记》より)、「三人成虎、狡兔三窟」(漢·刘向《战国策》より)、「三折之肱、再衰三竭、退避三舍」(春秋·左丘明《左传》より)、「朝三暮四」(戦国·庄子《庄子》より)、「说三道四」(唐·宋若昭《女论语 学礼》より)、「半夜三更」(元·脱脱《宋史》より)など、66例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集を起源としたものは「三千宠爱」(唐·白居易《长恨歌》より)、「三平二满」(宋·黄庭坚《四休居士诗 序》より)、「一日三秋」(周《诗经》より)など、8例ある。

(3) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品を起源としたもものは「三亲六故」(清·张杰鑫《三侠剑》より)、「三亲六眷、三亲四眷」(元·关汉卿《鲁斋郎》より)、「丢三落四、丢三拉四」(清·曹雪芹、高鹗《红楼梦》より)、「两面三刀」(元·李行道《灰阑记》より)、「屡次三番」(清·李宝嘉《官场现形记》より)、「颠三倒四」(明·许钟琳《封神演义》より)、「垂涎三尺」(現代·老舍《赵子曰》より)など、56例ある。

2.1.2.2 他国を起源とした数字「三」を含む四字熟語

他国を起源としたものはキリスト教を起源とした「三位一体」の、わずか1例である。

2.1.2.3 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「三」を含む四字熟語

中国語における数字「三」を含む四字熟語の中に、仏教または仏教関連のものを起源としたものは「三头六臂」(宋·释道原《景德传灯录·汾粥善昭禅师》より)、「三灾八难」(清·《鼓刹丛钞》より)、「张三李四」(宋·释道原《景德传灯录·道吾和尚》より)など、17例ある。

以下の図2は中国語における数字「三」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「三」を含む四字熟語の出典元

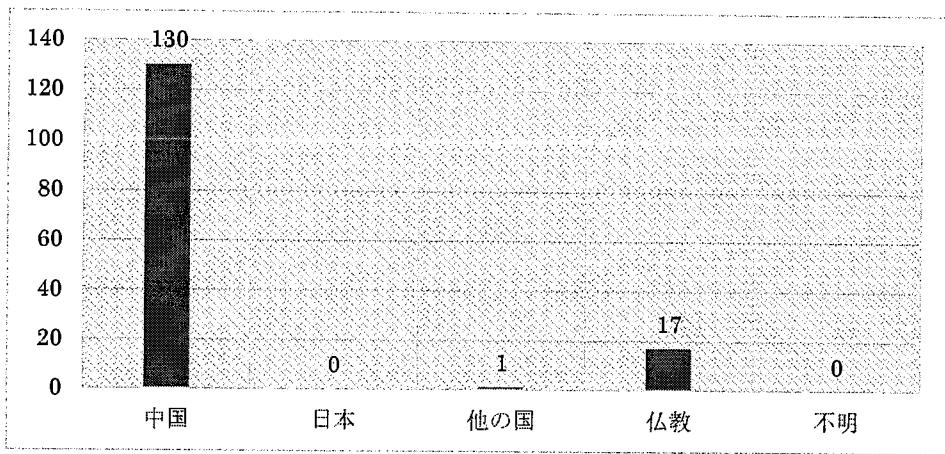


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が130例あり、中国語における数字「三」を含む四字熟語の総数の87.84%を占めており、仏教または仏教関連のものを起源としたものが17例、11.49%を占め、日中以外国を起源とした四字熟語が一つ、日本を起源とした四字熟語はない。中国語における数字「三」を含む四字熟語の出典元が大部分中国となっている。

2.1.3 数字「三」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「三」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数字「三」を含む四字熟語は日本以外の国(特に中国)を起源としたもの、日本を起源としたもの、仏教または仏教関連のものを起源としたものと出典元が幅広い。これに対して、中国のほうは中国と仏教または仏教関連のものを起源としたものしかなく、しかも中国語における数字「三」を含む四字熟語の87.84%は中国を起源としたものである。

2.2 日中両言語における数字「三」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「三」の現れる位置考察

四字熟語における数字「三」の現れる位置とは四文字において、数字「三」が何番目の文字であるかということを指している。例えば、数字「三」の現れる位置が三番目のみの四字熟語とは「狡兔三窟」、「退避三舍」など、数字「三」の現れる位置が一番目と二番目共起の四字熟語とは「三三五五」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「三」の現れる位置については以下のとおりである。

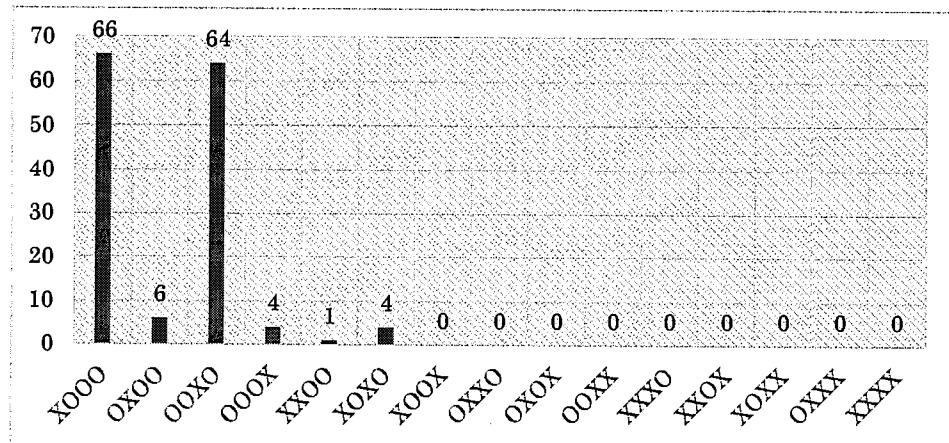
- ・一番目のみ……66例
- ・二番目のみ……6例

- ・三番目のみ……64 例
- ・四番目のみ……4 例
- ・一番目と二番目に共起……1 例
- ・一番目と三番目に共起……4 例

ほとんどの場合、数字「三」が一番目のみと三番目のみの位置に現れ、それぞれ 45.52% と 44.14% を占めている。次は二番目に現れる四字熟語で、4.14%、次は四番目のみ、一番目と三番目に共起する四字熟語であり、いずれも 2.76% を占めている。一番目の位置と二番目の位置に共起するものはわずか 0.7% である。

図 3 に、「X」、「0」によって数字「三」の現れる位置を表示する。「X」は数字「三」を表し、「0」は数字「三」以外の文字を表す。例えば、数字「三」は二番目と四番目に共起する四字熟語「三三五五」は「XX00」で表示する。

図 3 日本語の四字熟語における数字「三」の現れる位置



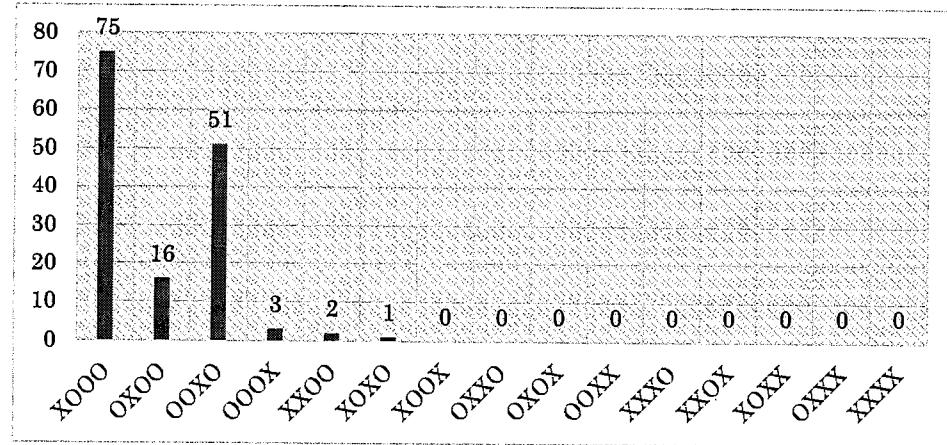
2.2.1.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「三」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……75 例
- ・二番目のみ……16 例
- ・三番目のみ……51 例
- ・四番目のみ……3 例
- ・一番目と二番目に共起……2 例
- ・一番目と三番目に共起……1 例

個数から見れば、数字「三」の現れる位置は大部分が一番目のみと三番目のみであり、それぞれ 50.68% と 34.46% を占めている。次は二番目のみの位置に現れるものであり、10.81% を占めている。次は四番目のみの位置に現れるものであり、2.03%、そして次は一番目の位置と二番目の位置に共起するものと一番目の位置と三番目の位置に共起するものであり、それぞれ 1.35% と 0.68% を占めている。詳細は図 4 の通りである。

図 4 中中国語の四字熟語における数字「三」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「三」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「三」の現れる位置については、中国語においても、日本語においても、一番目と三番目の位置に現れるケースが最も多い。これは、日本語における大部分の数字「三」を含む四字熟語は中国を起源としたものであるからと考えられる。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「三」と他の数字との共起関係の考察

日中両言語における数字「三」を含む四字熟語には、他の数字と共に起するケースが少くない。その中で、他の数字との共起関係がどのようなもので、どのような数字と共に起する場合が最も多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「三」と他の数字との共起関係についての詳細を図 5 にまとめる。

図 5 日本語の四字熟語における数字「三」と他の数字との共起関係

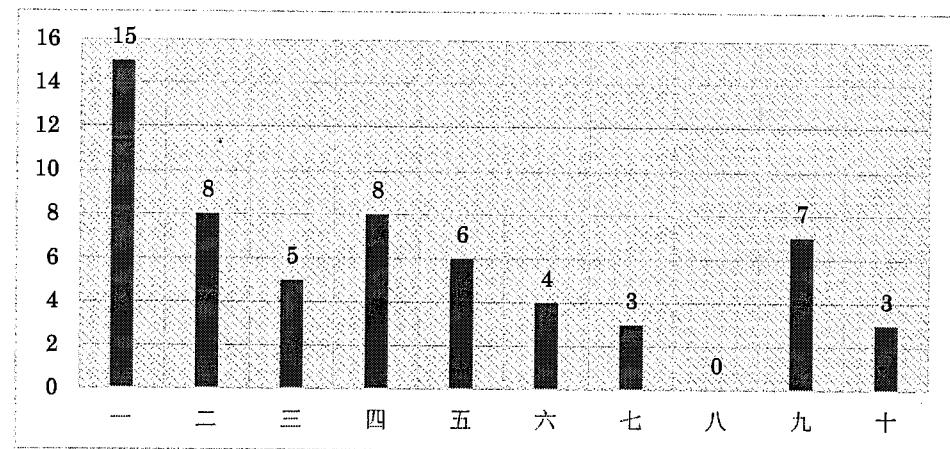


図5から分かるように、日本語における数字「三」を含む四字熟語の中には、数字「三」が数字「三」自身と共に起するものが5例あり、総数の8.47%を占めている。以下、数字「一」と共起するものが15例、25.42%、数字「二」と「四」と共起するものが共に8例、それぞれ13.56%、数字「五」と共起するものが6例、10.17%、数字「六」と共起するものが4例、6.80%、数字「七」と「十」と共起するものが各3例、それぞれ5.08%、数字「九」と共起するものが7例、11.86%、数字「八」と共起するものはない。

割合からみると、数字「一」と共起するケースが最も多く、その次は数字「二」、「四」、「九」、「五」、「三」、「六」、「七」と「十」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「三」と他の数字との共起関係に関する詳細は図6の通りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「三」と他の数字との共起関係

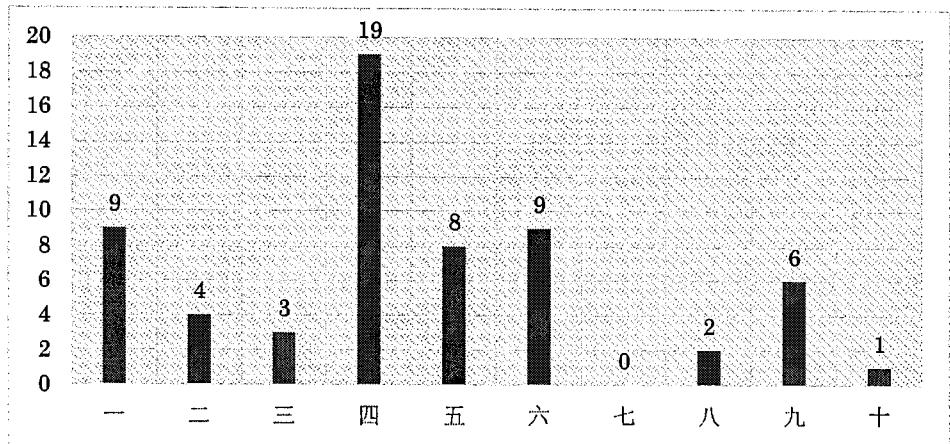


図6から分かるように、日本語における数字「三」を含む四字熟語の中には、数字「三」自体と共に起するものが3例で、総数の4.92%を占めている。数字「一」と「六」と共起するものが各9例、14.75%、数字「二」と共起するものが4例、6.56%、数字「四」と共起するものが19例、31.15%、数字「八」と共起するものが2例、3.28%、数字「九」と共起するものが6例、9.84%、数字「十」と共起するものが1例、1.64%、数字「七」と共起するものは無い。

割合からみると、数字「四」と共起するケースが最も多く、その次は数字「一」、「六」、「五」、「九」、「二」、「三」、「八」、「十」の順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「三」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは、日中両言語の四字熟語において、数字「三」と他の数字と共に起して表す意味を分類し、提示する。具体的な例もあげる。

(1) 数字「一」と共起する場合

A: 実際の数量

日：三位一体

中：三位一体

B: 対比する

日：一刀三礼 一唱三歎 一諫三嘆

中：一唱三叹 一隅三反 一波三折

(2) 数字「二」と共起する場合

A: 変化

日：三心二意

中：三心二意

B: あらゆる

日：三草二木

中：三草二木

C: 少なさ

日：二言三言

中：三言二语

D: 多さ、頻繁

日：なし

中：接二连三

(3) 数字「三」と共起する場合

A: 少ない

日：三三五五

中：三三两两

B: 多い

日：三浴三薰 三薰三沐

中：三浴三熏 三浴三畔

(4) 数字「四」と共起する場合

A: 実際の数量

日：桃三李四 三从四德

中：三从四德

B: あらゆる

日：張三李四

中：三朋四友 三亲四眷 张三李四

C: 繰り返し

日：再三再四 三温四寒

中：再三再四

D: 多い

日：なし

中：三妻四妾

E: あれ…これ…、雜、乱

日：なし

中：推三阻四 低三下四 丢三落四 橫三竖四 说三道四 言三语四 颠三倒四

(5) 数字「五」と共起する場合

A: 実際の数量

日：五障三徙 三綱五常

中：三纲五常

B: 少ない

日：三三五五

中：三五成群 三三五五

C：多い、繰り返し

日：三令五申

中：三令五申 三番五次

D：大体の数量

日：なし

中：三年五載

D：実際の意味なし、広く指す

日：なし

中：三江五湖 三差五錯

(6)数字「六」と共起する場合

A：多い

日：三面六臂

中：三推六问 三头六臂 三班六房 三街六巷 三宫六院

B：あらゆる

日：六韜三略

中：三姑六婆 六街三市 三亲六眷 六韜三略

C：程度の高さ

日：なし

中：三茶六饭

(7)数字「七」と共起する場合

A：割合

日：人三化七

中：なし

(8)数字「八」と共起する場合

A：多い、さまざま

日：なし

中：三灾八难 八难三灾

(9)数字「九」と共起する場合

A: 多い

日：三拝九拝 三跪九叩

中：三转九弯

B: あらゆる

日：三槐九棘

中：三教九流

C: 繰り返し

日：三思九思

中：なし

D: 程度の高さ

日：なし

中：三贞九烈

日中両言語における数字「三」を含む四字熟語において、数字「三」と他の数字と共に起するケースが多く見られる。日本語において、数字「三」は数字「一」と共起するものが最も多く、25.42%を占めている。一方、中国語においては数字「三」が数字「四」と共起するものが最も多く、31.15%を占めている。

数字「三」が数字「二」までと共に起する場合については先に述べたので、ここでは数字「三」自身と共に起する場合からを見ることとする。数字「三」と数字「三」が共起する場合、日中両言語においては共通している。共に、「少ない」と「多い」という二つの意味が見られる。

数字「四」と共起する場合には中国語のほうが日本語より数がずいぶん多い。意味から見れば、共通する「実際の数量」、「繰り返し」、「あらゆる」という意味を表す以外、中国語には「多い」(例えば、三妻四妾(旧時、妻妾が多いことを形容する))と「あれ…これ…、雑、乱」(例えば、推三阻四(あれこれ言い訳する)、颠三倒四(つじつまが合わないこと、でたらめであること)、说三道四(あれこれ勝手にいい加減なことを言う))などマイナスの意味が見られ、一方、日本語においてはこのような使い方は見られないようである。

数字「五」、数字「六」と共起する場合、日中両言語において共通している意味は多いが、中国語には「大体の数量」、「実際の意味なし、広く指すだけ」と「程度の高さ」という意味が見られる。例えば、“三年五载”は「三四年、三五年、数年」を指しており、“三差五错”は「思わぬ間違い、意外な出来事」を指しており、“三茶六饭”は「手厚くもてなすこ

と」を指している。一方、日本語においてはこのような使い方は見られない。

数字「七」と共起する場合には、日本語においては「人三化七」など、「割合」という意味が見られるが、中国語においては数字「七」と共起する四字熟語は見られない。数字「八」と共起する場合には、中国語においては“三灾八难”（さまざまな災難）など、「多い、さまざま」という意味で使われるが、一方、日本語においては、数字「八」と共起する四字熟語は見られない。

数字「九」と共起する場合には日中両言語共に「多い」と「あらゆる」という意味が見られるほか、日本語においては「三思九思」（何度もじっくり考えること）など、「繰り返し」という意味が見られ、「三」と「九」を重ねることで、何度も繰り返して考えるという意味を強調している。一方、中国語においてはこのような意味は見られないようで、“千”と“万”を用いた“千思万想”で「三思九思」と同じ意味を表す。ちなみに中国語では“三贞九烈”（女性が死ぬまで操を守ること）のように、「三」と「九」を重ねて、「程度の高さ」を表す使い方が見られるが、これは日本語には見られない意味である。

3. 数字「三」を含む四字熟語の対照考察

ここでは以下の三つに分類し、日中両言語における数字「三」含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「三」を含み、同義・類義を表すもの、②両言語とも「三」を含み、異義を表すもの、③一方の言語で「三」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「三」を含み、同義・類義を表すもの

三人成羣 // 三臭皮匠

(14) 一个人的头脑是有限的，“三臭皮匠”，大家一齐想一定会有好办法。（『中国語熟用成語・熟語』光生館）

訳文：一人だけの頭脳には限りがある、三人成羣、みんなそろって考えると、きっといい方法が出る。

(15) “三个臭皮匠，合成一个诸葛亮”，这就是说，群众有伟大的创造力。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈毛泽东選集第三卷〉』）

訳文：「三人成羣」というのは、大衆には偉大な創造力があるということである。

日本語における四字熟語「三人成羣」は熟語では「三人よれば文殊の知恵」と言う。普通の人でも三人(以上)で考えを出し合えば、文殊菩薩と同等以上の考えが浮かぶということから、力を合わせるのが大事であることを喻えている。ここにおける数字「三」は数量

的意味「三人」から「多数の人」を指しており、「文殊」は知恵をつかさどるとされるという文殊菩薩のことを指しており、「文殊」で知恵を指している。

一方、中国語における四字熟語“三臭皮匠”は“三臭皮匠，湊諸葛亮²⁹”、もしくは、“三個臭皮匠，合成一个諸葛亮”とも言う。靴職人でも三人(以上)が協力すれば、“諸葛亮”に匹敵することから、力を合わせるのが大事であることを喻えている。ここにおける数字“三”も数量的意味「三人」から「多数の人」を指している。“皮匠”は靴職人のことであり、ここでは頭の良くない人のこととして使われている。“臭”は名詞の前において、軽蔑的意味を表している。昔の中国では靴職人は勉強しなくても仕事ができるので、三国時代における知識豊富の軍師と比べれば、遙かに劣っている。中国は儒教の世界なので、“臭皮匠”と“諸葛亮”を対比して、“万般皆下品，唯有读书高”という代表的な儒教精神を広く普及させるというのが“臭皮匠”という語を使っている一説である。また、別の説として、“裨将”は古代の中国では「副将領」という意味で、中国語では“皮匠”的発音と“裨将”的発音が似ていることから、“三臭皮匠(湊諸葛亮)”は実は「副将領三人(以上)が知恵を合わせて協力すれば、諸葛亮に匹敵する」という意味だという。

三遷之教 // 孟母三迁

(16) お母さんのお民が、三遷之教の故事にちなんで、学校のなかで育てば、教育のためによいと考えたからです。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「ひとりっ子の上手な育て方』』)

訳文：次郎的母亲从孟母三迁中得到启示，认为在学校里会有利于对孩子的培养。

中国語における四字熟語“孟母三迁”は西汉·劉向《列女傳·卷一·母仪》を出典とし、子供の教育には環境の影響が大きく関係し、教育は環境に支配されるということを示唆していると同時に、教育熱心な母親のことを喻えている。ここにおける“孟母”とは、孟子³⁰の母親のことである。数字“三”は三度という意味を指しており、“三迁”とは住居を三度移し変えることを指している。孟子は幼くして父を失い、母の手一つで育てられた。彼の母はよく見られる“未亡人”的タイプであるが、自分のわき目もふらず、情熱をすべてわが子の成長に捧げた。孟子と母は最初は墓場のそばに住んでいたが、孟子が葬式のまねばかりするので、市場近くに転居した。ところが今度は孟子が商人の駆け引きをまねるので、学校のそばに転居した。すると孟子は礼儀作法をまねるようになった。そこで母は「こういう所こそ、わが子を置くにふさわしい」と喜んだというのである。これが“孟母三迁”という四字熟語となり、歴史に名を残す美談となった。

“孟母三迁”という四字熟語が日本に伝わってきて、「三遷之教」、もしくは「孟母三遷の教」となり、子供の教育にはよい環境を選ぶことが大切であることを喻えている。

三三五五 // 三三两两

(17) 夏天的夜里，操场上三三两两漫步着的情人和朋友全消散了，他们俩还在不知疲倦地谈着。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<青春之歌>』）

訳文：夏の夜、三三五五、運動場を散歩していた恋人同士や友だち連れは、もうすっかりすがたを消していたが、ふたりは疲れもおぼえぬように、語りつづけていた。

(18) 人们三三两两聚在一起，有说有笑。（《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社）

訳文：人々が三々五々集ってしゃべったり笑ったりしている。

日本語における四字熟語「三三五五」は人がばらばらに、三人、また五人ぐらいずつ続いて歩いて行く、来る、または存在する様子を表す。また、あちらこちらに家などが小さく固まって散在している様子を表すこともある。もっぱら、人間の集団について使われる。

熟語「三三五五」は中国における有名な詩人李白の七言絶句“采莲曲”三句目“岸上谁家游冶郎，三三五五映垂杨”を出典としている。“采莲曲”は李白が“若耶溪”³¹に来た時、中国四大美女³²の一人西施がここで蓮を探っていたことを思い起こして、作ったと言われている。女性が三三五五と“若耶溪”的岸辺で蓮を探っており、その様子を若者が柳の葉陰から、こっそり見ている描写において、数字「三」と数字「五」は三人～五人のグループが存在し、合わせて「少ない」という意味を表している。その後、日本における与謝蕪村も四字熟語「三々五々」を使い始め、俳詩「春風馬堤曲 十八首」³³で「たんぽぽ花咲けり 三々五々 五々は黄に 三々は白し 記得す 去年此の路よりす」と詠んでいる。

中国では現在、“三三五五”と似た意味として、“三三两两”が多く使われている。“三三两两”は宋·郭茂倩《乐府诗集》卷四十七引晋人《娇女》：“鱼行不独自，三三两两俱。”を出典とする四字熟語である。ここにおける数字「三」と“两”（数字「二」）は、合わせておむね数が少ないと形容している。“五五”より、“两两”のほうが人数の少ない状態をもっと鮮明的に表わすことができるからではないかと考えられる。

三顧之礼 // 三顧茅庐

(19) 这次当了财务部长的田中，听说是经理三顾茅庐从银行挖来的。（『例解中国語熟語辞典』東方書店）

訳文：こんど財務部長になった田中さんは、社長が銀行から三顧之礼で引き抜いたのだそうだ。

中国語における四字熟語“三顧茅庐”は目上の人があの下の者に対して三度も出向いてお願いをして、礼を厚くして人を迎えることのたとえであり、中国の三国時代に劉備³⁴が諸葛亮を迎える際に三度草ぶきの家をたずねたとする物語に由来する。ここにおける数字“三”は「みたび」を指しており、“顧”は訪れるることを指しており、“茅庐”は草ぶきの家を指している。

一方、日本の戦国時代の有名なエピソードにも、この「三顧之礼」という四字熟語が出てくる。中国語における四字熟語“三顧茅庐”と同じように、目上の人があの下の者に対して三度も出向いてお願いをして、礼を厚くして人を迎えることのたとえである。ここにおける数字「三」も「みたび」という意味である。後の天下人・木下秀吉(豊臣秀吉)³⁵が、今孔明(諸葛亮)と称された竹中重治³⁶を軍師に迎えようとするときにも、この「三顧の礼」で頼み込んだという逸話がある。とは言え、これは後になって作られた作り話である可能性が高い。当然ながら元ネタは劉備と諸葛亮の“三顧茅庐”であり、秀吉が本当に三度も訪ねたかどうかは定かではない。要は秀吉を劉備、重治を諸葛亮に喩えて、物語を引用して彼らの業績に箔をつけようとしたのであろう。

3.2 両言語とも「三」を含み、異義を表すもの

朝三暮四 ≠ 朝三暮四

(20) 政府の朝三暮四的な態度を攻撃する。(『日中辞典』小学館)

訳文：攻击政府蒙骗敷衍的态度。

(21) 这个人朝三暮四，做起事来总是虎头蛇尾。(『中国語成語ハンドブック』白水社)

訳文：この人は考
えがころころ変わり、何をしても尻すぼみだ。

日本語における四字熟語「朝三暮四」は中国の故事に由来する。中国における《列子・黄帝篇》に見える「朝三暮四」は古代中国の「宋」という国の話である。宋の国に狙公という人がいた。狙公は群れをなすほどの猿を飼っていた。猿を非常に可愛がり、気持ちを理解することができ、猿も同様に狙公の心をつかんでいた。自分の家族の食べ物を減らしてまで、猿に餌を与えていた。ところが急に貧しくなったので、猿に与える餌の茅を減らすことにした。猿たちが自分になつかなくなってしまうのではないかと心配したので、まず猿たちを誑かして言った。「お前たちにどんぐりをやるのに、朝は三つで暮(夕方)は四つにする。足りるか?」すると猿たちは怒りだした。そこで狙公が「それじゃ、朝は四つで暮(夕方)は三つにしよう。足りるか?」と言うと、猿たちは喜んだ。また、中国における《庄子・齐物論》にも出てくるが、意味はやや異なる。《列子・黄帝篇》の場合は、「朝

三暮四も朝四暮三も実質は同じでありながら、猿たちは朝に三つに怒り朝に四つに喜んだ。知者が愚者を籠絡し、聖人が衆人を籠絡するのも、狙公が知を以て猿たちを籠絡したのと同じである。」と結んでいる。利巧な者が愚かな者を言いくるめるのはすべてこの話のようなもので、分け前がどっちでも変わりがないのに、相手を喜ばせたり怒らせたりするのである。また、『庄子・齊物論』の場合は籠絡される者の中に立ち入って、狙公の「賢」や衆狙(猿たち)の「愚」を論じるのではなく、実質に変わりはないのに区別を設けた狙公とその区別にこだわった衆狙の浅知恵の両方を退けていたように思われる。現在、日本語における四字熟語「朝三暮四」は狙公が猿を籠絡したということから、「人を籠絡してその術中に陥れること」とか「詐術を以て人を騙すこと」とか、もしくは、根本的な違いに気づかない愚か者という意味に使われている。

一方、中国語における四字熟語“朝三暮四”は現代文において、既に語源の猿の生計とかけ離れていて、捉え方も角度も変わっている。むしろ、朝三つがだめだったら、すぐに朝四つに変えた人間の豹変ぶりをマイナスにとらえて、「変わりやすいこと、移り気であることのたとえ。また、考え方や方針が定まらず、当てにならないことのたとえ」となっている。意味が変化した理由をたとえば、中国においては古文から現代文に変わってきたとき、“朝三暮四”を知らない人が、“朝秦暮楚”と混同したそうである。中国語における四字熟語“朝秦暮楚”は朝には中国の西部にある秦について、暮れには南部にある楚にいる、また、朝には秦国に頼り、暮れには楚国に頼るという。一定の場所に生活の拠点を持たずにふらふらと放浪すること、信念や主義、主張などが一定でない、すぐに変わることを喻える。中国語における四字熟語“朝三暮四”は現代文の用例を見れば、男女の浮気心に使われることがほとんどであるが、進路や考え方が定まらず、心が浮ついていることに使われることもある。

三行半文 ≠ 三句半文

(22) 三行半文を書く。(『日中辞典』小学館)

訳文：写休书。

日本語における四字熟語「三行半文」は「三下り半」とも言う。江戸時代に庶民が離婚する際、妻から夫、夫から妻(または妻の父兄)に宛てて交付する、離婚を確認する文書である。この文書には離婚を決めたという宣言と、妻の再婚許可が三行半にまとめられ、また、字を書けない人は三本の線とその半分の長さの線を一本書くことにより離縁状と同等の取扱がされていたため、庶民の間では三行半文(三下り半)という呼称が広まり、シネク

ットキが働いていると考えられる。なお、奈良時代の律令に定められた棄妻(婿入婚における、夫からの一方的な離婚。放妻とも言う。)の際に用いられた書状七出之状の「七」を半分に割って、三行り半というとする説や、婚姻の際に妻の親元が出す婚姻許可状が七行の文書であることが多かったため、その半分の三行半にするという説などもある。三行半文といった場合、どちらか一方が愛想をつかすなど一方的な離縁に使われる。後に恋人関係でも使われるようになり、離縁まではしなくても、愛想をつかしたという意思表示程度でも「三下り半を突きつけた」といわれるようになる。

一方、中国語における“三句半文”は“三句半”とも言う。紐を通した何枚かの竹の板を鳴らして、韻文を軽やかに、リズミカルに韻文を語る大衆芸能である中国の“快板”と似ている。“快板”は一人あるいは二人の掛け合いでするが、“三句半”は四人並んで行なう。銅鑼などの打楽器で拍子を取りながら、はじめの三人が七言の句を語ると、最後の一人が一言あるいは二言、三言の突っ込みを入れるというものであり、同じようにシネットキが働いていると考えられる。“三句半文”は有名な詩に基づいて、作ったものもある。真髄は皮肉、風刺、ユーモアである。

長舌三寸 ≠ 三寸之舌

(23) 凭他三寸之舌也难以说服。(小学館『中日辞典』)

訳文：彼の口達者をもってしても説得することはできない。

日本語における四字熟語「長舌三寸」は人前では調子のいいことを言い、陰では舌を出して笑うことを指している。つまり、人前では同意した振りをして、陰では舌を出して笑らい、同意しないという意味を表し、主体と機能の関係に基づくメトニミーが働いていると考えられる。ここにおける数字「三」は舌の長いことを形容する。「長舌三寸」は四字熟語「八方美人」的な意味もあり、マイナスの意味として使う場合が多い。

これに対して、中国語における四字熟語“三寸之舌”は“三寸不烂之舌”とも言う。《史記·平原君虞卿列传》：“毛先生以三寸不烂之舌，强于百万之师。”を出典とする四字熟語である。よく回る舌、口達者を喻えている。日本語における「長舌三寸」と同じように主体と機能の関係に基づくメトニミーが働いていると考えられるが、多くの場合にはプラスの意味として使われている。

3.3 一方の言語で「三」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 贅沢三昧 // 一掷千金

(24) 他完全知道静宜在两个孩子面前讲了他的许多坏话，把他变成一个花天酒地、骄奢淫

逸、一掷千金的人。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<活动变人形>』)

訳文:妻が子供たちの前で彼のことを酒に女と贅沢三昧の放蕩者だと散々けなしている。

日本語における和製四字熟語「贅沢三昧」は思う存分にぜいたくする、金や物を思うままに好きなだけ使うことを喻える。ここにおける「贅沢」は身分にふさわしくない、必要以上の無駄な費用を使うことを指している。「三昧」はもともとはサンスクリット Samādhi(サマーディ)の音写であり、仏教における禪定、ヒンドゥー教における瞑想において、精神集中が深まりきった状態のことを指している。日本では江戸時代のころに庶民に浸透し、自己中心的な考えを指すようになっていったようである。その後、「三昧」はそのことに夢中になって、他をかえりみない意を表し、ほかのことを疎かにするという意味となっている。日本語において、「三昧」を多くの名詞と合成させて、多くの和製四字熟語を作ってきた。例えば、「読書三昧」、「勉強三昧」、「放蕩三昧」、「風流三昧」などである。「贅沢三昧」はマイナスの意味に見えるが、プラスの意味として使う場合もある。例えば、玉造温泉旅亭山の井の「贅沢三昧会席」の宣伝は以下のようなものである。「柔かく蒸し上げた島根のあん肝はとろける美味しさ。吟味したお造りと旬味を盛り込んだ前菜。とろけるような食感と独特の甘い香り、絶品「しまね和牛」のしゃぶしゃぶをお楽しみ頂きます。幻の高級魚「のどぐろ」塩焼は秋の逸品！季節の揚物や蒸し物に釜飯など全13品「贅沢三昧会席」で秋の美味をご満喫ください。」このような場合では、プラスの意味というより、むしろ自慢の意味を表していると考えられる。

一方、中国語における四字熟語“一掷千金”は唐·吳象之《少年行》“一掷千金浑是胆，家无四壁不知贫。”を出典とする四字熟語である。“千金一掷”とも言う。賭け事をして、一度の勝負に大金を賭けるという意味から、一度に惜しげもなく大金を浪費する、金遣いが荒いこと、また、一度に大金を投げ出すような大胆で豪快な振る舞いや思い切りのよいことを喻える。ここにおける数字“一”は一度という意味であり、“一掷”が一度投げる、投げ出すことを指しており、「千金」は大金のことを指している。多くの場合はマイナス的意味の四字熟語として使われている。

阳春三月 // 小春日和

(25) 如果是阳春三月，这些罗带的曲处还有一个个的彩球，玫瑰杜鹃之类矮而隆然的灌木丛。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<霜叶红似二月花>』)

訳文：これが小春日和ならば、この宝石の帯の曲り角ごとに、美しい飾り玉——それは小ぢんまりとはしているが活気に充ちたバラやツツジだったがつくはずである。

中国語における四字熟語“阳春三月”は旧暦三月、または旧暦三月のような温かい陽射し、春に満ちた天気を言う。旧暦は一月の長さを月の月齢約二十九日を基準に一年における月の配列を太陽の運行を基準に定める。季節は一太陽年を二十四分した二十四節気を基準に決められる。年始は前漢の太初暦以来冬至の翌々月、つまり立春前後に設けられ、一月には必ず雨水が含まれた。これにより一年の始めと四季の始めが一致するようにされ、旧暦三月は大体新暦四月中旬くらいからの一ヶ月を指している。

一方、日本語における四字熟語「小春日和」は晚秋から初冬にかけて現れる穏やかな暖かい気候を指している。小春とは旧暦10月のこと、太陽暦では11月から12月上旬にあたる。このころの気候と陽気が春に似ているため、小春と呼ばれるようになった。厳しい冬を前に現れる温和な天気を喜んだことばであり、アメリカ大陸やヨーロッパにも冬を前にしたこの時期の穏やかな晴天を「インディアン・サマー」、「老婦人の夏」などと呼ぶ言葉がある。なお、晩冬から初春にかけて暖かくなり始めた頃を指している「小春日和」は誤用であると言われている。

三日坊主 // 一暴十寒

(26) 学习要有恒心, 一暴十寒是学不好的。(小学館『中日辞典』)

訳文：勉強には根気が必要で、三日坊主ではよく学べるはずがない。

日本語における四字熟語「三日坊主」は物事に飽きやすく、長続きしないことを喻える。ここにおける「三日」というのは単に短い期間という意味で使われていると考えられる。僧の修業というのは朝早くからのお勤めに始まり、規則正しい生活を送らねばならず、つい衝動的に頭を丸めて坊主を志した人でもその実態に触れると並大抵の心構えではとても長続きしない。こうしたことから「三日坊主」という四字熟語が生まれた。近年、日本語における四字熟語「三日坊主」は単に「飽きっぽい」ことを揶揄する言葉というより、朝、昼、晩の坊主の生活を三日繰り返すことで、自分に出来るか出来ないかを判断できるというふうに取る用法も出てきた。今やりたいことを「三日坊主」でもいいから、とりあえずやってみる。そして、三日を目安に再考してみるということである。同じ和製四字熟語として、「三月庭訓」というものもある。四字熟語「三月庭訓」は「庭訓往来」の一ヶ月の往復書状を手本にして手習いを始めた者が三月のあたりでやめてしまうから、学習が長続きしないことを喻えている。

一方、中国語で似た意味を表す場合には四字熟語“一暴十寒”を用いる。“一暴十寒”は《孟子・告子上》の“虽有天下易生之物也，一日暴之，十日寒之，未有能生者也。”に由

来し、“一曝十寒”ともいう。一日中、日に曝さらして暖めたかと思うと、次の十日は陰で冷やす意から、ちょっとだけ努力して、あとは怠ける、つまり気が変わりやすいこと、または少しの間だけ努力をしても、その努力を継続することができずに、すぐに怠けてしまい、結局、仕事や学業などの物事を成し遂げることはできないことを喻える。石の上にも三年のように、努力や忍耐を続けることの大切さを説く四字熟語である。ここにおける数字“一”と数字“十”は「短い時間」と「長い時間」を表し、“曝”は、日と獸の死骸の形を組み合わせて出来た会意文字であり、獸の死骸が太陽にさらされている形で、「さらす」の意味となり、時には「日」を加えた“曝”が使われるようになる。似た熟語として、“三天打鱼，两天晒网”がある。三日魚をとり二日網を干すというように物事に精を出してやらないことを喻えている。

三长两短 // 万一之事

(27) 音作の言うには、もしも病人に万一之事が有ったら一切は自分で引受けよう、そのかわりお志保と省吾の身の上を頼む。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「破戒」』)

訳文：音作说：万一病人有个三长两短，一切由他承担，只求照顾好志保和省吾。

(28) 我告诉你们，我女儿要是有什么三长两短，我也不活了，我这条命就豁出去了，我就跟你们拼个你死我活。(風詠社『中国成語へのアプローチ』)

訳文：言っておきますがね、もしも娘に万一之事があったときには、私も生きてるつもりはありませんよ、この命を投げ出してあなたたちとことん戦うつもりですからね。。

中国語における四字熟語“三长两短”は意外な災禍、事故のことを指しており、特に人が死亡するようなことを表す。三つの長所と二つの短所と短絡的に解釈してはいけない。旧時の中国では金持ちや権勢家は生前に自分の棺桶を用意するという風習があった。この“三长两短”実は棺桶のことを言っている。フタを除いた状態の一般的な長方形(立方体)の棺桶は右と左両側二枚と底一枚の長い板材“三长”と頭側と足側の短い部分の短い板材“两短”からなっている。つまり、“三长两短” = 「棺桶」ということになる。棺桶の蓋は死人が中に入つてから、他人が釘で打ちつけてくれるものなので、数には数えない。

一方、日本語において、四字熟語「万一之事」はめったにないが、ごくまれにあることを指している。保険勧誘のおばさん(生保レディ)がよくお使いになる「あなたに万一之事があつたら…」などと言うと、ほとんどの場合は「万一之事」 = 「事故、死亡」などと考えるそうである。

4. 数字「三」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

「三」は指事文字であり、横画三本を並べた形である。細長い木などを用いた古い数とりの仕方をそのまま字形に示したものである。许慎の《说文解字》には“三：数名。天地人之道也。于文一耦二为三。成数也。凡三之属皆成三。”とある。数字「一」には「道は一に立つ」、数字「二」には「地の数なり」とあり、数字「三」において天地人の「三才」が備わるとするものであるこそ、万物を生む。さらに、沈经（1991）では数字「三」の重要性が更に明らかにされている。“我们整个宇宙是由三种基本粒子组成的、即上夸克、下夸克、和电子。不论是恒星、行星、原子、分子、还是我们人类自身全部都是由这三种粒子所构成。”などとある。

中国の伝統思想においては人は天と地の次に位置し、天地人を代表する数字「三」は必ず吉数とされ、広く崇められ、好まれる数字となった。数字“三”を含む熟語も、皇帝権威に関する“三宮六院”、民俗に関する“三姑六婆”、自然の世界に関する“三维空間”、仏教に関する“三生有幸、三千世界”、道教に関する“三魂七魄”、軍事に関する“三令五申”など広く見られる。中国において周の時代から“鼎”というものが数字“三”的神聖と権威の象徴として流行していた。夏の舜帝が九鼎を鋳た。そして、国宝として代々に渡した。しかし、鼎はもともとは炊飯具である。普通の炊飯具に何故こんなに重要な価値があるかというと、恐らく数字“三”に関係するであろう。鼎は三つの脚がある。力学の原理により、三つの脚の力が一番安定で穩やかである。故に、鼎の三つの脚が安定、平安、穩かさを象徴することになった。“三足鼎立”、“三分鼎足”というような四字熟語もある。

また、中国において、特に広東の人と香港の人は数字“三”が好きである。それは広東語では“三”と“生”は同じ発音である。“生”は“死”的反対的意味として、数字“三”は“生龙活虎”（生気に満ち活力に溢れる）という意味を象徴していると考えられるからである。

一方、縁起のよさを求める日本人にとって、数字「三」は昔から崇拝されていたのも当然だと言える。日本人の「三」に対する崇拝は中国の伝統文化の影響と深くかかわっていると考えられる。日中両国は古くから頻繁な文化交流を行っていた。中国の道教、インドから伝えられた仏教、及び儒教の文化は日本に入ってきた後、日本文化の形成と発展に大きな影響を与え、日本の伝統的な文化を創り上げる基礎となり、日本文化の中で極めて重要な位置を占めている。

『古事記』によると、日本神話においては重要な神が現れる時はほとんど「三つの神」（三

神)として現れる。しかも、この「三つの神」はさらに三つのグループに分かれる。中でも、天照大御神は天皇神統の象徴の三種の神器—八尺瓊勾玉、八咫鏡、天叢雲剣を天皇の祖先、神話の中の天孫、皇室の祖先瓊瓈杵尊とし、その後、この三つの宝物は皇室の至宝となり、和製四字熟語「三種神器」はここから由来したようである。『日本書紀』においては三神から八神への展開という記述も「三は万物を生ずる」という中国思想をうまく取り入れたものと考えられる。また、日本語における数字「三」の発音「みつ」は「満つ、充つ」の発音と一緒にであるから、円満や満溢、そして願望が叶えられるという縁起がよいの意味を持っている。日本語における数字「三」を含む四字熟語において、プラス的意味合いで使われているものが多数である。例えば、「三文之徳」、「三人文殊」などの例が挙げられる。

日中両言語における数字「三」を含む四字熟語において、共に数字「三」は「多い」ことを表している場合がある。

まず、日本語における「三人文殊」という四字熟語を見てみると、「文殊」は「文殊菩薩」の略で、仏教で知恵をつかさどる菩薩である。この語は「平凡な人間でも、三人寄り集まって考えれば、文殊菩薩の知恵のようにすぐれた知恵ができる。」と直訳できる。ここの「三人」は一定の人数ではなく、三人(以上)の人を指している。英語では似ている言い方「Two heads are better than one」である。

もう一つの例を見てみよう。「石上三年」という四字熟語である。「石上三年」は「石の上にも三年」とも言う。「石の上にも三年で、どうにか仕事も一人前になってきた」というセンテンスを聞いたら、恐らく誰でも理解できるであろう。それは「つらい事でも長い間辛抱すれば、報われるものだ。」ということである。ここの「三年」は不確定の数詞で「長い間」という意味である。また、よく知られている書店の「三省堂」の「三省」は『論語』の「吾れ日にみたび吾が身を省みる」からとったものに違いないが、これなども「みたび」と限定するよりも、「たびたび」と拡張して考えたほうがよさそうである。この三つの例から見れば、中の「三」は実際の数を指しているではなく、「長い」、「多い」という意味である。

一方、日本語だけではなく、「三=多い」という意味は中国語においても見られる。

まず、中国語における“三人成虎”という四字熟語を見よう。

『戦国策・魏策』には魏の臣庞葱は、(魏の)太子とともに趙の邯郸に人質として行くことになった。庞葱が魏の惠王に「いま、一人の者が『市場に虎が出た』と申しましたら、王様はお信じになられますか」と言った。王は「いや」と言った。「二人の者が『市場に虎

が出た』と申したら、王様はお信じになられますか」と言った。王は「わしは、あるいは、と疑うだろう」と言った。「では、三人の者が『市場に虎が出た』と申したら、王様はお信じになられますか」と言った。王は「信するだろうと」と言った。そこで、庞葱は「そもそも、市場に虎が出ないことは分かり切ったことです。にもかかわらず、三人の者が言いますと、虎が出たことになります」と言ったとある。この話は魏の大尉の庞葱が趙に人質として赴く太子に同行することになり、出発の前に魏王に言ったものである。“三人成虎”というのは多数の人の言うことは嘘でも人びとが信じ込むという意味であり、嘘が耳目を驚かせるに足ることにたとえる。庞葱のこの話の意味は魏王が明察し、流言に左右されずにすむことができるよう啓発することにあった。魏王は自分の心中に成算があることを表明し、相手が心配しすぎないよういたわる。庞葱が出かけたのち、庞葱を中傷する者がおり、魏王はやがてその中傷を真実だと思い込み、庞葱に疑惑を抱くようになった。その後、太子の人質の期間が終わり、庞葱が魏に帰国すると、魏王は召見しなかった。“三人成虎”的憂慮は不幸にも的中したのである。この四字熟語において、数字の「三」は多数を意味する。現代の「嘘でも千回繰り返せば真理になる」は同様の道理であるが、「三」がまるで「千」のようになっている。

もう一つの例を見よう。

四字熟語“狡兔三窟”は「ずるいうさぎは三つの穴をもつ」というのである。必ずしも悪い意味ばかりで使われるわけではないが、多くは「ずる賢い者ほど、ぬかりなく多くの逃げ道を用意している」ということをいうのに使われる。“狡兔”などと言う、うさぎはいかにも狡猾な動物のように思われるが、うさぎが三つの穴を用意するにはわけがある。「脱兎のごとく」などと逃げ足の速いものの代表のように見なされているが、うさぎは長時間走り続けることはできない。広い野原で追い回されたりすると、簡単にダウントしてしまう。野生生物の世界は常に弱肉強食である。うさぎは体温の調節が苦手で、走り続けると体温が上昇してしまって動けなくなるということである。というわけで、うさぎは外敵から身を守るために、身近なところに避難場所をいくつも用意しているのである。三つの穴を用意するのはかよわき者の身を守る知恵であって、これをずるいとか、狡猾であるとかいうのは少し当てはまらない。「三つの穴」とした「三」は必ずしも「三つ」とは限らない。「いくつも」くらいに理解してもかまわない。中国語の「三」は「三つ」のほかに、「三つ以上」、すなわち、「多数」を表すのに使われる。また、“众”の字が「多数の人」を意味し、“森”という字が「樹木の多いさま」を示しているのも、同様に考えることができる。中

国の戦国時代に齊国の宰相・孟嘗君に仕えた参謀・冯谖はこのウサギの習性を例に挙げ、来るべき危機への対応策を複数準備しておくことの重要性を主張した。これを聞き入れて実行した孟嘗君は成功と安泰を勝ち得た。このときの冯谖の言葉“狡兔三窟”は現在も中国では広く知られている。

このような四字熟語は中国には数多く見られる。たとえば、「三令五申」(度重なる命令や報告)、「三思而行」(行動に移る前によく考える)、「三推六问」(こと細かに何回もたずねる)、「三命而俯」(官位が高いほど責任が重く、さらに謙遜になる)、「三缄其口」(三重にその口を封する)、「三朝元老」(三朝に仕えて重用された高官)などである。

また、面白いのは日中両言語における数字「三」の意味はどちらも明確には「少ない」という意味までは拡張されていないが、日中両言語における数字「三」を含む四字熟語には、「短い、少ない」というような意味を表している例が共にある。

次は日本語における「三日坊主」という四字熟語を取り上げてみよう。「長続きしない人」、「飽きっぽくて、やり始めてもすぐに止めてしまう人」のことである。ここの「三日」は以上の例と違い、時間が「短い」ことを表す。同じような使い方として四字熟語「三日法度」と「三日天下」がある。「三日法度」は短い期間しか守られない法律や規則のこと、また、効き目の薄い薬などを諭えている。ここにおける数字「三」は非常に短い期間のことを指している。「三日天下」とは明智光秀が織田信長を倒してからわずか十三日間で豊臣秀吉に倒されたところからの四字熟語である。それは日本人に広く知られている話だが、「十三日天下」と呼ばれていない。なぜこうなったかと言うと、光秀の政権が短かったことを言っているであろう。

一方、中国語においては古今を見て数字「三」で「少ない」、「小さい」の意味を表わす四字熟語も見える。例えば、“三寸金蓮”、“三分姿色”などである。

ここで四字熟語“三寸金蓮”について少し説明する。

“三寸金蓮”(纏足)は女性の足は小さければ小さいほどよいという価値観から生まれた中国の奇習である。千年ほど前から始まったが、現在はほとんど行われていない。纏足は女の子が3、4歳ぐらいの時に行われた。それ以上になると骨が硬くなるからである。なぜこんな痛く、苦しい思いまでして纏足をしたのであろうか。冯骥才(1995)には一番の目的はセックスだったとある。バランスがとりにくいために、内股の筋肉と女性器が発達するのである。また小さい足でよちよちと歩く様が男性にとって、たいへん愛らしいものだったそうである。女性は夜も靴を脱がずに休んだ。彼女たちにとって裸を見られるよりも、

纏足した足を見られる方がずっと恥ずかしかったのである。纏足は当時の中国人にとって最高にエロティックな部分だったそうである。現在、山東省浜州市の辛店郷で、起源は明朝後期にまでさかのぼるといわれる女性による「寸子」という踊りが伝わっている。大勢の女性が、纏足の中でも足を最も小さくすることに成功した“三寸金蓮”を自慢して見せながら踊る地方の行事である。ただし現在では纏足をしているように見える、斜めにした木板を仕込んだ靴を履いて踊るようになっている。

では、なぜ数字「三」は四字熟語においてはこのような両面性が出たのだろうか。人類は最初に数に関する認識は「一」と「二」しかない。これは恐らく人間が男と女との両性に分けられているためかもしれない。それに、一人に目が二つ、耳が二つ、手も足もそれぞれ二つある。すると「三」を発見したことは非常にすばらしいことである。数字「三」に対する認識により、人類の抽象的な思惟は大いに広がっていた。例えば、「上・中・下、左・中・右、大・中・小、過去・現在・将来」など。「一」と「二」より、無論「三」は大きな数である。しかし、人間社会の発展に従って、後の数百、千、万などが発見されてから、「三」は当然、小さくなつた。従って、「少ない」という意味は数字「三」のイメージ的認知上だけの意味であると考えられる。これも弁証的な相対論の反映の一つではなかろうか。

また、数字「三」は古代の宇宙観をも反映している。古代の人々の宇宙観即ち「天と地の觀」である。「天円地方」と信じていたため、円形の天と方形の地の比率は3:4と思われ、数字「三」と数字「四」も天と地、円と方を象徴する数字となつたようである。従って、数字「三」と数字「四」と合わせて、「あらゆる」、「あれ…これ…」などの意味を表せ、「三从四德」、「三朋四友」、「三亲四眷」、「三妻四妾」など、数字「三」と数字「四」が共起する四字熟語も数多く存在する。また、吳慧穎（1995）は“三属于哲学意义上的数量范畴，是道生一，一生二，二生三，三生万物的推衍过程中，三是最后一个抽象的形而上之数，表示一切由矛盾双方产生的新事物。哲学意义上的三加一并不能生成四。”と言つてゐる。哲学範疇に属する「三」に対して、数字「四」は普通は意味上の数量範疇に属し、数字「三」と数字「四」は異なる範疇に属している。従って、数字「三」と数字「四」が共起する四字熟語には、「低三下四」、「丢三落四」、「说三道四」、「推三阻四」など、マイナスの意味が多いという。

現在、数字「三」をあがめる思想はもう日中文化の中で融合している。

日本における三月三日の雛祭りは女の子が無事に成長することを祈つてお祝いする行事である。飯倉（2007）によると、実は雛祭りの起源は中国から伝わった「節句」と呼ばれ

る暦上の風習で、江戸時代にそのうちの五つを五節句として幕府が定めた。中国古代では旧暦の三月最初の巳の日に体のケガレを紙人形に移し船に乗せて川に流すという風習があった。その風習が日本に伝わり、平安時代には宮中で「上巳の祓い」という行事が行われるようになったということである。

一方、現在の中国において、三月三日に“上巳节”（上巳の祓い）という行事も行われている。特に少数民族においては人は歌ったり、踊りったりなどいろいろな形式でお祝いをする。

また、日本における神前結婚式では四字熟語「三三九度」の儀式が行われる。夫婦になる男女が御神酒を飲み交わして契りを結ぶ大事な儀式である。元来、中国の陰陽道では奇数は陽数といわれ、縁起のいい数とされてきた。なかでも「三」は天地人を表す、特にめでたい数である。めでたい数を三つ重ね、陽数の中で最も大きい「九」にするということは結婚式の晴れ舞台にふさわしい最上級のめでたさを表現していることになる。日本では「九」はその発音が「苦」に通じることから、どちらかというと避けられていたようだが、この場合はめでたい「三」を重ねたものなのでいいと考えられていたようである。

一方、同じ理由として、中国においては日本のように神前や仏前等の結婚式は行われないが、司会者によって式は進んでいく。まずは指輪交換から。二人の結婚の承認となる人に三回、次に新婦の両親、新郎の両親に各三回、次に仲人さんに、そして最後は新しく夫婦になる二人が向き合って三回ずつ、お辞儀をする。最後は披露宴の出席者に向かって、二人の結婚を認めるかどうかを司会者が問い合わせ、全員の同意があった後、つつがなく結婚式が終わる。ちなみに、中国のユグル族に伝わる習慣は新郎新婦にとってはかなり過酷である。それは結婚式で新郎が新婦を弓で射るという文化なのである。ユグル族の習慣によつて、新郎は新婦を三回弓で射る。そしてそのあと、その弓をすべて折り夫婦の愛を誓う。ユグル族に古くから伝わるこの結婚文化は新郎と新婦の永遠の愛を維持するための縁起担ぎ的に行われているもので、新婦を射る弓の先には金属のやじりではなく、ゴムがつけられている。

さらに、活動あるいは集会を行う時、日本人はよく手を上げて「万歳」を三回繰り返すが、これも同じ理由と考えられる。

IV. 数字「四」



1. 日中両言語における数字「四」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「四」の意味を調べるためにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の7項になる。

基本義：

- ① 数の名。三の次、五の前の数。よつ。

派生義：

- ② 四つ目、四番目。
- ③ 四度、よたび。
- ④ 多数。
- ⑤ 東西南北、また、前後左右の四つの方向。
- ⑥ あちらこちら。いたるところ。
- ⑦ 四寸

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典（修订版）》(2001)、《现代汉语辞海（全新版）》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の8項になる。

基本義：

- ① 数目、三加一所得的数。

派生義：

- ② 序数、第四。

- ③ 四次。
- ④ 多，多数。
- ⑤ 指东、南、西、北四个方向。
- ⑥ 周围，到处。
- ⑦ 姓氏。
- ⑧ 中国民族音乐的音阶之一，相当于简谱的低音6。

上から見られるように、日本語における数字「四」の意味は7項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味は6項ある。これに対して、中国語における数字“四”の意味は8項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味は7項ある。

以下に日中両言語における数字「四」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「四」のプロトタイプに関する比較対照

日中両言語における数字「四」のプロトタイプ、つまり数える数量的概念として、意味は一致している。

(1) 二二得四。(小学館『中日辞典』)

訳文：二二(ににん)が四。

(2) 四季の別なく落ち続ける、熱帯の落葉が道に朽ち、柔らかい感触を靴裏に伝えた。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「野火」』)

訳文：不分四季飘落在地上的热带落叶慢慢腐烂，踏上去脚下软软的。

例(1)と例(2)は日中両言語における数字「四」のプロトタイプ的意味に基づいた例である。例(1)は基本的な数を表し、例(2)は共に助数詞と連用する場合である。例(1)における“二二得四”は“二乘以二得四”(二二(ににん)が四)という意味を指している。中国でも古代より1から9までの自然数同士の掛け算を語呂良く暗記する方法があり、“乘以”が省略されている。例(2)においては、日中両言語における「四季」は共に「春、夏、秋、冬の四つの季節」を指しており、数字「四」は「四つ」という意味である。

1.4 数字「四」の意味拡張に関する比較対照

派生義②から⑥までは日中両言語において、意味は共通している。

(3) 芸者の中でも、三流、四流となると、館を出て待合に行って客をとる習慣になっていた。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「越前竹人形」』)

訳文：艺妓当中的三流、四流脚色，习惯上得到外面酒馆去招徕嫖客。

(4) 正好高小四年级的教室里没有人，丑松把省吾带进教室，拿出用报纸包好的东西给他看。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈活动变人形〉』)

訳文：丁度高等四年の教室には誰も居なかつたので、そこへ丑松は省吾を連れて行って、新聞紙に包んだものを取出して見せた。

(5) 他再三再四的请我上湖北，我还没有肯。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈呐喊〉』)

訳文：彼は再三再四僕に湖北へ行ってくれと頼んだが、僕はまだうんとはいわない。

例(3)と例(4)はいずれも派生義②に基づいて、数字「四」の順序、四つ目を表している例である。例(3)の「四流」と“四流”における数字「四」は共に順序を表し、その分野で四番目に位置する等級という意味を表している。三流よりさらに一段劣った、程度の低いものを使う。例(4)における“四年级”的“年级”は「学年」という意味であり、数字は“四”は「四番目」という意味を指している。つまり、“四年级”と「四年」は四番目の学年という意味を表している。

例(5)は日中両言語における数字「四」の派生義③に基づく例である。「よたび」という意味を指している。「再四」は「再三」を強めている語として、数字「三」と数字「四」を合わせて、繰り返し何度も何度もという意味を表している。

(6) 我们多次讲过，在中国这样一个大国，没有共产党的领导，必然四分五裂，一事无成。
(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈邓小平文选第二卷〉』)

訳文：何度も述べたことだが、中国のような大国で、もしも共産党の指導がなければ、きっと四分五裂し、なに一つ成就できないにきまっている。

(7) 憲兵は手分けをして、金剛院を四方から囲むことになった。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「金閣寺」』)

訳文：宪兵分开人群从四面向金刚院包抄。

(8) 在四面环山的荒寺，在寒风仍然盘旋的地方，在树枝依然干枯却又鼓胀起它的苞蕾的时刻。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈活动变人形〉』)

訳文：四方を山々に囲まれた荒れ寺、寒風吹き荒ぶ処、冬枯れの木立の枝に早くも蕾の膨らむ時。

例(6)は共に日中両言語における数字「四」の派生義④に基づいて、「多数」という意味を表す例である。「四分五裂」はいくつにも分かれること、また、秩序をなくしてばらばらになることを指している。例(7)と例(8)は共に日中両言語における数字「四」の派生義⑤

に基づく例である。ここにおける数字「四」は東、西、南、北、あるいは前、後、左、右の四つの方角や方向を指している。例えば、例(7)における「金剛院を四方から囲むことになった」というのは特定的に金剛院を「東、西、南、北の四つの方角」から囲むことになった。中国語に訳すと、“四面”を用いて表す。同じように、例(8)における“四面环山的荒寺”は特定的に「東、西、南、北の四つの方角」を山々に囲まれた荒れ寺という意味を指している。日本語における「四方」と中国語における“四面”は置き換えられる。

(9) クモの子を散らすように四散して逃げる。(小学館『中日辞典』)

訳文：四散奔逃。

(10) 大家都几乎失望了，幸而放出眼光去四处搜索，终于在相距十多家的路上，发见了一辆洋车停放着，一个车夫正在爬起来。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈彷徨〉』)

訳文：人々は失望しかけていたが、なおも目を四方にくばって探すうちに、ついに十数軒向うの路上に、一台の人力車が停っていて、ちょうど車夫が起き上がるとしているのを発見した。

例(9)における「四散」は「まとまっていたものがはなればなれになる、あちこちばらばらになる」という意味である。例(10)における“四处”は「方々、いたるところ、あちこち」という意味を指している。日本語に訳すと、「四方」と訳すのが妥当である。例(9)と例(10)はいずれも日中両言語における数字「四」の派生義⑥に基づいて、「あちらこちら、いたるところ」の意味を表す例である。

(11) 幾冊かの黒っぽい表紙の、四六倍判の雑誌が、その卓上に積まれている。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「家」』)

訳文：那几本暗黄色封面的十六开本的杂志叠在床前那张条桌上。

例(11)は日本語における数字「四」派生義⑦に基づく例である。「四六判」は原紙が四寸かける六寸くらいの判型を指しており、「四六倍判」は原紙が四寸かける六寸くらいの判型の二倍の判型を指している。ここにおける数字「四」は特定的「四寸」という意味を表している。これに対して、中国語において、数字“四”的意味は「四寸」まで拡張されていない。

また、中国語における数字“四”的拡張義⑦には数字“四”は人の姓として使える。《说苑・权谋》によると、中国の春秋時代、越国に“四水”という人がいた。日本語における数字「四」は人の姓としては使われない。中国語における数字“四”的拡張義⑧として、中国民族音楽の十音階の一つとして使える。略譜の低音ラに相当する。特に工尺譜に使わ

れる。工尺譜とは西洋音楽の「低いソ、低いラ、低いシ、ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ」にあたる音階をそれぞれ「合、四、一、上、尺、工、凡、六、五、乙」の漢字を用いて表記した楽譜である。中国の伝統音楽では楽器や音楽のジャンルごとにさまざまな記譜法が使われていた。工尺譜もその一つで、主に民間の通俗音楽などの楽譜として広く使われた。工尺譜における低いラは数字「四」で表記する。これに対して、日本語においては数字「四」がこの意味まで拡張されていない。日本ではピアノなどの楽譜は絶対音高を表す五線譜であるが、大正琴やハーモニカでは今も数字譜を使うことが多い。数字譜は「ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ」をそれぞれ「1、2、3、4、5、6、7」と表記する。

なお、その他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

2. 日中両言語における数字「四」を含む四字熟語の全体像

ここでは「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「四」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめてみる。

2.1 日中両言語における数字「四」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「四」を含む四字熟語は45例が取り上げられている。出典元によって分析して見ると、主に日本を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「四」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍と詩歌または詩歌評論集の二つに分けることができる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源とした四字熟語は「四十不惑、四海同胞、四海兄弟」(《论语》より)、「四分五散、四分五裂」(刘向《战国策·魏策》より)、「四海困窮」(《书经》より)、「四面楚歌、四塞之国」(司马迁《史记》より)、「四通八達」(程本《子华子·晏子问党》より)、「四鳥之別」(《孔子家语》より)、「家徒四壁」(班固《汉书·司马相如传》より)、「黄霧四

塞」(班固《汉书》より)、「三從四德」(无名氏《礼仪 丧服》より)、「朝三暮四」(庄子《庄子》より)、「説三道四」(王相《女论语》より)など、22例である。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集を起源とした四字熟語は「四荒八極」(白居易《新乐府·八骏图》より)と「四絃一撥」(白居易《琵琶行》より)の2例がある。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「四」を含む四字熟語

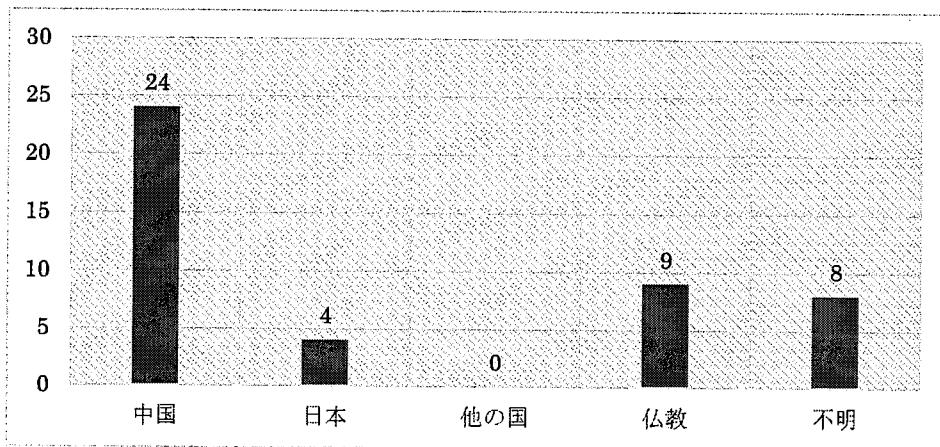
日本を起源としたものは「一天四海」(《平家物語》より)、「四面四角」、「四六時中」など、4例ある。

2.1.1.3 佛教または仏教に関するものを起源とした数字「四」を含む四字熟語

佛教または仏教に関するものを起源としたものは「張三李四」(释道原《景德传灯录·道吾和尚》より)、「四弘誓願」、「四百四病」、「四門出遊」(《過去現在因果經》より)、「四無量心」など、9例ある。

以下の図1は日本語における数字「四」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図1 日本語における数字「四」を含む四字熟語の出典元



上の図1からも分かるように、日本語における数字「四」を含む四字熟語の中で、中国を起源としたものが24例で、総数の53.33%を占めている。以下は日本を起源としたものがわずか4例で、8.89%、佛教または仏教に関するものを起源としたものが9例で、20.00%、出典不明な四字熟語が8例で、他国を起源としたものはない。日本語における数字「四」を含む四字熟語の中で中国を起源としたものが最も多く、総数の約半分を占めている。佛教または仏教に関するものを起源とした四字熟語も少なくない。

2.1.2 中国語の場合

商務印書館の《成语大词典》2012(第二版)に収録されている数字「四」を含む四字熟語は47例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関連するものを起源とした四字熟語という三つに分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「四」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「四」を含む四字熟語は主に古代典籍からと、伝説、劇曲及び小説からの二つに分けることができる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍からのものは「四时八节」(房玄龄等《晋书》より)、「四面受敌」(《管子》より)、「四面楚歌」(司马迁《史记·项羽本纪》より)、「四海一家、四海鼎沸」(陈寿《三国志》より)、「四海为家」(《荀子》より)、「四通八达」(程本《子华子·晏子问党》より)、「暮四朝三」(庄子《庄子》より)、「五湖四海」(周公《周礼》より)、「家徒四壁」(班固《汉书·司马相如传》より)など、19例ある。

(2) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「不三不四」(施耐庵《水浒传》より)、「再三再四」(吴敬梓《儒林外史》より)、「丢三落四、丢三拉四」(曹雪芹·高鹗《红楼梦》より)、「低三下四」(金木散人《鼓掌绝尘》より)、「言三语四」(无名氏《谢金吾》より)、「挑三拣四」(周立波《盖满爹》より)、「推三阻四」(武汉臣《生金阁》より)、「颠三倒四」(许钟琳《封神演义》より)、「四马攒蹄」(关汉卿《调风月》より)、「四平八稳」(施耐庵《水浒传》より)、「四脚朝天」(钱彩·金丰《说岳全传》より)、「光芒四射」(陆仁龙《醒世言》より)など、21例ある。

2.1.2.2 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「四」を含む四字熟語

中国語における数字「四」を含む四字熟語の中に、仏教または仏教関連のものを起源としたものは「张三李四」(释道原《景德传灯录·道吾和尚》より)、「四大皆空」、「四方八面、四面八方」(释普济《五灯会元·镇州普化和尚》より)など、7例ある。

以下の図2は中国語における数字「四」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「四」を含む四字熟語の出典元

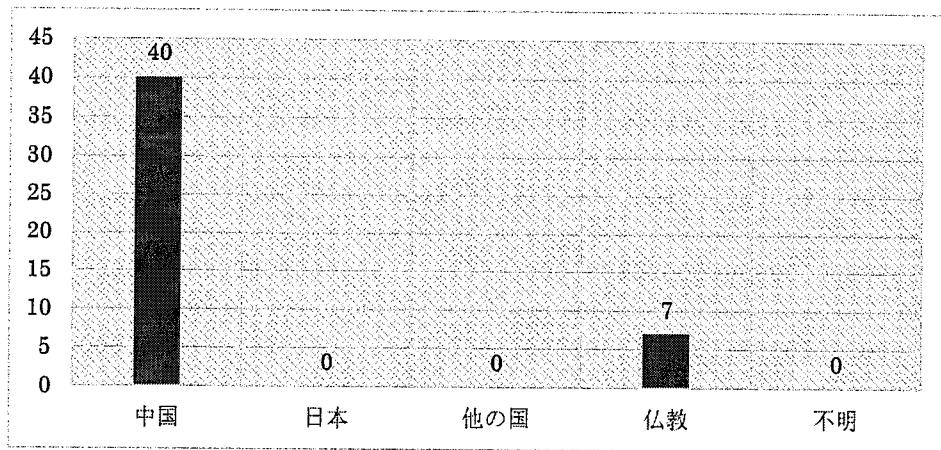


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が40例あり、総数の85.11%を占めている。仏教または仏教関連のものを起源としたものが7例で、14.89%となっているが、日本を起源とした四字熟語や日中以外の国を起源とした四字熟語はない。中国語における数字「四」を含む四字熟語の出典元はほとんどが中国となっている。

2.1.3 数字「四」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「四」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数字「四」を含む四字熟語のほうは出典元が幅広く、中国を起源としたもの、日本を起源としたもの、仏教または仏教関連のものを起源としたものと多様である。これに対して、中国語のほうは中国を起源としたものと仏教または仏教関連のものを起源としたものしかなく、しかも中国語における数字「四」を含む四字熟語の総数の85.11%は中国を起源としたものである。

2.2 日中両言語における数字「四」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「四」の現れる位置考察

四字熟語における数字「四」の現れる位置とは四文字において、数字「四」が何番目の文字であるかということを指している。例えば、数字「四」の現れる位置は三番目のみの四字熟語とは「家徒四壁」、「五湖四海」など、数字「四」の現れる位置が一番目と三番目共起の四字熟語とは「四百四病」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「四」の現れる位置については以下のとおりである。

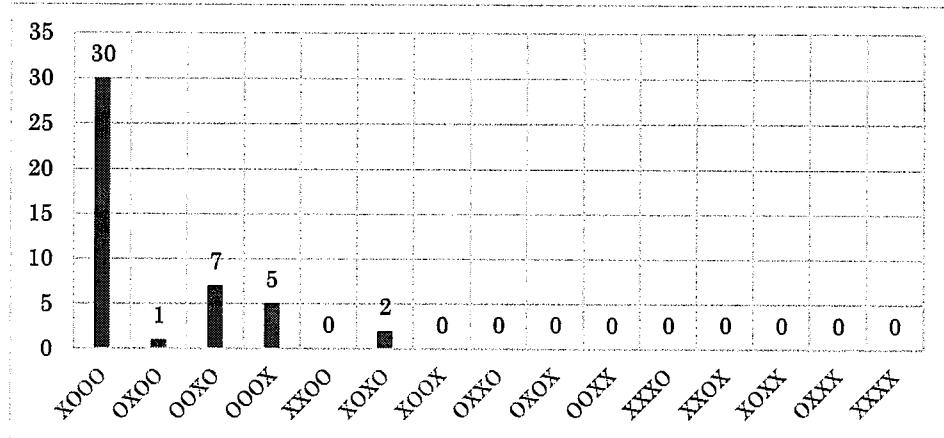
- ・一番目のみ……30例
- ・二番目のみ……1例

- ・三番目のみ……7例
- ・四番目のみ……5例
- ・一番目と三番目に共起……2例

個数からみれば、数字「四」が一番目のみに現れるものが最も多く、総数の 66.67%を占めている。以下、三番目のみに現れるものが 15.56%、四番目のみに現れるもの 11.11%、一番目と三番目ともに現れるもの 4.44%、そして最も少いのは二番目のみに現れるもので、2.22%となっている。

図3に「X」、「0」によって数字「四」の現れる位置を表示する。「X」は数字「四」を表し、「0」は数字「四」以外の文字を表す。例えば、数字「四」は一番目の位置と三番目の位置に共起する四字熟語「四角四面」は「XOXO」で表示する。

図3 日本語の四字熟語における数字「四」の現れる位置



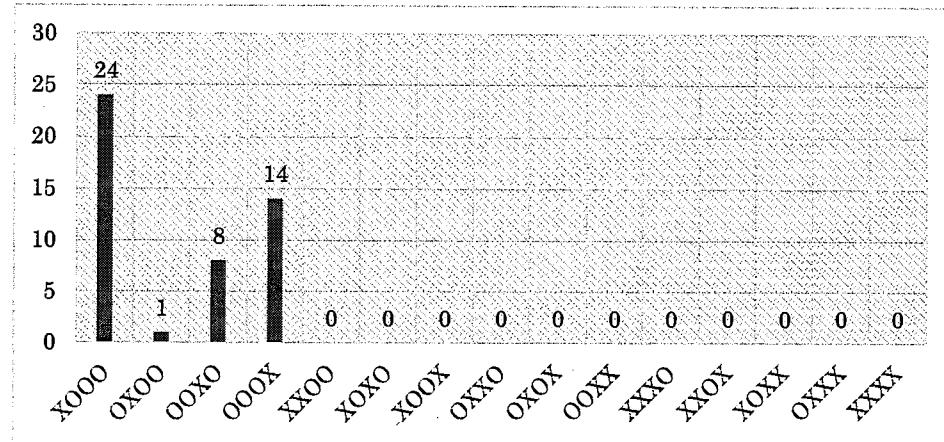
2.2.1.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「四」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……24例
- ・二番目のみ……1例
- ・三番目のみ……8例
- ・四番目のみ……14例

個数から見れば、数字「四」の現れる位置は大部分が一番目のみと四番目のみであり、それぞれ総数の 51.06% と 29.79% を占めている。以下、三番目のみに現れるもの 17.02%、二番目のみに現れるもの 2.13% となっている。詳細は図4の通りである。

図4 中中国語の四字熟語における数字「四」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「四」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「四」の現れる位置については中国語においても、日本語においても、一番目のみに現れるケースが最も多い。また、中国語においては数字「四」が四番目のみに現れるケースが14例あり、これに対して、日本語においては数字「四」が四番目のみに現れるケースは少ない。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「四」と他の数字との共起関係考察

日中両言語における数字「四」を含む四字熟語には他の数字と共起するケースが少なくない。その中で、他の数字との共起関係はどうなるのか、どのような数字と共起する場合が最も多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「四」と他の数字との共起関係に関する詳細を図5にまとめる。

図5 日本語の四字熟語における数字「四」と他の数字との共起関係

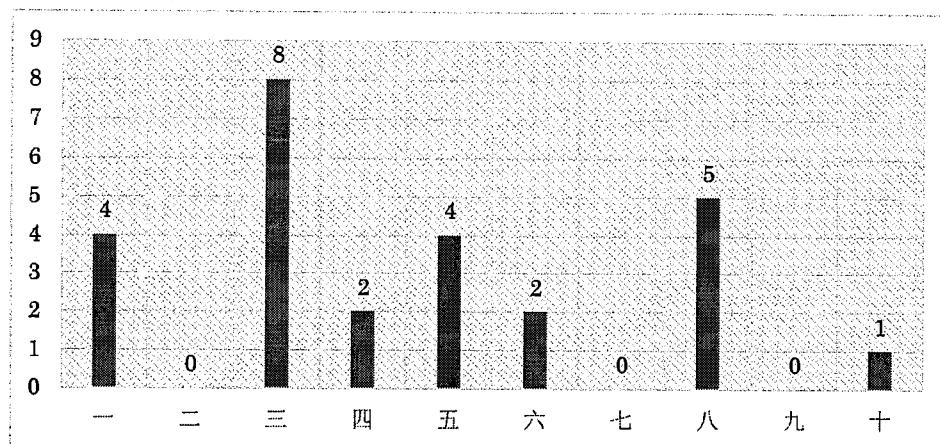


図5から分かるように、日本語における数字「四」を含む四字熟語の中には数字「四」が数字「四」自身と共に起するものが2例あり、総数の7.69%を占めている。数字「三」と共起するものが8例、30.77%、数字「八」と共起するものが5例、19.23%、数字「一」、数字「五」と共起するものが共に4例、15.38%、数字「六」と共起するものが2例、7.69%、数字「十」と共起するものが1例、3.85%、数字「二」、数字「七」、数字「九」と共起するものはない。

割合からみると、数字「三」と共起するケースが最も多く、次に数字「八」、「一」、「五」、「四」、「六」と「十」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「四」と他の数字との共起関係に関する詳細は図6の通りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「四」と他の数字との共起関係

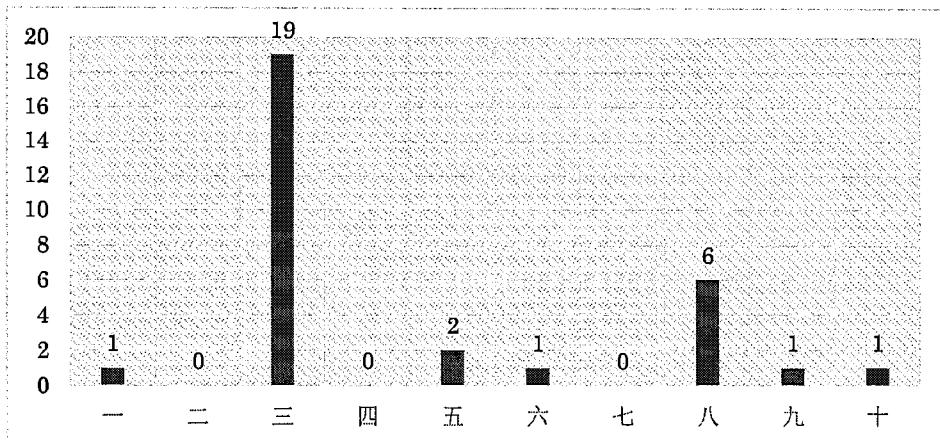


図 6 から分かるように、日本語における数字「四」を含む四字熟語の中には数字「四」が数字「四」自体と共に起するものはない。数字「三」と共起するものは 19 例で、総数の 61.29%、数字「八」と共起するものが 6 例、19.35%、数字「五」と共起するものが 2 例、6.45%、数字「一」、「六」、「九」、「十」と共起するものが各 1 例で、3.23%、数字「二」、数字「七」と共起するものは無い。

割合からみると、数字「三」と共起するケースが最も多く、次に数字「八」、「五」、「一」、「六」、「九」と「十」の順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「四」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは日中両言語の四字熟語において、数字「四」と他の数字と共に起して表す意味を分類し、提示し、具体例をあげる。

(1) 数字「一」と共起する場合

A: 全体、総体

日：一天四海

中：四海一家

(2) 数字「三」と共起する場合

A: 実際の数量

日：桃三李四 三从四德

中：三从四德

B: あらゆる

日：張三李四

中：三朋四友 三亲四眷 张三李四

C: 繰り返し

日：再三再四 三温四寒

中：再三再四

D: 多い

日：なし

中：三妻四妾

E: あれ…これ…、雑、乱

日：なし

中：推三阻四 低三下四 丢三落四 横三竖四 说三道四 言三语四 颠三倒四

(3) 数字「五」と共起する場合

A: 実際の数量

日：四書五經

中：四书五经

B: あらゆる

日：四肢五体

中：五湖四海

C: 亂、分散

日：四分五裂 四分五散

中：四分五裂

(4) 数字「六」と共起する場合

A: 掛け算の結果 24 時間

日：四六時中

中：なし

B: 各方面

日：なし

中：六通四达

C: 少数と多数の割合

日：なし

中：四不拗六

(5) 数字「八」と共起する場合

A: 各方面

日：四方八方

中：四面八方 四通八达 四平八稳

B: あらゆる

日：四苦八苦

中：四时八节

C: 程度の高さ

日：なし

中：四碟八碗 四停八当

日中両言語における数字「四」を含む四字熟語において、数字「四」と他の数字との共起関係については数から見ると、共に数字「三」との共起するケースが最も多い。中国語において、数字「三」と共起するケースが中国語における数字「四」を含む四字熟語総数の 61.29% を占めており、また、日本語においては数字「三」と共起するケースが日本語における数字「四」を含む四字熟語総数の 30.77% を占めている。

数字「四」が数字「三」までと共起する場合については先に述べたので、ここでは数字「五」と共起する場合からを見ることとする。

数字「五」と共起する場合には日中両言語において、表す意味が共通している。数字「六」と共起する場合には日本語において、掛け算の結果 24 時間という意味が見られ、例えば、四六時中であり、一方、中国語においてはこのような使い方は見当たらない。また、中国語において、「各方面」、「少数と多数の割合」という意味が見られ、例えば、“六通四达”は道路がどの方面にも通じていることを指しており、“四不拗六”は少数は多数に逆らえないことを指している。一方、日本語においてはこのような使い方は見当たらない。

数字「八」と共起する場合には共通する「各方面」と「あらゆる」という意味を表す以外、中国語には「程度の高さ」という意味が見られ、例えば、四停八当(すごくうまくおさまる、ちょうど妥当なところに落ち着くこと)、四碟八碗(盛りだくさんの料理のこと)などであり、一方、日本語においてはこのような使い方は見当たらないようである。

3. 数字「四」を含む四字熟語の対照考察

ここでは以下の三つに分類し、日中両言語における数字「四」含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「四」を含み、同義・類義を表すもの、②両言語とも「四」を含み、異義を表すもの、③一方の言語で「四」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「四」を含み、同義・類義を表すもの

四方八方 // 四面八方

(12) 徒衆が眉を蹙めて慨嘆した光景が、現代は到る所ますます四方八方に、加速度をもって広がっているように見受けられる。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「百言百話」』)

訳文：徂衆皺着眉头感叹的情景，现已迅速地蔓延到四面八方。

(13) 一片鞭炮的响声把石板地也震动了，四面八方都是这同样的声音，人分辨不出它们究

竟是从什么地方来的。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈家〉』)

訳文：連発の花火の音が地面をゆすり、四方八方から同じ音がひびいてきて、どこからくるのかはっきりわからないほどだった。

日本語における四字熟語「四方八方」と中国語における四字熟語“四面八方”は意味が完全に共通していると考えられる。ここにおける日本語の数字「四」と中国語の数字“四”は共に「東、西、南、北の四つの方向」を指しており、日本語の「四方」と中国語の“四面”も同様であり、空間についてのみ表す。日本語の「八方」と中国語の“八方”は「東、西、南、北と、南東、北東、南西、北西の八つの方角」を指している。心配り、処理などの各方面の意味で使うことが多い。数字「四」(“四”)と数字「八」(“八”)を合わせて、「各方面」という意味を表している。日本語における四字熟語「四方八方」と中国語における四字熟語“四面八方”は各方角、各方面を強調する四字熟語である。

四之五之 // 説三道四

(14) 用李天达副总编的嘴说出他想说的话，这也是张思锦深思熟虑的。转达李天达的意见，既封住了李天达的嘴，他不会对自己的提议说三道四吧。(『中国成語へのアプローチ』風詠社)

訳文：李天達副編集長の口を借りて自分の考えを言うというのも、張思錦が深謀熟慮の末立てた作戦だ。李天達の意見を伝えると言う形にすれば、李天連の口を封じができるし、李天連だって自分の提案に対して四之五之言うことはないだろう。

(15) 有人在背后嘀咕她：“连袜子都不买一双。”她既不能一笑了之，也无法去找那个背后说三道四的女人吵上一架。(『中国成語へのアプローチ』風詠社)

訳文：「靴下くらい買えばいいのにね」と陰口をたたく者がいたが、彼女にしてみればそれを一笑に付すこともできないし、陰で四之五之言っている者のところに行つてけんかすることもできない。

日本語における四字熟語「四之五之」は「四之五之言う」ともいう。他人に不満を持つて、あれこれとやかましく言うことを指している。仮の顔も三度までという言葉もあることから、三を超えて、四之五之を言われると、うるさく感じるであろう。江戸末期の国語辞典『俚言集覽』によると、「四之五之」は江戸中期頃から現れ、「あれこれ」の意味を表している。あれこれ不平などを言う意味の四字熟語「四之五之」以外に、「あれこれ言う余地がないほど素晴らしい」という意味の熟語「四之五もなし」、「あれこれ言う必要がない」という意味の熟語「四も五もいらず」などもあった。「四之五之」の語源の一説に、さいこ

ろの目が偶数「丁」(四)か奇数「半」(五)かを決めかねている様子に対して、「丁(四)に賭けるか? 半(五)に賭けるか? ぐずぐず言わずに早く賭けろ!」と嘲って、文句をつける表現が熟語化されたというのがある。ここから転じて、「他人に不満を持って、あれこれとやかましく言う」という意味で一般にも広く普及した。また、四字熟語「四之五之」をもじったと思われる表現に「酢之蒟蒻之(酢だの蒟蒻だの)」というのがある。

一方、中国語においては似た意味を表す場合には“说三道四”と言う。ここにおける“说”と“道”は共に「言う、話す、述べる」という意味で、“道”はやや古風な文章語に使われている。小学館『中日辞典』によると、“说～道～”は「～と言ったり～と言う」という意味で、「反対または類似の形容詞や数詞を当てはめて熟語を構成する」とある。例えば、“说三道四”、“说黑道白”などである。四字熟語“说三道四”は日本語に直訳すると、「三と言ったり、四と言ったり」となり、「いろいろと取り沙汰す」との関係がおぼろげながら見えてくる。ここにおける数字“三”と数字“四”は共に多数という意味を指しており、日本語における四字熟語「四之五之」よりそれぞれ数が小さいが、いずれもうるさい感じに違いはない。また、同様に、“说黑道白”も「黒と言ったり、白と言ったり」という直訳から、「みだりに批判する」という意味にまで広がることがわかる。

四鳥別離 // 四鸟之别

(16) 四鳥別離の悲しみ。(小学館『日中辞典』)

訳文：四鸟之别的悲痛。

中国語における四字熟語“四鳥之別”は《孔子家語・顏回》を出典とする四字熟語である。四羽の雛の羽がやがて飛べるほどまでに大きくなり、巣立っていくとき、再会できないこと悲しんだ母鳥が鳴いたという様子から、親子の悲しい別れのことを喩えたもので、メタファーが働いていると考えられる。

一方、中国語における四字熟語“四鸟之别”的故事は日本語においては「四鳥別離」という。「四鳥別離」の故事は日本に伝わってから、深く浸透したようで、謡曲(観世流³⁷)の「隅田川」の上歌³⁸(曲節)には親と子の「四鳥別離」これなれやと謡われている。能楽では一粒種の梅若丸を人買いに誘拐された母親が我が子の行方を追って今の京都から東京の隅田川まで流浪したが、はかなくも再会できず、愛児の死を知ることになるという非情の運命に玩ばれ悲嘆に暮れるという描写もある。

四六骈儻 // 骈四俪六

(17) 在文学作品中现在还常能见到“骈四俪六”。(吉林大学汉日词典编纂部《汉日词典》)

訳文：文学作品には現在でもよく「四六駢儻」を見られる。

中国語における四字熟語“骈四俪六”と日本語における四字熟語「四六駢儻」は共に四字句と六字句の対句を用いる、古代中国の修辞的な文体のことを指している。「駢文」、「駢儻文」、「駢体文」、あるいは「駢儻体」とも言う。ここにおける“駢”（「駢」）とは二頭の馬が並んでいることを表し、対句を基本とする文体であることを意味している。“俪”（「儻」または「麗」）は一対になって並ぶという意味である。一つ句の字数が四字句または六字句を基調とするため、「四六文」とも呼ばれた。「四六」の語は晚唐から使われはじめ、宋の時代に広がった。「駢文」の名が用いられるようになったのは清代である。これらを合わせて「四六駢儻文」または「四六駢儻体」と呼ぶこともある。「四六駢儻」は散文・韻文と対立する文体であり、四字と六字からなる対句を多用する中国の美しい文体の基本となった。中には平仄など韻律面も整えたものもある。美しい文辞を用い、典故のある語句を繁用し、さらに平仄を合わせて音調を整えるのが特徴である。「四六駢儻」の流行は唐代まで続いたが、次第に形式化が進んで陳腐に感じられるようになり、唐の韓愈・柳宗元は古文の復興を提唱したことにより衰退していった。日本では奈良・平安時代の漢文によく用いられた。現在でも中国における文学作品の創作にもよく見られる。

3.2 両言語とも「四」を含み、異義を表すもの

四足投出 ≠ 四脚朝天

(18) その岸づたいに上って千田小学校の校庭に近づくと、一頭の牝馬が四足投出して川岸に倒れていた。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「黒い雨」』）

訳文：沿着河岸往上去，当走近千田小学校的院子时，看到一头母马四脚朝天躺在河边上了。

(19) 他最近忙得四脚朝天。（小学館『中日辞典』）

訳文：彼は最近とても忙しい。

日本語における四字熟語「四足投出」は熟語「四足を投げ出す」から省略された四字熟語である。動物が力を失って、地に横たわって、四足を投げ出す姿勢、または人が両手両足の関節を伸ばし、地面に接地している姿勢のことを表している。あぐらをかいていたか、正座をしていたかはわからないが、長時間座っていると足や腰が疲れてきて、思わず、そのまま仰向きに寝ころび、ウーンと足を伸ばす場合にも、よく四字熟語「四足投出」を使う。身体を伸ばすと、気持ちの疲れも吹き飛ぶような心持ちになる。

一方、中国語において、四字熟語“四脚朝天”的基本義は日本語における四字熟語「四

足投出」と同じである。しかし、四字熟語“四脚朝天”は両手両足の関節を伸ばし、地面に接地している姿勢のことを表すだけではなく、この姿勢から拡張して、“忙得脚底朝天”と使われることが覆い。これは忙しい程度が「脚底(足の裏)が朝天(天を向く)」のように、「ひっくり返るくらい忙しい」というもので、類似性によってメタファーが働いていると考えられる。“脚底朝天”、“手脚朝天”などの類似した語もある。日本語における四字熟語「四足投出」にはこの比喩的な用法はないようである。

3.3 一方の言語で「四」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 四苦八苦 // 千辛万苦

(20) 四苦八苦して得た金。(小学館『日中辞典』)

訳文：千辛万苦得来的钱。

日本語における四字熟語「四苦八苦」は非常に苦労すること、大変な苦しみを喻える。もともとは仏教語であり、四つの苦と八つの苦で合計八種類の苦しみを表していたが、やがて一般的に人間のあらゆる苦しみを指す言葉として用いられるようになった。「四苦」と「八苦」で十二苦あるわけではない。それは「四苦」とは人間として逃れられない必然的な苦しみ「生苦」(生まれてくる苦しみ)、「老苦」(老いていく苦しみ)、「病苦」(病気になる苦しみ)、「死苦」(死ぬ苦しみ)を言い、さらに人間として味わう精神的な苦しみ「怨憎会苦」(嫌いな人の出会いによる苦しみ)、「愛別離苦」(愛する人の別れによる苦しみ)、「求不得苦」(求めても得られない事を求めてしまう欲から生じる苦しみ)、「五蘊盛苦」(人の存在そのものからくる苦しみ)の以上四つの苦を加えて「四苦八苦」と言うからである。

一方、中国語における四字熟語“千辛万苦”は元・張之翰《元日》“千辛万苦都尝遍，只有吴淞水最甘。”を出典とする四字熟語である。さまざまな困難や苦労をすること、また、そうした苦しみのことを喻えている。ここにおける「千」と「万」は数の多いことを示しており、辛いことや苦しいことが千も万もあるという誇張的な意味を表している。

四六時中 // 时时刻刻

(21) 人間は四六時中を通じて無言のうちに、自分を認めてくれ、然るべく待遇してくれと、まわりに向けて乞い綿っているのだ。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「百言百話」』)

訳文：人时时刻刻都在无声地向四周祈求，希望自己能得到认同，能够得到应有的待遇。

(22) 我们的敌人时时刻刻想要消灭我们才快活。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「毛泽东选集第一卷」』)

訳文：われわれの敵は四六時中われわれを消滅しようと考えており、そうしなければ胸がおさまらないのである。

日本語における四字熟語「四六時中」は「いつも、常に」という意味を指している。もともとは「二六時中」と言っていた。明治六年以降に「太陽暦(新暦)」が採用され、一日が二十四時間になり、それに伴い、四字熟語も「二六時中」から「四六時中」に変化したが、意味は変わってはいない。「四六時中」は「二六時中」を現代の一日の時間(二十四時間)に合わせ、四時(早晨・午時・晡時・黄昏)と六時を合わせ、「四」かける「六」の二十四時間としたものである。四時から六時ではなく、掛け算である。

一方、中国語において、「いつも、常に」という意味は四字熟語“时时刻刻”で表す。「時刻」は時間の流れの決まった一瞬のことであり、それを重ねて、一瞬一瞬が連続して経過していくことから、絶えず、いつも、常にという意味に拡張した。ちなみに、日本語においても「時時刻刻」という四字熟語がある。しかし、四字熟語“时时刻刻”的意味とは完全に共通するわけではない。日本語における四字熟語「時時刻刻」には中国語における四字熟語“时时刻刻”と共通する「いつも、常に」という意味がある以外、「しだいに、つぎつぎと」という意味を表すこともできる。この場合は中国語に訳すと“越来越”と訳すのが妥当である。

四六倍判 // 十六开本

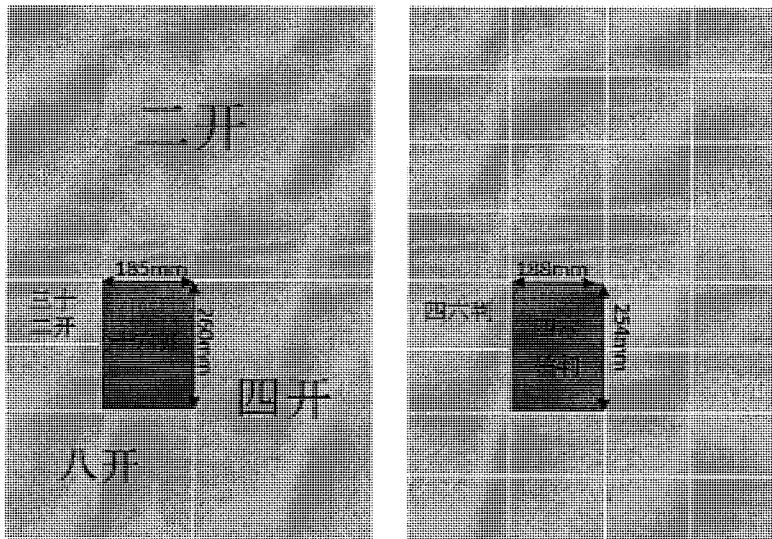
(23) 覚慧在窗前一把藤椅上躺下去，翻开那本十六开本的杂志，像捧着宝物似地带笑说。
(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<家>』)

訳文：覚慧は窓ぎわの藤椅子に横になって、一冊の白い表紙に紅で題字を印刷した四六倍判の雑誌をめくって、宝物でも捧げるよう、笑顔でいう。

日本語における四字熟語「四六倍判」は紙の寸法の一種である。ここにおける紙の寸法とは紙の日本工業規格によるものである。サイズの系統にはA列、B列、四六判、菊判、ハトロン判、AB判などがある。数字「四」は特定的「四寸」という意味を指している。「四六判」は全紙を三十二分の一に折って製本した書物が四寸二分かける六寸二分くらいだったので、「四六判」と称され、規格はB6判(128mm×182mm)に当たり、その二倍の判型を「四六倍判」(188mm×254mmが標準)と言い、規格のB5判(182mm×257mm)に当たる。日本における印刷業界では通常この「四六判」、「四六倍判」を基準にして紙の大きさを表記することが多い。

一方、中国語において、数字“四”的意味は「四寸」まで拡張されていない、紙の寸法

についても「判」によって記述することはない。全紙を三十二分の一に折って製本した書物(日本における「四六判」)が直接に“三十二开本”と記述され、日本における四字熟語「四六倍判」は原紙を十六分の一に折って製本した書物であるため、中国語では四字熟語“十六开本”で表す。厳密に言えば、日本と中国では全紙の大きさはやや異なる。詳しくは以下の図を参照。左が中国の基準であり、右が日本の基準である。



四角四面 // 规规矩矩

(24) 彼は四角四面な人だ。(小学館『日中辞典』)

訳文：他是个规规矩矩的人。

(25) 四角四面なあいさつ。(小学館『日中辞典』)

訳文：规规矩矩的客套话。

日本語における四字熟語「四角四面」は四つの角と面がはっきりとしていることから、物事を几帳面に考える真面目な人を喻えている。また、丸い卵も切り方によっては四角になるように、同じことでも言い方が悪いと、角が立ち、真面目すぎて融通が利かず面白みがない人のことも喻えられる。ちなみに、英語の正方形、四角という単語「square」にはスラングで「真面目な人」、「つまらない人」という意味もあり、スペイン語にも同じ意味があるそうである。

一方、中国語において、似た意味を表す四字熟語は“规规矩矩”を用いる。“规规矩矩”は清・曹雪芹《红楼梦》第25回“说了不多几句话，宝玉也来了，进门见了王夫人，不过规规矩矩说了几句。”を出典とする四字熟語である。“规”と“矩”は円形を描くコンパスと四角を描く定規のことで、“规矩”はきまり、習わし、規則のことを指している。重

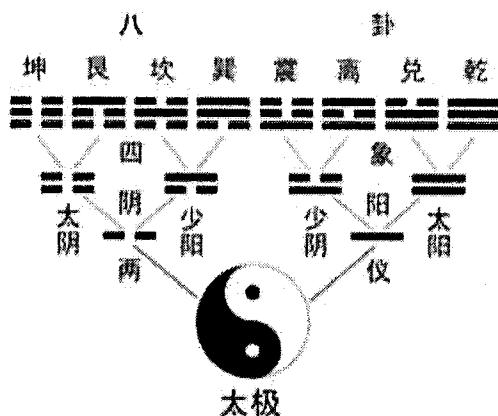
ねて合わせると、「生真面目、几帳面」というの意味となる。日本語における「四角四面」と比べると、“規規矩矩”はほとんどの場合はプラスの意味として使われている。

4. 数字「四」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

人類学の資料によると人類が「四」という数を認識するまでには果てしなく長く、多大な困難を伴う知的努力を経なければならなかつたということである。現存する多数の原始部族の文化では人びとの数に関する概念はわずかに「二」か「三」の水準に留まり、「四」までを認識するのはまだ少數である。G B ダンツィク(1945)にオーストラリアの原始民族に対する広範な研究があるが、「四」を弁別し得る先住民はきわめて少なく、野外で暮らすオーストラリアの先住民には「四」を理解できる者はいないと述べている。南アフリカのコイサンマンには「一」、「二」と「多数」のほかには数字がないが、この三つの数は語調がきわめて曖昧で、コイサンマンがはつきりとした意味を認識しているかには疑問が残る。

数字「四」の神聖な意味からみると、原始人が空間を知覚する四つの方向の産物である可能性がきわめて高い。最初は二つの方位、つまり日の出る東と、日の沈む西しか知らなかつた。叶舒宪・田大宪(1995)に以下のような記載が見られる。民族学の資料によると、中国でも、最初に東と西の方向を知り、のちに南と北の方向を知った民族が少なくない。チンボー族は東をペイトゥオ、つまり日の出る方向と言い、西をペイカン、つまり日の沈む方向と言つた。中国の新石器文化の墓葬遺跡ではパターン化した埋葬方向を見て取ることができる。たとえば、宝鸡の北首嶺の墓地は「頭東面西」であり、大汶口の墓地は「東西方向」である(宋兆麟等 1893 参照)。太陽は一日に東、南、西という三つの方位を通過し、北のみが太陽が通らない方位である。そのことから、四つの方位の空間的概念が最初に形成される際に、北は陰間地獄の方位とみなされる。さらには《礼記・礼运》によると、“故死者北首，生者南乡(向)。”というものがある。この方式の出現は四つの方位の空間意識が従来の二つの方位という空間に取って代わったものにほかならない。おそらく、この二つの方位の空間的意識から四つの方位の空間的意識への変化こそ、眞に“两仪生四象”的究極的な根源であろう。

周知の事実のように《易经》の“四象八卦”的説は占いである。《易传・系辞上传》に“易有太极，是生两仪，两仪生四象，四象生八卦。”とある。“两仪”は陰と陽のことであり、“四象”は“两仪”が重なり合つて生ずる四種の組み合わせである。すなわち「太陽」、「太陰」、「少陽」、「少陰」のことである。詳細は以下の図を参照。



《周易尚氏学》はさらに一步進めて、卦と爻との四種の組み合わせを季節に当てはめると、“四象”は「四季」ということになる。春は少陽、夏は老陽、秋は少陰、冬は老陰であると述べている。上述の説明によれば、いわゆる“两仪生四象”的意味するものは天地の変化によって派生する四季の変遷の法則であり、春、夏、秋、冬は“四象”的原型と見なされる。例えば、中国語における四字熟語“四时八节”は春夏秋冬の四つの季節と立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至の八つの節氣から一年中を指している。

ちなみに、「四象」と言えば、関係がありそうなもう一つの言葉に言及しなければならない。よく間違っている意味に理解される「四不象」である。「四不象」における「象」の意味は「四象」における「象」の意味と異なっていて、動物の「象」でもない。中国には洋人街など、その観光地とは不釣り合いな規模の通りがある。このエリアには小さなレストランが軒を連ねているが、多くは外国人客で、まるで外国のようである。このように実際には外国ではなく、中国でありながら、外国のような場所を喻えるときに“四不象”という語が使われる。

“四不象”はこの“四不象”というのは動物の名に由来するものである。“四不像”と通じる。“像”は「～に似ている」という意味である。ここにおける数字「四」は多数、多くという意味で、「どれにも似ていない」という意味に拡張している。角はシカに似ているが、シカでない。首はラクダに似ているが、ラクダでない。蹄はウシに似ているが、ウシでない。尾はロバに似ているが、ロバでない。あるいは、角はシカに似てシカでない、頭はウマに似てウマでない、体はロバに似てロバでない、蹄はウシに似てウシでない。さらに、尾はウマに似て、ウマでないというのもある。“四不象”に関する表現はいろいろあるが、得体の知れないものを“四不象”と呼ぶようになり、更に形容詞的にも用いるようになったメタファーと考えられている。多くの資料では「麋鹿」を“四不象”としている。

また、中国における伝説上の動物「麒麟」こそが、究極の“四不象”ではないかという説もある。

東西南北の方位を表わす物質的世界の基準としての数字「四」が生まれてから、神聖な象徴的意味を持つようになった。そして、中国の古代の宇宙観即ち「天と地の觀」をも反映している。空間や範囲を表わす語には「四」や「四方、四角」に関するものが非常に多い。《说文解字》の中に「四」を次のように解釈している。“‘四’会数也、四之口像四方”。従って、「四」と組み合わさる単語は空間や範囲、あるいは世界を表わす例が多い。例えば、「四方、四邻、四海、四周、四面」などである。「四方」と「地方」の「四と地」はいずれも「方」を修飾していることから、地面に関することは主に「四」と関係するようになつた。「四面楚歌」、“四四方方”など、数字「四」を含む四字熟語も多くある。

数字「四」があれば、数字「八」は「四」の最小の倍数であるから、数字「八」も当然なくてはならない。従って、数字「四」と数字「八」と共起する四字熟語も「四面八方」、「四通八达」、「四时八节」、「四平八稳」など、多くある。

ここで、四字熟語“四平八稳”を見てみる。

“四平八稳”は明・施耐庵《水滸传》第44回“戴宗、杨林看裴宣时，果然好表人物，生得面白肥胖，四平八稳，心中暗喜。”を出典とする四字熟語である。ここにおける数字“四”は「東、西、南、北の四方」という意味を指しており、数字“八”は「東、西、南、北、南東、北東、南西、北西の八面」という意味を指している。中国語における四字熟語“四…八…”はよく意義の似通った二つの語、または造語成分を当てはめて、各方面という意味を表す。なぜ他の数字ではなく、ちょうど数字「四」と数字「八」と組み合わせるのかと言うと、人の習慣でもあるが、やはり数字の拡張義によって決められる。数字「四」にはあちらこちら、いたるところという意味があり、数字「八」は数字「四」の最小の倍数であり、極大や無限の意味を含んでいる。とりわけ、数字「四」と数字「八」の組み合せは、すべてを含む、覆うという意義を具えている。また、四月八日の釈迦牟尼の誕生日から来たものだという説を唱える人もいる。四字熟語“四平八稳”は各方面が平穩であるという意味から転じて、プラス的意味としては話しぶり・仕事・文章などが穩当であり、しっかりとしている、態度が落ち着き払っているさまを表している。日本語では「落ち着き」に似ている。また、「堅実である仕事に当たって、落度がないように気を配るだけで、積極性や創造性を欠いているさま」というマイナスの意味に使われることもある。こういった意味の場合には日本語の「石橋を叩いて渡る」のような意味である。強固に見える石橋

でも、なお、安全を確かめてから渡るという意味から、何事にも用心深い行動をたとえている。また、慎重すぎるがゆえに、決断が遅いことを皮肉る場合もある。

コロンブスが新しい航路を発見する前、人類が生活しているこの地球は“四四方方”だと思われていた。「四」の観念は人類に最も根本的な時空の尺度を提供し、それにより、神秘的な数字の系統において特殊、且つ重要な意義を持っている。四字熟語“四四方方”の中の「方」は正方形を指す。正方形の四辺で構成される文字「四」の中に「八」を加えて字なる。すると、「四」は一つの整体的かつ全面的な概念と認められ、宇宙観の概念も反映する。従って、平穏、安定などのよい象徴として、中国人に好まれる。伝統的に「四」が重んじられている。平和を「四海升平」と言い、「忠愛、无私、用賢、度量」を「治国四术」と言い、家で「四書五経」を学び、書道の道具に「文房四宝」があり、祈願する時には「四季發財」と言い、忙しいことを形容する場合には「四脚朝天」の姿勢を取っているのである。

風水は古代中国の思想で、もともとは都市や住居、墓などの位置の吉凶禍福を決定するために用いられた。中国では四方の方角を司る「四神」に対応している地形が理想とされ、四字熟語“四神相応”と言われている。“四神”とは東を司る青龍、西を司る白虎、南を司る朱雀、北を司る玄武で、それぞれ地形にも対応している。青龍は流水、白虎は大道、朱雀は窪地や湖沼、玄武は丘陵である。一方、“四神相応”に繋がる思想はかなり古くに日本に入ってきたと考えられる。飯倉(2007)では平安京は四神相応の地勢に造営されたとしている。東(青龍)には鴨川が流れ、西(白虎)には山陰道が通り、南(朱雀)には巨椋池があり、北(玄武)には船岡山(あるいは比叡山)が位置し、四神に対応しているのである。このほか、九州の太宰府(東は御笠川、西は西海道、南は二日市温泉、北は四王寺山)、江戸城(東は平川、西は甲州街道、南は江戸湾、北は東敷山(上野山))なども四神相応の都市として造られたといわれ、これらはみな風水の思想によるものだと言われている。

また、中華料理は世界でも有名な料理の一つであるが、中国では食卓での四品の料理と一種類のスープは最もよく見られる光景である。結婚式での贈り物は“四礼”という。“金瓶梅词话”に西門慶は息子の婚約の時、“四盘蒸餅、四盘水果、四盘羹肴、四个金宝石戒指儿”という結婚の贈り物を用意したとある。このような“四礼”は今でも、東北地方の“四盒礼”など、一部の地方の習慣に見られる。《醒世姻缘传》には友人を招待して、食事を振り舞う時の“正说、一面四碟小菜、四碟案酒、四碟油果”的ように、「四」という数字を大切にしていることが見られる。

古代において、数字「四」は偶数として吉祥を象徴する場合が多く、中国人に崇められた。しかし、現代になって、縁起が悪いことや不吉と見なされている。それは数字「四」の発音が「死」と似ており、縁起が悪いことや不吉なことを連想し易いので嫌われたからである。電話番号に「四」があれば、不吉だと考える人は少なくない。それゆえ、「四」を含む電話番号の通話料を一ヶ月に五元の割引するなどの特別なサービスをする場合がある。同音や類似音の文字に対する中国人の敏感な反応は代々伝わっている。先に述べたように、「四」という文字の発音は「死」に似ているので、もともとまったく関係のないこの二つの概念に意味上のつながりは生まれやすく、ひいては避諱さえ形成されている。しかし、実際には道理は全くないとは言えない。

数字「四」の大字の「肆」は発音上で「死」と偶然の関係があるばかりか、意味上でも「死」と関係する。元代の熊忠《韵会》に“肆，既刑陈尸曰肆。”とある。また、《周礼·春官·大宗伯》には国家の祭礼に言及し、“以血祭祭社稷…以肆献裸享先王。”とある。唐の賈公彥は《疏》ではさらに、動物の犠牲を二十一個の大きな塊に分解したものしか「肆」といわないと述べているなど、さまざまなものから「肆」と「死」とのもともとの関係をうかがい知ることができる。

一方、日本人にとって「四」という数字から連想するのはやはり四季であろう。一年のうつろいは春夏秋冬。一生のうつろいは「四相」、つまり生老病死、物事のうつろいもやはり「四相」で、こちらは生住異滅と理解された。仏教で「四大」といえば、地水火風の四大元素のことを言い、人間の身体も四大元素でなり立っているとし、病気を「四大不調」と言い、死を「四大空に帰る」などと言う。「四相」と言えば、生、老、病、死の、人間の一生にあらわれる四つの変化の相のことであるが、事物の現象も生、住、異、滅の四相として説明した変化の原則と言ってよい。また、四つの方角には「四神」があり、「四天王」がこれらを押さえるのである。

実は日本人も数字「四」にそれほどよい印象はない。その理由も発音である。数字「四」と言えば、日本語で「し」という音読の発音があり、これは「死ぬ」の「死」と同音である。そのため、日本人にとっても数字「四」は好まれる数字ではない。古代においては自然環境が悪く、生きること自体が難しかったため、災いを避け、凶を避けることで、無事や吉祥を願うというのが人々の強い願望となっていた。そのため、災いや不吉をもたらす可能性のあるすべてのものを避けようという心理から、多くのタブーが生まれた。日本人は現在でも不吉を連想させる数字をなるべく避けるようにしている。

例えば、中国では最もよく見られる食卓での四品の料理と一種類のスープに対して、日本では料理の品数が四品でも「一汁三菜」と呼ぶ。「一汁四菜」はない。伝統的な日本料理の献立の基本は「一汁三菜」である。飯と香の物は数に入れないので、残りのなます、煮物、焼き物、汁は四品ということになる。「四品料理」と言わずに「一汁三菜」と呼ぶのは、「四」という数が「死」を連想させるために忌み嫌い、わざわざ「一」汁「三」菜と分割して呼ぶようになったのである。

大学病院系は例外なところが多いようだが、一般の病院では「四病棟」、「四号室」や「四番のベッド」などはない。病人は敏感になっているので、「シクラメン」をお見舞にもらうことを喜ばない。また、病院では「十四」、「二十四」なども「重死」や「二重死」に音が通じ、縁起が悪いとされるため避けられる。同様に、「94」は「苦死」と音が重なるために避けられ、「4989」、「4279」、「8342」等の数字は、それぞれ「四苦八苦」、「死に泣く」、「破産死に」と音が重なるため、好まれない数字であるが、他の数字との組み合わせることにより、それを実用的な意味を持つものに変え、受け入れられている例もある。例えば、薬屋は「1424」の電話番号で「医師不要」と読ませ、タクシーの場合は「8400」で「走れ」と読ませるなどである。

また、歌舞伎では曾我狂言「鬼王貧家の場」というのが貧しい曾我兄弟を育む家来の鬼王が貧に苦しむというのである。その中に鬼王の「「四百四病」の苦しみより、貧しさよりつらきものはない」というセリフが極り文句である。四字熟語「四百四病」は仏教用語を出典とし、人間がかかる一切の病気を指している。群馬県の四万温泉は四百万の病を直す効能があるということから名付られた土地だとされている。

V. 数字「五」



1. 日中両言語における数字「五」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「五」の意味を調べるためにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 4 項になる。

基本義：

- ① 数の名。四の次、六の前の数。

派生義：

- ② 五つ目、五番目。
- ③ 五回、いとたび。
- ④ 管楽器の穴の称。

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典（修订版）》(2001)、《现代汉语辞海（全新版）》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 10 項になる。

基本義：

- ① 数目、四加一所得的数。

派生義：

- ② 序数、第五。
- ③ 五次。
- ④ 多数或多次。
- ⑤ 特指五年。

- ⑥ 特指五月。
- ⑦ 通‘午’，交午，纵横交错。
- ⑧ 指五帝。
- ⑨ 中国民族音乐的音阶之一，相当于简谱的高音6。
- ⑩ 姓氏，复姓。

上から見られるように、日本語における数字「五」の意味は4項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が3項ある。これに対して、中国語における数字“五”の意味は10項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が9項ある。

以下で日中両言語における数字「五」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「五」のプロトタイプに関する比較対照

日中両言語における数字「五」のプロトタイプ、つまり数える数量的概念として、意味は一致している。

(1) 他觉得头里面很胀满，似乎桠桠叉叉的全被木柴填满了，五五二十五，脑皮质上还印着许多散乱的亚刺伯数目字。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<彷徨>』)

訳文：彼は頭の中がふくれあがって、ギシギシと薪でいっぱいに詰まり、五五二十五と、脳皮質にまだ無数の散らばったアラビア数字を印しているような気がした。

(2) 高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針の様に尖がってる。『中日対訳コーパス「坊ちゃん」』)

訳文：高柏寺的五重塔直立在树林的上头，象针一样又尖又细。

例(1)と例(2)は数字「五」のプロトタイプ的意味に基づいた例である。例(1)は基本的な数の名を表し、例(2)は共に助数詞と連用する場合である。例(1)における“五五二十五”は“五乘以五得二十五”(五かける五は二十五)という意味を指している。中国では古代から1から9までの自然数同士の掛け算を語呂よく暗記する方法があるので、“乘以”が省略されている。例(2)における五重の塔は仏塔の形式の一つである。層塔と呼ばれる楼閣形式の仏塔のうち、五つの屋根を持つものを指している。

1.4 数字「五」の意味拡張に関する比較対照

派生義②と③は日中両言語においては意味は共通している。

(3) 爹临死的前一天，五妹死了，妈去给她料埋殓具。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<家>』)

訳文：お父さんが死ぬ前の日に五妹が死んだ。お母さんがいろいろ寝棺などの心配をした。

(4) 日に五度ずつ、払暁、朝八時、十二時、入相、夜の十時、これだけの鐘を撞くのがあの男の勤務なんだそうだ。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「破戒」』)

訳文：听说他干的工作就是每天敲五次钟：拂晓、早上八点、十二点、日暮和夜里十点。

例(3)は日中両言語における数字「五」の派生義②に基づいて、順序、五つ目を表している例である。「五妹」における数字「五」は親族の長幼の順序を表し、「上から五番目の娘」を意味している。例(4)における「五度」は日中両言語における数字「五」の派生義③によって、動作の回数「五度、いつたび」という意味を表している。

(5) 你看，我们那时的人全四零五散啦——牺牲的、坐牢的、叛变的、妥协的、不知下落的，真是应有尽有。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「輪椅上の夢」』)

訳文：考えても見たまえ、ぼくたちのあのころの仲間は、みんな、ちりぢりばらばらに、なってしまったね——殺された者、投獄された者、裏切った者、妥協した者、行方不明の者、ほんとうにいろいろだ。

例(5)における数字“五”は中国語における数字“五”の派生義④に基づく例である。“四零五散”は秩序がなく、色々な物事が乱れている様子を指している。日本語における数字「五」はこの意味までは拡張されていないようである。

(6) “八五”时期，进一步扩大了对外开放的范围和规模，形成了由沿海到内地、由一般加工业到基础工业和基础设施的总体开放格局。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「人大報告 96」』)

訳文：第八次五ヵ年計画期に、対外開放の範囲と規模がさらに拡大し、沿海から内陸部に、一般加工業から基礎工業、基礎施設に至る全般的な開放の枠組みが形成された。

(7) 制定和实施“九五”计划和 2010 年远景目标纲要，开局良好。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「人大報告 98」』)

訳文：第九次五ヵ年計画と二〇一〇年までの長期目標要綱の制定、実施にあたって、すばらしいスタートが切られた。

(8) 不少人稀里糊涂地知道有个“五一”，却不知道有劳动节。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「插队的故事」』)

訳文：多くの人が五月一日という祝日を漠然と知っているが、メーデーのことは知らない。

例(6)と例(7)における数字“五”はともに中国語における数字“五”的派生義⑤に基づく例である。特定的に「五年」という意味を指している。例(6)における“八五”は「第八次五ヵ年計画」という意味を指しており、例(7)における“九五”は「第九次五ヵ年計画」という意味を指している。日本語における数字「五」はこの意味まで拡張されていないようである。例(8)における数字“五”は中国語における数字“五”的派生義⑥に基づく例である。ここにおける数字“五”は特定的に「五月」という意味を指している。国際連合などの国際機関によって定められたメーデーとなっており、世界の少なくとも80以上の国で“五一”を祝日としている。中国はその80以上の国の中の一つの国である。これに対して日本のメーデーは祝日とはなっていない。

(9) 许慎说“五”的本义是阴阳在天地之间的交五。(社会科学文献出版社《中国古代神秘数字》)

訳文：许慎は「五」の本来の意味は陰陽が天地の間で交差することであると述べている。
(鈴木博訳)

(10) 栓儿出去了一冬，回来时一根粗绳等着他，五花大绑被请到县大狱去。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<插队的故事>』)

訳文：栓児はひと冬じゅう清平湾を離れていたが、帰ってきた時には太い縄が彼を待ち構えていて、がんじがらめに縛られて県の刑務所に送られてしまった。

例(9)と例(10)は中国語における数字“五”的派生義⑦に基づく例である。例(9)における“交五”は“交午”とも書き、数字“五”は四つの方位を表した二本の線が交差する状況、つまり交差した点の中心が第五の方位なのである。例(10)における“五花大绑”は縄を輪にして交差で首に掛け、その縄を背に回して後ろ手にした両腕を縛る、がんじがらめに縛り上げることを指し、数字“五”は「交差する」という意味を指している。これに対して、日本語における数字「五」はこの意味まで拡張されていないようである。

また、中国語における数字“五”は拡張義⑧にあるように、特定的に「五帝」を指すことがある。この場合、数字“三”との組合せが多く、“三五”という形で、「三皇五帝」のことを指している。「三皇五帝」とは古代中国の神話や伝説上の八人の帝王である。三皇と五帝に分かれ、三皇は神、五帝は聖人としての性格を持つとされ、理想の君主とされた。伝説では最初の世襲王朝である夏より以前の時代とされる。「三皇」については諸説あるが、最初は天皇・地皇・人皇という天地人三才に由来する抽象的な存在であったが、後に人類に文明をもたらした英雄が名を連ねるようになった。誰をもって「五帝」となすかも様々

であるが、一番説得力があると思われるは『戦国策』と《易经》における「伏羲³⁹、神農⁴⁰、黄帝⁴¹、堯⁴²と舜⁴³」という五つの帝を指しているという説である。

中国語における数字“五”の拡張義⑨として、数字“五”は中国民族音楽の十音階の一つとして使え、略譜の高音ラに相当する。特に工尺譜における高音ラは数字“五”で表記される。これに対して、日本語においては数字「五」はこの意味まで拡張されていない。

中国語における数字“五”の拡張義⑩には数字“五”は人の姓として使える。蜀漢のころには“五梁”という人がいたとされる。日本語における数字「五」は人の姓としては使われないようである。

なお、その他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

2. 日中両言語における数字「五」を含む四字熟語の全体像

ここでは「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「五」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめてみる。

2.1 日中両言語における数字「五」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「五」を含む四字熟語が37例が取り上げられている。出典元によって分析して見ると、主に日本を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「五」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍と詩歌または詩歌評論集の二つに分けることができる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源とした四字熟語は「五方雜處」(班固《汉书》より)、「五里霧中、五倫十起」(范晔《后汉书》より)、「五風十雨」(王充《论衡》より)、「五臟六腑」(呂不韦《呂氏春秋》より)、「五十知命、十五志学」(孔丘《论语》より)、「目迷五色」(老子《老子》より)、「馬氏五常」(陳壽《三国志》より)、「三令五申」(司马迁《史記》より)など、17例

ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集から出てきた四字熟語は「一発五犯」(《诗经》より)、「三三五五」(李白《采莲曲》より)、「五色霜林」(钱惟善《南江夕照》より)、「十風五雨」(陆游《村居初夏》より)の5例がある。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「五」を含む四字熟語

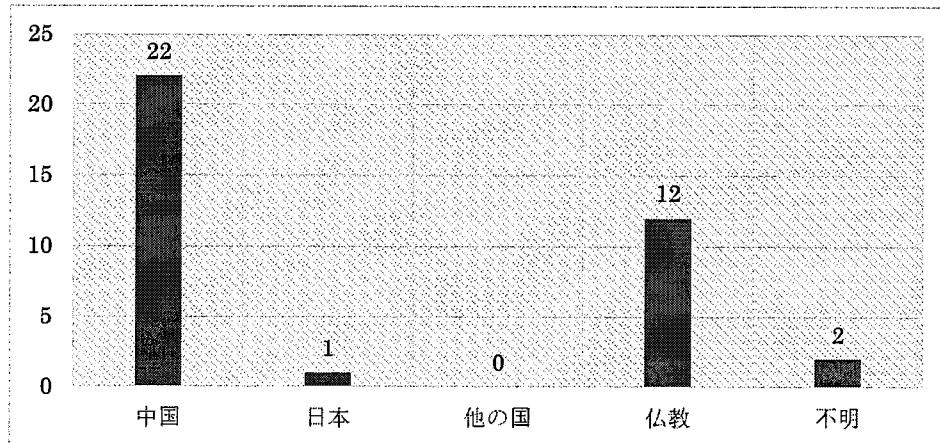
日本を起源としたものは「五分五分」の1例のみである。

2.1.1.3 仏教または仏教に関するものを起源とした数字「五」を含む四字熟語

仏教または仏教に関するものを起源としたものは「五体投地」、「五盛陰苦」、「五陰盛苦」、「五障三従」、「五趣生死」、「五濁惡世」、「五蘊皆空」、「五蘊盛苦」、「七五三縄」、「十逆五惡」、「十惡五逆」など、12例ある。

以下の図1は日本語における数字「五」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図1 日本語における数字「五」を含む四字熟語の出典元



上の図1からの分かるように、日本語における数字「五」を含む四字熟語の中で中国を起源としたものが22例で、総数の59.46%を占めている。以下、日本を起源としたものは1例の2.7%、仏教または仏教に関するものを起源としたものは12例で、32.43%、出典不明なものは2例となっている。また、中国以外の他国を起源としたものはない。日本語における数字「五」を含む四字熟語の中では中国を起源としたものが最も多く、総数の半分以上を占めている。仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語も少なくない。

2.1.2 中国語の場合

商務印書館の《成语大词典》第二版(2012)に収録されている数字「五」を含む四字熟語は39例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関連するものを起源とした四字熟語という三つに分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「五」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「五」を含む四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集からと、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分かれる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍からのものは「五风十雨」(王充《论衡》より)、「五方杂处、五方杂厝、五方杂聚」(班固《汉书・地理志》より)、「五世其昌」(左丘明《左传》より)、「五行并下、五行俱下、五里雾中」(范晔《后汉书》より)、「五谷丰登」(《太公六韬》より)、「五脏六腑」(吕不韦《吕氏春秋》より)、「五湖四海」(《周礼》より)など、17例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集からのものは「三三五五、十五五五」(郭茂倩《乐府诗集》より)、「五脏如焚、五内俱焚」(袁中道《赠别文弱》より)、「五陵年少」(李白《少年行》より)など、7例ある。

(3) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「一五一十、三言五语」(施耐庵《水浒传》より)、「三五成群」(冯梦龙《喻世明言》より)、「三年五载」(曹雪芹、高鹗《红楼梦》より)、「三番五次」(沈鲸《双珠记》より)、「五大三粗」(古华《芙蓉镇》より)、「五花大绑」(张杰鑫《三侠剑》より)、「五陵豪气」(关汉卿《裴度还带》より)、「五黄六月」(吴承恩《西游记》より)、「五彩缤纷」(吴趼人《二十年目睹之怪现状》より)など、14例ある。

2.1.2.2 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「五」を含む四字熟語

中国語における数字「五」を含む四字熟語の中に、仏教または仏教関連のものを起源としたものは「五体投地」の1例のみである。

以下の図2は中国語における数字「五」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「五」を含む四字熟語の出典元

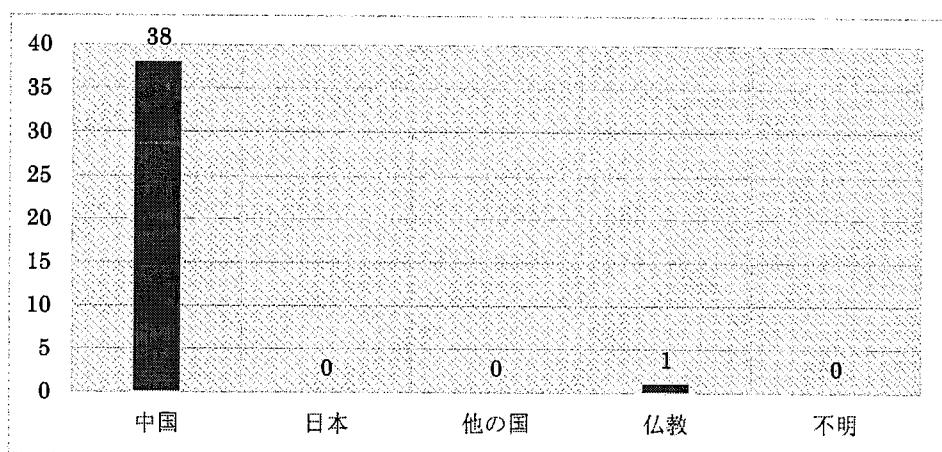


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が38例あり、総数の97.44%を占めている。以下、仏教または仏教関連のものを起源としたものはわずか1例の2.56%となっているが、外国を起源とした四字熟語はない。中国語における数字「五」を含む四字熟語の出典元がほとんど中国ということである。

2.1.3 数字「五」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「五」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数字「五」を含む四字熟語は出典元が幅広く、日本以外の国(特に中国)を起源としたもの、日本を起源としたもの、仏教または仏教関連のものを起源としたものなど、いろいろある。仏教または仏教関連のものを起源としたものが日本語における数字「五」を含む四字熟語の総数の32.43%を占めており、中国語における数字「五」を含む四字熟語、及び日本語における他の数字を含む四字熟語より、かなり多くなっている。

これに対して、中国語における数字「五」を含む四字熟語は中国と仏教または仏教関連のものを起源としたものしかない。仏教または仏教関連のものを起源としたものの割合はは低く、中国語における数字「五」を含む四字熟語の97.44%が中国を起源としたものである。

2.2 日中両言語における数字「五」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「五」の現れる位置考察

四字熟語における数字「五」の現れる位置とは四文字において、数字「五」が何番目の文字であるかということを指している。例えば、数字「五」の現れる位置は一番目のみの四字熟語とは「五方雜処」、「五内俱焚」など、数字「五」の現れる位置は一番目と三番目共起の四字熟語とは「五分五分」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

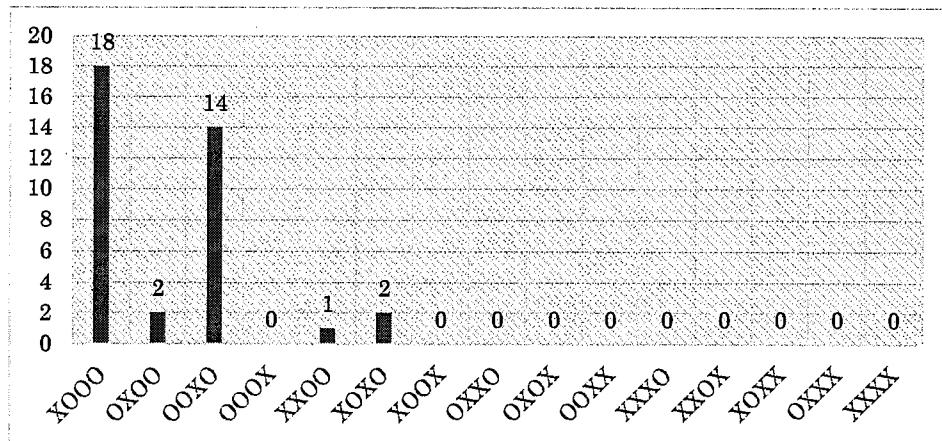
日本語の四字熟語における数字「五」の現れる位置については以下のとおりである。

- ・一番目のみ……18例
- ・二番目のみ……2例
- ・三番目のみ……14例
- ・一番目と二番目に共起……1例
- ・一番目と三番目に共起……2例

個数からみれば、ほとんどの場合、数字「五」が一番目のみ、三番目のみという位置に現れ、それぞれ総数の48.65%、37.84%で、合わせると86.49%となる。以下、二番目のみの位置に現れるものと、一番目と三番目に共起するものがそれぞれ5.41%、一番目と二番目に共起するものが2.7%となっている。

図3に、「X」、「0」によって数字「五」の現れる位置を表示する。「X」は数字「五」を表し、「0」は数字「五」以外の文字を表す。例えば、数字「五」は一番目の位置と三番目の位置に共起する四字熟語「五分五分」は「XOXO」で表示する。

図3 日本語の四字熟語における数字「五」の現れる位置



2.2.1.2 中国語の場合

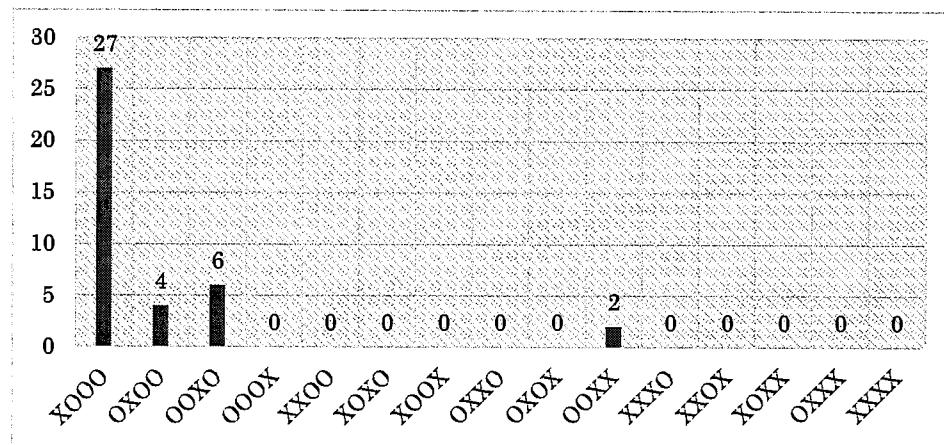
中国語の四字熟語における数字「五」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……27例
- ・二番目のみ……4例
- ・三番目のみ……6例

・三番目と四番目に共起……2例

個数から見れば、数字「五」の現れる位置は大部分が一番目のみであり、総数の 69.23% を占めている。以下、三番目のみと二番目のみの位置に現れるものが、それぞれ 15.38%、10.26%、三番目と四番目に共起するものが 5.13% となっている。詳細は図 4 の通りである。

図 4 中中国語の四字熟語における数字「五」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「五」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「五」の現れる位置については中国語においても、日本語においても、数字「五」が一番目のみの位置に現れるケースが最も多い。その理由は日本語において、大部分の数字「五」を含む四字熟語は中国を起源としたものであるためと考えられる。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「五」と他の数字との共起関係考察

日中両言語における数字「五」を含む四字熟語には他の数字と共起するケースが少なくない。その中で、どの数字と共起する場合が一番多いのかなど、他の数字との関係を探る。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「五」が他の数字と共起する関係に関する詳細を図 5 にまとめると。

図 5 日本語の四字熟語における数字「五」と他の数字との共起関係

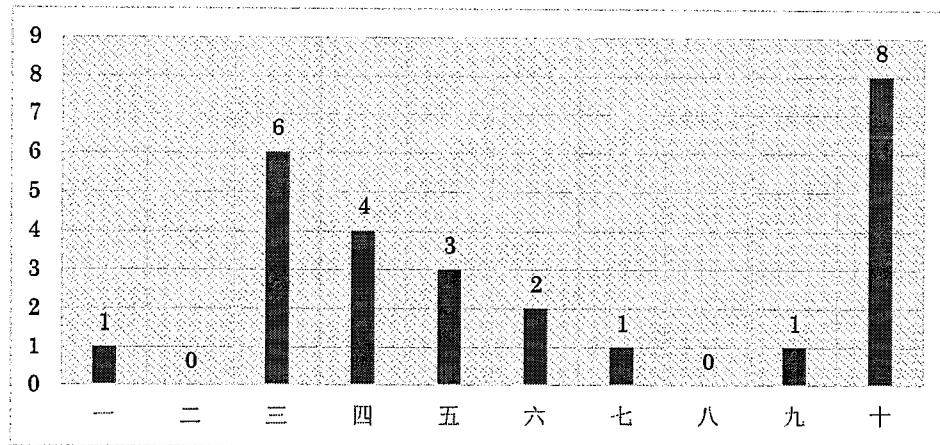


図5から分かるように、日本語における数字「五」を含む四字熟語の中には数字「五」が数字「五」自身と共に起するものが3例あり、総数の11.54%を占めている。以下、数字「十」と共起するものが8例、30.77%、数字「三」と共起するものが6例、23.08%、数字「四」と共起するものが4例、15.38%、数字「六」と共起するものが2例、7.69%、数字「一」、「七」、「九」と共起するものが共に1例で、3.85%となっている。

割合からみると、数字「十」と共起するケースが最も多く、以下、数字「三」、「四」、「五」、「六」、「一」、「七」、「九」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「五」が他の数字と共に起する関係に関する詳細は図6の通りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「五」と他の数字との共起関係

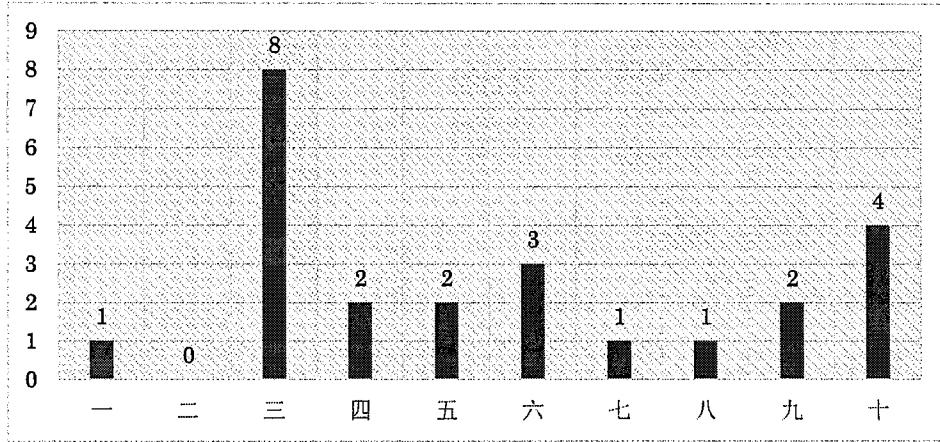


図6から分かるように、中国語における数字「五」を含む四字熟語の中で、数字「五」が数字「五」自身と共に起するものが2例で、総数の8.33%を占めている。以下、数字「三」と共起するものが8例で、33.33%、数字「十」と共起するものが4例で、16.67%、数字「六」と共起するものが3例で、12.50%、数字「四」、「九」と共起するものが共に2例で、8.33%、数字「一」、「七」、「八」と共起するものは共に1例の4.17%となっている。

割合からみると、数字「三」と共起するケースが最も多く、以下、「十」、「六」、「四」、「五」、「九」、「一」、「七」、「八」の順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「五」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは日中両言語の四字熟語において、数字「五」と他の数字と共に起して表す意味を具体例をあげ、分類し、提示する。

(1) 数字「三」と共起する場合

A: 実際の数量

日：五障三従 三綱五常

中：三綱五常

B: 少ない

日：三三五五

中：三五成群 三三五五

C: 多い、繰り返し

日：三令五申

中：三令五申 三番五次

D: 大体の数量

日：なし

中：三年五載

D: 実際の意味なし、広く指す

日：なし

中：三江五湖 三差五錯

(2) 数字「四」と共起する場合

A: 実際の数量

日：四書五経

中：四书五经

B: あらゆる

日：四肢五体

中：五湖四海

C: 亂、分散

日：四分五裂 四分五散

中：四分五裂

(3) 数字「五」と共起する場合

A: 実際の数量

日：五倫五常

中：五伦五常

B: 少ない

日：三三五五

中：三三五五

C: 等比例

日：五分五分

中：なし

(4) 数字「六」と共起する場合

A: あらゆる、全部

日：五臓六腑

中：五颜六色 五脏六腑

B: 変化する

日：なし

中：五心六意

C: あれ…これ…

日：なし

中：吆五喝六

(5) 数字「七」と共起する場合

A: 多い

日：なし

中：五痨七伤

(6) 数字「八」と共起する場合

A: さまざま多彩

日: なし

中: 五花八门 五行八作

(7) 数字「九」と共起する場合

A: 実際の数量

日: 九寸五分

中: なし

B: 帝王を敬う

日: なし

中: 九五之尊 九五之位

(8) 数字「十」と共起する場合

A: 実際の数量

日: 十逆五惡 十惡五逆

中: 十惡五逆

B: さまざま多彩

日: なし

中: 五光十色

日中両言語における数字「五」を含む四字熟語において、数字「五」と他の数字との共起関係については日中両言語において、共に数字「二」と共起するケースはない。中国語における数字「五」を含む四字熟語では数字「五」と共起できる数字は日本語より多い。日本語においては数字「五」は数字「十」と共起するケースが最も多く、総数の 30.77%を占めている。これに対して、中国語においては数字「五」は数字「三」と共起するケースが最も多く、総数の 33.33%を占めている。

数字「五」が数字「四」までと共起する場合については先に述べたので、ここでは数字「五」自身と共起する場合からを見ることとする。数字「五」と数字「五」が共起する場合、日中両言語において、共に「実際の数量」と「少ない」という意味を表すが、日本語においては「五分五分」など、「等比例」という意味も見られる。一方、中国語においてはこのような使い方は見られないようである。数字「六」と共起する場合には日中両言語において、共に「あらゆる、全部」という意味を表している以外、中国語には「変化する」

と「あれ…これ…」というマイナスの意味が見られる。例えば、“五心六意”は「優柔不断である、ああでもない、こうでもないとよく変わること」を指しており、“吆五喝六”は「あれこれ叫ぶ騒がしい声、または盛んに人を威圧すること」を指している。しかし、日本語においてはこのような使い方は見られないようである。

数字「七」と共起する場合、中国語においては“五痨七伤”（多くの内臓の病気、または虚弱多病のことを指す）など、「多い」という意味が見られるが、日本語においてはこのような使い方は見られないようである。数字「八」と共起する場合には中国語では「さまざまで多彩」という意味が見られる。例えば、“五花八门”は「種類の豊富な、目もくらむ程に多い、多彩なこと」を指しており、“五行八作”は「さまざまな商い、さまざまな職業」を指している。日本語においては数字「八」と共起する四字熟語は見られないようである。

数字「九」と共起する場合、日本語においては「実際の数量」という意味が見られる。例えば「九寸五分」は刃の部分の長さが九寸五分の短刀。または女性が護身用に帯にさした短刀、懐剣のことを指している。中国語においてはこのような使い方は見られないようである。中国語においては「帝王を敬う」という意味が見られる。例えば“九五之位”は昔の皇帝の地位を指しており、“九五之尊”は昔の皇帝のことを指している。日本語においてはこのような使い方はやはり見られないようである。

数字「十」と共起する場合、日中両言語において、共に「実際の数量」という意味を表している以外、中国語には「八」と共起する場合と同様「さまざまで多彩」という意味が見られる。“五光十色”は「色とりどり形さまざまな、きらびやかなこと」を指している。これに対して、日本語ではこのような使い方は見られないようである。

3. 数字「五」を含む四字熟語の対照考察

ここでは以下の三つに分類し、日中両言語における数字「五」含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「五」を含み、同義・類義を表すもの、②両言語とも「五」を含み、異義を表すもの、③一方の言語で「五」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「五」を含み、同義・類義を表すもの

五穀豊穣 // 五谷丰登

(11) 他们踏着的秋的大地，是万物收获、五谷丰登的。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス（我的父亲邓小平）』）

訳文：その足に踏む秋の大地は、万物が収穫を迎える、五穀豊穣であった。

日本語における四字熟語「五穀豊穣」は穀物などの農作物が豊作になることを幅広く指す四字熟語である。「五穀」は人間が主食とする五種類の代表的な穀物のこと、または具体的な穀物名を指さずに、穀物の総称という意味で用いられるが、古代からその内容は決まっていない。『古事記』によると、「五穀」は稻・麦・粟・大豆・小豆という五つの穀物を指しており、『日本書紀』によると、稻・麦・粟・稗・豆という五つの穀物を指している。現在においては米・麦・粟・豆・黍(または稗)を指すことが多いようである。「豊穣」は穀物が豊かに実ることであるが、「穣」だけでも穀物が豊かに実ると言う意味がある。「豊」を付けて強調していると考えられる。日本において、四字熟語「五穀豊穣」は「商売繁盛」、「家内安全」などと同じように、祈願の言葉としても使われる。

一方、同じ意味を表す中国語における四字熟語に“五谷丰登”がある。“五谷丰登”は《六韬·龙韬·立将》“是故风雨时节，五谷丰登，社稷安宁。”を出典とする四字熟語である。古代中国においては五行説に基づき、五で事物を総括する習慣があり、“五谷”といつても形式的なもので、その解釈は古来より一定していなかった。『周礼』によると、“五谷”は麻・黍・稷・麦・豆という五つの穀物を指しており、『大戴礼』には「豆」が「菽」とされている。「菽」は大豆とも豆類の総称とも言われる。『孟子』によると、稻・黍・稷・麦・菽という五つの穀物を指しており、『楚辞』によると、稻・稷・麦・豆・麻という五つの穀物という記述がある。四字熟語“五谷丰登”は中国においても吉祥を象徴し、古代から中国人に好まれる言葉となっている。

五里夢中 // 五里霧中

(12) 事件は依然として五里夢中の状態だ。(小学館『日中辞典』)

訳文：事件依然真相不明，如堕五里霧中。

中国語における四字熟語“五里霧中”は南朝·宋·范晔《后汉书·张楷传》“性好道术，能作五里雾。”を出典とする四字熟語である。現在の状態がわからず、見通しや方針の全く立たないことを喻えている。また、心が迷って、考えが定まらないことにも用いる。“五里霧中”という四字熟語は“五里霧” + “中”であって、最初から“中”が付いていたわけではない。ここにおける数字“五”は数量的な意味「五つ」を指しており、“五里霧”は五里四方に立ち込める深い霧であり、迷宮、迷離を喻えている。中国の歴代の文人たちにとって、人生の最大の目標はほとんどが「自分の学識を国家の運営に役立てること」であったそうである。しかし、高い学識と名声を持ちながら、敢えて官途につかない知識人もいた。高雅にして清廉潔白な彼らは世間から役人とは異なった尊敬を受けている。《后汉书

·張楷傳》によると、後漢の時代における張楷もそうした人物の一人である。張楷という人は五里四方にわたる霧をおこす術を知っていた。世間に出来るのを嫌がる張楷は集まってくれる人に会いたくないときに、この術を使って姿を隠したという。五里も続く深い霧の中に迷い込めば、東も西も皆目わからなくなってしまう、どうしたらよいかわからず困っている、そういう意味に使われる。要するに物事の方針の見込みが立たないこととか、心が迷って途方にくれることの喻に用いられる。

これに対して、日本では中国語における四字熟語“五里霧中”が伝わってから、「五里霧中」と書き、同じ意味として使っている。しかし、ある語源辞典に「五里夢中」と誤記されたため、現在では四字熟語「五里夢中」が四字熟語「五里霧中」と区別なく使われている。また、若者言葉には「五里夢中人」という言い方がある。五里にもわたる深い夢の中で、現状も方向もわからずさまよっている者たちを指している。

五臓六腑 // 五脏六腑

(13) 不仅脑子，而且五脏六腑都似已经被抽空了。她只剩下了一个的躯壳。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス 〈活動変人形〉』）

訳文：魂ばかりか五臟六腑まで抜き取られ、身体の脱穀だけがそこに残っている。

日本語における四字熟語「五臓六腑」は伝統的な東洋医学において人間の内臓全体を言い表すときに用いられた四字熟語である。この意味から転じて、全身の意を表されるのはメトニミーが働いていると考えられる。ここにおける数字「五」は五つという意味であり、「五臓」は、肝・心・脾・肺・腎という五つの臓器を指している。「六腑」とは胆・小腸・胃・大腸・膀胱・三焦のことを指しており、「六腑」にある三焦はさらに上中下の三つに分かれ、上焦は横隔膜より上部、中焦は上腹部、下焦は下腹部であり、呼吸、消化、排泄をつかさどる器官といわれており、西洋医学のそれとはまったく異なった概念である。

一方、中国語における四字熟語“五脏六腑”は《呂氏春秋・达郁》“凡人三百六十节、九窍、五脏六腑。”を出典とする四字熟語である。日本語における四字熟語「五臓六腑」の典故と考えられ、同様に人間の内臓全体、または全身という意味を表している。“五脏六腑”について書かれた最古の文献は中国最古の医学書とされる『黄帝内經』であると言われている。中国の陰陽五行説による解釈では五臓も六腑もともに五行に配当されているとある。また、日本語において、時にはこの「五臓六腑」も同じ意味として使っている。

3.2 両言語とも「五」を含み、異義を表すもの

五体投地 ≠ 五体投地

(14) 我对她真是佩服得五体投地。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈人啊,人〉』)

訳文：まったくもって感服に堪えない。

四字熟語「五体投地」は最も丁寧な礼拝方法の一つとされ、「五体」すなわち両手、両膝、額を地面につけて、仏や高僧などに礼拝することを指している。仏教において、対象への絶対的な帰依を表す。古代インドでは尊者の足下にひざまずき、額を地に付けることが、最高の敬礼方法とされていた。ここにおける数字「五」はプロトタイプ的な意味「いつつ」をさしている。「五体投地」をするものは元々すでに己を捨てている。生きるも死ぬも、越えた境地で進んで行く。その境地そのものが、まさに仏の境地そのものなのである。普通に勤行や修行に入る僧侶や檀信徒が、本尊の前でこの「五体投地」で礼拝する。巡礼者の「五体投地」の方法はやや複雑である。巡礼のため聖地に赴く時、文字通り、五体を地面につけ、尺取り虫のように、大地にひれ伏しては、また立上がりながら、進んでいくことを言う。詳しく言えば、まず、まっすぐ立つ姿勢をとる、そして「オンマニペメホン(南無阿弥陀仏に似ている)」などと唱えながら、両手を合掌して、頭の上に上げてから、一步進む。その後、両手を合掌の状態で胸まで下ろしてから、第二歩目を進める。第三歩目を踏み出す時は合掌した両手を離し、胸から体の前方にまっすぐ伸ばし、掌を地面に向ける。そして、跪いてから、全身を地面に伏せ、額で地面を軽く叩いてから、まっすぐ立つ。このような動作を繰り返す。第一歩目から第三歩目までの間は「オンマニペメホン」などを絶えず唱えなければならない。

中国語における四字熟語“五体投地”はすでに仏教用語の義本義から転じて、心から感服するという意味を指しており、メタファーが働いていると考えられる。日本語における四字熟語「五体投地」はこの意味まで拡張されていないようである。

3.3 一方の言語で「五」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 五湖四海 // 津津浦浦

(15) 明治五(一八七二)年刊行された福澤諭吉の「学問のすすめ」は、津津浦浦の人々の心をとらえ、長い封建的な身分制度や因習に束縛されていた人々に深い共感を与えた。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「近代作家入門」』)

訳文：明治五年(一八七二)福澤諭吉著《劝学篇》一文，吸引了五湖四海的人们，激起了长期被封建等级制度和陈俗旧习束缚的广大人民的强烈共鸣。

(16) 我们都是来自五湖四海，为了一个共同的革命目标，走到一起来了。(北京日本学研

究センター『中日対訳コーパス〈毛泽东选集第三卷〉』)

訳文：われわれは、全国の津津浦浦からやってきた。共通の革命の目標をめざして集まつたのである。

中国語における四字熟語“五湖四海”は《周礼·夏官·职方氏》“其浸五湖。”と《论语·颜渊》“四海之内，皆兄弟也。”を出典とし、組み合わせた四字熟語である。ここにおける数字“五”は「いつつ」という意味を指している。“五湖”普通は“洞庭湖”、“鄱阳湖”、“太湖”、“巢湖”、“洪泽湖”という五つの湖を指しているが、“巢湖”ではなく、“鉴湖”だとする説もある。“四海”は「四方の海」という意味であり、つまり、中国の東海(東シナ海)、南海(南シナ海)、西海(黄海の古称)、北海(渤海の古称)という四つの海を指している。この「五つの湖と四つの海」という意味から転じて、「全国、または全世界」という意味を指すようになったのはメトニミーが働いていると考えられる。

一方、日本語において全国という意味を表す四字熟語は「津津浦浦」である。「津津浦浦」はいたるところの津や浦という意味から転じて、日本中のいたるところ、全国各地、国内のあらゆる地域という意味を指している。中国語における四字熟語“五湖四海”と同じように、メトニミーが働いていると考えられる。ここにおける「津」は港を意味し、「津」の右側の文字「聿」は本来は手で筆を持っている様子を示す「聿」にしづくが垂れる印である「丶」から成り、わずかなしづくを意味する。これに水を表すさんずい偏を加えて、わずかに水のあるところ「浅瀬」などを意味するようになった。「浦」は入り江や海岸を意味している。浦は水+甫であり、甫は芽生えをあらわす「甫」に田を合わせた文字である。苗を育てる畠の意があり、平らに広がるという意味も持つ。これに水について「浦」となり、水がひたひたとせまってくる岸、即ち、入り江や海岸を表すようになった。

五花八門 // 多種多様

(17) 陈列的货是五花八门。(大修館書店『中日大辞典』)

訳文：陳列されている商品は多種多様だ。

(18) 现在我们周围的有害化学物质真是五花八门，防不胜防。（『中国語成語ハンドブック』白水社）

訳文：現在我々の周りの有害化学物質は実に多種多様で、防ぐにも防ぎようがない。

中国語における四字熟語“五花八門”は清·钱泳《履园丛话·精怪·张氏怪》“庭不甚广，而纵横驰骤，五花八门，宛如教场演习兵弁也。”を出典とする四字熟語である。もともとは中国古代の二種の変化の戦術、布陣である五行陣と八門陣を指している。この布陣は複雑

多様であり、変化も速いため、人の目をくらませる。ここから転じて、現在は種類が非常に多い、また多方面という意味を指し、メタファーが働いていると考えられる。ここにおける数字“五”は「五つ、たくさん」という意味であり、五行は金、木、水、火、土で、また赤、黄、青、白、暗い5種類の色素を代表して、それらが一緒になると、多種の色になることにより、人の目をくらませる事ができるのである。数字“八”は「八つ」という意味であり、八門陣には諸説あるが、魚鱗・鶴翼・雁行・偃月(彎月)・鋒矢・衡輒・長蛇・方圓(方圓)という八つという説が有力である。また、現在、“五花”と“八門”について、新しい解釈が出ている。“五花”は金菊花(お茶を売る女人を喻える)、木綿花(街道で病気を治す漢方医者を喻える)、水仙花(飲み屋での女性歌手を喻える)、火棘花(寄席演芸を遊ぶ人を喻える)、土中花(荷担ぎ人を喻える)という五つの花を指しており、“八門”は一門巾(運命を占う人を喻える)、二門皮(民間薬を売る人を喻える)、三門彩(手品をする人を喻える)、四門挂(世の中の芸能で生計を立てる人を喻える)、五門平(講談の語り物者を喻える)、六門団(街頭で歌を歌って金を得る人を喻える)、七門調(色々組み立てる人を喻える)、八門聊(劇を演じる人を喻える)という八つの門を指しているというものである。

一方、日本語においては数字「五」はこの意味まで拡張されおらず、数字「八」などと組み合わさった四字熟語もないようである。そのため、日本語に訳す場合には例文のように、種類が多いこと、さまざまであることを表す四字熟語「多種多様」などと訳すのが妥当だと言える。

五短身材 // 小柄之人

(19) 只見来人生得五短身材。(大修館書店『中日大辞典』)

訳文：見るとむこうからやって来る人は小柄之人であった。

中国語における四字熟語“五短身材”は明·施耐庵《水滸伝》第三十二回：“这个好汉，祖貫兩淮人氏，姓王，名英，为他五短身材，江湖上叫他做矮脚虎。”を出典とする四字熟語である。四肢と胴の五つが短いことから、背の低い人を指しており、メトニニーが働いていると考えられる。マイナス的意味あるいは中性的意味で用いる場合が多いが、文脈によってはプラス的意味の場合もある。例えば、小説《金瓶梅》では孫雪娥に対する描写として“约二十年纪，生的五短身材，有姿色。”とある。李瓶儿に対する描写に“生的甚是白净，五短身材，瓜子面儿，细弯弯两道眉儿，不觉魂飞天外。”とある。これに対して、潘金蓮は背の高い王六儿に対する批評は“大摔瓜长溼妇。”と言っている。これを見れば、四字熟語“五短身材”がプラス的意味としても使えることがわかる。

一方、日本語においては体格が普通より小さいことを表す場合、「小柄之人」を用いる。「小柄之人」は多くの場合は中性的、あるいはプラス的意味として使っている。同じように背の低い人を形容し、主にマイナス的意味あるいは中性的意味の“五短身材”と比べれば、中国での「崇大」と日本での「崇小」という日中両国における人の審美観も感じられると言えるかもしれない。

五分五分 // 半斤八两

(20) 依我看，他俩半斤八两，谁也没有理。（《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社）

訳文：私から見れば、二人は五分五分で、誰も道理に合わないのだ。

(21) 丸顔の演説も似たりよつたり、いつもの古い唄だった。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「ノルウェイの森』』）

訳文：黑圆脸的演说也是半斤八两，一派陈词滥调。

日本語における四字熟語「五分五分」はどちらも同等で、優劣のないことを表している。ここにおける数字「五」は「いつつ」という数量的な意味であり、「分」は割合の意味で用いられる。「五分五分」は「十分=1」に対する割合を表している。つまり「1」を100%として、「50%対 50%」ということなのである。同じような使われ方は他にもある。例えば、熟語「盜人にも三分の理」は「盜人にも30%の理屈がある」という意味を表しており、熟語「七分咲き」は、「70%咲いている」という意味を表している。また、毎日放送(MBS)で放送されている有名な旅・バラエティ番組は「ごぶごぶ」と命名されている。番組タイトル名「ごぶごぶ」は、浜田と芸人と“当番組スタッフ”が上下関係を捨て「五分五分(ごぶごぶ)の立場で楽しいことを進行しようとするロケ番組」という意味からであり、番組冒頭にもその旨を書かれたテロップが流れているそうである。

一方、中国語において、似た意味を表す場合には四字熟語“半斤八两”を用いる。“半斤八两”は宋・釋普濟《五灯会元》卷十一“问：‘来时无物去时空，二路俱迷，如何得不失去？’ 师曰：‘秤头半斤，秤尾八两。’”を出典とする四字熟語である。中国において、旧制の度量衡では「一斤」が「十六两」であったので、「半斤」と「八两」は目方が同じということから、似たり寄ったりであることを指している。中性的意味を表す日本語の「五分五分」と比べると、例(21)のように、中国語における“半斤八两”はマイナスの意味のほうが多いようである。

五体満足 // 四肢健全

(22) 五体満足さえいてくれれば、どんな子でもいい。（北京日本学研究センター『中日

対訳コーパス「五体不満足」)

訳文：只要四肢健全，生个什么孩子都行。

日本語における四字熟語「五体満足」の「五体」とは頭部と四肢のことを指し、身体のすべての部分が揃っていることを表し、メトニミーが働いていると考えられる。

一方、中国語において、似た意味を表す場合には、四字熟語“四肢健全”を用いる。“四肢健全”四肢が完全であることを指し、「五体満足」と同じようにメトニミーが働いていると考えられる。

五月之鯉 // 心直口快

(23) 他为人心直口快，有啥说啥。(三修社『中国語四字成語慣用表現』)

訳文：彼は五月之鯉のような人で、思ったことは何でもズバリと言ってのける。

日本語における四字熟語「五月之鯉」とは鯉のぼりの鯉を指し、鯉のぼりの鯉は口を大きく開け、腹の中に何もないところから、さっぱりした人柄を表し、「竹を割ったよう」と通じるところがある。よく言えば、裏表のない、見たとおりの人物ということになり、悪く言えば、少し単純であるということになる。実に日本文化と深くかかわった、面白いメタファー的表現である。反対の意味を表す喻えとして「煮ても焼いても食えないやつ」がある。これは「えらく複雑で、腹に一物も二物もあり、しつこく、ねばり強く、策士で、寝技にたけ、信用するととんでもないやけどを負わされる」ことを表すときに使われる。

一方、中国語において、似た意味を表す場合には、四字熟語“心直口快”を用いる。“心直口快”は元・張国宾《罗李郎》第四折：“哥哥是心直口快射粮军，哥哥是好人。”を出典とする四字熟語である。性格が率直で、思ったことをざっくばらんに言うことを指している。

4. 数字「五」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

数字「五」は中国文化の特色をもっとも具える重要な数字であるといつても過言ではない。

《中国文化象征词典》によると、アメリカの中国研究者のエバーハルトはある《中文大字典》には数字「五」が千百四十八種の利用法が並んでいるが、そのうちおおよそ千種は「五行」と関係があると述べている。中国における「五行」の社会生活への影響力は巨大で、深遠なものであることは明らかである。漢の時代の許慎は《說文解字》で数字の「五」を“五行也。”とことさらに定義したが、これは本末転倒、因果が逆転することになってしまったことからも、「五行」の影響力は巨大であることは明らかである。

邹衍が「五行」の学説を提唱して以来、すでに中国の古代哲学の精髄となっている。「五行」の学説は周の末期に始まったと言われており、古代中国で万物の根源とされた「金、木、水、火、土」という五元素を五行と言う。戦国時代に「五行」の説が広がり始め、邹衍らは天地を陰陽の二気に当てはめ、天文、暦、方位などで自然や人事を占った金、木、水、火、土の五行と結びつけ「陰陽五行説」を大成させた。数字「五」に関する文化もほぼ五行をと関係している。

数字「四」の節において、人がいかにして東、西、南、北の四方の概念を確立し、その結果がどのようなものとなったかについて説明したが、それと合わせることにより、「五」の誕生を容易に理解することができる。平面空間において、どこから東、西、南、北という四方に向かって伸びている部分があれば、当然第五の平面空間である「中央」という意識が生まれる。人が自分の体の周辺を前後左右の四方向に分ければ、人体の位置する位置が「中央」となる。「五方杂处」、「五方杂厝」などの四字熟語もこういった思考から誕生したと考えられる。この二つの四字熟語はいろいろな地方出身の人が交じり合って生活することを指している。ここにおける数字「五」は東・西・南・北・中央の五つ方向から転じて、さまざまな地方を指している。

また、《易经》では数字「九」は陽の最大数であり、それに加え、四方と中央を象徴し、君主の位に配する数字「五」の重要さが相まって、中国古代帝王を尊ぶことを形容する「九五之尊」、「九五之位」など四字熟語の起源も推測できると言えよう。

数字「五」に神聖な意味が付与されるのに伴い、「五」を中心とする文化が形成され、「五」制の規範は政治方面においても非常に明白である。

春秋時代の左丘明の《国語 齐語》に“管子于是治国：五家为轨，轨为之长…五家为轨，故五人为伍，轨长帅之，十轨为里，故五十人为小戎。”このような方法で、民は“祭祀同福，死丧同恤…守则同固，战则同强。”とある。管仲は春秋時代の傑出した政治家であり、国政進める上で非常に豊富な経験を有した。きわめて重要な施政の一つは民を「五」を基数とする秩序に組織したことであり、四字熟語「五家为轨」、「五人为伍」はいずれもここから由来する。

朝廷だけではなく、数字「五」は庶民にも重要な数字として波及していく。

庶民の間に「五禽戲」という導引養生派という氣功が流行した。これは五種の動物の動作を模倣したもので、虎戯、鹿戯、熊戯、猿戯、鳥戯からなっていた。五禽は五行、五臓に対応するもので、木と鳥、火と猿、土と熊、金と虎、水と鹿となる。虎戯は肺を強化し、

鹿戯は腎臓を強化し、熊戯は脾臓を強化し、猿戯は心臓を強化し、鳥戯は肝臓を強化し、「五禽戯」には内臓強化の効果があるといわれている。後漢時代に神医と言われた華陀が考案したとされ、長く続ければ筋骨が強くなり、長寿につながると言われている。また、端午の節句に五色の絹糸を身に着ける風習があった。叶舒宪・田大宪(1995)では以下のような記載が見られる。その日、人びとは色とりどりの糸を手足にまとったり、金や錫を吊り下げて首飾りのようなものを作り、首にかけたりした。また、紙や布で菱形や四角を作って胸に付けたりもした。この風習は前漢時代に始まったと言われている。前漢時代には陰陽五行説が広まり、五色の糸は五色の龍を象徴し、それを身に帯びれば、厄除けや無病息災になると言われていた。

漢族の間に広まったばかりか、一部の少数民族の叙事詩や伝説にも見ることができる。ナシ族の叙事詩の「創世紀」では天を支えているのは五色の大きな柱である。“東邊竖起白螺柱，南邊竖起白玉柱，西邊竖起墨珠柱，北邊竖起黄金柱，中央竖起一根撐天大铁柱。”(朱桂元・吳肅民 1984) これは五方向の崇拜を表しており、五方を支えてることにより天地開闢を象徴している。ナシ族の伝説では五行思想がいっそう明確となっている。昔、「佳音」と「佳氣」が結合して「白露」となり、さらに白蛋(白い卵)に化け、その白蛋が変化して、金、木、水、火、土が生じた。その五つが変化して白風、黒風、緑風、黄風、紅風の五風が生じた。その五風がさらに変化して、白雲、黒雲、緑雲、黄雲、紅雲の五雲が生じた。そして、その五雲がさらに変化して、白蛋、黒蛋、緑蛋、黄蛋、紅蛋の五蛋が生じたという(《云南省少数民族哲学、社会思想資料选集》第一輯)。

一方、中国の「五行」思想は日本にも深い影響を与えた。

飯倉(2007)によると、東京の五つの色を冠した不動尊を総称する四字熟語「五色不動」は「五行」と関係するということである。目黒不動(目黒区)、目白不動(元は文京区にあつたものが昭和二十四年に豊島区に移された)、目赤不動(文京区)、目青不動(世田谷区)、目黄不動(台東区)がそれで、目黒、目白などは地名にもなっているので有名であるが、五色不動はいずれも現存している。この五色不動は江戸時代に三代将軍徳川家光が天海僧正の進言に従い、五行説の五色に基づいて江戸の五カ所の不動尊を選んで、天下太平を祈念したことが由来とされている。

また、日本における七夕は五色の短冊に願い事を書いて笹に飾る。五色は中国の五行思想に由来するものである。五行思想とは万物は木、火、土、金、水という五つの元素から成り立ち、この五元素に対応するように五色が決められた。青(木)、赤(火)、黄(土)、白(金)、

黒(水)である。後に、この五色をまとめる最高位の色として紫を置き、紫を最も縁起のよい色とした。

さらに日本には旧暦の五月五日までの梅雨の時期の雨の日に、鯉の形ののぼりに飾りを付け、男児の出世と健康を願う鯉のぼりという風習がある。鯉の形をしたのぼりと共に五色の吹き流しがなびかせるが、これも中国の五行思想と関係がありそうである。この風習に関わる四字熟語は前に説明した「五月之鯉」である。

中国語における数字「五」は「多数、多い」という意味に拡張され、四字熟語“一目五行”は読解力が優れていることを喻えている。日本語においては数字「五」はこの意味までは明確に拡張されてはいないが、日中両言語ともに“一目十行”「十行俱に下る」という語がある。ただの速読ではなく、よく理解するというところに重点がある。人から著書を贈られたりすると、何とか読破して、何か感想をと心がけるが、自分で買ったものでなければ興味がわからない。そこで、さまざまな速読の代用を苦し紛れに考え出す。よくあるのは「前書き」あるいは「後書き」だけを読んで、著作の意図を話題にすることである。また、目次がついている場合は、それで全体の構成をつかみ、ある見出しを口にして「あれがおもしろかった」と言ってお茶を濁す場合もある。達人となると、小説の最初の一ページと最後の一ページを読んで、あとは本文の会話だけを拾い読みして立派に評論するという。四字熟語「其書五车」は五台の車に積みあげるほどたくさん書物があるということを指している。

四字熟語“五彩缤纷”は色とりどりで、鮮やかで、美しいという意味を表している。ここにおける数字“五”も「五つ、たくさん」という意味であり、“五彩”は「赤色、黄色、青色、白色、黒色」という五つの色から、たくさんの色、色とりどりを指しており、“缤纷”はいろいろものが入り乱れていることを指している。この五つの色も「五行」に関わっていると考えられる。日本語に訳す場合には、色の鮮やかさに重点を置くのであれば、「色鮮やか」などと訳し、色の種類に重点を置くのであれば、「色とりどり」と訳すのが妥当であるが、どちらも全く同じ意味を表すことはできないようである。

また、日中両言語における数字「五」を含む四字熟語には、体に関するものが多い。日中両言語に共通する「五臟六腑」、中国語における“五脏俱焚”や日本語における「五体満足」などは、メトニミーによって内臓、四肢と頭などから転じて、人間の肉体のことを広く指している。“五脏俱焚”（“五内俱焚”とも言う）は決して本当に五臓を焚く（物語には、五臓を取り出し、火で焚く）ことを指しているのではなく、五臓が焼かれる思いであること

から、気を揉む、非常に煩悶する、またはひどく嘆き悲しむという比喩的な意味を表し、メタファーが働いていると考えられる。ここにおける数字“五”は数字のプロトタイプ的「いつつ」という意味を指しており、“五脏”は先にも述べたように、漢方でいう人体の五つの内臓のことと、心臓、肝臓、肺臓、脾臓、腎臓という五つの内臓を指し、“五内”とも言う。日本語では「いても立ってもいられない」という。これも先に述べたが、「五体満足」の「五体」は頭部と四肢を表すが、これと関係する中国語における四字熟語に“五马分尸”がある。これは“五牛分尸”ともいう。中国古代に五匹の馬にそれぞれ人の四肢と頭を縛り付けて、体をばらばらにするという残酷刑があった。この“五”は「五体」の「五」とつながるものである。中国語での意味はそこから転じて、物をばらばらにしたり、精力を分散することを喻えている。

また、中国語における“五大三粗”は人が大きくて頑丈なこと、筋骨たくましいことを喻えている。ここにおける“五大”は「頭、両手と両足という五つのところが大きい」という意味を指している。“三”は三つという意味であり、“三粗”は「足(すね、ひざ、股の全体)、腰、首という三つのところが太い」という意味を指している。この五つの部位と三つの部位から、全体の体つきを指すのはメトニミーが働いていると考えられる。中国の古代において、“五大”的一つである手は大きければ、財富を集めることができるとされた。他の部位である足については、大きな足は労働者にとっては有利なことであったため、“五大三粗”はほとんどがプラスの意味として用いられた。しかし、体力依存社会から機械社会に進歩するにつれ、人の審美も変わり、四字熟語“五大三粗”は現在では中性的な意味、ひいては、マイナスの意味としても用いられるようになった。日本語では「堂々たる体格」、「ごつごつした体つき」などという。

日中両国においては、共に数字「五」が好まれるようである。恐らく、これは数字の発生に重要な役割を果たした「手」と関係があるのであろう。人間は最初、手を使って数を数えた。片手では「一」から「五」で終わるので、最後の「五」が最大の数として、人間の生活に用いられた。これは人間のもっとも原始的な数字観であるかもしれない。そして、「五」が「一」から「九」までのちょうど真ん中に位置し、最も中心的な縁起のよい数として、好まれたことがあるかもしれない。

吉祥文化は日常生活や吉日の儀式といった特別な場面の言葉や図案、飾り物などに表れる。中国において、「五福」とは「福・禄・寿・喜・財」を指し、人生における幸せの追求である。中国における四字熟語“五福临门”はこの五種類の福が来るという縁起のよい意

味を表し、好まれる。また、中国語では発音が同じか、あるいは近いことが重んじられる。例えば、“蝙蝠”的“蝠”と“福”は同音であるため、“五福”は「五匹の蝙蝠」によって喻えられている。また、“和”、“合”と“盒”は同音であるため、中国の民間には“五福和合”という縁起のよい絵がある。五匹の蝙蝠が蓋付きの丸い“盒”の中に一斉に飛んで入る様子が描かれ、家庭が円満であるという意味が込められているなどである。

これに対して、日本では初詣などで、五円玉をお賽銭にするのが普通である。五円玉は五円硬貨の別称で日本政府発行の硬貨である。「ごえん」は「ご縁」とも書くことができるところから、縁起のよい硬貨として、神社などへの賽銭としてよく使われる。五円玉を使って祈ると、「ご縁があるように」という意味が込められることになる。

数字「五」が好まれていることから、日中両言語共に数字「五」からなる四字熟語が多くあると考えられる。例えば、「五風十雨」は五日目ごとに風が吹き、十日目ごとに雨が降ることから、農業に好都合な気候、また、世の中が平穏なことを指す。天子の宮居を雲の上とし、その周りに雲上人がいる。これを「五雲之衢」という。英雄雲のごとくに起りなどと形容するのも、この「五雲之祥」によるものである。中国語における“五角大楼”はアメリカ国防総省の建物が五角形(ペンタゴン)であることから、アメリカ国防総省を指し、メトニミーが働いていると考えられる。また、日本の短歌の「五七五七七」、俳句の「五七五」などは「五七調子」(五七調)と言われ、伝統的な詩歌は五音と七音で構成されている。一方、中国でも五言絶句や七言律詩などの五言や七言の形式はあるが、これは五音なら五音のみで、七音なら七音のみである。五音節と七音節でつくられた詞はリズム感があり、非常に心地よいものであると言えよう。

VI. 数字「六」



1. 日中両言語における数字「六」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「六」の意味を調べるためにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の7項になる。

基本義：

- ① 数の名。五の次、七の前の数。

派生義：

- ② 六つ目、六番目。
- ③ 人を表わす語に付けて、その人を卑しめ、罵つていう。
- ④ 和琴箏の絃名。
- ⑤ 神楽笛、竜笛、高麗笛、簞篥などの孔の名。
- ⑥ 六指の略。
- ⑦ 六字、「南無阿彌陀仏」の略。

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典(修订版)》(2001)、《现代汉语辞海(全新版)》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994) を参照して考察を行った。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の8項になる。

基本義：

- ① 数目、五加一所得的数。

派生義：

- ② 序数、第六。

- ③ 表示轻蔑。
- ④ 表示否定。
- ⑤ 表示反驳。
- ⑥ 特指五行说中的阴。
- ⑦ 中国民族音乐的音阶之一，相当于简谱的高音 5。
- ⑧ 姓氏。

上から見られるように、日本語における数字「六」の意味は 7 項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が 1 項で、拡張された意味が 6 項ある。これに対して、中国語における数字“六”の意味は 8 項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が 1 項で、拡張された意味が 7 項ある。

以下で日中両言語における数字「六」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「六」のプロトタイプに関する比較対照

日中両言語における数字「六」のプロトタイプ、つまり数える数量的概念として、意味は一致している。

(1) 他的算法很不高明，可是心中和嘴上常常念着“六六三十六”，这并与他的钱数没多少关系，不过是这么念道，心中好象是充实一些，真象有一本账似的。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<骆驼祥子>』)

訳文：算術などろくに知りもしないのに、胸のなかでも口のなかでも、「六六三十六」とくりかえしていた。自分の所持金とはなんの関係もなかったが、つぶやいていると、自分もちゃんとした帳簿でももっているような、満ちたりた気持になってくるのだった。

(2) 母屋のしころを下ろしたらな、あんたの寝る六畳の一部屋ぐらいはらくにとれるさかいな。『中日対訳コーパス「越前竹人形」』)

訳文：把正屋旁的屋披拆除，替你盖一间六铺席大的卧室是毫无问题的。

(3) 这一年，师部机关的收成还真不错，一个大萝卜，有六斤重。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<我的父亲邓小平>』)

訳文：この一年、支部組織の収穫は素晴らしい、六斤もある大きな大根がとれたほどだった。

例(1)から例(3)までは数字「六」のプロトタイプ的意味に基づいた例である。例(1)は基本的な数の名を表し、例(2)と例(3)は共に助数詞と連用する場合である。例(1)における“六六三十六”は“六乘以六得三十六”(六かける六は三十六)という意味を指している。中国

でも古代から1から9までの自然数同士の掛け算を語呂良く暗記する方法があり、“乘以”が省略されている。例(2)における畳⁴⁵は、日本で利用されている伝統的な床材である。一畳の大きさは3尺×6尺のものが基本となるが、部屋の寸法に合わせて注文生産される場合が一般的なのでサイズは一定していない。ここにおける「六畳」は「一畳の畳六枚分」の広さを意味している。これに対して、中国には「畳」という物もなく、また中国語に「畳」という助数詞もない。例(3)における“斤”は尺貫法の重さの単位である。その値は時代と地域により異なる。ここにおける“六斤”は「一斤、六つ分」の重さを意味しているが、日中両国における“斤”的重さは異なっている⁴⁶ため、中国語から日本語に訳す場合には少し差がある。

1.4 数字「六」の意味拡張に関する比較対照

日中両言語において、派生義②と派生義③の意味は共通している。

(4) 明治六年なら煙草はまだ専売にされてなかつたので、百姓は自家栽培して除虫菊のように虫除けにも使つたものだらう。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「黒い雨」』)

訳文：如果是明治六年，烟叶还不是专卖品，可能是农民自己种好之后，当防虫菊一样用來防虫的。

(5) 大哥，我想和六妹通信，……已经去了三封信，但她未曾复我，请你帮忙疏通一下，感谢不尽。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「关于女人」』)

訳文：お兄さん、ぼくは六妹と文通したい。……三通も手紙を出したのに、返事がきません。返事を出すようにいってください。感謝します。

例(4)と例(5)は共に派生義②に基づいて、数字「六」の順序、六つ目を表している例である。例(4)における「明治六年」と“明治六年”は共に順序を表し、「明治元年(1868年)から数えて、第六番目の年(つまり1873年)」のことを意味する。例(5)における“六妹”と“六妹”は共に「年齢上の第六番目の娘」という意味を指している。ちなみに、中国語において、親族の長幼の順序については二番目の兄、三番目の兄は“二哥”、“三哥”と呼ぶが、一番目の兄は“一哥”ではなく、“大哥”と呼ぶ、同じように、一番目の伯父は“一伯”ではなく、“大伯”と呼ぶ。

(6) 総領の基六末っ子の甘えん坊か。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「ひとりっ子の上手な育て方」』)

訳文：老大傻老小娇吗？

(7) うちの宿六はまだ帰らない。(小学館『日中辞典』)

訳文：当家的还没回来。

(8) 你个六猴！(角川書店『中国語大辞典』)

訳文：あなたは望みが高く、とても実現できないよ。

例(6)から例(8)までにおける数字「六」はいずれも日中両言語における派生義③に基づく例である。さいころを投げる時に六の目が上に向くのがすごく難しいことから、人を卑しめる意味を表している。例(6)における「甚六」は「お人よし」や「愚か者」という意味を指している。例(7)における「宿六」は「宿の碌でなし」の略であり、「宿」は妻が夫のことを他人に言う際に使う俗称である。つまり、「宿六」とは仕事をしない、甲斐性なしの夫など、ろくでもない夫を妻が他人に罵る際に使う言葉である。しかし、こうした夫を罵る言葉は「馬鹿亭主」のように、親しみを込めて使われることもある。例(8)における“六猴”は望みが高く、とても実現できないことを指している。例(6)から例(8)までにおける数字「六」の用法は共通しているが、日中両言語における対応できる四字熟語はないようである。

(9) 六，他知道什么！(角川書店『中国語大辞典』)

訳文：だめだ、彼が何を知っているか。

(10) “那钱他开了饥荒啦？”“六！又喝去了！”(角川書店『中国語大辞典』)

訳文：「その金は返金を返すために使ったの？」「だめだ、またお酒を飲んでしまった。」

例(9)と例(10)は中国語における数字“六”的派生義④「断固する否定を表す」という意味に基づく例である。これに対して、日本語における数字「六」の意味はそこまでは拡張されていないようである。

(11) 他知道个六！(角川書店『中国語大辞典』)

訳文：彼が何を知っているか。

(12) 你会个六！(角川書店『中国語大辞典』)

訳文：おまえに何ができるか。

(13) 你们的成绩忒六，以后多用心念书才行啊！(大修館書店『中日大辞典』)

訳文：きみたちの成績はまことになってない、今後は大いに気をつけて勉強しなくちゃいかん。

(14) 买这买那，买个六！钱呐？(角川書店『中国語大辞典』)

訳文：これを買うとか、あれを買うとか、やめな、金がどこにある。

例(11)から例(14)までにおける数字“六”はいずれも中国語における派生義⑤に基づく例である。反語文の中で用い、名詞、動詞、形容詞及びいくつかの品詞に代わって、「まことになってない」、「やめな」など相手に対する強い禁止を表す。中国語の“什么”に置き換えるても、意味上はほとんど同じである。これに対して、日本語における数字「六」の意味はそこまでは拡張されていないようであるため、日本語に訳す場合には「何を…か」、「何が…か」、「まことになってない」などに訳すより仕方ない。

また、日本語における数字「六」の拡張義④は「和琴箏の絃名」という意味である。具体的に言えば、一三絃の箏では低い音から六番目のことを探しておらず、和琴では奏者に近い手前から数えて六番目のことを探している。日本語における数字「六」の拡張義⑤は「神楽笛、竜笛、高麗笛、簞篥などの孔の名」という意味である。具体的に言えば、吹口の反対側から数えて、指孔が六孔の神楽笛、高麗笛は第六番目のことを探しており、七孔の竜笛は第七番目のことを探しており、九孔の簞篥は第五番目の孔のことを指している。また、その孔を用いる音の名のことを指している。これに対して、中国語における数字“六”的意味はそこまでは拡張されていない。

日本語における数字「六」の拡張義⑥は六指(むさし)の略を探している。六指とは日本における遊戯の一つである。二人が縦横各9本の線を引いた盤上に、各3個の石を持って線上を進退させ、早く決勝線に自分の石を並べたものを勝ちとする。「十六六指」と同じである。これに対して、中国語における数字“六”はこの意味までは拡張されていないようである。日本語における数字「六」の拡張義⑦は六字、「南無阿彌陀仏」の略という意味を探している。この六字の意味から盜人仲間の隠語として、殺人、殺傷のことを指す。中国語における数字“六”的意味はここまでは拡張されていない。

また、中国語における数字“六”的拡張義⑧は陰陽の陰を探している。爻辞⁴⁷のはじめに初六、九二、六三という爻の順と九か六の組み合わせが記されている。数字“九”は陽、数字“六”は陰という意味である。初六は初爻が陰爻、九二は二爻が陽爻であることを示している。これに対して、日本語における数字「六」の意味はそこまでは拡張されていない。中国語における数字“六”的拡張義⑨は中国民族音楽の音階の一つを探し、現行略譜の“5”(高音5)に相当する。

中国語における数字“六”的拡張義⑩として、数字“六”は人の姓として使える。《清史》によると、中国の清の時代において、“六十七”という満州族の官員がいた。また、《路史》によると、夏の時代には“六国”という古い国(現在の安徽省六安市)があり、この国の国

民は國の名前“六”を用いて、自分の姓とした。これに対して、日本では数字「六」を人の姓としては使っていよいようである。

なお、その他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

2. 日中両言語における数字「六」を含む四字熟語の全体像

ここでは「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「六」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめてみる。

2.1 日中両言語における数字「六」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「六」を含む四字熟語20例が取り上げられている。出典元によって分析して見ると、主に日本を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「六」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍と伝説、劇曲及び小説等の文学作品の二つに分けることができる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源とした四字熟語は「六十耳順、六尺之孤、六言六蔽」(《论语》より)、「六合同風」(班固《汉书》より)、「六親不和」(《老子》より)、「三十六計」(梁萧子《南齐书》より)など、10例ある。

(2) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説等の文学作品を起源とした四字熟語は「五角六張」(郑启《开天传言记》より)の1例のみである。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「六」を含む四字熟語

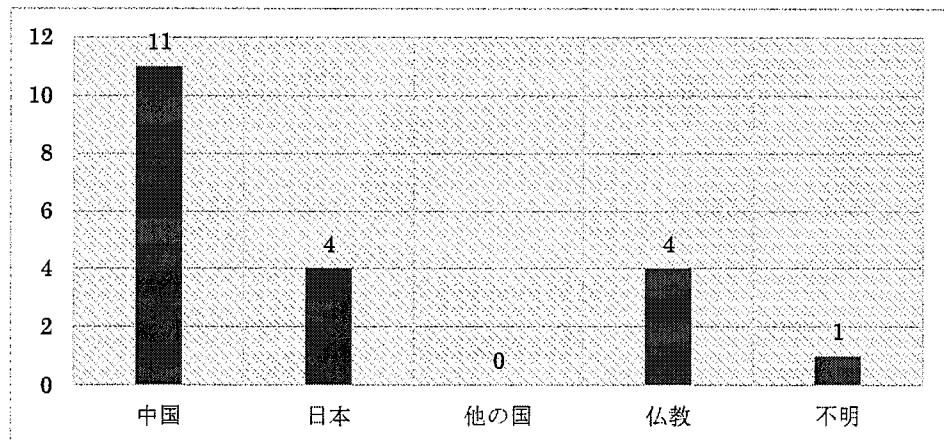
日本を起源としたものは「一六勝負」、「二六時中」、「四六時中」及び「常命六十」の4例がある。

2.1.1.3 仏教または仏教に関するものを起源とした数字「六」を含む四字熟語

仏教または仏教に関するものを起源としたものは「三面六臂」、「六根清浄」、「六道輪廻」、「八面六臂」の4例がある。

以下の図1は日本語における数字「六」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図1 日本語における数字「六」を含む四字熟語の出典元



上の図1からも分かるように、日本語における数字「六」を含む四字熟語の中で中国を起源としたものが11例で、総数の55.00%を占めている。以下は日本を起源としたものが4例で、20.00%、仏教または仏教に関するものを起源としたものが4例で、20.00%、出典不明な四字熟語が1例となっている。また、中国以外の他国からのものはない。日本語における数字「六」を含む四字熟語の中で中国からのものが最も多く、総数の半分以上を占めている。日本を起源とした四字熟語と仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語は同じ数である。

2.1.2 中国語の場合

商務印書館の《成语大词典》第二版(2012)に収録されている数字「六」を含む四字熟語は28例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語という三つに分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「六」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「六」を含む四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集からと、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分かれる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍からのものは「三姑六婆」(陶宗仪《南村辍耕录》より)、「五脏六腑」(呂不韦《吕氏春秋》より)、「六月飞霜」(江淹《诣建平王上书》より)、「六尺之孤」(《论语》より)、「六合之内」(庄子《庄子》より)、「六神不安」(张君房《云笈七签》より)、「身怀六甲」(魏征《隋书》より)、「七情六欲」(戴圣《礼记》より)など、9例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集からのものは「六街九陌、六街三市」(刘晨翁《虞美人·城山堂试灯》より)、「六韬三略」(黄滔《祭南海南平王》より)の3例がある。

(3) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「三六九等」(曹雪芹、高鹗《红楼梦》より)、「三茶六饭、五黄六月」(吴承恩《西游记》より)、「三亲六故」(张杰鑫《三侠剑》より)、「三亲六眷」(关汉卿《鲁斋郎》より)、「四不拗六」(凌蒙初《二刻拍案惊奇》より)、「五颜六色、六亲无靠」(李汝珍《镜花缘》より)、「六阳会首」(高文秀《蝇池会》より)、「六亲不认」(冯德英《苦菜花》より)、「六畜不安」(刘鹗《老残游记》より)、「六朝金粉」(王实甫《西厢记》より)など、13例ある。

2.1.2.2 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「六」を含む四字熟語

中国語における数字「六」を含む四字熟語の中に、仏教または仏教関連のものを起源としたものは「三头六臂、六臂三头」(释道原《景德传灯录·汾粥善昭禅师》より)、「六根清淨」(鳩摩罗什译《法华经》より)の3例がある。

以下の図2は中国語における数字「六」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「六」を含む四字熟語の出典元

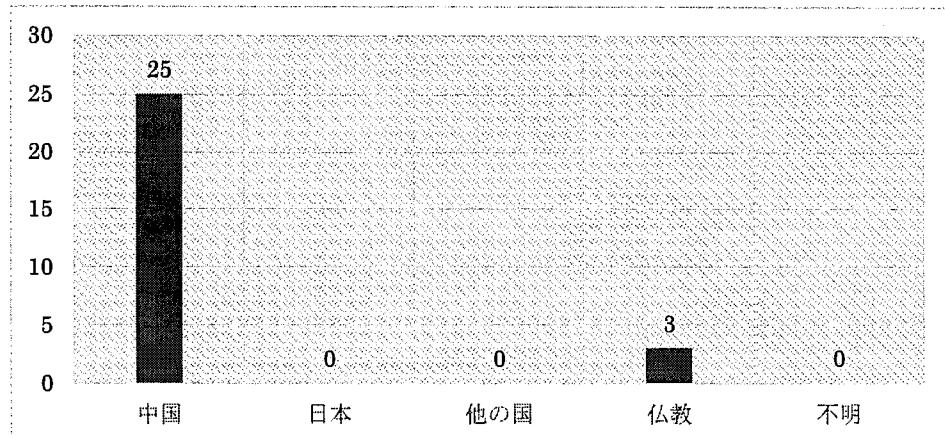


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が25例あり、総数の89.29%を占めている。次が仏教または仏教関連のものを起源としたものが3例で、2.56%となっているが、中国以外の他国を起源とした四字熟語はない。中国語における数字「六」を含む四字熟語の出典元はほとんどが中国ということである。

2.1.3 数字「六」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「六」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数字「六」を含む四字熟語は出典元が幅広く、日本以外の国(特に中国)を起源としたもの、日本を起源としたもの、仏教または仏教関連のものを起源としたものといろいろある。これに対して、中国のほうは中国と仏教または仏教関連のものを起源としたものしかない。しかも中国語における数字「六」を含む四字熟語の総数の89.29%は中国を起源としたものである。

2.2 日中両言語における数字「六」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「六」の現れる位置考察

四字熟語における数字「六」の現れる位置とは、四文字において、数字「六」は何番目の文字であることを指している。例えば、数字「六」の現れる位置は一番目のみの四字熟語とは「六道輪廻」、「六亲不认」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

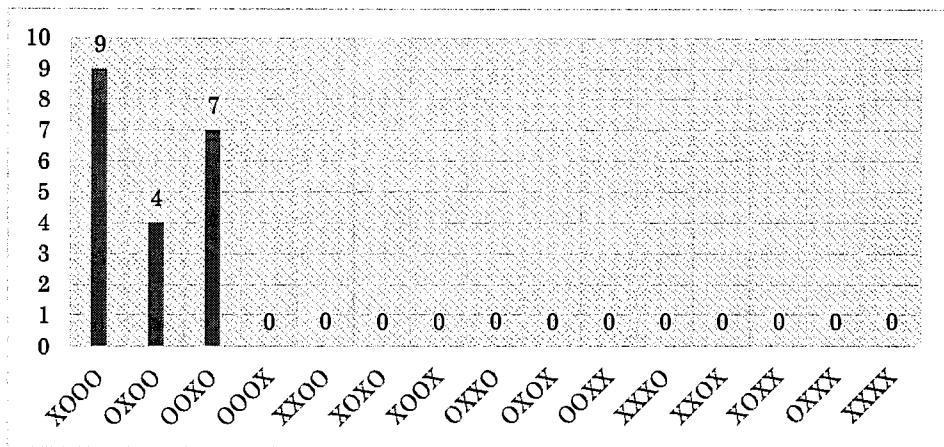
日本語の四字熟語における数字「六」の現れる位置については以下のとおりである。

- ・一番目のみ……9例
- ・二番目のみ……4例
- ・三番目のみ……7例

個数からみれば、数字「六」が一番目のみの位置に現れるものが最も多く、総数の45%を占めている。以下は三番目のみに現れるもの、35%、二番目のみに現れるもの、20%となっている。

図3には、「X」、「0」によって数字「六」の現れる位置を表示する。「X」は数字「六」を表し、「0」は数字「六」以外の文字を表す。例えば、数字「六」は一番目のみに現れる四字熟語「六道輪廻」は「X000」で表示する。

図3 日本語の四字熟語における数字「六」の現れる位置



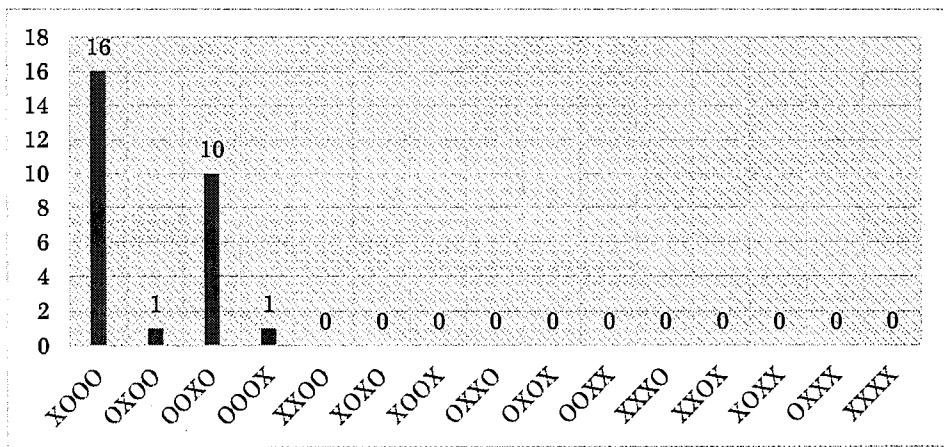
2.2.1.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「六」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……16例
- ・二番目のみ……1例
- ・三番目のみ……10例
- ・四番目のみ……1例

個数から見れば、数字「六」の現れる位置は大部分が一番目のみと三番目のみであり、それぞれ総数の 57.14% と 35.71% を占めており、合わせると 93% 以上に達する。その次は二番目のみと四番目のみに現れるもので、それぞれ 3.57% となっている。詳細は図 4 の通りである。

図 4 中国語の四字熟語における数字「六」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「六」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「六」の現れる位置については、中国語においても、日本語においても、共に数字「六」が一番目のみと三番目のみに現れるケースが多く、合わせて、総数のすべてをほぼ占めている。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「六」と他の数字との共起関係考察

日中両言語における数字「六」を含む四字熟語には、他の数字と共起するケースが少な
くない。その中で、他の数字との共起関係はどうなるのか、どのような数字と共起する場
合が最も多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「六」と他の数字との共起関係についての詳細は、図 5
のようにまとめた。

図 5 日本語の四字熟語における数字「六」と他の数字との共起関係

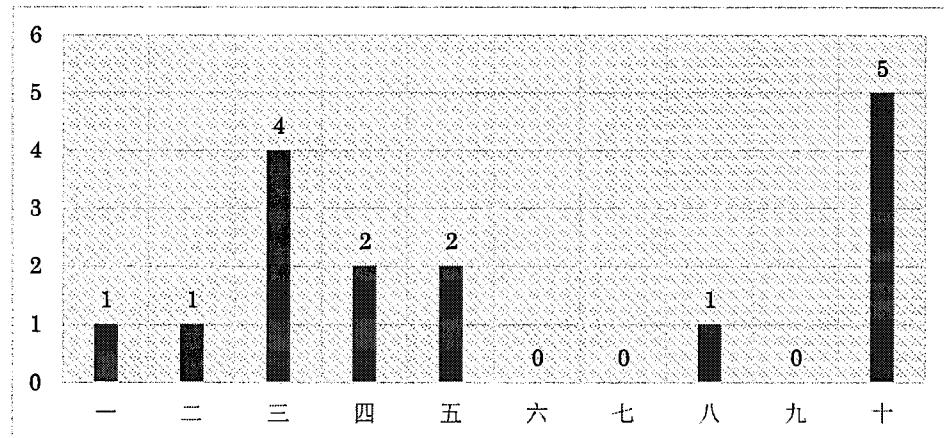


図 5 から分かるように、日本語における数字「六」を含む四字熟語の中には数字「六」
が数字「六」自身と共に現れるものはない。以下、数字「一」、「二」と共起するものが共に
1 例、それぞれ 6.25%、数字「三」と共起するものが 4 例、25%、数字「四」、「五」と共起
するものが共に 2 例、それぞれ 12.50%、数字「八」と共起するものが 1 例、6.25%、數
字「十」と共起するものが 5 例、31.25%、数字「六」、「七」、「九」と共起するものはない。

割合からみると、数字「十」と共起するケースが最も多く、その次は数字「三」、「四」、
「五」、「一」、「二」、「八」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「六」と他の数字との共起関係に関する詳細は図 6 の通

りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「六」と他の数字との共起関係

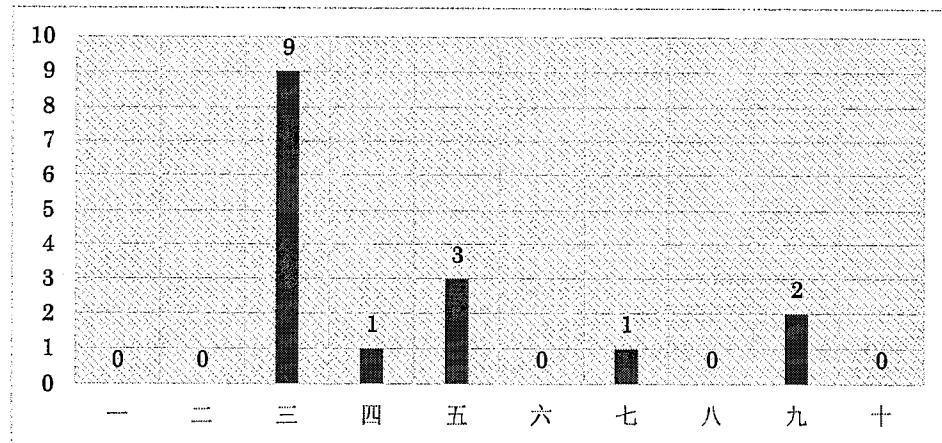


図6から分かるように、日本語における数字「六」を含む四字熟語の中には、数字「六」が数字「六」自身と共に起するものはない。以下、数字「三」と共起するものが9例、56.25%、数字「五」と共起するものが3例、18.75%、数字「九」と共起するものが2例、12.50%、数字「四」、「七」と共起するものがそれぞれ1例で、6.25%、数字「一」、「二」、「八」、「十」と共起するものはない。

割合から見ると、数字「三」と共起するケースが最も多く、その次は数字「五」、「九」、「四」、「七」の順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「六」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは日中両言語の四字熟語において、数字「六」と他の数字と共に起して表す意味を分類し、提示する。具体的な例もあげる。

(1) 数字「二」と共起する場合

A: 掛け算の結果十二

日：二六時中

中：なし

(2) 数字「三」と共起する場合

A: 多い

日：三面六臂

中：三推六问 三头六臂 三班六房 三街六巷 三宫六院

B: あらゆる

日: 六韜三略

中: 三姑六婆 六街三市 三亲六眷 六韜三略

C: 程度の高さ

日: なし

中: 三茶六饭

(3) 数字「四」と共起する場合

A: 掛け算の結果 24 時間

日: 四六時中

中: なし

B: 各方面

日: なし

中: 六通四达

C: 少数と多数の割合

日: なし

中: 四不拗六

(4) 数字「五」と共起する場合

A: あらゆる、全部

日: 五臓六腑

中: 五颜六色 五脏六腑

B: 変化する

日: なし

中: 五心六意

C: あれ…これ…

日: なし

中: 呟五喝六

(5) 数字「七」と共起する場合

A: あらゆる

日: なし

中: 七情六欲

(6) 数字「八」と共起する場合

A: 多い

日：八面六臂

中：なし

(7) 数字「九」と共起する場合

A: あらゆる

日：なし

中：六街九陌

日中両言語における数字「六」を含む四字熟語において、数字「六」と他の数字との共起関係については数から見ると、中国語においては数字「六」が数字「三」と共起するケースが最も多く、中国語における数字「六」を含む四字熟語総数の 56.25%を占めている。一方、日本語においては、数字「六」が数字「十」と共起するケースが最も多く、日本語における数字「六」を含む四字熟語の総数の 31.25%を占めている。

数字「六」が数字「五」までと共起する場合については先に述べたので、ここでは数字「七」と共起する場合からを見ることとする。

数字「七」と共起する場合、中国語においては「あらゆる」という意味が見られ、例えば、“七情六欲”は「喜、怒、愉、思、悲、恐、驚という七情、と食、色、財、丁、權、貴という六欲から、あらゆるの感情と欲望のこと」を指している。一方、日本語においては数字「七」と共起する四字熟語は見られないようである。

数字「八」と共起する場合、日本語においては「八面六臂」など、「多い」という意味が見られるが、一方、中国語においては数字「八」と共起する四字熟語は見られない。

数字「九」と共起する場合、中国語においては「あらゆる」という意味が見られる。“六街九陌”は「あらゆるの大通りや横丁、町中至るところ」を指している。一方、日本語においては数字「九」と共起する四字熟語は見られないようである。

3. 数字「六」を含む四字熟語の対照考察

ここでは以下の二つに分類し、日中両言語における数字「六」含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「六」を含み、同義・類義を表すもの、②一方の言語で「六」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「六」を含み、同義・類義を表すもの

六親眷族 // 三亲六眷

(15) 谁都有个三亲六眷的。(小学館『中日辞典』)

訳文：だれにだって六親眷族はいるものだ。

日本語における四字熟語「六親眷族」はすべての親族縁者のことと指している。ここにおける数字「六」はプロトタイプ的意味数量を表し、「六親」について、どの親族かはさまざまな説があり、最も説得力があるのは最も身近な六種の親族の父・母・兄・弟・妻・子である。父・子・兄・弟・夫・婦のことや広く親族全体を指しても、シネックトキが働いていると考えられる。また、「六親」に関して、日本語には「朋友は六親に敵う」という熟語がある。親友は六親に匹敵するほど貴重なものであることを指している。

一方、完全に同じ意味を表す場合、中国語では“三亲六眷”を用いる。“三亲六眷”は元・关汉卿《鲁斋郎》第一折：“那里管三亲六眷尽埋冤。”を主典とする四字熟語で、“三亲六故”ともいう。ここにおける“三亲”は父母、兄弟、夫婦のことを指しており、“六眷”には日本語における「六親」と同じように、さまざまな説がある。漢・賈谊《新书·六术》における“戚属以六为法，人有六亲，六亲始曰父，父有二子，二子为昆弟；昆弟又有子，子从父而为昆弟，故为从父昆弟；从父昆弟又有子，子从祖而昆弟，故为从祖昆弟；从祖昆弟又有子，予以曾祖而昆弟故为曾祖昆弟；曾祖昆弟又有子，子为族兄弟。务于六，此之谓六亲。”によると、「六眷」は「親子や兄弟、親兄弟から、祖兄弟から曾祖父兄弟、同族兄弟」のことを指している。《左传昭公·二十五年》における“为父子、兄弟、姊妹、甥舅、昏媾、姻亚，以象天明。”によると、「六眷」は「親子や兄弟、姊妹、甥おじ、結婚、結婚帝国」のことを指している。

六尺四方 // 六尺见方

(16) 近づいて見ると、六尺四方ぐらいな穴ぼこに、鉄道の古枕木を入れて燃しながら、運んで来た死体を投げこんで焼いている。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「黒い雨」』)

訳文：我走过去一看，原来在一个六尺见方的土坑里，点燃着铁路上的旧枕木，把运来的死尸扔进去火化。

日本語における四字熟語「六尺四方」は土地や建物などの面積を表す四字熟語である。江戸時代までの日本は長さの単位は尺貫法と呼ばれる「尺」が基準であった。一尺は十寸、一寸は十分である。現在のセンチに直すと一分は約 0.303 センチ、一寸は約 3.03 センチであるから、一尺は約 30.3 センチになる。尺の上の単位は「丈」(10 尺は約 3.03 メートル)であるが、その中間に「間」もあり、六尺で一間という。土地や建物などの面積

も尺貫法が長く使われた。日本では利用可能な土地の最少単位は「六尺四方」(一間四方)であり、これを「一坪」(一步)と言い、一坪は約3.3平方メートルで計算していることが多い。

一方、中国語における四字熟語“六尺見方”も土地や建物などの面積を表す四字熟語である。日本語における四字熟語「六尺四方」表す面積は完全に同様というわけではないが、似た四字熟語と考えられる。「尺」という単位は古代中国の殷の時代にはすでにあったとされている。中国では一尺=三分の一メートル(約33.3センチ)と定義している。人体の骨格の尺骨はこの尺とほぼ同じの長さであることに由来する。従って、中国の1尺は日本の一尺一寸にあたる。中国の伝統的な面積を表す単位に“平方歩”と“亩”という言葉があった。“亩”的定義は時代によって異なり、古くは六尺を“步”とし、“六尺見方”を“平方歩”とした。“一亩”は100平方歩(“六尺見方”かける100)とした。メートル法への移行が進む現代中国でも、“亩”は今なお盛んに用いられる単位である。例えば、“三十亩地一头牛”と言えば左うちわの安楽な生活を指しており、逆に“一亩三分地”といえば個人がかろうじて暮らせるだけの狭い畠を指し、転じて自分だけの空間を意味する。四字熟語“六尺見方”は1/100“亩”として、量の多くない面積を表す場合に、よく使われている。

3.2 一方の言語で「六」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 六日菖蒲 // 明日黄花

(17) 不过这已经是明日黄花了。(大修館書店『中日大辞典』)

訳文：でもこれはもう六日菖蒲だったことなのだ。

日本語における四字熟語「六日菖蒲」はせっかく用意しても肝腎の時機に遅れて、役に立たない物事を喻えている。ここにおける数字「六」は「序数、六番目」という意味を指しており、「六日」とは端午の節句(五月五日)の翌日のことを指している。「菖蒲」は端午の節句に使う花であるが、なぜ端午の節句に使われるようになったかは「菖蒲」の読み方にあった。「菖蒲」という漢字は「ショウブ」と読み、この発音は「尚武」に通じる。五月五日の端午の節句は「尚武の節句」ともいう。「菖蒲」はサトイモ科で、葉はアヤメ科と似ているが、花の形、色はまったく別である。しっとりとした紫色とは違い、蒲の穂のような黄色だ。しかし、香気が強いので古来、邪気を払うとされ、魔除けとして季節の行事や儀式に用いられてきた。日本においては、現在でも、男の子の健やかな成長を祝う五月五日の節句に欠かせぬものである。その日に菖蒲の花を飾ることは大切なことであるのに、一日遅れて「六日」になつては意味がない。また、外見の優劣をつけがたい美女

を形容する場合には、「いざれが菖蒲かカキツバタ」と言う。

一方、中国語において、同じ意味を表す四字熟語は“明日黄花”である。“明日黄花”は宋・苏轼《九日次韵王巩》诗：“相逢不用忙归去，明日黄花蝶也愁。”を出典とし、“明日”とは重陽節(旧暦九月九日)が過ぎたあとの日のことを指している。“黄花”は特に「菊の花」を指しており、ここでは類と種の関係なので、シネックトキが働いていると考えられる。中国では重陽節に菊を観賞する風習があり、その日に満開を迎えるよう栽培される。そのため、四字熟語“明日黄花”は節句が過ぎ、人びとの関心が薄れたあとの「菊の花」のことであり、遅れて盛りを迎える花の場合には「役たたず」ということになる。出始めたころは独占状態であった人気デジタル商品が売れなくなる場合も“明日黄花”を使って表すことができる。

総領甚六 // 傻瓜老大

(18) あの人は総領甚六で、恰幅はいいが気が弱い。(黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》)

訳文：他是傻瓜老大，身材魁梧，却很懦弱。

(19) むかしから「総領の甚六」という言い方があります。長子は次子以下の子どもに比べると、どうもおっとりしていて、俊敏さに欠ける傾向がある、という意味です。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「ひとりっ子の上手な育て方』)

訳文：自古有这么一句话叫做“傻老大”，意思是说长子与次子以下的孩子相比较总是显得稳重，缺乏敏锐的头脑。

日本語における四字熟語「総領甚六」は「総領の甚六」とも言う。長男または長女(特に、長男を指している)は弟や妹に比べて大事に育てられるので、弟や妹に比べると、おっとりしていて、お人好しで、鈍い者が多いという意味である。ここにおける数字「六」は人を表わす語に付けて、その人を卑しめ、罵ることを意味している。「総領」は家名を継ぐ子、跡取りのことを指しており、「惣領」とも書く。「甚六」は、「お人よし」や「愚か者」をいう語であり、「甚六」のみでも、のんびりしてお人よしな長男をいう。なぜ、そのような意味を表すかはいくつかの説がある。「甚だしいろくでなし」を縮めて「甚六」とし、それを人名に見立てたものとする説や、かつて長子は年齢の順により家禄を継いだことから「じゅんろく(順録)」が転じたものとする説もある。

これに対して、中国語で似た意味を表すのは“傻瓜老大”である。“老大”は第一子、長男、あるいは長女のことを指している。

4. 数字「六」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

数字「六」は小さな幕舎の形であるが、原義において用いられることはなく、その音を仮借して数の「六」にのみ用いる。すなわち仮借字である。《说文解字》には“易之数，阴变于六，正于八，从入，从八。”と易の数理によって説く。中国においては、帝王の制度から祭祀儀礼にいたるまで、数字「六」制は象徴的な意味を構成してきた。

これは、少なくとも古史、伝説中の堯舜の時代にまでさかのぼることができる。《尚书·尧典》⁴⁸に、舜は堯の太廟で、禅讓の冊命を受け取ったときに、“肆类于上帝，禋于六宗，望于山川，遍于群神。”と言ったとある。六宗を祭り、莊嚴盛大な封立の儀式に取り入れた。ここにおける“类”、“禋”、“望”はすべて祭祀の名称であり、四字熟語“禋于六宗”とは六神を祭ることにほかならない。しかし、“六宗”とはなになのか、また、なぜ「六」制にしたのかは現在では知るすべもなく、さまざまな推測がなされている。叶舒宪・田大宪(1995)では、以下のように言っている。四時、寒暑、日、月、星、水旱を六宗とする人も、水、火、雷、風、山、沢を六宗とする人も、星、辰、司中、司命、風師、雨師を六宗とする人も、天宗、地宗、四方を六宗とする人も、天皇、五帝を六宗とする人も、天、地、春、夏、秋、冬を六宗とする人もいる。各説で言っている名称は異なるが、いずれも「六」制に対する合理的な解釈や歴史的根源をさかのぼる証明はなされていない。

中国の古代では天子の車駕に“六馬”があり、“六龙”と言った。出かける時は“六馬”が飛ばし、威風堂々としていた。李白は《上皇西巡南京歌》において、“谁道君主行路难，六龙西幸万人欢。”と感嘆せざるをえなかつた。古代の天子はこの世の太陽として奉られていたが、天子が“六馬”に乗る制度は“六龙”神話と関係があると言われている。太陽神は歩くのを怠け、天上における毎日の行程には龍車に乗っていた。李白が《蜀道难》で、四字熟語“六龙回日”と詠じている。なぜ“五龙”や“七龙”を使わず、“六龙”のみが使われたかは神秘的な数字「六」の由来と関わり、古人の「六合」宇宙観の中にその解答を求めなければならない。

四つの方位に上と下を代表する天と地という二つの方位が加わって、六方の立体観念が生まれた。《淮南子·地形訓》には“地形之所载，六合之间，天地之内。”とある。太陽神は四方をあまねく照らすばかりか、その巨大な貫通力で上は天にも通じ、下は地にも達し、光が全世界を覆う。「六合」空間は太陽神の崇拜と切り離すことはできない。古代の祭祀儀礼では祭壇に神祇の模型、つまり方明を安置しなければならない。《仪礼·觐礼》⁴⁹に、“方明者，木也，方四尺，设六色，东方青，南方赤，西方白，北方黑，上玄，下黄。”とある。

この六色に塗られた巨大な六面体は祭壇に安置され、太陽の神が天地四方をあまねく照らすことを象徴し、それと同時に「六合」に宇宙の神秘的な意味を付与した。四字熟語“六合同風”は天下が統一され、世の中が平和に治まっており、人への教育と風俗を同じものにすることを指しており、「六合」は天と地と四方で天下のことを指している。

中国語における数字「六」にまつわる古来の思想は《易经》の中で数字「六」は順調を象徴するものとされているということと深く関係すると言えよう。これは《易经》にある「八卦」と関わっている。「八卦」は陰陽の爻を組み合せてできる八つの図形であり、それぞれの図形は「-」と「-」で三度重なることで生じるのである。「-」は数の「六」によって示されているので、三つの「-」が重なると「☰☰☰」になって、これを「坤卦」という。「坤卦」は数で表すと「六六六」になる。「六」は陰陽の陰に属するものであるから、「坤卦」は「純陰の卦」と言い、または「純六の卦」とも言う。《坤传》には“坤道其順乎”とあり、さらに《说卦传》には“坤、顺也”とある。従って、数字「六」は順調の象徴であると推測される。中国人は数字「六」というと、四字熟語“六六大順”を連想し、自分の願いがみな順調にきちんと叶えられるとされ、大変縁起がよいという意味を表わす。特に昔は結婚式を挙げたり、重大な商談をしたりする時、六日、十六日、二十六日など数字「六」がつく日が選ばれた。

これに対して、日本語においてはこのような数字「六」で順調の意を表す四字熟語はないようである。その原因を探ってみると、日本の古代文字学者は甲骨文字の発想から、仮に両手で数えたとして、手の指で五まで数えた場合、片手で一通り数え終えて、折り返しの二回目の一に当たる。新たに一本指を出すことから、数字「六」は新たに「再興する」ことにつながり、盛り上がるイメージがあると結論づける。このように日本語の世界では「六」という数は中国の古来の《易经》の思想から影響を受けた部分は相対的に希薄であり、言語上の運用諸相から見ると「万物は順調に」という意味は薄いようである。《易经》に関する数字「六」と比べると、どちらかというと、宗教からの影響がやはり多いようである。

日中両国において、数字「六」へのイメージに関しては共に宗教に影響されている。数字「六」は無限に豊富な神秘的構造を構成していると考えられる。密教は地、水、火、風、空、識を「六大」とし、それを世界を構成する基本的な元素と見なしている。「六大」には「六性」、「六用」、「六形」、「六色」があり、「六性」は堅、湿、暖、動、無碍、了別の六種の性質であり、「六用」は不壞、攝持、離散、長養、自在、識別の六種の業用であり、「六

形」は方、円、三角、半月、宝形、雑形の六種の形色であり、「六色」は黄、白、赤、黒、青、雑の六種の色である。仏教から見ると、世の中のすべての現象はこの六大を始め、「六性」、「六用」、「六形」、「六色」に収まる。「六大」があまねく全宇宙に行きわたっているのである。仏教において「六情」とは「目、耳、鼻、舌、身、意」のことであり、目根、耳根、鼻根、舌根、身根、意根を指す「六根」とも言われる。道教でも「六根」というものがあり、これはすなわち「見・聞・嗅・言・触・知」で、それぞれ眼根、耳根、鼻根、舌根、身根、心根のことを指す。伝統医学では「六極」というものがあり、具体的な分類の方法は医学書によって異なるが、「気極、血極、筋極、骨極、肌極、精極」とするのが最も有力であると思われ、いずれも疲労から生じる病症である。「六通」を表す意味は比較的多い。一つは体を深く修練する人の六種類の特殊能力いわゆる「眼通、耳通、鼻通、口通、身通、心通」のことを指している。また、涅槃に入る門は「六門」と呼ばれ、禅宗を確立したのは達磨をはじめとする「六祖」であるとされている。

宗教に関する数字「六」を含む四字熟語もいくつも見られる。

「六根清浄」は日中両言語に共通する宗教に関する四字熟語の一つである。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、知覚という人間の感覚を清らかにすることをいう。富士山などの靈峰に登るとき、「六根清浄」と唱えながら登る人がいる。これは山岳仏教の行者たちが山岳修行の際に唱えていた言葉であり、六根に具わる煩惱を淨めるためである。

中国における道家では六つの臓器は六つの神に支配されていると考えている。四字熟語“六神无主”は驚き、または慌てて思案が浮かばないことを喻えている。ここにおける数字“六”は「六つ」という意味を指しており、“六神”は六つの臓器の神(心臓、肺臓、肝臓、脾臓、腎臓、胆嚢をそれぞれ支配する神)という意味を指している。六神がいなくなると、人間の臓器を支配するものがいない。ここから類似性によって転じて、驚き、または慌てて思案が浮かばないことを指すのはメタファーが働いていると考えられる。一方、日本語では「胆を抜く」とか、「心はうつろです」などと訳すのが妥当であろう。

中国語の“身怀六甲”は《隋书·经籍志三》の《六甲贯胎书》を出典とする四字熟語である。女性が妊娠することを指している。中国における“天干地支”が六十の組み合わせから成立していることは知られているが、その六十の組み合わせの中に、「甲」を含んだ組み合わせは六つある。すなわち、甲子、甲戌、甲申、甲午、甲辰、甲寅であり、これを“六甲”という。“身怀”は「身を隠す、身を持つ」という意味を指している。伝説によると、この“六甲”的日は神様が天下万物を創造する日であり、女性が最も妊娠しやすい日でも

あり、最初の道教での安全祈願から、女性が妊娠することを“身怀六甲”というようになつたようである。

人が死ぬと生前の報いで地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道の「六道」の間を徘徊するといわれている。これを日中両言語に共通する四字熟語「六道輪廻」と呼ぶ。人が生きていくためになくてはならないもの、あるいは人の生死に関わることに「六」という数が用いられるのも、数字「六」の持つ安定性と無関係ではないであろう。この「六道」にそれぞれ配置された地蔵尊は四字熟語「六之地藏」という。「六道」の辻に立って導いてくれるのが「六道能化」の地蔵尊である。飯倉(2007)によると、死者の棺に銭を入れる風習は平安時代からあったようである。金属に宿る靈力で邪惡なものを寄せ付けないためだといわれている。中世になると、この風習が仏教の「六道輪廻」と結びつき、広く一般でも行われるようになった。仏教では死後、人は生前の行いに応じて「六道」を輪廻転生する宿命にあるという。墓地の入口などに立てられている六地蔵は死後の世界の救済者と考えられ、死者とともに埋葬する六道銭は六地蔵への賽銭、あるいは三途の川の渡し賃といわれた。日本においては現在でも「六道銭」を死者に持たせる風習は残っているそうである。これに対して中国においては「六道銭」ではなく、「紙銭」というのがあり、葬儀のとき燃やす。

宗教の世界を離れて科学と博打の世界に目を転じてみると、ここにも数字「六」がある。科学技術が興らないのは数字「六」と無関係でなかったからではないだろう。中国の数字は筆算が困難である。戦国時代に算木と呼ばれる木片を縦横に並べて計算する方法が使われた。数字「一」から数字「五」までを縦にならべ、数字「六」以上は横一本で五を表すことから、数字「六」になると並べ方が突如一変するのである。

「双六」は中国から日本に伝わったもので、遊びというより、さいころを用いることもあることから、むしろ博打である。さいころを振ることによって勝負の運命が決まるのである。さいころの多くは正六面体で、転がりやすいように角が少し丸くなっている。各面に数を示す一個から六個の小さな点が記されていて、対面の和は必ず七となる。言及すべきことは、さいころを「六么」、といい、「六赤」、「象六」ともいるのは、その形状がちょうど正六面体で、先に説明した「六合」をかたどった「方明」に似ているからということである。

一方、日本では「双六」は持統天皇の時代に禁止されたとされる。紙の「双六」が出来たのは江戸時代である。「六方者」がこの世のあぶれ者や無類の徒であるのも命を博打と感

じていたからに違いない。日本において数字「六」には男どもが目を血走らせる神秘的な力があると言える。にぞろ(二、二)の丁だとか、ぐに(五、二)の半だとか、ヤクザ映画の賭博場面は修羅場である。ここから出た四字熟語には「一カ八カ」、「一六勝負」などがある。

また、生活、民俗、習慣の面において、日中両言語における数字「六」を含む四字熟語も少なくない。中国語において、「六畜」は豚、牛、羊、馬、鶏、犬の六種のこと、「六畜兴旺」は各種の家畜がよく繁殖する意味である。人には「六親」がいる、「六親」について、日中両言語における四字熟語「六親不和」は《老子》第十八章“六亲不和，有孝慈；国家昏乱，有忠臣。”を出典とする四字熟語であるが、中国では現在はあまり使われていない。中国の改革開放政策における「一人っ子政策⁵⁰」が始まり、去年終了するまで人口規制によって、親戚が減少して、多くの親戚が一同に集まることもある程度少なくなったからだと考えられる。「六親不和」は「六親」の間の関係がよくないという意味から転じて、親族、親戚の間の関係がよくないという意味を指している。中国語の四字熟語“六亲不认”は親戚を他人とみなす、義理にかけること、または私情をはさまない、情に左右されない、公平無私であることを喻えている。日本語では「恩知らず、私情をはさまない、情に左右されない」などという。“六亲无靠”は頼るべき“六亲”がいないから転じて、頼るべき親戚がいない、天涯孤独であるという意味を指しており、シネックトキが働いていると考えられる。

中国語では一人前の男子ではない十五歳の者を熟語「六尺」、四字熟語「六尺之孤」などと表現する。日本では坪内逍遙の『当世書生氣質』⁵¹に「否六尺の男児をして能く其偉業をなさしむるは、屢々佳人の力にあるよ」という一節が見られる。まだ一人前にもならぬ男という意が残っているように思える。

また、日本語には「六反百姓」という四字熟語がある。昔、日本において自己所有の土地は「六反」イコール「六石」(米一石は大人一人の年間消費量)で、これでは自分と家族の米しか作れず、生活できない。そのため、ほかに土地を借りて耕作しなければならない小作農家を指した表現である。日本語における「六月殺人」とは陰暦六月に人を殺すことを指している。「六刑」は秋殺の理によって秋に死刑なども行われるのが普通だったが、六月はまだ夏であるから、この月に刑を行うのを天理に反するということを言った。「六月祓」もこれとなんらかの関係があるのかも知れない。一方、中国語における四字熟語“六月飞霜”は夏に霜が降るという意味を表し、冤罪を被った人の悲憤慷慨に神が感動したからだ

とされている。

中国で数字の「六」はめでたい数字でもあると思われる。それは中国語には「六」と「祿」の発音からの連想と考えられる。そのため、数字「六」を福祿喜慶の象徴として、古代には“六月回娘家”（六月六日の里帰り）の風習があった。すなわち、毎年六月六日に他家に嫁いでいる娘を呼び寄せ、ひとしきり歓待したのち、嫁ぎ先に再び送り出すのである。なぜこの日を選んだのであろうか。叶舒宪・田大宪(1995)には以下のような記載が見られる。春秋戦国時代に晋の宰相の狐偃は功が高いことを自負して、いつも六月六日の誕生日に豪華な宴会を催し、金を浪費し、人びとの怒りを買っていたが、あえて口にする者はいなかった。狐偃の娘婿の父親である趙衰が親身になって忠告したが、狐偃は強情で自分の意見を押し通し、忠告に耳を傾けなかつたばかりか、逆に趙衰を辱めたので、趙衰は恥じて死んでしまった。狐偃の娘婿は六月六日の狐偃の誕生日に狐偃を殺して父の仇を討とうとした。娘はそのことを知ると、実家に戻って狐偃にそのことを知らせた。狐偃は死の恐怖に直面してやっと目が醒め、心を入れ換えて生まれ変わった。それ以後、毎年六月六日に娘と娘婿を招いて団欒を楽しんだということである。そのことが庶民に伝わり、庶民がまねるようになり、長い年月が経つうちに風習になった。いまでも、山西、陝西両省一帯で見ることができる。

中国雲南省大理市の少数民族ペー族⁵²も数字「六」と深く関係する贈りものの風習がある。婚約の結納金は百六、二百六、六十、六十六で、結納の塩、砂糖、茶、酒などはみな「六」にちなんでおり、長寿の祝いや新築の祝いの贈りものも「六」と切り離せない。地元の人びとはこの種の風習の由来について、ある説では漢字の“有福有祿”的意味を取り、“祿”と“六”は同音であるので、古くから漢字を使っているペー族は「六」を“有福有祿”、“吉祥如意”的兆候とみなしていると言う。また、別の説では漢語の方言の“六”はペー族の「充分」という言葉と発音が似ているので、贈られたものの多少にかかわらず、「六」があれば充分なのだという。また、中国語における数字“六”は“路”と同音であり、ほかの数字と組み合わせることによって、縁起のよい意味合いになる。例えば、「163」は「一路生」、すなわち、人生という道において生気に満ち活力にあふれるの意味を寓し、また、「168」は「一路发(財)」、人生という道において、ずっと儲かるというようにメタファー的な意味を表わす。

これに対して、日本においては数字「六」は縁起がよい数字とされてはいないが、重視されている数字であると考えられる。

日本の暦では現在でも、まだ「六曜星」というものがある。先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口がそれである。結婚式シーズン真っ盛りのジューンブライドともなれば、大安吉日の結婚式場はすぐに予約で埋まってしまう。友引の日に葬式は避けるなどである。「六曜」の起源には諸説あるが、飯倉(2007)によると、中国唐代の暦算学者李淳風が説いた吉凶占い「六壬時課」が日本に伝わり、日本流にアレンジされて広まったというのが通説のようである。中国では戦いや争い事の日の吉凶を知るために用いられたと言われ、《三国志》で有名な諸葛孔明も戦いの際には参考にしたという。一方、日本では難しい暦法の知識がなくても、日の吉凶を知ることができたことから、「六曜」も併記した暦に大いに人気が集まつたそうである。また、日本において、六月六日は「お稽古始めの日」とされる。指折り数えると五までは親指から順に指を曲げて数えるが、「六」は小指を立てて数えることになるから、「子が立つのは六」と縁起担ぎをするようになり、芸事は六歳の六月六日に始めるのがよいと言われるようになったそうである。

VII 数字「七」



1. 日中両言語における数字「七」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「七」の意味を調べるためにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 6 項になる。

基本義：

- ① 数の名。六の次、八の前の数。

派生義：

- ② 七つ目、七番目。
- ③ 七度、ななたび。
- ④ 何度も、たくさん。
- ⑤ 人が死んだ時、死後七日目ごとに行う仏事。
- ⑥ ばくちうち、博徒の略称。

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典（修订版）》(2001)、《现代汉语辞海（全新版）》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 8 項になる。

基本義：

- ① 数目、六加一所得的数。

派生義：

- ② 序数、第七。
- ③ 七次。

- ④ 多数或多次。
- ⑤ 俗人死后每七日一祭，俗称“七”。
- ⑥ 珍贵的东西，奇迹。
- ⑦ 文体名，或称七体，为赋的形式之一。
- ⑧ 姓氏。

上から見られるように、日本語における数字「七」の意味は6項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が5項ある。これに対して、中国語における数字“七”的意味は8項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が7項ある。

以下で日中両言語における数字「七」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「七」のプロトタイプに関する比較対照

日中両言語における数字「七」のプロトタイプ、つまり数える数量的概念として、意味は一致している。

(1) だから口語短歌そのものは新しくもなんともないのだが、彼女の短歌は口語でありますながら、そのほとんどがきっちと五七五七七の定型リズムに乗っていて、字余り、手足らずほとんどない。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「サラダ記念日」』)

訳文：所以口语化短歌本身并不新鲜，但是俵万智的短歌虽然是口语化，可却大体合于五、七、五、七、七的定型节奏，几乎没有多字、减字之处。

(2) 不料，有一年，一连下了七七四十九天的雨，大水淹过坝顶，直泻下来，浇了满满一洼水。那坝子修得太堅牢，连个去处也没有，成了个大湖。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈小鮑庄〉』)

訳文：ところが、ある年、七七、四十九日雨が降り続いて、大水が堤防を越えてどつと流れこみ、堤内がすっかり水につかってしまった。堤防の造りがあまりにも堅牢だったので、水は逃げ場を失い、大きな湖となった。

(3) 勿論飛驒越と銘を打った日には、七里に一軒十里に五軒という相場、其処で粟の飯にありつけば都合も上の方ということになっております。『中日対訳コーパス「高野聖」』)

訳文：当然，当初既然标榜要翻过飞山的天险，已经估计到，有时走上七里才有一家，或走上十里路顶多有五家可以投宿，而且能捞上一顿小米饭吃，就算幸运了。

(4) 每个卦的卦辞是七言绝句一首，四行七言二十八字，但此二十八字在书页上并不印在一起。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈活动变人形〉』)

訳文：どの卦にもその意味をのべた卦辞が、七言絶句、つまり四行七言計二十八文字で記されている。

例(1)から例(4)までは数字「七」のプロトタイプ的意味に基づいた例である。例(1)と例(2)は基本的な数の名を表し、例(3)と例(4)は共に助数詞と連用する場合である。例(1)における「短歌」は韻文である和歌の一形式で五・七・五・七・七の五句体の歌体のことを指しており、中の「五七五七七」の各数字はその定型リズムのことを指している。例(2)における“七七四十九”は“七乘以七得四十九”（七かける七は四十九）という意味を指している。例(3)における“里”は尺貫法における長さの単位である。現在の中国では 500m であり、日本では約 3.9km である。例(4)において、“七言絶句”は漢詩で、七言の句が四句からなる近体詩のことを指している。元来は古詩、もしくは古樂府の長編の詩の中から連続する四句をとりあげて独立させ、その部分のみを朗誦する形にしたものである。

1.4 数字「七」の意味拡張に関する比較対照

派生義②から⑤までは、日中両言語において意味は共通している。

(5) 明治七年、佐川町にはじめて小学校が開校すると、富太郎は十二歳で入学します。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「ひとりっ子の上手な育て方」』)

訳文：明治七年，当佐川町开设了有史以来的第一个小学时，富太郎就去上学，当时他十二岁。

(6) 四奶奶早就预言过：“我们六姑奶奶这样的胡闹，眼见得七丫头的事是吹了。”(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「傾城之恋」』)

訳文：四奥様が早々と予言したところでは、「六妹があんなばかなことをしたんだもの、七妹のことはきっとだめね。」

例(5)と例(6)は共に派生義②に基づいて、数字「七」の順序、七つ目を表している例である。例(5)の「明治七年」は明治元年から数えて七番目の年のことを指している。例(6)における“七丫头”的“七”は親族関係の順序を表し、「七番目の妹」という意味を表している。

(7) 七生までたたる。(小学館『日中辞典』)

訳文：倒霉七辈子。

(8) 諸葛亮七擒七纵孟获。(大修館書店『中日大辞典』)

訳文：諸葛亮が孟獲を七たび捕らえ、七たび放つ。

例(7)と例(8)はいざれも日中両言語における数字「七」の派生義③に基づいて、「七たび」

という意味を表している例である。例(7)における「七生」は仏教用語であり、「この世に七度生まれ変わること」を指しており、例(8)における“七擒七纵”は「七たび捕らえ、七たび放つ」という意味を表す中国の有名な故事を出典とする四字熟語である。蜀の諸葛亮が南蛮王孟獲を七回捕らえては逃がすということを繰り返しつつ、南部を平定して行き、最後には二度と反乱を起こさないことを南蛮王孟獲に誓わせた故事から、敵を捕らえたり逃がしたりして、力を見せ付けて屈服させて見方にすることを喻えている。

(9) 色の白いは七難隠す。(小学館『日中辞典』)

訳文：一白遮百丑。

(10) 他一天天七病八痛的。(小学館『中日辞典』)

訳文：彼は体が弱く、病気がちです。

例(9)と例(10)は日中両言語における派生義④に基づいて、数字「七」は「何度も、たくさん、多い」という意味を表している例である。例(9)における「七難」はもともと仏教用語であり、「七種類の災難」という意味を指している。その七種類は各宗派により異なるが、「仁王経」では「日月失度難・星宿失度難・災火難・雨水難・惡風難・亢陽難・惡賊難」を指しており、「法華経」では「火難・水難・羅刹難・刀杖難・鬼難・枷鎖難・怨賊難」を指している。しかし、「色の白いは七難隠す」という場合の「七難」の数字「七」は「たくさん」の意味であり、「七難」は「たくさんの欠点」という意味を表している。具体的にはどのような欠点であるのかは定かではない。例(10)における“七病”は「病気がち、病気が多い、病気になりやすい」という意味を表している。この意味においては日中両言語における数字「七」の意味が共通している。

(11) 七七日の法要しなきや。(小学館『日中辞典』)

訳文：要做七七的法事。

(12) 亲大爷的孝才五七，侄儿娶妻，这个礼，我竟不知道。(大修館書店『中日大辞典』)

訳文：伯父さんが亡くなつてわずか三十五日なのに、その甥が祝言をあげるなんてそんな礼法はわたしはとんと知らんわい。

例(11)と例(12)は共に日中両言語における派生義⑤に基づいて、数字「七」の「人が死んだ時、死後七日目ごとに行う仏事」という意味を表している例である。仏教では亡くなつてから四十九日までの間、厳密には七日ごとに七回の法要を営む。命日も含めて七日目に行うのが「初七日」で、故人が三途の川のほとりに到着する日とされている。故人が激流か急流か緩流かのいざれを渡るかがお裁きで決まる大切な日であり、故人が緩流を渡れ

ることを祈って法要を営む。続いては「二七」、「三七」、「四七」、「五七」、「六七」。四十九日は、初七日から七日ごとに受けたお裁きにより、来世の行き先が決まる最も重要な日で、「七七日」と呼ぶ。故人の成仏を願い、極楽浄土に行けるように、家族や親族のほか、故人と縁の深かった方々を招いて法要を営む。そして、この日をもって「忌明け」となるので、法要後、忌明けの宴を開く。法要は忌日の当日に行うのが理想であるが、実際には参列者の都合もあり、最近は週末に行うことが多い。「七七日」は、それまで喪に服していた遺族が日常生活にもどる日でもある。

(13) 他可貧出七来了。(角川書店『中国語大辞典』)

訳文：彼は世にもまれな貧乏をすることになった。

(14) 你就是嚷出七来也不行。(角川書店『中国語大辞典』)

訳文：きみが人間ばなれした大声を出してもだめだ。

例(13)と例(14)は中国語における派生義⑥に基づいて、数字「七」の「珍しいこと、奇跡」という意味を表している例である。もともとはさいころの七の目を出すという、ありえないことを指している。これに対して、日本語における数字「七」はこの意味までは拡張されていないようである。

また、日本語における数字「七」の拡張義⑥には数字「七」はばくちうち、博徒の略称として使える。昔の物語には七半と四一半のばくちの記述が見える。花山院右大臣忠経公に仕える侍どもの間に「七半」というばくちが大流行し、大臣が禁じても聞き入れないほどで、みんな夜昼を問わず「七半」にふけったことがあったという。「七半」とは二個のさいころを同時に振り、目の合計が七になれば賭金の半分がやりとりされるものと言われている。これに対して、中国語における数字“七”はこの略称の意味まで拡張されてはいない。

中国語における数字“七”的拡張義⑦として、数字“七”は文体の一つである“七体”的略として使える。“七体”とは中国の韻文における賦⁵³の一つである。問答体で七段の構成となっているのが、その特徴である。代表作は枚乘の「七發」である。美文の名手である枚乘⁵⁴が孝王の太子を啓発するために作った「七發」は「七」と呼ばれる賦の新しい形式によるもので、同時代および後世の辞賦に大きな影響を与え、数字“七”も“七体”的略として使われるようになってきた。一方、日本語における数字「七」はこの意味まで拡張されていない。中国語における数字“七”的拡張義⑧には数字“七”は人の姓として使える。明の時代、中国には“七希賢”という人がいたそうである。日本語における数字

「七」は人の姓としては使われないようである。

なお、その他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

2. 日中両言語における数字「七」を含む四字熟語の全体像

ここでは、「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「七」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめてみる。

2.1 日中両言語における数字「七」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「七」を含む四字熟語が20例が取り上げられている。出典元によって分析して見ると、主に日本を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「七」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集からと、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分かれる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源としたものは「七転八倒」(黎靖德《朱子語類》より)、「七擒七縱、七縱七擒」(陳壽《三国志》より)の3例がある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集を起源としたものは「七十古稀」(杜甫《曲江》より)の1例のみである。

(3) 伝説、劇曲及び小説などの文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「七步之才、七步八叉、竹林七賢」(劉義慶等《世說新語》より)、「七種菜羹」(高濂《遵生八牋》より)、「七嘴八舌」(張鳳翼《灌園記》より)など、5例ある。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「七」を含む四字熟語

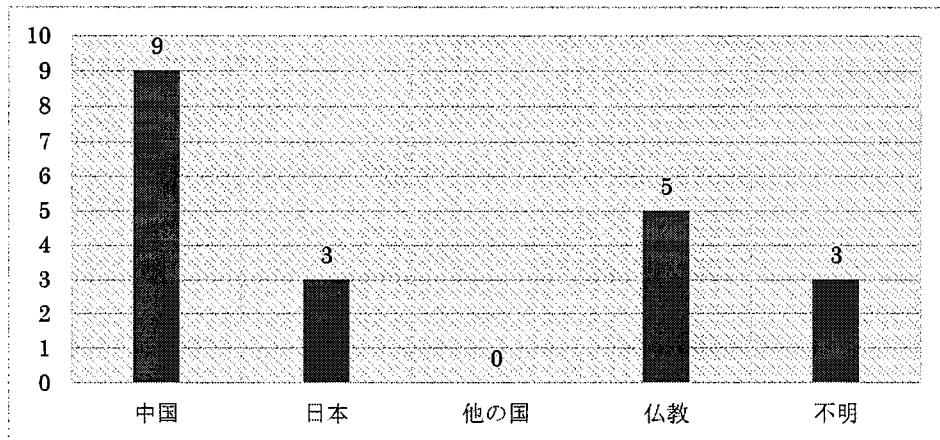
日本を起源としたものは「七重之膝」、「三汁七菜」と「七生報國」の3例がある。

2.1.1.3 仏教または仏教に関するものを起源とした数字「七」を含む四字熟語

仏教または仏教に関するものを起源としたものは「七里結界」、「七珍万宝」、「七堂伽藍」、「七難八苦」など、5例ある。

以下の図1は日本語における数字「七」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図1 日本語における数字「七」を含む四字熟語の出典元



上の図1からも分かるように、日本語における数字「七」を含む四字熟語の中で中国を起源としたものが9例で、総数の45%を占めている。中国以外の他国を起源としたものではなく、日本を起源としたものは3例で、15%、仏教または仏教に関するものを起源としたものは5例で、25%、また出典不明なものが3例となっている。日本語における数字「七」を含む四字熟語の中で、中国からのものが最も多く、総数の約半分を占めている。仏教または仏教に関するものを起源としたものも少なくない。

2.1.2 中国語の場合

商務印書館の《成语大词典》第二版(2012)に収録されている数字「七」を含む四字熟語は32例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語という三つに分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「七」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「七」を含む四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集から、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分かれる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍からのものは「七情六欲」(戴圣・《礼記》より)、「七尺之躯」(荀子・《荀子》より)、「七孔生烟」(《庄子・應帝王》より)、「七纵七擒、七折八扣」(陳壽・《三国志》より)など、10例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集からのものは「五痨七伤」(蘇軾・《東坡志林・論医和語》より)の1例のみである。

(3) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「七长八短」(施耐庵・《水滸傳》より)、「七老八十」(凌濛初・《初刻拍案惊奇》より)、「七死八活」(吳昌齡・《張天師》より)、「七言八語」(曹雪芹・高鶚・《紅樓夢》より)、「七拉八扯、烏七八糟」(吳趼人・《二十年目睹之怪現狀》より)、「七高八低」(吳承恩・《西游記》より)、「七病八痛」(李綠園・《歧路灯》より)など、16例ある。

2.1.2.2 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「七」を含む四字熟語

中国語における数字「七」を含む四字熟語の中で仏教または仏教関連のものを起源としたものは「七上八下、七上八落」(釋宗杲・《大慧普覺禪師語錄》より)、「七手八脚」(釋普濟・《五燈會元・育王德光禪師》より)、「七零八落」(釋普濟・《五燈會元・天衣懷禪師法嗣》より)など、5例ある。

以下の図2は中国語における数字「七」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「七」を含む四字熟語の出典元

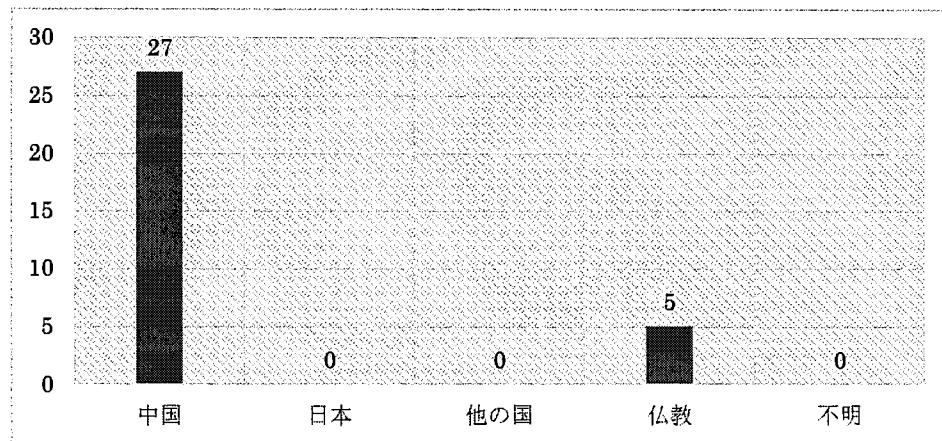


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が27例あり、総数の84.38%を占め

ている。仏教または仏教関連のものからのものは5例あり、15.63%となっているが、日本を起源としたもの、日中以外の国を起源としたものはない。中国語における数字「七」を含む四字熟語の出典元はほとんどが中国ということである。

2.1.3 数字「七」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「七」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数字「二」を含む四字熟語は出典元が幅広く、日本以外の国(特に中国)を起源としたもの、日本を起源としたもの、仏教または仏教関連のものを起源としたものといろいろある。それに対して、中国語は中国、仏教または仏教関連のものを起源としたもののみで、しかも中国語における数字「七」を含む四字熟語の総数の84.38%が中国を起源としたものである。

2.2 日中両言語における数字「七」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「七」の現れる位置考察

四字熟語における数字「七」の現れる位置とは四文字において、数字「七」は何番目の文字であるかということを指している。例えば、数字「七」の現れる位置が三番目のみの四字熟語とは「竹林七賢」、「五痨七伤」など、数字「七」の現れる位置が一番目と三番目共起の四字熟語とは「七縦七擒」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

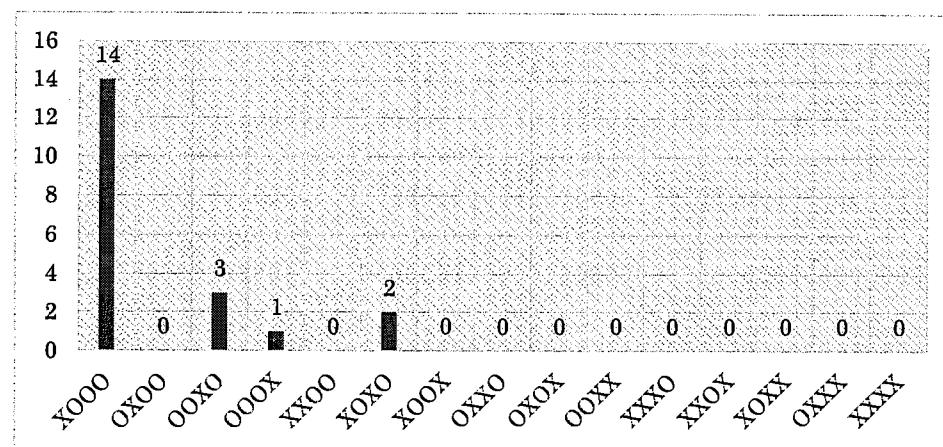
日本語の四字熟語における数字「七」の現れる位置については以下のとおりである。

- ・一番目のみ……14例
- ・三番目のみ……3例
- ・四番目のみ……1例
- ・一番目と三番目に共起……2例

個数からみれば、多くの場合、数字「七」が一番目のみの位置に現れ、総数の71.88%を占めている。以下、三番目のみに現れるものが15%、一番目と三番目に共起するものが10%、四番目のみに現れるものが5%をとっている。

図3に「X」、「0」によって数字「七」の現れる位置を表示する。「X」は数字「七」を表し、「0」は数字「七」以外の文字を表す。例えば、数字「七」が一番目と三番目に共起する四字熟語「七縦七擒」は「XOXO」で表示する。

図3 日本語の四字熟語における数字「七」の現れる位置



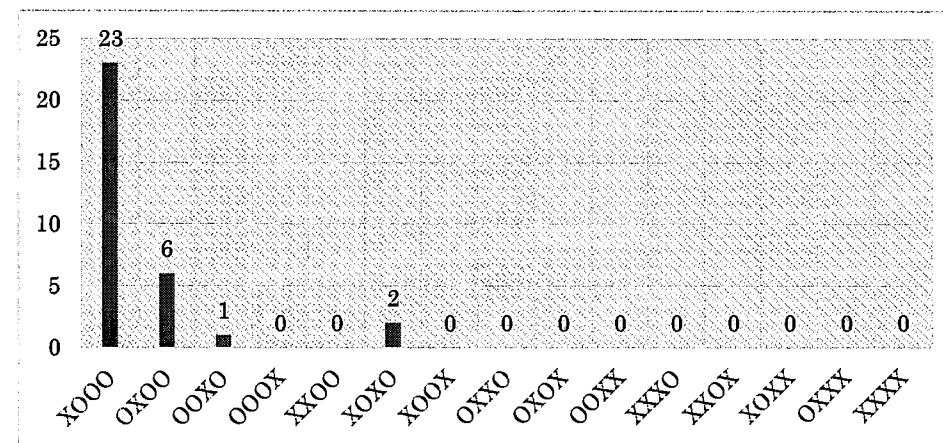
2.2.1.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「七」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……23 例
- ・二番目のみ……6 例
- ・三番目のみ……1 例
- ・二番目と四番目に共起……2 例

個数から見れば、数字「七」の現れる位置は大部分が一番目のみであり、総数の 71.88% を占めている。以下、二番目のみに現れるものが 18.75%、一番目と三番目に共起するものが 6.25%、三番目のみに現れるものが 3.13% となっている。詳細は図 4 の通りである。

図 4 中国語の四字熟語における数字「七」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「七」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「七」の現れる位置については中国語においても、日本語においても、一番目のみの位置に現れるケースが最も多い。また、日本語においては二番目のみに現れる四字熟語は一例もないが、中国語においては二番目のみに現れるものが少なくない。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係考察

日中両言語における数字「七」を含む四字熟語には他の数字と共起するケースが少くない。その中で、他の数字との共起関係がどのようなもので、どのような数字と共起する場合が最も多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係についての詳細は、図 5 のようにまとめる。

図 5 日本語の四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係

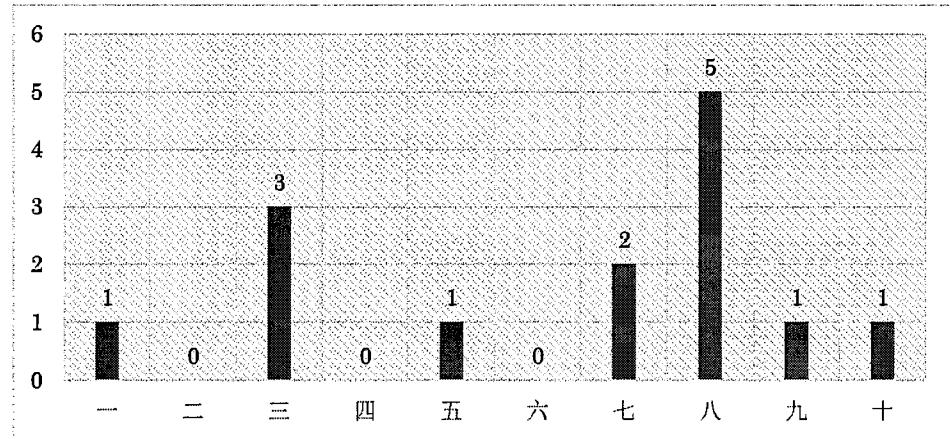


図 5 から分かるように、日本語における数字「七」を含む四字熟語の中には数字「七」が数字「七」自身と共に起するものが 2 例あり、総数の 14.29% を占めている。以下、数字「八」と共起するものが 5 例、35.71%、数字「三」と共起するものが 3 例、21.43%、数字「一」、「五」、「九」、「十」と共起するものが各 1 例、7.14%、数字「二」、「四」、「六」と共起するものはない。

割合からみると、日本語における数字「七」を含む四字熟語では数字「八」と共起するケースが最も多く、その次に数字「三」、「七」、「一」、「五」、「九」と「十」の順となる。

2.2.1.3 四字熟語における数字「七」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「七」の現れる位置については中国語においても、日本語においても、一番目のみの位置に現れるケースが最も多い。また、日本語においては二番目のみに現れる四字熟語は一例もないが、中国語においては二番目のみに現れるものが少なくない。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係考察

日中両言語における数字「七」を含む四字熟語には他の数字と共起するケースが少くない。その中で、他の数字との共起関係がどのようなもので、どのような数字と共起する場合が最も多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係についての詳細は、図5のようにまとめた。

図5 日本語の四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係

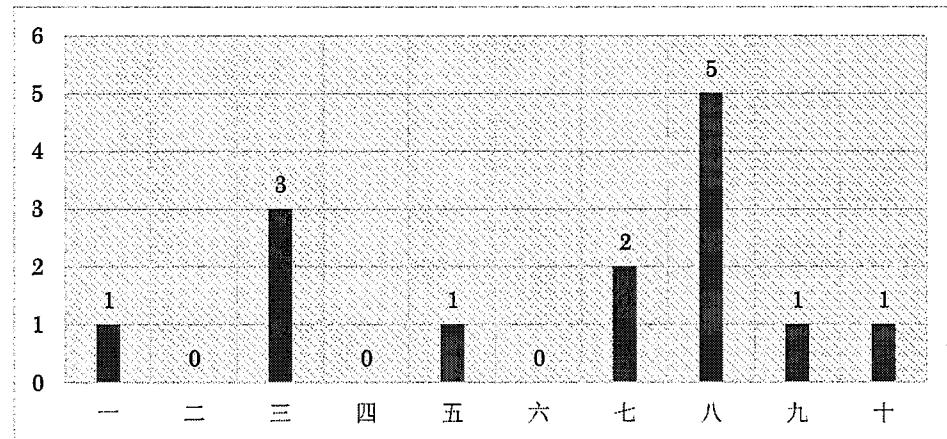


図5から分かるように、日本語における数字「七」を含む四字熟語の中には数字「七」が数字「七」自身と共に起するものが2例あり、総数の14.29%を占めている。以下、数字「八」と共起するものが5例、35.71%、数字「三」と共起するものが3例、21.43%、数字「一」、「五」、「九」、「十」と共起するものが各1例、7.14%、数字「二」、「四」、「六」と共起するものはない。

割合からみると、日本語における数字「七」を含む四字熟語では数字「八」と共起するケースが最も多く、その次に数字「三」、「七」、「一」、「五」、「九」と「十」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係についての詳細は図6の通りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係

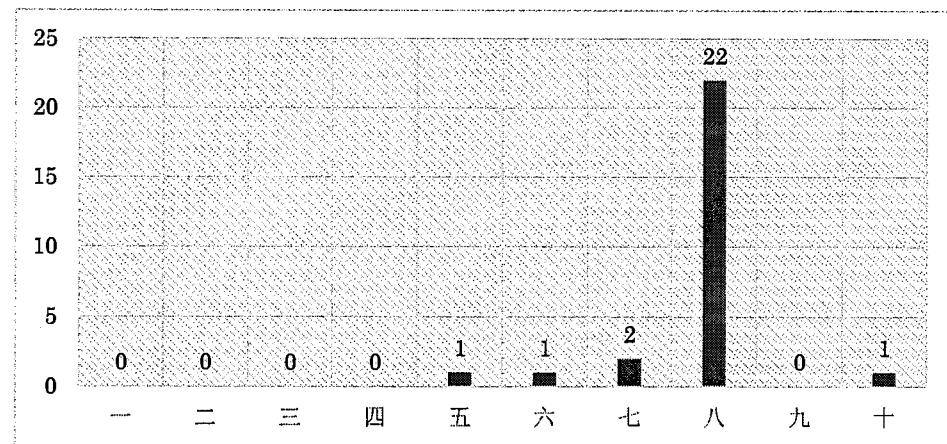


図6から分かるように、中国語における数字「七」を含む四字熟語の中には数字「七」が数字「七」自身と共に起するものが2例あり、7.41%を占めている。以下、数字「八」と共起するものが22例、81.48%、数字「五」、「六」、「十」と共起するものが各1例、3.70%、数字「一」、「二」、「三」、「四」、「九」と共起するものはない。

割合からみると、中国語における数字「七」を含む四字熟語は数字「八」と共起するケースが最も多く、次に数字「七」、「五」、「六」と「十」の順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「七」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは日中両言語の四字熟語において、数字「七」と他の数字と共に起して表す意味を分類し、提示し、さらに具体例もあげる。

(1) 数字「一」と共起する場合

A: 対比し、多いことを強調する

日：一死七生

中：なし

(2) 数字「三」と共起する場合

A: 割合

日：人三化七

中：なし

(3) 数字「五」と共起する場合

A: 多い

日：なし

中：五痨七伤

(4) 数字「六」と共起する場合

A: あらゆる

日：なし

中：七情六欲

(5) 数字「七」と共起する場合

A: 多い

日：七縱七擒

中：七擒七纵

(6) 数字「八」と共起する場合

A: 亂雜、揃っていない

日：七転八倒 七嘴八舌

中：七上八下 橫七豎八 亂七八糟 七嘴八舌 七零八碎 七拼八湊 七長八短

B: あらゆる、さまざま

日：七難八苦

中：七病八痛

C: 多い

日：なし

中：七折八扣

日中両言語における数字「七」を含む四字熟語において、数字「七」と他の数字との共起関係については数量から見ると、中国語においては数字「七」が数字「八」と共起するケースが圧倒的に多く、総数の 81.48%を占めており、数字「七」が他の数字と共起するケースは相対的に少ない。一方、日本語においては数字「七」が数字「八」と共起するケースが最も多いが、他の数字と共起するケースも少なくない。

数字「七」が数字「六」までと共起する場合については先に述べたので、ここでは数字「七」自体と共に起する場合からを見ることとする。数字「七」と数字「七」が共起する場

合、日中両言語において、表す意味が共通している。数字「八」と共起する場合には日中両言語において、共に「乱雜、揃っていない、あらゆる、さまざま」という意味を表す以外、中国語においては“七折八扣”（割引に割引を重ねる、金額を多くさっひくこと）のように「多い」という意味が見られるが、日本語においてはこのような使い方は見られないようである。

3. 数字「七」を含む四字熟語の対照考察

ここでは以下の三つに分類し、日中両言語における数字「七」含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「七」を含み、同義・類義を表すもの、②両言語とも「七」を含み、異義を表すもの、③一方の言語で「七」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「七」を含み、同義・類義を表すもの

七難八苦 // 八苦七難

(15) 克服了八苦七難。（吉林人民出版社《汉日词典》）

訳文：七難八苦を乗り越えた。

日本語における四字熟語「七難八苦」と中国語における四字熟語“八苦七難”は共に仏教用語を出典とする四字熟語である。様々な災難や苦難のこと、またはそのような多くの災難、苦難に出あうことを喻えている。ここにおける数字「七」と数字「八」は本当の「七つ」、「八つ」という意味ではなく、「多い」という意味を指している。もともと仏教における「七難」とは先にも述べたように七種の難であり、宗派によってその内容に多少の差異がある。最も有名のは『観音経』における「七難」で、一は大火の難、二は大水の難、三は羅刹難(風難)、四是刀杖難、五は惡鬼難、六は枷鎖難、七は怨賊難。また、『薬師経』における「七難」とは人衆疾疫難(伝染病が流行り、多くの人が死ぬ)、他国侵難(外国から侵略され、脅かされる)、自界叛逆難(内部分裂や同士討ち)、星宿変怪難(天体の運行に異変が起こる)、日月薄蝕難(日食や月食)、非時風雨難(季節はずれの暴風や強雨)、過時不雨難(雨期に雨が降らない天候不順)など。他にも大体似たような「七難」の定義がある。

「八苦」は先の四字熟語「四苦八苦」でも紹介したが、「生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎会、求不得苦、五蘊盛苦」のことを指している。日本においては戦国時代の山中鹿之助が三日月に「願わくば、我に七難八苦を与えたまえ」と祈ったことで有名になったそうである。

七歩之才 // 七步为诗

(16) 姜赵氏也会有声有色地讲曹植七步为诗，“本是同根生，相煎何太急”的故事，这样的故事倒是姐儿俩都爱听。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈活动変人形〉』）

訳文：婆ちやまも真に迫って、曹植が「元は同じ根から生まれしにせめぐ」という七步之才の物語をしてくれた。こんな話なら姉弟とも大好きです。

日本語における四字熟語「七步之才」と中国語における四字熟語“七步为诗”は共に中国の小説集『世説新語』⁵⁵を出典とする四字熟語である。三国時代、曹植⁵⁶の詩才に嫉妬した曹丕は七歩歩く間に詩を作ることができなければ処刑すると命じたところ、即座にすぐれた詩を作ったという故事から、文才に恵まれていること、またはすぐれた詩文を素早く作る才能があることを喻えている。

3.2 両言語とも「七」を含み、異義を表すもの

七転八起 ≠ 七上八下

(17) 七転八起の人生。（小学館『日中辞典』）

訳文：人生沉浮无定。

(18) 这时，她心里七上八下糟乱得很——表哥表嫂不在这里了，工作又毫无着落，回北平吧，连路费都不够，而且回去后又怎么办呢？（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈青春之歌〉』）

訳文：そうはいったものの、彼女の胸は、ちぢに乱れていた——従兄夫婦はここにはいない、仕事のめどもつかない、北平へ戻るといつても、旅費さえたりない、それに帰ったところで、それから先、いったいどうすればよいのだろうか？

(19) 可负责剧目的副团长的态度还是那么暧昧，同剧组的人也是七上八下，乐队的人也不那么积极。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈钟鼓楼〉』）

訳文：なのに、レパートリー担当の副団長の態度はまだ煮えきらないし、チームの人たちの考え方もまちまちで、灘し方もあり乗り気じゃないんだから。

日本語における四字熟語「七転八起」は七度転んでも八度起き上がる意から転じて、何度失敗してもくじけず、立ち上がって努力すること、または人生の浮き沈みが激しいことを喻えている。ここにおける数字「七」と数字「八」は「七回、八回」という具体的な回数ではなく、「多い」ということを示しており、失敗にめげずに何度もチャレンジする精神を表している。失敗しても、諦めなければ必ず成功（達成）できる。達成する楽しさや達成感を感じることも大切であるが、過程を楽しむ先にポジティブな結果があると思う。また、だるまは日本人に最も愛されている縁起物の一つと言ってよいであろう。にらめっこ、

だるまさんがころんだ、だるま落とし、雪だるまなど、幼いころから親しみ、転んでも転んでも、立ち上がってチャレンジすれば、必ず夢は叶うという。だるまの象徴は四字熟語「七転八起」だと考えられる。この「起き上がり」「七転八起」と言う特性から、次第に縁起物や必勝・合格だるまなどの祈願物とされるようになったそうである。

これに対して、中国語における四字熟語“七上八下”は明·施耐庵《水滸全傳》第二十六回“那胡正卿心头十五个吊桶打水，七上八下。”を出典とする四字熟語である。十五個のつるべを順番に使って水を汲むとすると、七個が上にある時は八個が下にあることから、(緊張・驚き・心配などで)気持ちが不安でびくびくして、居ても立ってもいられない、気持ちが複雑で落ち着かないこと、または各人の考えがまちまちであることを喻えている。日本語における四字熟語「七転八起」と文字を見れば似てはいるが、完全に異なっている意味を持つ四字熟語である。

七転八倒 ≠ 七颠八倒

(20) 附添婦の話では、病人は一日に一回必ず激痛に襲われて、このときばかりは苦しくてたまらなくなるらしい、七転八倒の苦しみをする。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「黒い雨」』)

訳文：据看护人说：病人每天必有一阵剧痛，就在这个时候，看上去显得痛苦难忍，有时痛得直打滚。

(21) 金閣が焼けたら、こいつらの世界は変貌し、生活の金科玉条はくつがえされ、列車時刻表は混乱し、こいつらの法律は無効になるだろう。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「金閣寺」』)

訳文：要是把金阁烧掉……这鬼世界就变了相。生活的金科玉律就会七颠八倒。火车时间也乱了套。这些鬼法律也就全部失效了。

日本語における四字熟語「七転八倒」は何度も転ぶことから、激しい苦痛などで、ひどく苦しんで転げまわることを喻えている。ここにおける数字「七」と数字「八」は数が多いことで、何度もという意味である。

一方、中国語における“七颠八倒”は”宋·釋道原《景德傳燈錄》卷二十一“問如何是佛法大師，師曰：‘七颠八倒。’”を出典とする四字熟語である。(物事のやり方が)混乱してむちやくちやであること、(行為・行動が)ひどく混乱して正常でないことを喻えている。ここにおける数字「七」と数字「八」には実質的な意味ではなく、呼応した形として、中に名詞または動詞(造語成分を含む)を入れて、回数や数量が多いこと、あるいは物事が秩序立

っていない、乱れていることを表す。

3.3 一方の言語で「七」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 七重之膝 // 低三下四

(22) まあ、頼み方次第だね、七重之膝くらいの気持ちでお願いするしかないよ。（黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》）

訳文：呀，那就让你吧，只有低三下四地求他了。

(23) 七重之膝を折って頼んだが、聞き入れてもらえなかつた。（黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》）

訳文：低三下四地央求也没答应。

日本語における四字熟語「七重之膝」は「七重之膝を八重に折る」ともいう。二重にしか折れない膝を七重に折り、さらに八重にも折りたいほどだということで、これ以上は折れないひざを無理にも折り曲げるぐらいにして詫びること、極めて丁重な詫び方、または相手に無理に頼み込むことを指している。マイナスの意味として使う場合が多く、ここにおける数字「七」は「多い、たくさん」という意味である。

これに対して中国語における似た意味を表す四字熟語としては“低三下四”がある。“低三下四”は清·吴敬梓《儒林外史》第四十回“我常州姓沈的，不是甚么低三下四的人家。”を出典とする四字熟語である。性格や態度が必要以上に媚びを含んで、卑しい程度、やたらにペこぺこする様子を指している。ここにおける数字“三”は特定の長さ“三尺”を指しており、“低三”は三尺ほど低くすること(土下座すること)を指している。数字“四”は「四肢」を指しており、“下四”は四肢がすべて地面に向かうことを指している。また、数字“三”と数字“四”が使われている理由について、もう一つの説がある。“三”プラス“四”は“七”になるが、中国の方言の一つ客家語では「七」の発音と「膝」の発音が似ているため、“低三下四” = “低七” = “低膝”(頭が膝より低い)という意味になり、マイナスの意味として多く使われている。

七生報国 // 永世報国

(24) 七度生まれ変わる、七生報国だ。（小学館『日中辞典』）

訳文：七度轮回，永世報国。

日本語における四字熟語「七生報国」は何度生まれ変わっても、国のために尽力することを喻えている。ここにおける数字「七」は数が多いことのたとえであり、「七生」は仏教用語であり、何度も生まれ変わるという意味であり、「報国」は国から受けた恩に報いるた

めに尽くすということを指している。この四字熟語は後醍醐天皇に仕えていた楠木正成⁵⁷が、足利尊氏の軍に敗れて弟(息子とも)と共に自刃した時に誓った言葉に由来するとされている。

これに対して、中国語における似た意味を表わす四字熟語としては“永世报国”がある。ここにおける“永世”は「限りのない長い年月に、永久に」という意味を表している。

七零八落 // 支離滅裂

(25) 敌军被我们打得七零八落, 溃不成军。(《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社)

訳文：敵軍はわれわれに打たれて、支離滅裂になり、潰滅して軍の形がなくなった。

中国語における四字熟語“七零八落”は宋・惟白《建中靖国续灯录》卷六：“无味之谈，七零八落。”を出典とする四字熟語である。(もともと整然としてまとまっていた物が)散り散りばらばらであること、(人々が戦争などで)散り散りばらばらになることを喻えている。ここにおける数字「七」と数字「八」も実質的な意味ではなく、呼応して回数や数量が多いこと、あるいは物事が秩序立っていない、乱れていることを表す。マイナスの意味として多く使われる。ちなみに、先に挙げたデータによると、中国語においては“七零八落”的ような「七（…）八…」型の四字熟語はマイナスの意味を表すものが多い。以下の“七长八短”、“七大八小”、“乌七八糟”などもその例である。

一方、日本語において、似た意味を表す場合は四字熟語「支離滅裂」を用いる。「支離」はばらばらなさまという意味であり、「滅裂」はきれぎれ、離ればなれ、ばらばらという意味である。

七长八短 // 長短不揃

(26) 这些板条七长八短的, 能做啥用? (《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社)

訳文：これらの長短不揃の木ぎれはなんの用をなすのか。

中国語における四字熟語“七长八短”は明・施耐庵《水浒传》第63回：“左有顾大嫂，右有孙二娘，引一千余军马，都是七汉，四山五岳人。”を出典とする四字熟語である。(人・物が)長かつたり短かつたりして不揃いであること、または高かつたり低かつたりしてまちまちであることを喻えている。ここにおける数字「七」と数字「八」も実質的な意味ではなく、呼応して物事が秩序立っていない、乱れていることを表す。マイナスの意味として多く使われている。

一方、日本語においては四字熟語「長短不揃」が中国語における四字熟語“七长八短”と同じ意味を持っている。多くの場合、例(26)のように置き換えられるようである。

七大八小 // 大小不揃

(27) 送到前线慰问的水果全都是上等的、整齐的，那些下等的、七大八小的，留给我们自己用了。（《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社）

訳文：前線へ送ったのはみな粒のそろった上等品の果物で、大小不揃の劣等品は自家用に残しておく。

(28) 好的都卖了，只剩下这些七大八小的了。（『中国語熟用成語 熟語』光生館）

訳文：いいやつは全部売れてしまった、残っているのはこれらの大小不揃のものだけだ。

中国語における四字熟語“七大八小”は清・刘鹗《老残游记》第十回：“有几张树根的坐具，却是七大八小的不匀。”を出典とする四字熟語である。大きかったり小さかったりして不揃いであることを喻えている。ここにおける数字「七」と数字「八」も実質的な意味ではなく、呼応して物事が秩序立っていない、乱れていることを表し、マイナスの意味として使われている。

一方、中国語における四字熟語“七大八小”と同じ意味の日本語における四字熟語としては「大小不揃」があり、多くの場合、例(27)と例(28)のように置き換えられるようである。

乌七八糟 // 滅茶苦茶

(29) 这个思潮不顶住，加上开放必然进来许多乌七八糟的东西，一结合起来，是一种不可忽视的、对我们社会主义四个现代化的冲击。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈邓小平文选第三卷〉』）

訳文：この思潮に持ちこたえないとすれば、そのうえ開放によって多くの滅茶苦茶なものが入り込むに決まっているのだから、この二つが結びつくと、われわれの社会主义の四つの現代化にとって軽視できない衝撃となるであろう。

(30) 我们治安组开展活动，让地主、反革命分子，这些乌七八糟的敌人，挨个地汇报思想，要对他们专政，要改造他们。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈金光大道〉』）

訳文：おれたち治安組の活動任務は、地主、反革命分子みてえな、どうしようもねえ敵の一人ひとりに思想状況を報告させて、奴らに独裁をしき、改造することだ。

中国語における四字熟語“乌七八糟”は老舍《四世同堂・偷生・四十糟中》“可是，整个的北平都在污七八糟中，她所知道的‘能人’们，都闭着眼瞎混。”を出典とする四字熟語である。めちゃくちゃである、乱れに乱れていること、または、（不衛生で）ひどく汚い、汚くて我慢できないこと、あるいは（不道徳で）ひどくいかがわしい、とてもまともでない

ことなどを喻えている。ここにおける数字「七」と数字「八」も実質的な意味ではなく、ただ呼応して物事が秩序立っていない、乱れていることを表し、マイナスの意味として多く使われる。

一方、“鸟七八糟”の一つの意味である「乱れに乱れていること」に対応する日本語の四字熟語としては「滅茶苦茶」がある。また、“鸟七八糟”的もう一つの意味である「ひどくいかがわしい、とてもまともでないこと」に対応する日本語の四字熟語はなく、例(30)のような日本語で表すのが相応しいと思われる。

4. 数字「七」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

《说文解字》には“七，阳之正也。从一，微阴从中邪出也。”とある。“阳之正”は数の「七」以内は陽で、「七」を過ぎると陰が始まるという意味である。これは夏までの半年が過ぎ、冬からの残り半年が始まるという意味である。つまり、「七」は年の境目として、一年を二分するために使われる。甲骨文の「七」は一本の縦の棒に横一本を付け加え、「十」と書かれているが、これは棒を切るという意味を表している。つまり、数字「七」は分割、切るなどの意味がある。そのため、中国人は数字「七」を忌み嫌う傾向があるようである。

しかし、忌み嫌うと同時に、《楚辞・招魂》の巫陽の招魂詞には「魂を戻らせる東、南、西、北、上、下、中」といった一連の方位があり、七番目の方位は「中」である。数字「五」の節に述べたように、平面空間において、数字「五」は「東、西、南、北」に対して、「中」という方位を指す。また、数字「六」の節には、平面空間の「東、西、南、北」は上の天と下の地と合わせて、立体空間の「六合」空間になると述べている。このように、数字「七」は立体空間における「中」という方位を指すようになった。古来、中国人は自分の国を中央の国と称し、「中」は伝統的な支配の中心、または中央集権の政治制度に高度に関わっていると考える。故に、中国人には数字「七」への畏敬も存在するようで、古代から農作業の時期を計るために天文学が発達し、北斗七星及びその中央にある北極星とに対する畏敬があることと関係すると考えられている。

これらの意識が言語に反映されている例としては先に述べた曹丕は七歩歩く間に詩を作ることから、文才に恵まれている喻えに関する“七步为诗”などがプラスの意味を表している以外、多くがマイナスの意味を表しているようである。

例えば、四字熟語“七窍生烟”は明・吴承恩《西游记》第78回：“忽闻此言，吓得三尺神散，七窍生烟。”を出典とする四字熟語である。ここにおける“七窍”は頭部の七つの穴、つまり、両目、両耳、鼻孔と口のことを指している。この七つの穴から煙が出るというの

は怒って頭から湯気を立てること、かんかんに怒ることを喻えている。また、四字熟語“七年之痒”は結婚して七年経つと刺激が少なくなり、結婚生活も淡白になるので、浮気など遊びをしたくなったりするなどの婚姻の状態を喻えている。

一方、日本においても数字には不思議なパワーが宿っていて運命を左右すると信じている人が少なくない。

日本人は仏様と神様とともに供えている。仏教と縁起の深い数字「七」は神秘的な数として、日本人に馴染み深い。日本語には数字「七」を含む仏教に関する四字熟語がいくつもある。例えば、「七仏」とは仏教の思想で「万物が七種類のものからなる、すなわち地、水、火、風、空、識、根」である。四字熟語「七難九厄」は人生の災難は七種類があると語っている。「七生」は七度生まれ変わることを指し、「七代」とも言う。四字熟語「七生報国」は七度生まれ変わっても国に忠誠を尽くすことを喻えている。仏塔は七階建てが多い。「七堂伽藍」という日本語の四字熟語があるが、「伽藍」とは本来、僧侶が集い修行する場という意味であり、それが転じて寺院、または寺院を構成する主要建造物を指すようになった。「七堂伽藍」と呼ばれるものは建造物が七つあるということではなく、諸設備がすべて整っている寺院のことをいう。日本における「七」という数字の宗教の根源を辿り、それをめぐる問題に関して、考察を進めていたのが川崎真治⁵⁸である。川崎真治（1991）において、「七枝樹二神」をポイントとして展開し、宗教の根源はウルク市から発した七枝樹二神思想であり、仏教以前の原始宗教における思想は中国の殷代末期から周代初期にかけて、日本の各地へ殷人の移動とともに渡來したということである。

また、日本はキリスト教の影響も受けたことから、数字「七」が「ラッキー7」として、好まれていると考えられる。16世紀にカトリック教会の司祭がキリスト教布教のため日本を訪れて、キリスト教の影響が日本で広がった。1868年明治維新後、日本は西洋文明を吸収し、西欧の文化を積極的に取り入れた。そこから、キリスト教は徐々に普及し、日本人の生活に深い影響をもたらすこととなった。数字「七」はキリスト教の經典『聖書』では神は七日間に世界万物を創った、イエスは七日に復活したなど、神秘的な数字であり、最も頻繁に出てくる数字である。西洋文化において、数字「七」は幸運をもたらす縁起のよい数字であり、七月七日に結婚する人が多い。その影響で日本人も数字「七」を縁起のよい数字として、崇めている。

そのため、日本語における数字「七」を含む四字熟語はプラスの意味を表すものが多く存在している。例えば、主君や親などの威光が大きく、その余光が長く及ぶことという意

味で使う「七之光り」、七珍と万宝、あらゆる種類の宝物という意味で使う「七珍万宝」、また、「七五三縄」、「七五三祝」、「七之福神」、「七種菜羹」などである。

「七五三縄」は神社などの神聖な場所に張られる縄を指している。「七五三祝」は子供の無事な成長を祝い、三、五、七歳で行われるお祝いである。「七五三祝」を十一月十五日に行うようになったのは江戸時代、五代将軍徳川綱吉が跡取りである徳松の髪置きの儀式を十一月十五日に行ったのがきっかけである。これを武家や町人、商人の富裕層が取り入れて十一月十五日に子供のお祝いをするようになった。庶民の間に浸透するのは更に後になってからだそうである。

「七之福神」とは恵比寿、大黒天、毘沙門天、弁財天、福禄寿、寿老人、布袋という福をもたらすとして日本で信仰されている七柱の神のことをいう。絵馬や額絵にして飾っている商店も多く、縁起のいいにぎやかな神様として庶民の人気を集めている。この「七之福神」、実はいくつもの国の神様の集合体である。調べてみると、日本の神様は恵比寿のみであり、イザナギノミコトとイザナミノミコトの子供だとされている。大黒天はインドのヒンドゥー教のシヴァ神の化身マハーカーラ神と日本のオオクニヌシノミコトが結びついたものである。毘沙門天は元はインドのヒンドゥー教のクベーラ神が、仏教に帰依した。弁財天はヒンズー教の神であり、福禄寿と寿老人は中国の道教から取り入れられたものである。布袋は唯一、実在の人物をモデルにしたものである。中国唐代の禪僧釈契此はいつも大きな袋をかついで喜捨を集めて回っていたので、布袋和尚と呼ばれるようになった。古くから日本には七福神の民間信仰が存在するのは日本人が数字「七」に親しみを持っていることと関係があるようである。

日中両言語における四字熟語には、数字「七」と「八」が共起する場合も他の数字より圧倒的に多い。例えば、日本語における「七転八起」は七度転んでも八度起き上がる意から転じて、何度も失敗してもくじけず、立ち上がって努力すること、または人生の浮き沈みの激しいことを喻えている。「七難八苦」は仏教用語で様々な苦難や災難のことを指している。このような四字熟語はプラスのあるいは中性的な意味を表すものが多い。

これに対して、中国語における数字「七」と「八」が共起する四字熟語にはマイナスの意味を表すものが多く見られる。先にも述べた“七零八落”、“乌七八糟”、“七长八短”以外、“七手八脚”は多くの人が一齊に慌ただしく動き回ることや皆が寄ってたかってやることを、“七嘴八舌”は(多くの人が)口々にやかましく言うことやべちゃべちゃがやがや言うこと、さらにあれこれてんてに言うことを、“杂七杂八”は非常に混雜したことやごたごた

入り乱れたこと、それにごちゃごちゃであること、またはがらくたのようなことを、四字熟語“七拼八湊”はあれこれ寄せ集めることやあちこちからかき集めること、さらにあちらこちらでやりくりすることをそれぞれ喻えている。数字「七」と数字「八」は隣り合った数字であり、しかも共に「たくさんの、多い」という意味を持っていることが、二つの数字が共起する四字熟語が多く存在する原因と考えられる。また、日本人が数字「七」を好むに対し、中国人は畏敬的な感情も持っている反面、忌み嫌う心理がある。このことから、中国語における数字「七」と数字「八」に元からある「たくさんの、多い」という中性的な意味の上に、マイナスのイメージを付与し、「物事が秩序立っていない、乱れているなど」のマイナスの意味となる新しい四字熟語が生み出されたと考えられる。

数字「六」が博打における表現に多用されているように、文学に関する表現に数字「七」が多用されている。

中国古代の文学作品には数字「七」を用いて命名したものが多く存在する。西漢の東方朔は早くから数字「七」を使った文人である。屈原の作品である「離騷」にならって、『楚辭』という文体の「七諫」を創作した。全文は七章に分かれている。屈原は「三諫」をしたが、数字「七」には亡くなった人を弔う意味があるため、「七諫」の「七」には屈原に対する哀悼の意が込められているとしたと解する人がいる。東方朔の「七諫」は内容では屈原の政治風刺の伝統を引き継ぎ、形式では七事にわたって問答形式で表現した賦体の文章を特徴としているが、数字「七」を賦体の一つにした人は実は東方朔ではない。西漢の辞賦家枚乘はまず「七發」を作った。「七發」の形式はその後の辞賦に極めて大きな影響を及ぼし、賦の一つの文体とみなされている。中国特有の文体に関する四字熟語“七諫七发”はここに由来すると考えられる。

一方、日本には「七」など七事にわたって問答形式で表現した賦体のような文体はないようである。しかし、短歌、俳句、和歌から童謡、民謡にいたるまで、日本語のリズムについて尋ねられると、「七音か五音か」の七五調と答える人が大半ではないだろうか。数字「五」の節で述べた五音に七音が続く二句がまとまりをなす「五七調」に対して、「七五調」とは七音に五音が続く二句がまとまりをなしている。上が長（七）、下が短（五）、重から軽へと続くため、軽妙な響きとなって、リズミカルな感じとなる。

また、漢代末期の文人の詩歌には「七哀」と題するものが少なくない。時が流れるにつれて、「七哀之詩」はやがて日中両言語に共通する四字熟語として人々に知られるようになった。この「七哀」になぜ「七」と名づけたのかについての定説はこれまでのところまだ

ない。蕭统（2012）には呂向は“七哀，谓痛而哀，义而哀，感而哀，怨而哀，耳目闻见而哀，口叹而哀，鼻酸而哀。”と注し、「七哀」を七種の哀情とみなしているのが最も有力な説と思われる。また、叶舒宪・田大宪(1995)では以下のように言っている。「七哀之詩」は庶民が死者を祭る儀礼に由来するようであり、いずれも死の悲哀を詠み、死後のもの哀しさを記したとされる。当時、流行していた挽歌体の「蒿里」（古人は人の死後の魂は蒿里に帰るとみなしていた）、「薤露」（人命の短いことを朝露にたとえた）と同類である。「七哀」という名も漢代末期に流行した喪葬習俗に関する四字熟語“七七奠祭”と直接関係があると指摘する学者もいる。

文学面だけではなく、風俗習慣の面において、数字「七」にはさまざまなもののが凝集されている。たとえば、少数民族ウイグル族、タール族、ハザク族などトルコ系民族は数字「七」に対して、時には恐れ、時には神秘的な力を感じることから、数字「七」に関する習俗やタブーがある。王珂の《突厥语民族神秘数字“七”、“四十”探源》によると、タール族は子どもが生まれて七日目にゆりかごの礼を行う。ウイグル族には子どもが生まれて七日目に名前をつける習慣や「水は七回かきまわせば清潔になる」という考えがある。

「水は七回かきまわせば清潔になる」という考えは「流水は腐らず」から来ており、飲用や身体を清めるときに使う。ウイグル族とハザク族は子どもが大きくなると、七代前までの祖先の名を覚えさせる。また、ハザク族には同一の部族内で結婚する場合には血縁関係が七世代以上前に絶えていなければならないという習慣や亡くなった人を自宅に置いておく間は遺体の足元に七つのランプを灯すなどの習慣がある。また、数字による占いでは「七」が大吉とされる。

一方、日本文化は絶えず西洋文化を吸収してきたことが数字文化にも反映され、数字「七」は日本人の好きな数字の代表となった。かつて日本で人気のあったタバコが「セブンスター」と名づけられたのはその証である。セブンにはラッキーセブンという言い方もあり、「スター」と一緒に新しい和製英語を作った。「セブンスター」はすべてが順調で、うまく行くという意味である。日本人が好きな野球で七回の攻撃は「ラッキーセブン」と呼ばれる。また、日本の茶道には「茶事七式」があり、茶室の庭園に置かれる石の数が奇数であり、普通「七」から「十五」まである。日本人はパチンコがとても好きである。パチンコなどにおいても、「七」がよい数字とされる。流行しているパチンコの「777」も有力の証である。「666」あるいは「888」ではなく、日本人の幸運の数字は「七」である。もし中国人にパチンコを発明させるとすれば、恐らく「六」あるいは「八」を選ぶだろう。

また、日本では一月七日に「七草がゆ」を食べる。和製四字熟語「七種菜羹」はここに由来すると言われる。正月七日に七草がゆを食べると、その年一年健康に過ごせると言われる。たしかに、七草のセリ、ナズナ、ゴ（オ）ギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロは栄養価が高く、滋養によいという意味において合理的な習慣である。しかし、飯倉（2007）によれば、実際は七草がゆを食べると健康になると言うのはどうやら後代になってから言われるようになったようである。古代中国では正月一日から鶏、狗、猪、羊、牛、馬の順に獸畜の占いを行い、七日には人を占った。そのため、七日は「人日」と呼ばれ、五節句の一つとなっているのである。この日、晴れなら吉、雨なら凶とされたようであるが、邪気を祓うために、七種の野草を入れた羹（汁物）を食べる習慣があり、それが日本に伝わったと考えられている。また、中国では一月七日に官吏の昇進を決めたことから、この日に薬草が入った汁物を食べて立身出世を願う習慣が、日本に入ってきて七草がゆを食べるならわしになったという説もある。

VII. 数字「八」



1. 日中両言語における数字「八」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「八」の意味を調べるためにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 7 項になる。

基本義：

- ① 数の名。七の次、九の前の数。

派生義：

- ② 八つ目、八番目。
- ③ たくさん、多い。
- ④ 八の字の形、また、眉をよせてその字の形にすること、顔をしかめた時の表情。
- ⑤ 漢字の部首名の一つ、はちがしら。
- ⑥ 隠語。盗人仲間、賭博仲間などで用いる。
- ⑦ 八兵衛の略。

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典（修订版）》(2001)、《现代汉语辞海（全新版）》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 8 項になる。

基本義：

- ① 数目、七加一所得的数。

派生義：

- ② 序数、第八。

- ③ 多，多数。
- ④ 八字形。
- ⑤ 部首名，八字部。
- ⑥ 表示大致的数。
- ⑦ 含八个原子，基团，或对应物。
- ⑧ 姓氏。

上から見られるように、日本語における数字「八」の意味は7項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が6項ある。これに対して、中国語における数字“八”の意味は8項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が7項ある。

以下で日中両言語における数字「八」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「八」のプロトタイプに関する比較対照

日中両言語における数字「八」のプロトタイプ、つまり数える数量的概念として、意味は一致している。

(1) 我们家电话五四一八八。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパスく活動変人形>』)

訳文：家の電話は五四一八八。

(2) 自動車の通る道をしばらく歩いてから細い道に曲ると、そのあたりには徳川時代の「箱根八里」という言葉がまだ生きているようだった。『中日対訳コーパス「青春の蹉跎」』)

訳文：下了公路往小道上走过去。这里相传德川时代叫“箱根八里”，此刻听起来仍感特别亲切。

例(1)と例(2)は数字「八」のプロトタイプ的意味に基づいた例である。例(1)は基本的な数の名を表し、例(2)は助数詞と連用する場合である。例(2)における“里”は、尺貫法における長さの単位である。「箱根八里」は明治34年発行の「中学唱歌」に初出の唱歌である。題名の「箱根八里」とは旧東海道で小田原宿から箱根宿までの四里と箱根宿から三島宿までの四里をあわせたものである。東海道では大井川とともに難所として知られていた。歌詞は2番まであり、1番に「昔の箱根」、2番に「いまの箱根」の副題がつけられている。広く知られている歌ではあるものの、中国における李白の詩『蜀道難』の一節「一夫當關萬夫開」が歌詞に織り込まれるなど、中国の典籍にみられる故事や古典、歴史に由来する事項が多く盛り込まれている。

1.4 数字「八」の意味拡張に関する比較対照

派生義②から⑤までは、日中両言語において意味は共通している。

(3) 伊三郎が出た留守は戸に鍵をかけられ、里子は八条の軒のひくい長屋の暗い奥で待っていたものだ。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「雁の寺」』)

訳文：伊三郎外出不在家时就把大门锁上，里子只能在八条轩低矮大杂院里等待着父亲归来。

(4) 人家苟兴旺早年是个八路军，后来又一直是大厂子里的工人，人家真有那无产阶级的思想觉悟，真能做到同志之间互相关心、互相爱护、互相帮助啊……(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈钟鼓楼〉』)

訳文：荀师傅は早くから八路軍に入っていた。その後ずっと大工場で働いてきたのだ。プロレタリアとしての自覚が高いから、同志として、心からいたわってくれ、助けてくれているのだ……

例(3)と例(4)は共に派生義②に基づいて、数字「八」の順序、八つ目を表している例である。例(3)は条里制で位置を表している。条里制とは日本において、古代から中世後期にかけて行われた土地区画(管理)制度である。条里の基本単位は約 109m 四方の正方形である(菱形や長方形の場合もある)。古代日本では約 109m は 1 町に当たり、約 109m 四方の面積も同様に 1 町と呼ばれていた。この 1 町四方からなる基本単位を「坪」と呼称した(現在でも使用される坪とは異なる)。基本単位である坪を 6×6 に並べた区画(つまり 6 町四方の正方形)は「里」と呼ばれ、里の横列を「条」、里の縦列を「里」とし、任意に設定された基点から、縦方向には一条、二条、三条と、横方向には一里、二里、三里というように、位置をはっきりと表示することが可能となる。従って、ここにおける「八条」は縦方向における八つ目の条を指しているのである。例(4)における“八路軍”は「中国国民革命軍第八路軍」の略であり、中の数字“八”は順序を表し、「第八路の軍」という意味を表している。1937 年 8 月、中国工農紅軍が国民革命軍第八路軍として国民政府指揮下に編入されたことからこの名称で呼ばれた(のちに国民革命軍第十八集團軍と改称されたが、八路軍の通称は残った)。現在の中国人民解放軍の前身のひとつである。

(5) 私の自由になったのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「こころ」』)

訳文：我获得解放，已是八重桜凋谢的枝头，不知不觉抽出烟霞般嫩叶的初夏时节了。

(6) 家乡不是出一种掉到地上就裂就碎八瓣的“酥梨”吗，秋后用这种酥梨熬汤，加上冰

糖，熬到浓如蜜汁的程度，就叫做秋梨膏，人们相信这种秋梨膏有润肺祛痰止咳的药效。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈活动变人形〉』）

訳文：田舎に産するサクサクした梨、熟れて枝から落ちると粉々に碎け散るあの梨を、初冬に入ってから水と冰砂糖でトロトロ煮込み、水飴状に仕上げたもので、咳止めの特効薬とされている。

(7) いささ小川の水になりとも、何処ぞで白桃の花が流れるのをご覧になつたら、私の体が谷川に沈んで、ちぎれちぎれになったことと思え。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「高野聖」』）

訳文：倘若您在什么地方的小溪的水里见到白桃花在漂流，您就只管认为我的身子沉到溪流里，碎成八瓣儿了。

例(5)、例(6)と例(7)はいずれも日中両言語における数字「八」の派生義③に基づいて、「たくさんの、多い」という意味を表している例である。例(5)における「八重桜」は花びらが重なって咲く桜の総称で、特定の品種ではない。花弁の枚数は300枚近くに達するものもあるという。例(6)と例(7)における“碎八瓣”と“碎成八瓣儿”は「ちぎれちぎれになった」という意味を指しており、ここにおける数字“八”も「たくさんの、多い」という意味を表している。

(8) 形のいい唇ながら、小鼻の下から唇の両端へ線をひいて八の字を描く笑い皺も淋しい。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「越前竹人形」』）

訳文：嘴唇生得很端正，但是从小小的鼻子下面，向两边唇角各引出了一条纹路，刻着八字形皱纹的微笑也颇凄凉。

(9) 八字的眉毛，绿豆眼儿，又摊上干的这行当，一辈子没人跟！（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈丹凤眼〉』）

訳文：八字眉毛に緑豆のような小さな眼、おまけにこんな商売やってりや一生来てくれる人なんかいやしないさ。

例(8)と例(9)は日中両言語における派生義④に基づいて、数字「八」は眉をよせてその字の形にすること。顔をしかめた時の表情などをいう。時には「八の字結び」という形として使う場合もあり、結び目がアラビア数字の8の形に似ていることからその名がついたのである。この意味においては日中両言語における数字「八」の意味が共通している。

(10) 你想想吧，这要是一张千儿八百元的账单，那可怎么办？（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈盖棺〉』）

訳文：やれやれ、万一、これが一千元などという高額の請求書だったらどうしよう？

(11) 少说也有百儿八十，点头之交，那就数不清了。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパスく上海的早晨』）

訳文：控え目に言っても、八、九十人はいますが、会釈するていどの知り合いとなると、数がはつきりしません。

例(10)と例(11)は中国語における派生義⑥に基づいて、数字「八」の「大体の数字を示す」という意味を表している例である。これに対して、日本語における数字「八」はこの意味までは拡張されていないため、日本語に訳す場合には例(10)のように、“千儿八百元”は意味的に「一千元など」と訳すとか、例(11)のように、“百儿八十”は意味的に「八、九十」と訳すより仕方ない。類似した表現に“万儿八千”（一万かそこら）、“块儿八七”（一元かそこら）、“十头八个”（十くらい、十足らず）などがある。

また、日本語における派生義⑥について、数字「八」は隠語の意味を持っている。盗人仲間で、相手を呼ぶ時の仮の名として用いて、賭博仲間の間で花札賭博の一種を八八と呼ぶことがある。日本語における数字「八」の派生義⑦について、「八兵衛」という人名はありふれた気のきかない田舎者という擬人名で、好色者とか裸男のことであり、また飯盛女のことにも用いられた。幼児の盆の窓に少しだけ髪を剃り残しておくことを「八兵衛」とか「権兵衛」とか呼ぶのは優秀であることを隠す、言わば一種の反語的な使い方である。これに対して、中国語において、数字「八」はこの二つの意味まで拡張されていないようである。

中国語における派生義⑦について、数字「八」は“含八个原子，基团，或对应物”という意味を持っている。例えば、“八乙酸酯”（オクタアセチルスクロース）である。中国語における数字“八”的拡張義⑧には数字“八”は人の姓として使える。漢の時代、西域に“八滑”という人がいたが、かれは後に班勇という者から親漢侯となるように薦められたそうである。一方、日本語において、数字「八」はこの二つの意味まで拡張されていないようである。

なお、その他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

2. 日中両言語における数字「八」を含む四字熟語の全体像

ここでは「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「八」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめて

みる。

2.1 日中両言語における数字「八」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「八」を含む四字熟語が27例取り上げられている。出典元によって分析してみると、主に日本を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「八」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集から、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分けることができる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源とした四字熟語は「四通八達」(程本《子华子·晏子问党》より)、「七転八倒」(黎靖德《朱子语类》より)、「八元八愷」(左丘明《左传》より)、「八字打開」(朱熹《与刘子澄书》より)など、7例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集を起源とした四字熟語は「四荒八極」(白居易《新乐府·八骏图》より)、「八面玲瓏」(马熙《开窗看雨》より)の2例がある。

(3) 伝説、劇曲及び小説などの文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品を起源とした四字熟語は「七步八叉」(刘义庆等《世说新语》より)、「七嘴八舌」(张凤翼《灌园记》より)の2例がある。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「八」を含む四字熟語

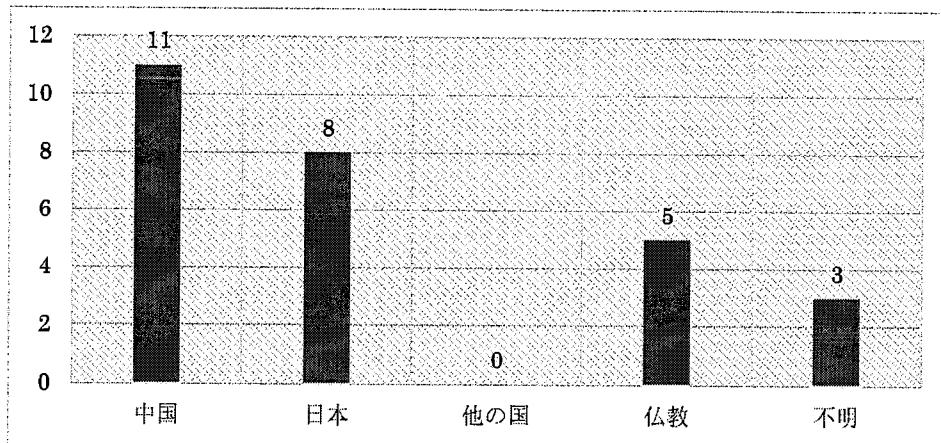
日本を起源としたものは「四苦八苦」、「八方美人」、「八面美人」、「八咫之鏡」、「八紘一宇」(《日本書紀》より)、「岡目八目」など、8例ある。

2.1.1.3 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「八」を含む四字熟語

仏教または仏教に関連するものを起源としたものは「八面六臂」、「七難八苦」、「八大地獄」、「八相成道」、「百八煩惱」など、5例ある。

以下の図1は日本語における数字「八」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図1 日本語における数字「八」を含む四字熟語の出典元



上の図1からも分かるように、日本語における数字「八」を含む四字熟語の中で中国からのものが11例で、総数の40.74%を占めている。以下は日本からのものが8例で、29.63%、仏教または仏教に関するものからのものが5例で、18.52%、また出典不明な四字熟語は3例ある。日本語における数字「八」を含む四字熟語の中で中国からのものが最も多く、日本を起源としたものも少なくない。

2.1.2 中国語の場合

商務印書館の《成语大词典》第二版(2012)に収録されている数字「八」を含む四字熟語は40例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関するものを起源とした四字熟語という三つに分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「八」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「八」を含む四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集から、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分けることができる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍からのものは「四时八节」(房玄龄等《晋书》)、「四通八达」(程本《子华子·晏子问党》より)、「七折八扣」(陈寿《三国志》より)など、5例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集からのものは「八面玲珑」(马熙《开窗看雨》より)など、2例ある。

(3) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「四平八穩、七長八短」（施耐庵《水滸傳》より）、「七老八十」（凌濛初《初刻拍案惊奇》より）、「七死八活」（吴昌龄《张天师》より）、「七言八語」（曹雪芹・高鹗《红楼梦》より）、「七拉八扯、烏七八糟」（吴趼人《二十年目睹之怪现状》より）、「七高八低」（吴承恩《西游记》より）、「亂七八糟」（吴趼人《发财秘訣》より）、「八拜之交」（王实甫《西廂記》より）、「威面八方」（郑德辉《三战吕布》より）など、23例ある。

2.1.2.2 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「八」を含む四字熟語

中国語における数字「八」を含む四字熟語の中で、仏教または仏教関連のものを起源としたものは「三灾八難」（《鼓刹丛抄》より）、「四方八面、四面八方」（釋普濟《五灯会元·鎮州普化和尚》より）、「七上八下」（釋宗果《大慧普覺禪師語錄》より）、「七手八脚」（釋普濟《五燈會元·育王德光禪師》より）、「七零八落」（釋普濟《五燈會元·天衣懷禪師法嗣》より）、「半斤八兩」（釋惟白《建中靖國續燈錄·法恭禪師》より）など、10例ある。

以下の図2は中国語における数字「八」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「八」を含む四字熟語の出典元

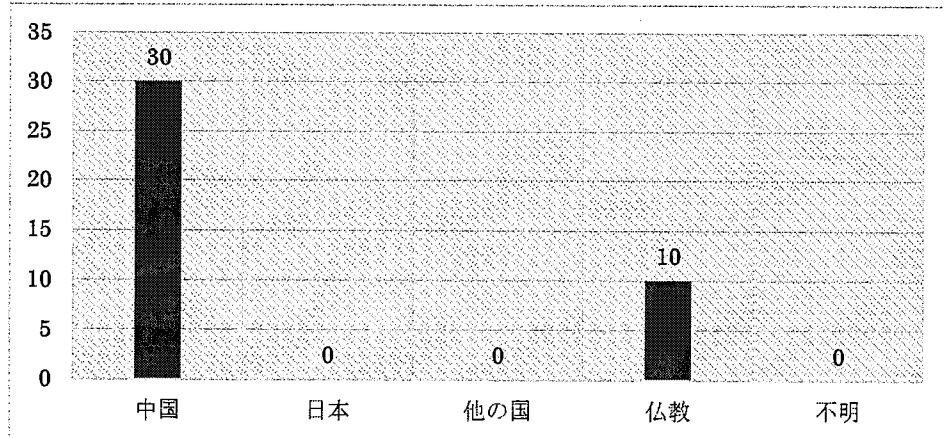


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が30例あり、総数の75%を占めている。仏教または仏教関連のものを起源としたものが10例で、25%となっているが、日本を起源とした四字熟語や日中以外の国を起源とした四字熟語はない。中国語における数字「八」を含む四字熟語の出典元は大部分が中国となっている。「一」から「十」までの他の数字を含む四字熟語より、仏教または仏教関連するものを起源としたものも少なくない。

2.1.3 数字「八」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「八」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数字「八」を含む四字熟語のほうは出典元が幅広く、中国を起源としたもの、日本を起源としたもの、仏教または仏教関連のものを起源としたものと多様である。これに対して、中国のほうは中国を起源としたものと仏教または仏教関連のものを起源としたものしかない。

2.2 日中両言語における数字「八」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「八」の現れる位置考察

四字熟語における数字「八」の現れる位置とは四文字において、数字「八」が何番目の文字であるかということを指している。例えば、数字「八」の現れる位置が三番目のみの四字熟語とは「子建八斗」、「七嘴八舌」など、数字「八」の現れる位置が一番目と三番目共起の四字熟語は「八元八愷」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

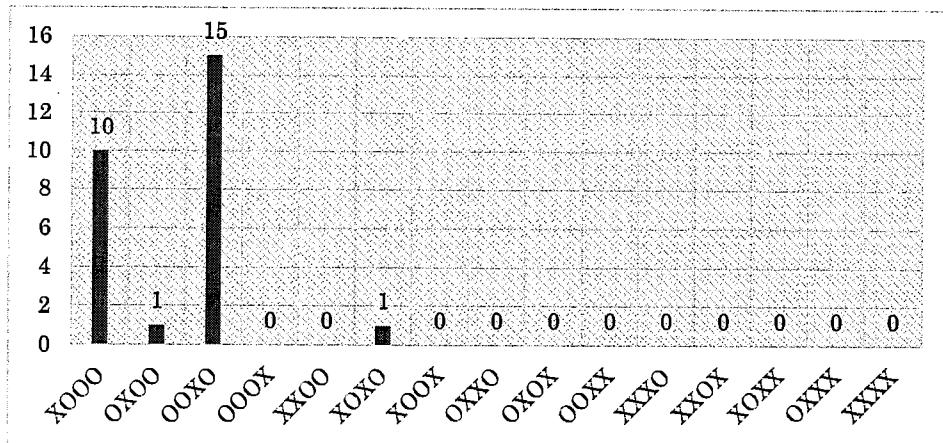
日本語の四字熟語における数字「八」の現れる位置については以下のとおりである。

- ・一番目のみ……10例
- ・二番目のみ……1例
- ・三番目のみ……15例
- ・一番目と三番目に共起……1例

個数からみれば、数字「八」の現れる位置は大部分が一番目のみと三番目のみであり、それぞれ総数の 37.04% と 55.56% を占めており、合わせて総数の 92% に達している。二番目のみ及び一番目と三番目に共起するものが共に 3.7% となっている。詳細は図 3 の通りである。

図 3 に「X」、「0」によって数字「八」の現れる位置を表示する。「X」は数字「八」を表し、「0」は数字「八」以外の文字を表す。例えば、数字「八」は一番目の位置と三番目の位置に共起する四字熟語「八元八愷」は「XOXO」で表示する。

図 3 日本語の四字熟語における数字「八」の現れる位置



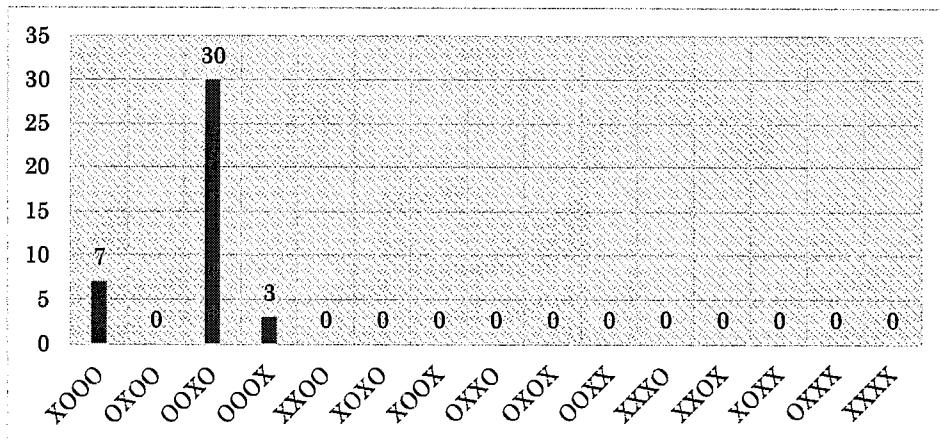
2.2.1.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「八」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……7例
- ・三番目のみ……30例
- ・四番目のみ……3例

個数から見れば、数字「八」の現れる位置は大部分が三番目のみであり、総数の75%を占めている。以下、一番目のみに現れるもの17.5%、四番目のみに現れるもの7.5%となっている。詳細は図4の通りである。

図4 中国語の四字熟語における数字「八」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「八」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「八」の現れる位置については中国語においても、

日本語においても、三番目のみの位置に現れるケースが最も多く、次は一番目のみの位置に現れるケースである。

また、日本語においては一番目の位置と三番目の位置に共起するケースが1例あり、これに対して、中国語においては二つの位置に共起するケースはない。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「八」と他の数字との共起関係考察

日中両言語における数字「八」を含む四字熟語には他の数字と共起するケースが少なくない。その中で、他の数字との共起関係はどうなるのか、どのような数字と共起する場合が最も多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「八」と他の数字との共起関係に関する詳細は図5にまとめる。

図5 日本語の四字熟語における数字「八」と他の数字との共起関係

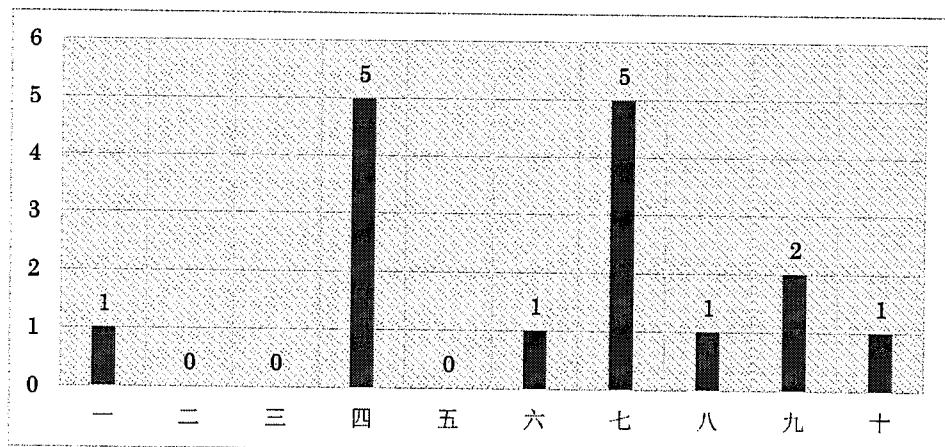


図5から分かるように、日本語における数字「八」を含む四字熟語の中で、数字「八」が数字「八」自身と共に起するものが1例あり、総数の6.25%を占めている。数字「四」、「七」と共起するものが共に5例で31.25%、数字「九」と共起するものが2例、12.50%、数字「一」、「六」、「十」と共起するものがそれぞれ1例、6.25%となっている。

割合からみると、数字「四」、数字「七」と共起するケースが最も多く、次に数字「九」、「一」、「六」、「八」と「十」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「八」と他の数字との共起関係に関する詳細は図6の通

りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「八」と他の数字との共起関係

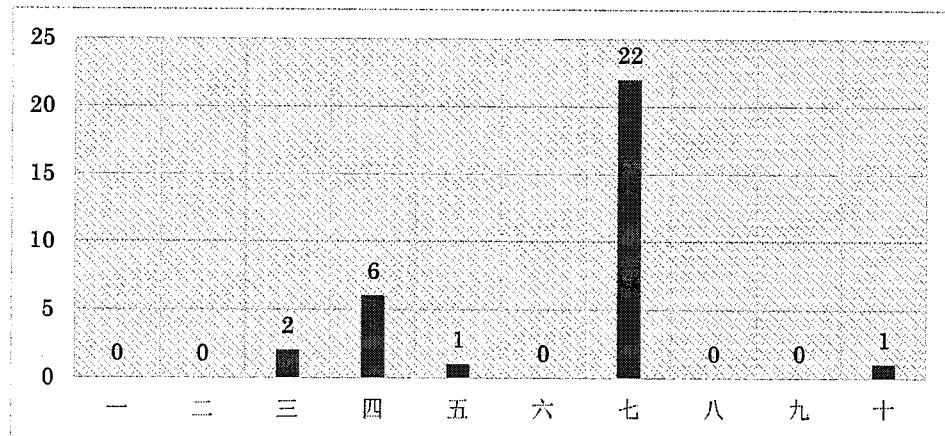


図6から分かるように、中国語における数字「八」を含む四字熟語の中には数字「八」が数字「八」自身と共に起するものはない。数字「三」と共起するものが2例で、総数の6.25%、数字「四」と共起するものが6例で、18.75%、数字「五」と共起するものが1例で、3.13%、数字「七」と共起するものが22例で、68.75%、数字「十」と共起するものが1例で、3.13%、数字「一」、「二」、「六」、「八」、「九」と共起するものはない。

割合から見ると、数字「七」と共起するケースが最も多く、次に数字「四」、「三」、「五」と「十」の順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「八」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは日中両言語の四字熟語において、数字「八」と他の数字と共に起して表す意味を分類し、提示する。具体的な例もあげる。

(1) 数字「一」と共起する場合

A: 全体、総体

日：八紘一字

中：なし

(2) 数字「三」と共起する場合

A: 多い、さまざま

日：なし

中：三灾八難 八難三灾

(3)数字「四」と共起する場合

A: 各方面

日：四方八方

中：四面八方 四通八达 四平八稳

B: あらゆる

日：四苦八苦

中：四时八节

C: 程度の高さ

日：なし

中：四碟八碗 四停八当

(4)数字「五」と共起する場合

A: さまざま多彩

日：なし

中：五花八门 五行八作

(5)数字「六」と共起する場合

A: 多い

日：八面六臂

中：なし

(6)数字「七」と共起する場合

A: 亂雜、揃っていない

日：七転八倒 七嘴八舌

中：七上八下 橫七豎八 亂七八糟 七嘴八舌 七零八碎 七拼八湊 七長八短

B: あらゆる、さまざま

日：七難八苦

中：七病八痛

C: 多い

日：なし

中：七折八扣

日中両言語における数字「八」を含む四字熟語において、数字「八」と他の数字との共起関係については中国語においては数字「八」が数字「七」と共起するケースが非常に多く、

総数の 68.75%を占めている。日本語においても、数字「八」が数字「七」と共起するケースが多く、総数の 31.25%を占めている。

3. 数字「八」を含む四字熟語の対照考察

ここでは以下の三つに分類し、日中両言語における数字「八」含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「八」を含み、同義・類義を表すもの、②両言語とも「八」を含み、異義を表すもの、③一方の言語で「八」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「八」を含み、同義・類義を表すもの

八百八品 // 五行八作

(12) 渡世は八百八品、なにができるかゆっくり考えていいよ、焦らないで。（黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》）

訳文：世间有五行八作，能做什么慢慢想就好，别着急。

日本語における四字熟語「八百八品」は熟語「渡世は八百八品」から省略され、生計を立てる基になる世間の稼ぎ(商い)には数え切れないほどたくさんの種類があることを喻えている。「身過ぎは八百八品」とも言う。また、生計を立てる手段は多種多様であることから、一つに執着して苦しまず、視野を広くするほうがよいという励ましの意味もある。自分が考える世間体で自分の道を決めるのは人の顔色を見て道を決めるのと同じである。もっと柔軟に、もっと多様に、もっと身近な人と一緒に納得できる道を選ぼうという人を励ます場合に使う四字熟語である。ここにおける数字「八」と「八百」は共に物事の数が多いことを表している。日本語においては「八百」と「八」を組合せ、物事の数が多いことを表す例は他にもいくつかある。例えば、江戸の「八百八町」、大阪の「八百八橋」などである。江戸には町の数が多く、大阪には川や掘割にかかる橋が多かったことから、江戸と大阪が広いことを表している。

一方、中国語における四字熟語“五行八作”は老舍《龙须沟》第一幕：“五行八作，就沒你这一行。”を出典とする四字熟語である。米屋、魚屋などの五つの小商いや大工、豆腐作りなどの八つの仕事場から、世の中にさまざまな商い、さまざまな職業があることを喻えている。ここでは数字「五」と数字「八」を組合せ、物事の数が多いこと、または種類が多いことを表している。同じような表し方は数字「五」の節に説明したように“五花八門”、“五味八珍”などがある。

3.2 両言語とも「八」を含み、異義を表すもの

八面玲瓈 ≠ 八面玲珑

(13) 八面玲瓈の富士。(小学館『日中辞典』)

訳文：从任何角度看都很美的富士山。

(14) 八面玲瓈の人物。(小学館『日中辞典』)

訳文：心地开朗的人。

(15) 黄新仁是个八面玲珑，哪头也不愿意落不是的滑溜人物。(東方書店『中国成語辞典』)

訳文：黄新仁は八方美人で、どちらにも悪く思われたくないツルリとした人間だ。

(16) 私はあなたが嫌い、あなたは彼が恐い、彼は私も煙たがる、正にこのような互いに牽制し合い、複雑にもつれ合った局面が、どちらを向いても如才なく八方美人の「とりなし役」である阿今の地位を高めることになったのだ。(風詠社『中国成語へのアプローチ』)

訳文：正是这种我恨你，你怕他，他防我，互相牵制，互相纠缠的局面，抬举了阿今这个四面圆滑、八面玲珑的“和事佬”的地位。

中国語における四字熟語“八面玲珑”は元·馬熙《开窗看雨》：“八面玲珑得月多”を出典とする四字熟語である。ここにおける“八面”は、東、西、南、北と、南東、北東、南西、北西の八つの方面のこと、あらゆる方面を意味する。“玲珑”は宝石のように曇りなく透き通っていて美しい様子や美しく鮮やかに輝く様子を指している。もともと四字熟語“八面玲珑”は室内でも、四方に窓があり、日当たりや風通しがよいことを指し、プラスの意味を表す四字熟語であったが、現在はメタファー的に人を形容する場合にも使える。人との付き合いに如才がないこと、またはその人を諭え、非難の気持ちを込めて、マイナスの意味で用いられる場合が多い。“八面玲珑”な人は本来嫌われたくないという恐怖心によるものであるから、簡単に妥協や同調する心が却って相手に不信感を与えてしまい、結局のところ、逆に嫌われてしまうと考えられる。

これに対して、日本語における四字熟語「八面玲瓈」は中国語から伝わってきたと考えられる。中国語における“八面玲瓈”的基本義と同じようにどの方向からみても、少しの曇りもなく、透き通っていることを表す以外、人間は本来、透き通って表裏がないものを求めるようとするため、「玲瓈」の美しい音やイメージから、心に不信や疑惑などがなく、すっきりと澄んでいること、または人付き合いがうまく、誰とでも円満に付き合えることを諭えている。日本語における「八面玲瓈」は「和」を重視する日本人にとっては非常にプラスの四字熟語であると考えられる。

ちなみに、中国語の“八面玲珑”はマイナスの意味で如才がない人を喻える場合、日本語では四字熟語「八方美人」を用いる（「八面美人」ともいう）。どこから見ても難点のない美人という意味から、だれに対しても如才なく振る舞うこと、またはその人を喻えている。

3.3 一方の言語で「八」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 八方全塞 // 一筹莫展

(17) 棘手的难题堆积如山，使他陷入一筹莫展的困境。（《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社）

訳文：手を焼く難題が山のように積み重なり、彼は八方全塞の窮境に陥ってしまった。

(18) 八方塞りの状態で、「僕の人生はもうこれで終わりだ」と思いつめ、Tさんは退職願を書いた。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「心の危機管理術」』）

訳文：由于处在这样一个到处碰壁、一筹莫展的情况之下，他不禁越想越感到苦恼：“我的人生已到此束了。”于是，写了辞职报告。

日本語における四字熟語「八方全塞」は「八方塞り」とも言い、どの方面にも進めず、手の打ちようがないことを喻えている。ここにおける「八方」とは東西南北・北東・南東・南西・北西の八つの方角のこと、あらゆる方角を意味する。陰陽道の占いではどの方角で何をしても不吉だとされ、そこから転じて、どこにも抜け道がなく、誰にも信用されず途方に暮れていることをいう。

一方、中国語における四字熟語“一筹莫展”は明·于谦《覆教习功臣孙疏》：“当有事之际，辄欲委以机务，莫不张皇失措，一筹莫展。”を出典とする四字熟語であり、日本語の「八方全塞」と似た意味を表す。一つの方策も施しようがない、万策尽きて手も足も出ないことを喻えている。“一筹莫展”は数字「二」の節で「二進三進」と比較する際にすでに説明したので、ここでは省略する。

八面威风 // 威風堂堂

(19) 中国，恰如那八面威风的雄鸡，恰如那振奋欲飞的巨龙，充满信心，充满豪情，充满热情，在除夕夜那如雷震耳的鞭炮鸣响中，正昂首挺胸，准备迈向二十一世纪。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈金光大道〉』）

訳文：中国は、威風堂堂たるおんどりのように、また奮い立って天に飛翔せんとする竜のように、自信、豪気、熱情に満ちあふれ、大晦日の夜、爆竹の炸裂音が耳をつんざく中、昂然と胸を張って、二一世紀に向かおうとしている。

(20) 大将军は威風堂堂あたりをはらっている。(大修館書店『中日大辞典』)

訳文：大将军八面威风。

中国語における四字熟語“八面威风”は元·郑德辉《三战吕布》第三折：“托赖着真天子百灵咸助；大将军八面威风。”を出典とする四字熟語である。威風堂堂当りを払う、威厳があつて、立派であるさまを喻えている。言い伝えによれば、北宋の徽宗の内府に古代の玉杯が三つ収蔵されていて、一つを“教子昇天”、一つを“八面威风”といったが、残る一つには名がなかつたと言われている。後世の人はこの四字熟語“八面威风”で威風堂々としていることを形容した。また、中国の文学作品には“八面威风”で朱元璋⁵⁹のことを形容する場合が多く見られる。元の末期、朝廷は汚職や腐敗が蔓延するようになり、そこから暴動が起り、朱元璋という人が出て、明が始まった。明の時代を向かえる前のある日、朱元璋と大将の徐達が長江の北側から小舟に乗り、長江を渡る際、船主の老夫婦はその一人が有名な朱元璋だと知ると、“真天子百灵咸助、大将军八面威风。”と言つたそうである。「聖天子は百靈が助け合い、大將軍は辺り一面威風が漂っている」ということで、適當におめでたい言葉を並べて、胡麻を擦つたのだった。朱元璋もそれに対して、まんざらでもなかつたそうである。明王朝を建てた際に、この時の船主をわざわざ探し出し、褒賞したと言われる。

これに対して、日本語の四字熟語「威風堂堂」が同じ意味を表している。態度や雰囲気に威厳が満ちあふれて立派なさま、周囲を威圧するようで、侵し難いさま、気勢が非常に盛んな様子を形容する。「威風」は威厳に満ちており、威厳があつて、侵し難いさまを指しており、「堂堂」は立派で力強いさまを指している。

八面六臂 // 三头六臂

(21) 八面六臂の大活躍をする。(小学館『日中辞典』)

訳文：施展三头六臂的本领。

(22) 本職のほかに大学の講師を二つ、月に二本ずつの小説の連載、それに講演会、おまけに地域住民運動のリーダー、まさに八面六臂の大活躍で…。(黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》)

訳文：除了本职工作还担任两科讲师，每月有两本小说连载，另外还有演讲会，再加上又是地区居民运动的领导，简直有三头六臂的神通…。

日本語における四字熟語「八面六臂」は仏像などが八つの顔と六本の腕をもつてることから多方面でめざましい活躍をすること、または一人で何人分もの活躍をすることを喻

えている。ここにおける数字「八」は「たくさんの、あらゆる」という意味を指している。しかし、元々は阿修羅など三つの顔と六本の腕をもつ三面六臂の仏像のイメージから、多方面で力を発揮する喻えとして言ったもので、八面六臂の仏像は実在しない。「三面六臂」から実在しない「八面六臂」に転じたのは「八面」があらゆる方面を表すからだそうである。ちなみに、俗説によると厩戸皇子は八人の言葉を一度に聞き分けることができたことから、「八耳皇子」と言わされたという話があり、聖徳太子の別称にふさわしい。しかし『日本書紀』には「稻田宮主簀狹之八箇耳」という神のことも記されている。「八面六臂」とい、人並すぐれて、大活躍する人を譬えるが、さしづめ聖徳太子などは耳ざといということを讃えたので、今日なら情報通のことであったのかも知れない。

一方、中国語において、四字熟語“三头六臂”は阿修羅像の姿そのままの表現を維持している。日本語における「八面六臂」と同じように、多方面でめざましい活躍をすることを表している。北方ルートで中国に伝來した仏教では迷いのある者が輪廻転生する世界を六道(天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道)とし、“三头六臂”的闘神・阿修羅が生きる修羅道を入れている。近年、中国語における“三头六臂”は芸術界において、新しい意味が付与されたそうである。香港の尖沙咀にある“三头六臂”というモニュメントがあったが、作者の張洹氏は中国伝説上の人物のナタやチベット仏像を手本に作り上げたそうである。“三头六臂”的“三头”とは仏像の頭や二人の人間の頭が組み合わさったもので、“六臂”は象徴的な意義のある仏像を基礎とし、大きな銅製の手を作り上げたものである。張氏はこの全知全能の象徴としての“三头六臂”を通して、中国人がますます変化し、何でも可能にするという状況、そして人類が大自然に屈しないという精神を伝えたかったそうである。

岡目八目 // 旁観者清

(23) 到底是我的意见对还是他的意见对，旁观者清，请你给做个判断吧。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「輝ける道」』）

訳文：いったいぼくの意見が正しいか、それとも彼の意見が正しいか、岡目八目で、君に判断してもらおう。

日本語における四字熟語「岡目八目」は人の墓をわきから見ていると、打っている人より何目も先まで手が読めるということから、当事者より第三者のほうがその状況や利害関係を正しく判断できることを喻えている。ここにおける数字「八」は「たくさんの、多い」という意味を表しており、「八目」には多くの数を表す「八」と「目」からなる「やつめ」

が本来の形で、多くの目の意味とする説や囲碁で八目分得する手を知ることができるという意味とする説などがある。「岡」は名詞の上に付いて、複合語を作ることができ、かたわら、局外からの見方や立場という意味を表すため、「岡目」は脇から見る、第三者の立場で見ることを意味し、「傍目八目」とも書く。この四字熟語は囲碁から出た言葉で、実際に囲碁を打っている人よりも、そばで見ている人のほうが石を置く先のところまで、見えてしまうということから生まれたことばのようである。碁盤と人生の類似性によって喻え、メタファーが働いていると考えられる。

これに対して、中国語においては四字熟語“旁观者清”で同じ意味を表す。“旁观者清”は晋·刘昫《旧唐书·元行冲传》：“当局称迷，傍观见审。”を出典とする四字熟語である。よく“当局称迷”と組み合わせ、“当局称迷，旁观者清。”という形で使われ、あることを実際にやっている人よりも、それに関係していない人のほうが、そこで変化している物事のようすを正しく見ることができ、どれを選べば得であるか損であるかを知ることができるということを喻えている。

熊公八公 // 张三李四

(24) 熊公八公にもわかる。（『日中辞典』小学館）

訳文：张三李四都能听懂的话。

(25) 我不管他是“张三李四”，要是不讲理就拉他上派出所。（『中国語熟用成語·熟語』光生館）

訳文：熊公八公僕の知ったことじゃない、むちやを言うなら、派出所へ引っ張って行く。

日本語における四字熟語「熊公八公」は落語などに出てくる庶民を代表する二人の名で、無教養ではあるが善意がある庶民をいう。例えば、落語に「粗忽長屋」という話がある。これは貧乏長屋に住む二人の粗忽者の話である。ある朝、粗忽者の「八公」が観音様の前で死体を見つけた。すると、それはなんと同じ長屋に住むもうひとりの粗忽者、「熊公」であったというものである。

これに対して、中国語における四字熟語“张三李四”は張家の三男、李家の四男というような意味であり、最もありふれた人名を代表している。

4. 数字「八」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

日本神話では日本のことを「大八洲国」と言い、今でも「八道」、つまり東海道、東山道、北陸道、北海道、山陰道、山陽道、南海道、西海道という名称がある。日本人は主要な姓を整理して、「真人、朝臣、宿禰、忌寸、道師、臣、連、稻置」という「八色の姓」⁶⁰を定

め、『古事記』では「八」で命名した事物が天を撲ち地を蓋っており、完全に「八」で統一された天下である。日本ではこのように数字「八」が人々の文化や生活と深くかかわっているが、中国では「五」、「七」、「九」などの数には競争があるが、数字「八」の優位性は決して存在しない。《易经》の巨大な影響がなければ、数字「八」が聖数に成れたかいなかは考慮に値する。

《易经》は古代中国の占筮の書物である。符号を用いて状態の変化や予測を体系化した古典である。《易经》における「八卦」はもともとは古代の占卜符号であり、祖先の残した智慧の無尽蔵な遺産のようである。「八卦」の観念が浸透し、伝統的な文化の中に「八」で命名する現象が数多く生まれたが、それらは直接的であれ、間接的であれ「八卦」と関係があり、豊富多彩な「八」の世界を構成し、世界的に神秘的な数字とされる「七」以外に、数字「八」も神秘的な数字として、大きな魅力を体現している。

軍事面における「八卦」から派生したものとして、軍陣の八種の形式を「八陣」と称する。太古には金、土、水、火、木、地、人、天という八陣があった。《太白阴经》には“黄帝设八阵之形，天阵居乾，为天门；地阵居坤，为地门；风阵居巽，为风门；云阵居坎，为云门；飞龙居震，为飞龙门；虎翼居兑，为虎翼门；鸟翔居离，为鸟翔门；蛇盘居艮，为蛇盘门。”とある。三国時代の諸葛亮は兵法を演繹して「八陣図」を作り、洞当、中黄、龍騰、鳥飛、折衝、虎翼、握機、連衡の八卦陣の八つの方向のいずれから攻撃を受けても、同等の兵力で抵抗できるようにした。中国語において「八卦」に関する四字熟語も多くある。例えば、「五行陣」と「八卦陣」变幻窮まりないから転じて、事物が多種多様、さまざまであり、または事物の変化が激しく計り知れない、变幻窮まりないことを喻える四字熟語“五花八門”はその中の一例である。

武術の面における「八卦」から派生したものとして、「八卦掌」などがある。「八卦掌」は異なった掌法や歩き方、走り方を主とする拳術である。この拳術は四正と四隅の八つの方位を縦横に交錯させ、八卦図に対応していることから、この名がある。特徴は剛と柔が相まって、勢いがあるということで、“八面威風”的勢いがある。威風堂々としていることを表す中国語の四字熟語としては“八面威風”がある。

建造物の面にも「八卦」の思想が深く浸透している。宅地や墓地の選択に始まり、風水を使った占い師などは八卦でその土地を見て、建造物の形状と自然界との統一や調和を考慮する。墓や家を建てる方角を確定するときは八卦の乾、艮、坤、巽と八天干、十二支で「二十四山」、「二十四路」を構成する。

一方、日本人が「八」という漢字を借用することにより、その思想の影響を当然受けることとなった。例えば、日本では占いは当たることもあるし、外れることもあるということで、吉凶は気にするなということで、悪い結果が出たときに、よく「当たるも八卦、当たらぬも八卦」と言われる。この八卦とは古代中国で考案された易において、自然界の現象を八つに分けたもので、この八つにはそれぞれ図形と意味が与えられている。日本で易占を八卦と呼ぶのはここから来ていると考えられる。

数字「八」は八卦で使われる以外、日中両国共に仏教の影響を受け、仏教に関する数字「八」を含む四字熟語も少なくない。例えば、「八大金剛」という四字熟語は顔が青く、牙を剥き、満面に凶相をみなぎらせた、名声赫々たる護持天将を描いている。「八大金剛」のほかに、「八大夜叉」、「八大龍王」、「八大明王」、「八大神将」、「天龍八部」などもあり、それらが仏の国で広まり、人びとの心や魂を動かし、奇怪で神異な神話伝説を生み出した。

四字熟語「八相作仏」（降凡率、托胎、出胎、出家、降魔、成道、転法輪、入作仏）は仏祖の誕生、成道、創教における八段階を表すことから、人の一生の象徴的な意味を表している。これらは一見するとお互いに何ら関連してはいないようであるが、実はお互いにつながっているという考え方である。仏教は人々の生活に深く入り込んでおり、日中両言語の仏教に関する術語や教義の多くに「八」が含まれている。このことから数字「八」に対する人々の崇拜が容易に見て取れる。

仏教において、数字「八」を崇拜するというのは自我を中心とし、八方にみなぎる宗教意識にあると言われる。インド仏教は伝説の須弥山を世界の中心とし、その八方を山が取り囲み、山と山との間にはそれぞれ海が連なり、合わせて八つの海がある。日本語の四字熟語「九山八海」はここから来ている。ここにおける「九山」は須弥山、法提羅、佐沙陀羅、游乾陀羅、蘇達梨那、安濕縛竭擎、尼民陀羅、毘那多迦、研迦羅を指している。「九山八海」の説は神話的宇宙観の仏教に対する大きく影響していることを表している。仏教が言う仏法無辺、仏光普照、寰被八方という教義が八方の空間に対する認識を踏まえて誕生したことは間違いない。「八方」という神聖な観念によって、仏教は「八」を崇仰し、「八」を名称とする多数の戒律や規則などを生み出したのである。

仏教が「八」をとても重視するのに比べると、中国の道教ではそれほど重視はされていない。しかし、道教には仏教でいうところの威風堂々たる「八大金剛」はないが、「八仙」がよく取り上げられる。「八仙」とは汉钟离、张果老、李铁拐、吕洞宾、韩湘子、蓝采和、曹国舅、何仙姑の八人の神仙のことである。「八仙」に関しては中国語に“八仙过海”とい

う四字熟語がある。これは八仙が東の海を渡ろうとした時に龍王たちと争うことになった故事に基づいており、京劇でもよく演じられる。八仙がそれぞれの不思議な力を持つ宝物を使って海を渡ったことから、この四字熟語は「それぞれの技量を生かして事に当たる」「それぞれの技を使って競争する」といった意味に使われる。呂洞賓は「八仙」の中でも特にその名が知られており、四字熟語“狗咬洞宾”的“洞宾”は呂洞賓のことで、直訳すると「犬が呂洞賓のような人格者にかみつく」ということであるが、そこから転じて「善悪の見境がつかない」、「よい人の心がわからない」、「身の程知らず」ということを喻えている。

「八仙」を見ると、日本の「七福神」とどこかでつながっているに違いないと思われる。一体どうして一人減ってしまったのであろうか。海でおぼれたというのが頭に浮かぶ当たり前の説のようである。理由は諸説あるが、七福神のルーツは「八仙」であり、道教でめでたい「八」という数字が日本人にとって縁起のいい数字「七」に変わったという説が有力なようである。

また、道教の「八道經」に関する面白い四字熟語もある。中国語における“胡說八道”は宋·釋普濟《五灯会元·龙门远禅师法嗣》：“祕魔岩主擎个义儿，胡說亂道，遂將一捆成齑粉，散在十方世界。”を出典とする四字熟語である。でたらめを言う、出まかせ放題を言うことを喻えている。ここにおける“八道”は八道經のことを指している。“胡”は古代中国の北方・西方民族に対する呼称である。戦国時代、内モンゴルの塞外民族を指していたが、秦漢朝では特に匈奴を指すことが多くなった。唐代になり、シルクロードの往来が活発になると、「胡」は特に「西胡」ともいわれ、西方のペルシャ系民族を指すようになった。四字熟語“胡說八道”はもともとは胡の人が「八道經」を伝道したことを指している。単民族国家の日本人には理解しにくいであろうが、漢民族の人に胡の人の言語(少数民族言語)は通じない。さらに内容が少々分かりにくいこともあり、「八道經」は出まかせ放題の感じとなったのであろう。

中国において、1970年より実施された改革開放政策以来、多くの人が数字「八」を好むようになった。これは広東語の影響を受けているからであると考えられる。広東語では「八」は「发」(儲かる、金持ちになる)と発音が似ている。中国は計画経済から市場経済に転換する過程において、人々の考え方も極めて大きな変化を遂げた。中国全土の先頭を切って広東の改革が進み、それに伴い発展した経済が中国全土に影響を与えただけでなく、広東人に好まれた数字「八」も中国全土に普及し、影響を与えた。富やよりよい生活への追求

により、数字「八」は中国人にとって最も縁起のよい数字となった。そのため、「899」、「988」はそれぞれ「发久久」(富が長く続く)、「久发发」(長く儲かる)という意味を表わし、特に好まれる。北京オリンピックの開会式が2008年8月8日の午後8時8分にスタートしたのは「八」という数字が縁起がよいかからである。また、電話番号やホテルの部屋番号、車のナンバーなどすべて「八」という数字が喜ばれる。

しかし、数字「八」は決してすべての場合にはプラスの意味の数字として使われるわけではない。例えば、人を貶す熟語に「三八」、「(烏龟)王八蛋」(ばか野郎)等がある。“王八”は“忘八”から来た言葉だと言われており、「八德(仁・義・礼・智・信・忠・孝・悌)を忘れた者」で恥知らずの意味である。発音が日本語のワンパターンと似ているだけでも、相手を馬鹿にした言葉ということはわかるであろうが、実際は中国語ではかなり人を馬鹿にしたニュアンスとなる。これに対して、日本語において、このような言い方はない。「畜生」、「バカ」などに訳すより仕方ない。ちなみに、中国語における“王八蛋”的“王八”はカメ、スッポンの俗語である。また、妻を寝取られた男という意味に使われることもある。

四字熟語でもマイナスの意味合いで「八」が入っている例として、前に述べた“胡说八道”以外に、“乱七八糟”(めちゃくちゃである)、“汚七八糟”(汚らしいさま)、“八没一撇”等がある。四字熟語“八没一撇”は“八字没一撇”、“八字还没一撇”、“八字没见一撇”などとも言う。“八字”は“八”という文字である。“还没”は「まだ～がない」を指し、“一撇”は「左はらい」である。「八」という漢字の最初の一画である「左はらい」もまだ書いていないから、物事を行うにあたって、まだ何も手をつけていないという意味で、まだまだ早い、目処が付いていない、輪郭さえはっきりしないことを表わしている。「八」は門が開いた状態のたとえで、両開きの門の片方すらもまだ開いていないと言う比喩から転じたとする説もある。日本語では「目鼻が付かない」という。「目鼻が付く」とは物事がほぼ出来上がったり、大体の事が決まったり、結果の予想が立ったりすることを指す。元々は目・鼻があるべき所にきちんとあって、整った顔立ちをしているという意味である。その否定は物事を行うにあたってまだ何も手をつけていないという意味を表している。

また、中国語においては、封建社会を象徴する“八股取士”という四字熟語がある。科挙は八股文によって官僚を選定するという意味である。八股文は中国特有の文体と言える。中国の明や清の時代に科挙の答案として用いられた特殊な文体のことである。八股文は四書文、八比文、時文、時芸、制芸、制義などとも呼ばれることがある。四書五経の中から出題された章句の意味について、対句法を用いて独特な八段構成で論説した。“取士”にお

ける八股文は、“題前”と“正文”からなる。“題前”は序論にあたり、“破題”、“承題”“起讲”、“領題”からなる。“正文”は本論にあたり、“提比”、“中比”“后比”、“東比”からなる。これら八つの段落から構成されること、また“正文”は四つの部分に分かれ、それが二つの比を対句として組み合わせており、合計八つのあし(股)を持つこととなる。このことから「八股文」と呼ばれた。出題は四書を中心とした古典解釈と政策に関する論文であった。「八股文」はその時代は驚くほど流行していたが、現在では批判される文体となってしまった。ここから見ると、数字「八」の形及び数字「八」を含む四字熟語の持つ意味の変化からも分かるように、数字文化において縁起がよい、あるいは縁起が悪いというのは時代とともに変化することがあるのだろう。

一方、数字「八」は日本人が大好きな数字なようである。日本の数字文化は奇数文化と言われたが、偶数である「八」は高い地位にある。『古事記』の中に「八百万の神」など、「八」にまつわる言葉をたくさん見られるように、数字「八」は日本古来の聖数と言える。日本では神宝とされ、神代より皇位の印として代々の天皇の象徴的な持ち物となった三種の神器には、八咫鏡、八握剣、八坂瓊勾玉と、鏡、剣、玉にみな、「八」の数字を冠せた。四字熟語「八咫之鏡」はこれを出典とする四字熟語であるが、美称と呪力の意味を読み取ることができる。現在においても、「八幡様」は日本に四万社以上あるといわれる、日本で最も有名な神社の一つである。八幡様の「八幡」は、数多くの旗を意味する。つまり、何人の神様をお祀りしている神社である。また、名古屋市の市章は「丸八」である。尾張徳川家の合印を表す。「八」は坤なり、順なり将に伸びんとするや道を行くが如く、また、順風に帆を揚げたがるが如しということによるものである。名古屋市が無限に安穏かつ順風に発展するという願いを込めたものであるそうである。ちなみに布団メーカーの「マルハチ」が中国に進出した際に、社名の「マルハチ」の中国語(丸八)の発音が中国南方では先に挙げた“王八”と同じになることから、中国人は「マルハチ」の布団を使いたがらなかつたというエピソードがあるらしい。

このような美称は日本に限ったものではなく、日本でも有名な中華料理である“八宝饭”“八宝菜”的ように、中国でも“八行书”、“八楞镜”など、数字「八」を使ったものは多い。おそらく、易の発達した中国の「八卦」による「八陣」の戦法で日本を席捲したときに持ち込まれたのが「八」の数の呪力であったのかもしれない。

さらに分析してみれば、日本人が数字「八」を好む原因にはいろいろあるが、その一つに字形がある。「八」という漢字が上が狭く、下が広く、歩けば歩くほど道が広がり、事業

がますます隆昌することを連想させる。『新明解国語辞典』の数字「八」に対する解釈には以下のものがある。和語の「八つ」が「弥」に通じ、豊かという意味に多く用いられる上に、字形が末広がりで縁起がよいとする向きがある。日本語の「末広がり」には「ますます広まって、ますます繁栄する」という意味がある。そのゆえ、数字「八」は事業が発展し、縁起がよいという意味を備えるようになった。

また、日本語において、数字「八」の甲骨文字の造形から、「八」の左右両側に背いて分かれるさまを象徴したものであるとする。起源は両腕を伸ばした形や親指と人差し指を離して伸ばした形などという具体的なものとかかわっていると考えられる。クロスしていることから、組み合わせた二本線の先には四つの方向が生じる。当時、四方向の概念が存在していたのかもしれない。線を複数交える考え方から、八つの方向の概念まで発達していた可能性もある。この「八方角」の思想に関する実例を示すものとして、日本に実在する八角形の天皇陵墓の古代遺跡遺構があげられる。こうした「八方角・八角形」から宇宙観・世界観への表現が何を意味しているのかと言えば、「神学における宇宙の最高神である天皇の、八紘(八荒)すなわち無限大の八角形の中心に高御座を置いて、ここにある四字熟語「八紘一宇」は全宇宙(世界)を一宇(一家)として統治する神聖な政治理想を意味するものにほかならない」と捉えられている。

さらに、日本人は数字「八」がめでたい、円満、繁栄を象徴していると信じている。数字「八」の字形が偶然にも日本一の山である富士山と形状が似ていることと関係があるのかもしれない。古代日本では自己のことを四字熟語「大八洲国」、「大八島国」を用いて称していたのは国土が広く、美しいという賛美の意味の表れである。また、日本人は八十八歳の祝いも大事にしている。

そのほか、日本語では数字「八」を「意志が強い」と結びつけた。日本語には「七たび転んで八たび起きる」という意味の「七転八起」という四字熟語がある。これは度重なる失敗にも屈せず、奮起することの喻えであり、人生の浮き沈みが甚だしいことの喻えでもある。この熟語は一回や二回くらいの失敗で気落ちせず、続けて頑張るべきであると人々を激励している。日本人は達磨法師をダルマと見なしている。なぜなら、達磨法師は洞窟で修行している時、七回倒れていて、八回目についに立ち上がり、悟りの果を得るからである。そのため、日本人は達磨法師を崇拝し、敬慕し、家にダルマを飾り、絶えず努力すべきと自らに言い聞かせている。

しかし、確かに『古事記』にみえる「八は日本における聖数」とする説があるが、必ず

しもよい聖数ばかりでもなかった。『風土記』では土雲族を「越の国に人あり、八掬脛と名づく」とし、「其の脛の長さは八掬、力多くただ強し」とある。「力多くただ強し」と言ったように、数字「八」は脅威を感じさせる数字であった。四字熟語「天之八衢」にも同様に脅威を感じさせたり、力量に勝れているという意味がある。また、『日本書紀』における「八俣大蛇」の身体は「八頭八尾」で、その長さが「谿八谷峠八尾」に及んだことを記している。これも脅威や力量につながるものであると考えられる。

IX 数字「九」



1. 日中両言語における数字「九」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「九」の意味を調べるためにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 5 項になる。

基本義：

- ① 数の名。八の次、十の前の数。

派生義：

- ② 九つ目、九番目。
- ③ 九度、九たび。
- ④ 数のきわまり、極めて数の多いこと。
- ⑤ 陽を象徴する数、易で陽の数で最上位の数とされる。

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典（修订版）》(2001)、《现代汉语辞海（全新版）》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 9 項になる。

基本義：

- ① 数目、八加一所得的数。

派生義：

- ② 序数、第九。
- ③ 九次。
- ④ 极多。

- ⑤ 阳，阴阳五行说中阳俗称“九”。
- ⑥ 时令名，从冬至起每九天是一个“九”。
- ⑦ 量词，1九是9里。
- ⑧ 古地名。
- ⑨ 姓氏。

上から見られるように、日本語における数字「九」の意味は5項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が4項ある。これに対して、中国語における数字“九”的意味は9項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が8項ある。

以下で日中両言語における数字「九」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「九」のプロトタイプに関する比較対照

日中両言語における数字「九」のプロトタイプ、つまり数える数量的概念として、意味は一致している。

(1) 平均一・七階の高さの建物を十七階にすれば九倍の空地ができる。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「日本列島改造論」』)

訳文：现在楼房平均高一点七层(即不足二层高)，如盖起十七层，就能腾出九倍的空地来。

(2) 这条龙从头到尾一共有九节，是用竹条编扎成的，每一节，中间插着蜡烛，外面糊了纸，画上鳞甲。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「活动变人形」』)

訳文：この竜は頭から尾まで九節、竹で編んでこしらえたものである。中に蠟燭を挿し、外は紙を貼って、鱗が描いてある。

例(1)と例(2)は数字「九」のプロトタイプ的意味に基づいた例である。例(1)は基本的な数の名を表し、例(2)は助数詞と連用する場合である。例(2)における“龙”は“龙舞”で使う竜を指している。中国では竜舞はよく獅子舞と合わせて、「舞竜舞獅」と呼ぶ。現在演じられる形は清の時代に確立されたもので、北方の北竜北獅と南方の南竜南獅の系統があり、競技にもなっている。人数なら少なくとも頭と前足を支える部分に1人、後ろ足と背中を支える部分に1人の2人と楽団で構成されている。多くの場合(特に竜舞)は背中の部分に何人かの人がいて、いくつかの節として演じる。ここにおける数字「九」はこの「九つ」の節を指している。日本では中華街などで、旧正月や商店の開店祝いなどで「招福驅邪」として演じられる。

1.4 数字「九」の意味拡張に関する比較対照

派生義②から⑤までは、日中両言語においては意味は共通している。

(3) アルバが九歳になったとき、お母さんが物理学の本を読ませたところ、夢中になって読み、心をうたれたようでした。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「ひとりっ子の上手な育て方」』)

訳文：爱迪生九岁时，母亲让他读物理学的书，他如饥似渴地阅读，受到很大的震动。

(4) 甭管什么时候，只要看见张春元架着胳膊往人群边上一站，韩德来就开进“进驻”，把“臭老九”连损带挖苦，骂得狗血喷头。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパスぐ辘轳把胡同9号』)

訳文：張春元が腕を組んで人びとの傍らに立つと、韓徳来はきまって例の“進駐”的話を始め、「九番目の鼻つまみ者」をあてこすり、皮肉り、完膚なきまでにやっつける。

(5) 義応は九拜して隠寮を出た。この旨を評議員に告げた。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「雁の寺」』)

訳文：义应行九拜礼，走出房间，把管长所说的旨意传达给评议员们。

(6) 特別是在和苏共中央进行意识形态的论战时，在中央写“九评”时，父亲为主要的负责人。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「我的父亲邓小平」』)

訳文：とくにソ連共産党とのイデオロギー論争(アメリカとの平和共存の道を模索するソ連側とアメリカ帝国主義打倒により世界革命を目指す中国側と対立した)時には、党中央で「九評」の作成で、父は責任者。

例(3)と例(4)は共に派生義②に基づいて、数字「九」の順序、九つ目を表している例である。例(5)の「九歳」は生まれてから九番目の年のことを指している。例(6)における“臭老九”は中国でかつて使われた語で、“九”は「九番目の鼻つまみ者」という意味を表している。例(5)と例(6)はいずれも日中両言語における数字「九」の派生義③に基づいて、「九たび」という意味を表している例である。例(5)における「九拜」は「九回拜礼すること」を指しており、例(6)における“九评”はソ連共産党とのイデオロギー論争について、中国側の見解を『人民日報』『紅旗』に一九六三～六四年にかけて九回にわたり掲載したものを見ている。

(7) 山門を指して住持は新命のよろこびに心躍りながら、「天域九重の内、帝城万寿の門。空手にして関鍵を抜き、赤脚にして崑崙に上る」と誇らしげに言うのである。」(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「金閣寺」』)

訳文：新任主持喜在心头，手指山门自我显耀般地说道：“天域九重内，帝城万寿门。空手拔关键，赤脚上昆仑。”

(8) 跟着陈毅的队伍打了好几个战役，可谓是九死一生，眼下每月还从民政局领取几元津贴。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈小鮑庄〉』）

訳文：陳毅の部隊で数々の戦闘を経験し、それこそ九死に一生を得て、今も民政局から毎月数元の手当をもらっているのだ。

(9) 重九的也叫重阳。（小学館『中日辞典』）

訳文：重九は重陽とも呼ばれる。

例(7)と例(8)は日中両言語における派生義④に基づいて、数字「九」は「数のきわり、極めて数の多いこと」という意味を表している例である。例(7)における「天域九重」は「天上の高いところ」という意味を表している。例(8)における“九死一生”は、確率として、90%死ぬ可能性があり、助かる見込みはたった10%しかないが、何とかこの10%のおかげで助かったというときに使う。とても助かるとは思えないような危険な状態から、奇跡的に助かったことを喻えている。例(9)は日中両言語における派生義⑤に基づいて、数字「九」の「陽、陽の数で最上位の数」という意味を表している例である。“重九”は「九」を二つ重ねるという意味で、「九月九日の節句」、「重陽の節句」とも呼ばれる。これらの意味において、日中両言語における数字「九」の意味は共通している。

(10) 立春早过，九九消寒，又是一年春草。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈活動变人形〉』）

訳文：立春もとっくに過ぎて、寒い日が消え、再び春の若芽が萌え出た頃である。

(11) 寒中に織った麻が暑中に着て肌に涼しいのは陰陽の自然だという言い方を昔の人はしている。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「金閣寺」』）

訳文：古时候有人说过，在三九天里织成的麻在暑热中穿在身上，肌肤生凉，这很合乎自然的阴阳道理。

例(10)と例(11)は中国語における派生義⑥に基づいた例である。冬至の当日（陽曆12月22日ごろ）からの9日間を“九”と言い、“九九”（81日目）まで続く。一番寒い時期は“三九”と言い、“数九”的期間が終われば、寒くなくなる。これに対して、日本語における数字「九」はこの意味までは拡張されていないようであるため、日本語に訳す場合には、例(10)のように、“九九”は意味的に「寒い日」と訳すか、例(11)のように、“三九”は意味的に「寒中」と訳すより仕方ない。

また、中国語における数字“九”は拡張義⑦のように道のりを表す量詞として使える。1九=9里であるが、現在はあまり使われない。中国語における数字“九”的拡張義⑧として地名に使うことができる。現在は中国河北省临漳县西南のところである。中国語における数字“九”的拡張義⑨として人の姓として使える。唐の時代において、中国には“九嘉”という人がいたそうである。これに対して日本語における数字「九」は量詞、地名、姓としての意味には拡張されていないようである。

なお、その他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

2. 日中両言語における数字「九」を含む四字熟語の全体像

ここでは「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「九」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめてみる。

2.1 日中両言語における数字「九」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「九」を含む四字熟語30例が取り上げられている。出典元によって分析して見ると、主に日本を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「九」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集から、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分けることができる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源とした四字熟語は「一夕九徒」(范晔《后汉书》より)、「一日九遷」(《易林》より)、「一言九鼎」(司马迁《史记》より)、「三跪九叩」(昭樞《嘯亭杂录内务府定制》より)、「八索九丘」(左丘明《左传》より)、「十羊九牧」(《隋书・杨尚希传》より)、「十室九空」(晋葛《抱朴子》より)など、15例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集を起源とした四字熟語は「九死一生」(屈原《离骚》より)と「九

「阜鳴鶴」（《诗经》より）の2例がある。

(3)伝説、劇曲及び小説などの文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「九腸寸断」（劉庆義《世说新语》より）の1例のみである。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「九」を含む四字熟語

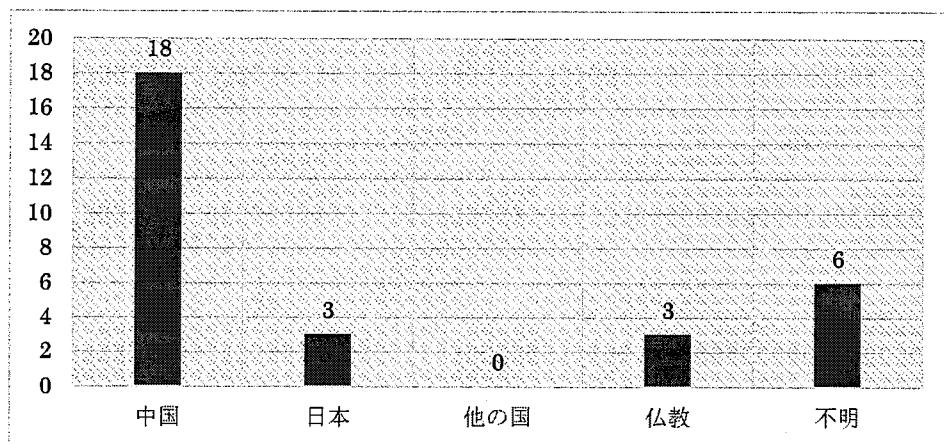
日本を起源としたものは「九分九厘」、「三思九思」と「十中八九」の3例がある。

2.1.1.3 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「九」を含む四字熟語

仏教または仏教に関連するものを起源としたものは「十進九退」、「七難九厄」、「九品蓮台」の3例がある。

以下の図1は日本語における数字「九」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図1 日本語における数字「九」を含む四字熟語の出典元



上の図1からも分かるように、日本語における数字「九」を含む四字熟語の中で中国からのものが18例あり、総数の60%を占めている。以下、日本からのものと仏教または仏教に関するものからものが共に3例で、10%、中国以外の他国からのものはない。また出典不明な四字熟語は3例となっている。日本語における数字「九」を含む四字熟語の中では中国からのものが最も多く、総数の半分以上を占めている。

2.1.2 中国語の場合

商务印书馆の《成语大词典》第二版(2012)に収録されている数字「九」を含む四字熟語は32例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関連するものを起源とした四字熟語という三つに

分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「九」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「九」を含む四字熟語は、主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集から、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分かれる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍からのものは「一言九鼎」(司马迁《史記》より)、「九五之位、九五之尊」(《周易》より)、「九世之仇」(公羊高《公羊傳·庄共四年》より)、「九泉之下」(《魏書·陽平王傳》より)、「龙生九子」(張華《博物志·逸篇》より)、「十羊九牧」(《隋書·楊尚希傳》より)、「十室九空」(黃宪《外史·將才》より)など、20例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集からのものは「六街九陌」(劉晨翁《虞美人·城山堂試燈》より)、「九霄云外」(劉禹錫《同樂天登栖靈寺塔》より)の2例がある。

(3) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「三贞九烈」(乔吉《金錢記》より)、「三六九等」(曹雪芹、高鹗《紅樓夢》より)、「九九归一」(秦兆阳《回答》より)、「九牛之力」(鄭德輝《三戰呂布》より)、「含恨九泉」(褚人获《隋唐演義》より)、「含笑九泉」(李汝珍《鏡花緣》より)、「十拿九稳」(阮大铖《燕子箋》より)など、8例ある。

2.1.2.2 仏教または仏教関連のものを起源とした数字「九」を含む四字熟語

仏教または仏教に関連するものを起源としたものは「十进九退」、「九品蓮台」の2例がある。

以下の図2は中国語における数字「九」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「九」を含む四字熟語の出典元

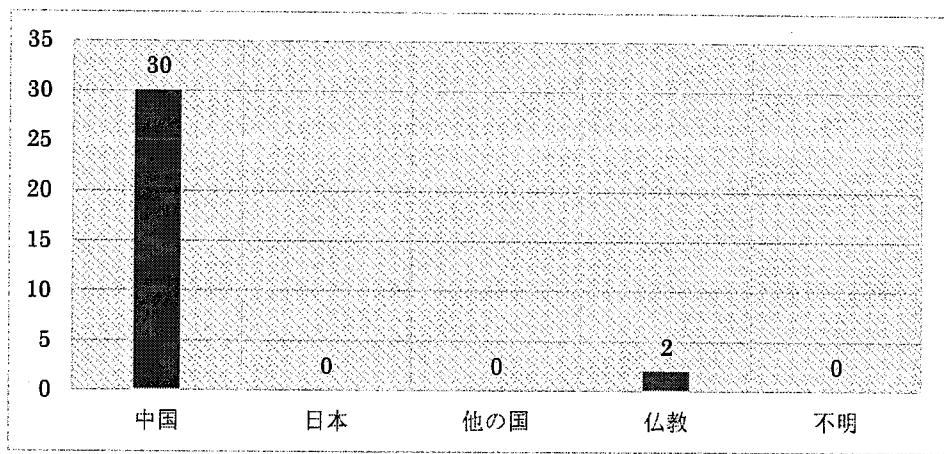


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が30例あり、仏教または仏教関連のものを起源とした四字熟語が2例あり、中国語における数字「九」を含む四字熟語がほとんど中国を起源としたものである。

2.1.3 数字「九」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「九」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数字「九」を含む四字熟語は中国を起源としたもの、日本を起源としたもの、仏教または仏教関連のものを起源としたものと出典元が幅広い。これに対して、中国語における数字「九」を含む四字熟語はほとんど中国を起源としたものである。

2.2 日中両言語における数字「九」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「九」の現れる位置考察

四字熟語における数字「九」の現れる位置とは四文字において、数字「九」が何番目の文字であるかということを指している。例えば、数字「九」の現れる位置が三番目のみの四字熟語とは「三旬九食」、「含笑九泉」など、数字「九」の現れる位置が一番目と二番目に共起する四字熟語とは「九九归一」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「九」の現れる位置については以下のとおりである。

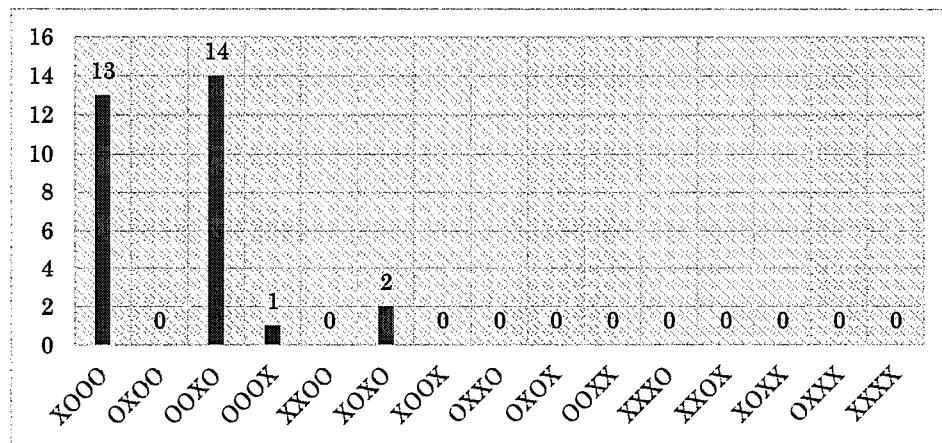
- ・一番目のみ……13例
- ・三番目のみ……14例
- ・四番目のみ……1例
- ・一番目と三番目に共起……2例

個数からみれば、多くの場合、数字「九」が一番目のみと三番目のみの位置に現れ、そ

れぞれ 43.33% と 46.67% を占めている。次は一番目と三番目に共起する四字熟語で、6.67%、四番目のみの四字熟語は 3.33% となっている。

図 3 に「X」、「0」によって数字「九」の現れる位置を表示する。「X」は数字「九」を表し、「0」は数字「九」以外の文字を表す。例えば、数字「九」は一番目の位置と二番目の位置に共に現れる四字熟語「九九归一」は「XX00」で表示する。

図 3 日本語の四字熟語における数字「九」の現れる位置



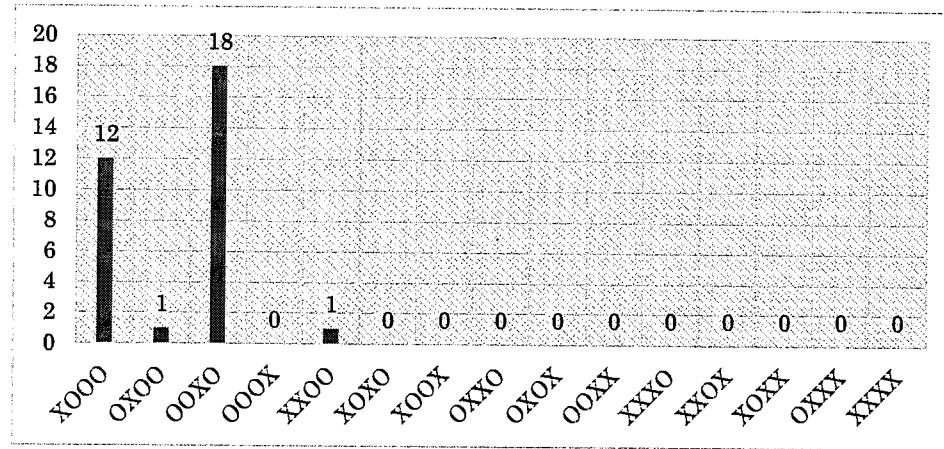
2.2.1.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「九」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……12 例
- ・二番目のみ……1 例
- ・三番目のみ……18 例
- ・一番目と二番目に共起……1 例

個数から見れば、数字「九」の現れる位置は半分以上が三番目のみで、総数の 56.25% を占めている。次は一番目のみに現れるもので、37.50%、二番目のみに現れるものと、一番目と二番目に共起するものとは共に 3.13% となっている。詳細は図 4 の通りである。

図 4 中国語の四字熟語における数字「九」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「九」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「九」の現れる位置については中国語においても、日本語においても、数字「九」が三番目のみに現れるケースが最も多い。また、一番目に現れるものも少なくない。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「九」と他の数字との共起関係考察

日中両言語における数字「九」を含む四字熟語には他の数字と共起するケースが少なくない。その中で、他の数字との共起関係がどのようなもので、どのような数字と共起する場合が最も多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「九」と他の数字との共起関係についての詳細を図5にまとめると。

図5 日本語の四字熟語における数字「九」と他の数字との共起関係

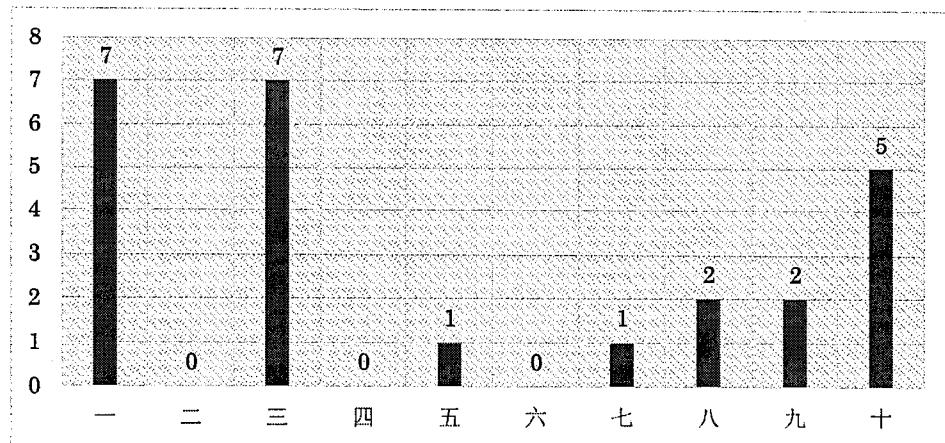


図5から分かるように、日本語における数字「九」を含む四字熟語の中には数字「九」が数字「九」自身と共に起するものが2例あり、総数の8%を占めている。以下、数字「一」、「三」と共起するものが共に7例、28%、数字「十」と共起するものが5例、20%、数字「八」、「九」と共起するものが共に2例、8%、数字「五」、「七」と共起するものが共に1例、4%、数字「二」、「四」、「六」と共起するものはない。

割合から見ると、日本語における数字「九」を含む四字熟語では数字「九」が数字「一」、「三」と共起するケースが最も多く、その次は数字「十」、「八」、「九」、数字「五」と「七」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「九」と他の数字との共起関係に関する詳細は図6の通りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「九」と他の数字との共起関係

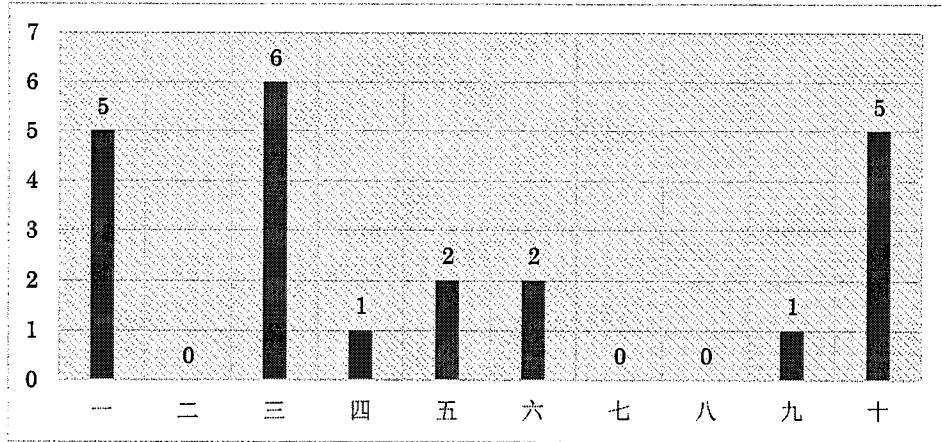


図6から分かるように、中国語における数字「九」を含む四字熟語の中には数字「九」が数字「九」自身と共に起するものが1例で、総数の4.55%を占めている。数字「一」、「十」と共起するものが共に5例、22.73%、数字「三」と共起するものが6例、27.27%、数字「四」と共起するものが1例、4.55%、数字「五」、「六」と共起するものが共に2例、9.09%、数字「二」、「七」、「八」と共起するものはない。

割合からみると、中国語における数字「九」を含む四字熟語では数字「九」が数字「三」と共起するケースが最も多く、その次は数字「一」、「十」、「五」、「六」、「四」と「九」の

順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「九」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは、日中両言語の四字熟語において、数字「九」と他の数字と共に表す意味を分類し、提示する。具体的な例もあげる。

(1) 数字「一」と共起する場合

A: 鮮明な対比

日：一日九遷 一日九回

中：九死一生 九牛一毛 一日九迁 一言九鼎

(2) 数字「三」と共起する場合

A: 多い

日：三拝九拝 三跪九叩

中：三转九弯

B: あらゆる

日：三槐九棘

中：三教九流

C: 繰り返し

日：三思九思

中：なし

D: 程度の高さ

日：なし

中：三贞九烈

(3) 数字「五」と共起する場合

A: 実際の数量

日：九寸五分

中：なし

B: 帝王を敬う

日：なし

中：九五之尊 九五之位

(4) 数字「六」と共起する場合

A: あらゆる

日：なし

中：六街九陌

(5) 数字「十」と共起する場合

A: ほとんど、多数を占める

日：十進九退 十羊九牧 十室九空

中：十羊九牧 十室九空 十拿九稳

B: 多い

日：なし

中：十亲九故 十病九痛 九十其仪

日中両言語における数字「九」を含む四字熟語において、数字「九」の他の数字との共起関係については数量から見ると、日本語においても、中国語においても、数字「一」、数字「三」、数字「十」と共起するケースが他の数字と共起するケースより相対的に多く、合わせて七割以上を占めている。

数字「九」が数字「八」までと共起する場合については先に述べたので、ここでは数字「十」と共起する場合を見ることとする。数字「十」と共起する場合、日中両言語において、共に「ほとんど、多数を占める」という意味を表す以外、中国語では“十亲九故”「たくさんの親戚と友達」、“十病九痛”「よく病気すること」など、「多い」という意味が見られる。一方、日本語においては、このような使い方は見られないようである。

3. 数字「九」を含む四字熟語の対照考察

ここでは以下の三つに分類し、日中両言語における数字「九」を含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「九」を含み、同義・類義を表すもの、②両言語とも「九」を含み、異義を表すもの、③一方の言語で「九」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「九」を含み、同義・類義を表すもの

九十九折 // 九曲连环

(12) 人びとは九十九折の遠い山道をのぼって甘藷、陸稻、甘藍などをつくり、麦もつくった。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「越前竹人形」』)

訳文：村民们得攀登九曲连环的山路去种甘薯、旱稻、卷心菜等作物，还种麦子，运施肥料便成了一桩很繁重的体力劳动。

日本語における四字熟語「九十九折」は山道などがはなはだしく曲がりくねっているこ

とを喻えている。もともとは「葛折り」と書いた。「葛」とは山に生えている蔓性の植物「ツヅラフジ」のことであるが、この植物の蔓というのがクネクネと折れ曲がっている。そこから「ツヅラフジみたいにクネクネ曲がった所の多い道」のことを「葛折り(の道)」と言うようになったのである。「葛折り」と「九十九折」は同じであり、また、九十九は「幾重」という意味からの当て字であるので、「九十九折」とも書くようになったそうである。鑑真の高弟鑑禎が毘沙門天を祀ったことに始まる京都の鞍馬寺には「九十九折参道」がある。

これに対して、中国語において、似た意味を表す四字熟語は“九曲连环”である。“九曲连环”は光未然《黄河颂》“我站在高山之巅，望黄河滚滚，奔向东南。惊涛澎湃，掀起万丈狂澜；浊流宛转，结成九曲连环”を出典とする四字熟語である。ここにおける数字「九」は「たくさんの、極めて多いこと」という意味を表し、“九曲”は曲がりの多いことを表し、“连环”はその曲がりくねった道が一本一本繋がっているという意味を指している。また、中国語においては、“九连环”という言葉もある。“九连环”は知恵の輪の一種で。チャイニーズリングとも言う。金属製の輪が順につながった形をしている。それに針金の細長い輪を挿し、根本までからませる。はずすときはすべての輪をはずして、本体と細長い輪が分離された状態にする。

九腸寸断 // 回肠九转

(13) 母が亡くなったと聞いた時は九腸寸断になった。(東方書店『例解中国語熟語辞典』)

訳文：听到母亲去世的消息，悲痛得回肠九转。

日本語における四字熟語「九腸寸断」は腸がずたずたに断ち切られるような非常に辛いことや悲しみを喻えている。ここにおける数字「九」は数が多いことを表しており、「九腸」は多い腸、つまり腸全体を表している。「寸断」はずたずたに断ち切られる意味である。『世説新語・黜免』に以下の故事がある。晋の武将桓温が船で蜀に攻め入ろうとして三峡を渡ったとき、その従者が猿の子を捕らえて船に乗せた。母親の猿は泣き悲しみ、連れ去られた子猿の後を百余里あまりも追い、ついに母猿は船に飛び移ったが、そのままもだえ死んでしまった。母猿のはらわたを割いてみると、腸がずたずたにちぎれていた。この故事を出典とした中国語における四字熟語は“猿肠寸断”であるが、いまはあまり使われず、“肝肠寸断”が使われるようになった。数字「九」は数が多いことを表すため、“猿肠寸断”は日本に伝わって、「九腸寸断」に変ったと推測されている。

これに対して、中国語において似た意味を表す四字熟語には“回肠九转”がある。“回肠九转”は汉・司马迁《报任少卿书》：“是以肠一日而九回。”を出典とする四字熟語である。

ここにおける数字「九」も「たくさんの、極めて多いこと」という意味を表しており、“转”は回ることを指している。“回肠九转”は腸が何回もねじれることから、焦慮傷心から腸のねじれるような苦痛を味わうことを喻えている。日本語における四字熟語「九腸寸断」とよく置き換えられる。

九分九厘 // 八九不离

(14) 初めはおれもうっかりしていて、家内に言われて気がつく始末で、あの二人のそぶりじゃ、おぼしめしのあること九分九厘まちがいねえ。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<金光大道>』)

訳文：刚有那么一点影子。开头我也没有留神，倒是我屋里人给我点破的；看他们两个人那一举一动，象有心有意，八九不离了。

日本語における四字熟語「九分九厘」は十分に一厘だけ足りないことから、ほとんど完全に近いこと、ほとんど間違いないく確実なこと、推測・予想などがほぼ確実であることを指している。ここにおける二つの数字「九」は共に数字のプロトタイプ的意味を指している。「厘」は量や割合を示す数値の後に付ける単位である。尺貫法では分量単位として用いられる。正字は「釐」で、「厘」は俗字である。つまり「九分九厘」という場合、少数で表すと 0.99、つまり 99% という意味である。

これに対して、中国語において、似た意味を表す四字熟語は“八九不离”である。四字熟語“八九不离”は“八九不离十”とも言い、老舍《柳屯的》：“可是比较的，我还算是他的熟人，自幼儿的同学。我不敢说是明白他，不过讲猜测的话，我或者能猜个八九不离十。”を出典とする四字熟語である。数の順序から言えば、数字「八」と数字「九」は数字「十」に近接しているという意味であるが、同時に中国語において、数字「十」と“实际”（実際）の“实”は同じ発音であり、「実際の状況に近い」という意味もある。

3.2 両言語とも「九」を含み、異義を表すもの

九鼎大呂 ≠ 九鼎一丝

(15) 在九鼎一丝之际防止了一场重大事故。(東方書店『例解中国語熟語辞典』)

訳文：危機一髪のところで重大事故を防ぐことができた。

日本語における四字熟語「九鼎大呂」は非常に貴重な物や重要な地位や名声などのたとえである。ここにおける数字「九」は「九つ」という意味であり、「九鼎」は「九つの鼎」のことであり、夏王朝の開祖禹王が九つの州(中国全土)から献上させた銅で作った九つの鼎のことを指している。それ以来、天子の宝・象徴として伝えられた。「鼎」とは三本足の

釜のようなものであり、いけにえの調理具として、また祭器として用いられた。「大呂」とは周王朝の大廟に供えた大きな鐘のことである。どちらも非常に価値がある珍しい物のたとえである。古代中国語では見られるが、現代中国語ではあまり見られない。現代中国語に訳す場合は四字熟語“一言九鼎”などに訳すのが妥当であろう。

一方、中国語における四字熟語“九鼎一丝”は明・宋濂《同公塔銘》：“呜呼，贤首之宗不振久矣，凜乎若九鼎一丝之悬。”を出典とする四字熟語である。一本の糸に九つの鼎という重いものをつるすという、非常に危険な状況を喻えている。ここにおける“九鼎”は上述の「九鼎」と同じであるが、“一丝”と組み合わせると、日本語における四字熟語「九鼎大呂」とは全く異なる意味となる。“九鼎一丝”を日本語に訳す場合には例(15)のように、四字熟語「危機一髪」と訳すのが妥当であろう。

3.3 一方の言語で「九」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 九仞之功 // 功亏一篑

(16) 優勝決定戦も間近になり、ここで気をゆるめいては、九仞之功の結果になりかねない。(東方書店『例解中国語熟語辞典』)

訳文：冠军争夺战迫在眉睫，现在要是松劲儿的话，就可能会功亏一篑。

(17) 在医預科三年，成績還不算坏，眼看将要升入本科了，如今竟然功亏一篑！(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<关于女人>』)

訳文：医学部予科三年間の成績はそう悪くなかった。本科に入るのを目前にして、九仞之功の結果になった。

日本語における四字熟語「九仞之功」は「九仞の功を一篑に虧く」の略であり、中国語における“功亏一篑”と同じように、《尚书・旅獒》：“为山九仞，功亏一篑。”を出典とする四字熟語である。長年の努力の結果、完成間近な大きな仕事が最後の小さな手落ちで失敗に終わることを喻えている。ここにおける数字「九」は「九つ」という意味を指しており、「仞」は周の時代には八尺(時代によっては七尺の場合もある)のことを指していた。

「九仞」とは九つの仞高さで、とても高いということを形容した言葉である。計算すると、五階建ての建物にほぼ相当する。“篑”(篑)は土を入れて運ぶ竹の籠のことであり、「モッコ」のことを言う。“一篑”(一篑)は、土を盛って運ぶ道具のモッコ一杯分の土のことを指している。

日本語における「九仞之功」と中国語における“功亏一篑”は共に高い山を築くためには最後の一杯のモッコの土を欠いても完成したことにはならない。九分九厘完成した大き

な仕事も、最後のわずかな油断のためにすべて台無しになってしまうように、仕事や物事を行うときは最後の最後まで気を緩めではならないという戒めの四字熟語である。この二つの四字熟語はほとんどの場合にはお互い置き換えることができる。

数九寒天 // 寒空之下

(18) 十五年前的一个数九寒天，这女人怀着八个多月的身孕，给地主推碾子，为那些吃人的魔鬼们准备过年蒸糕的粘面。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈金光大道〉』）

訳文：十五年飾の或る寒空之下、彼女は妊娠八ヶ月の身体で、地主の石臼をひき、人を食らう悪魔たちのために正月用のもち米の粉を準備していた。

(19) 父親の薬代かせぎに寒空之下を蜆を売り歩く八つの三之助の姿は痛ましい。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「近代作家入門」』）

訳文：作品中看仅八岁的三之助为了给父亲买药，数九寒天叫卖海蚬的情节，也实在令人可怜。

中国語における四字熟語“数九寒天”は《刘胡兰》第一幕：“数九寒天下大雪，天气虽冷心内热。”を出典とする四字熟語で、冬の一番寒い時期を指している。ここにおける数字“九”は冬至の当日(陽曆12月22日ごろ)からの9日間のことを指しており、“数九”は冬至から数えて九つ目の9日間までを数える。“数九”的期間が終われば、寒くなくなる。中国に“数九”に関して、“一九二九，伸不出手。三九四九，冻死母狗。五九六九，河边看柳。七九八九，单衣行走。九九闻雷，响声持久。”と歌う有名な“九九歌”がある。

これに対して、日本語における数字「九」はこの意味までは拡張されていないようである。日本語では四字熟語「寒空之下」を用いて似た意味を表す。「寒空」は冬の寒々とした空、または冬の寒い天候という意味を表している。

九泉之下 // 草葉之陰

(20) 要是知道了我获奖的事，父母在九泉之下该是多么高兴啊。（東方書店『例解中国語熟語辞典』）

訳文：私の受賞を、両親も草葉之陰でどんなに喜んでくれているだろう。

中国語における四字熟語“九泉之下”は《魏书·阳平王传》：“若为死鬼，永灭天颜，九泉之下，实深重恨。”を出典とする四字熟語である。幾重にも土が覆いかぶさった地下深くという意味から、死後に行く世界、黄泉のことを指している。古代の中国人は地下に死者の世界があると考え、そこを“九泉”と呼んだ。ここにおける数字“九”は「数のきわまり、極めて数の多いこと」という意味を指している。“九泉”は“黄泉”とも呼ぶ。「黄」

は五行思想で土を表しており、黄という文字で地下を表したのである。

これに対して、日本語で似た意味を表す四字熟語は「草葉之陰」である。日本語における四字熟語「草葉之陰」は草や葉の下という意味から、墓の下、つまりあの世のことを指している。日本では古来より死んだ人を地中に埋めていた。現在は埋葬したところに墓石を置くが、墓石を置かない時代もあった。埋葬したところに草が生えて、草が茂ると、その草の下が陰になる。つまり、死者は「草葉之陰」の下に眠っているわけである。現在は墓石を置くが、それでもしばらく手入れをしなければ、すぐに墓石の周りに草が生える。その状態が本来の意味での「草葉之陰」ということである。

九霄云外 // 雲之彼方

(21) 嗓子疼时，他发誓要忌烟，可嗓子一好，他便把那誓言抛到了九霄云外，又开始吸烟。
(東方書店『例解中国語熟語辞典』)

訳文：喉が痛かったとき、彼はタバコをやめようと誓ったが、喉が直るとすぐこの誓いを雲之彼方に投げ出してしまって、また吸い始めた。

中国語の“九霄云外”は北齐 颜之推《颜氏家訓·文章》：“一事愜当，一句清巧，神厉九霄，志凌千载。”を出典とする四字熟語である。はるかかなた、空の限りなく高いところを指している。“九霄”は“九天”とも言う。《太玄》には“有九天，一为中天，二为羨天，三为从天，四为更天，五为眡天，六为廓天，七为咸天，八为沈天，九为成天。”とある。

これに対して日本語にはこのような四字熟語はないようである。似た意味を表す場合、日本語では四字熟語「雲之彼方」を用いる。

4. 数字「九」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

まさに「大八洲国」を自任する日本人の数字「八」に対する思いと同じであり、中国の国土をかつて「九州」と言った。中国人が偏愛したいくつかの縁起がよい数字のうち、数字「九」がもっとも影響力があり、普及したかもしれない。

中国語において数字「一」から数字「十」まで、「多数、多い」という意味を表す数字は数字「九」だけではない、しかし、極限を表す場合は数字「九」の他はないであろう。例えば、四字熟語“九牛之力”は“九牛二虎之力”とも言い、元・郑光祖《三战吕布》第三折：“兄弟，你不知他靴尖点地，有九牛二虎之力，休要放他小歇。”を出典とする。九頭の牛に匹敵する力から、事柄を成功させる場合など、骨を折るほど大変な事柄、たいへんな力を尽くすことを喻えている。日本語ではよく「力の限り」や「骨を折る」などと訳す。

では、数字「九」がなぜ極限を表すことができるのかというと、甲骨文字の字形に關係

するようである。数字「九」は「龍」の甲骨文字とよく似ており、《本草纲目》では“龙有九似：头似蛇，角似鹿，眼似兔，耳似牛，颈似蛇，腹似蜃，鳞似鲤，爪似鹰，掌似虎”と龍を九種類の動物からなったと述べている。この九種類の器官がある靈異な動物には不思議な力があるということからも、数字「九」が極限性を体現していると考えられている。

中国の古文字学史上、数字「九」の神秘的な造形がさまざまな憶測を引き起こしたことがあった。许慎が《说文解字》を著したとき、小篆の「九」の字形に、“九，阳之变也。象其屈曲究尽之形。”と説明を付している。林义光は「九」字の曲がりくねった古い字形から、本来の意味を「曲」と解したとしている。丁山は《数名古谊》で、“九本肘字，象臂节形，臂节可曲可伸，故有纠屈意。”と言っている。

従って、湾曲が多いという意味に関わる四字熟語には数字「九」がよく出てくる。例えば、刘禹锡の《浪淘沙》には“九曲黄河万里沙，浪淘风簸自天涯。”とある。四字熟語“黄河九曲”、“九曲连环”も徐々に広まった。四字熟語“鹤鸣九皋”的出所である《诗·小雅·鹤鸣》の最初の部分に“鹤鸣于九皋”とある。ここにおける“九皋”は曲がりくねったところが多い水辺の平地を指している。また、司马迁の《报任少卿书》には“是以肠一日而九回。”とある。そこから腸が九回ねじれるほど憂悶して苦しむという四字熟語“九曲回肠”、“回肠九转”などが出てきた。これは医学で「腸は一日に九回りする」と関係あると考えられ、一度に九回転すると形容したのである。一方、日本でも苦しみの限りのことを腸全体が断ち切れるようということで、「九腸寸断」という四字熟語を使う。

現在の古代文字学界における「九」に対する見解は“曲”説のほかに、「龍」説もかなり有力である。《金文诂林补》卷十四には、于省吾らは甲骨文や金文の字形から、数字「九」が“虫”形か“虯龙”形とみなしている。《诗骚联绵字考》には、姜亮夫も数字「九」を“虯”とみなし、龍蛇崇拜に由来があると考えている。数字「九」からの連想により、龍は頭を九つ有するばかりか、後世に生まれた神話伝説では九匹の子を有するとされる。いわゆる四字熟語“一龙九子”的説である。また、“九龙车”、“九龙山”、“九龙殿”、“九龙灯”などのように、“九龙”は多くの詩にも詠まれている。中国における元宵節の“九龙灯”はいまでも盛んに行われている。九枝燈は一つの幹から九つの枝に分かれた燈りのことである。劇の皇帝の衣装も“九龙”的金の刺繡である。

一方、日本でも雨乞いに関連して、「龍神」を祀る村落は全国に多いが、「九」という数字はあまり出てこない。和歌山县日高郡にかつて龍神村という村があった。同県の中央東部に位置し、龍神温泉の村として知られていた。2005年に田辺市、中辺路町、本宮町、大

塔村と新設合併して田辺市となつたが、田辺市の広域地名として大字に「龍神村〇〇」の名称を残しているそつである。

“龙”と言えば、古代帝王が連想されるであろう。中国の伝統文化において、“龙”と数字「九」という二つの文字が帝王の象徴または代名詞とすることができます。《周易乾卦》では“九五、飞龙在天、利见大人”と解釈された。“初九”的“潜龙”から、“九五”的“飞龙”までになり、すでに極限に達したということである。皇帝はその高い地位を表すために四字熟語“九五之尊”と言い、九匹の龍を施した服、いわゆる“九龙袍”を着る。君主は必ず“一言九鼎”でなければならず、承諾したことは絶対実行するという意味である。白居易の《长恨歌》に“九重城阙烟尘生、千乘万骑西南行。”とある。“九重城阙”とは帝王の宮殿の深さを形容する四字熟語である。注意すべきことは代々の帝王の宮殿は「九」を使って、名づけられることが多い。最も代表的なのは紫禁城であろう。紫禁城は故宫とも言う。三つの大殿の高さはすべて“九丈九尺”であり、各大殿の階段の数も九あるいは九の倍数である。「午門」の上にある建物も主に九軒を単位として、九かける九で、合わせて八十一軒となる。なぜ数字「九」が帝王の象徴と関係するかについては、以下の「九宮图」を見てみよう。

离			
巽	4	9	2 坤
	☰	☲	☷
震	☳	5	☱ 兑
	☳	☵	☱
艮	☶	1	☶ 乾
	☶	☷	☶
坎			

「九宮图」は数字「九」と数字「五」を基礎としてできたものである。この図表は横、縦、交差の三つの数を相互に足すと、必ず十五となる（郭书春等《算经十书・数术记遗》参照）。数字「九」は最大の陽数として、数字「五」は他の八つの数を貫通する核心の数字であり、それぞれに神秘的な機能がある。従って、数字「五」と「九」という最大かつ最大の陽数が結合し、これ以上にはならない「天数」となり、帝王のみに適応することができるるのである。

また、帝王が天に対して祭祀を行つた祭壇も数字「九」と関係があると考えられる。例

えば、北京における天壇の圜丘が円形を呈し、三層である。第一層の中心は円形の石であって、太極を象徴する。周囲に敷き詰められた石は扇形で、その数は「九」である。その外側に同心円が拡がっているが、使われている石はみな「九」とその倍数である。このように築かれている天壇の圜丘は数字「九」を崇拝するという思想を強烈に体現している。

『呂氏春秋』⁶¹に“天有九野，地有九州，土有九山，山有九塞，泽有九薮。”とある。夏朝の大禹は領土を九州に分け、各州をさらに九つの地域に分けたという神話がある。そのため、中国語における四字熟語“九州四海”などの「九州」は天下、世界全体という意味として用いられている。また、人間には肝、肺、心、脾、腎の五つの神々を藏する藏と、膀胱、胃、大腸、小腸の四つの有形のものを藏する藏とがあり、合わせて“九藏”になる。

“九野”は人の“九藏”に相応する。この数の組み合わせには数に対する極めて古い科学的概念が含まれており、「天人合一」という心理を体現し、数字「九」が民衆の中で巨大な神秘性を有する根源を表している。

一方、日本列島の南西部に位置する島の一つ「九州」の由来については軍記物語として知られる『陰徳太平記』の序に、「山陰山陽四国九州」との記載がある。この名称がいつから使われるようになったかは不明である。一般に「九州」は西海道のうち筑前国・筑後国・肥前国・肥後国・豊前国・豊後国・日向国・大隅国・薩摩国の九国の総称として名付けられ、「九国」とも呼ばれた(『日本地名大百科—ランドジャポニカ』1996 小学館 P380-381)。

地上の「九州」と関係するのは地下の「九泉」という概念であり、地獄が九層であることを暗示している。その実、「九泉」はかつては「黄泉」と呼ばれ、天数の「九」とはまだ関係はなかったようである。春秋時代末期の左丘明による《春秋左氏傳》にある“黄泉相見”という有名な故事からも、このことは分かる。戦国時代から、「黄泉」が「九泉」に変わり、“九泉之下”、“含恨九泉”、“含笑九泉”などという四字熟語が生まれたのである。これに対して、日本語においては「九泉」という言い方はなく、「黄泉」あるいは「草葉の陰」などによって、その意味を表している。

また、「九龍」に対するもう一つの聖獸は「九尾狐」である。

郡司(1997)で、三国時代に伝わっていた希代の妖狐「金毛九尾」の狐が日本を脅していた時代がある。下野国の那須野にある殺生石は玄翁和尚の一撃のもとに石と化した妖狐の終焉の古跡として、その後、芭蕉が「飛ぶものは雲ばかりなり石の上」と句を残し、永くその上を飛ぶ鳥や虫は毒によって死んで落ちるという伝説となつたと述べている。後には坪内逍遙による「金毛狐」という舞踊劇もある。狐にまつわる妖しい話は古来より日本には

多く、それは陰陽道との関係が深く、稻荷信仰の流行とも関係していると思われる。

一方、中国でも小説には千年の老狐の妖術師の活躍する話がある。しかし、日本ではこの九尾狐を怖がって、数字「九」も避けられているが、中国では《涂山歌》で“绥绥白狐，九尾庞庞。成子家室，乃都攸昌。”と《白虎通德論》卷五：《封禪》で“狐九尾何？狐死首丘，不忘本也，明安不忘危也。必九尾者也？九妃得其所，子孙繁息也。于尾者何？明后当盛也。”などと述べたように、「九尾狐」は悪狐でも妖狐でもなく、幸福のシンボルであった。

中国語における数字「九」は「九尾狐」のように思うがままに天や地を駆け巡ることができるばかりか、幾何学的に分割する力も具えている。

例えば、古人は天を九つの区域、つまり天の中央とその他の八方に分けたことから、“九天”となった。しかし、九天という名称には別の見解もある。《广雅・釋天》には“东方皞天，东南阳天，南方赤天，西南朱天，西方成天，西北幽天，北方玄天，东北变天，中央钧天。”とあり、また、《淮南子・天文訓》に“天有九野，中央及四方四隅，故曰九天。中央曰钧天，东方曰苍天，东北曰变天，北方曰玄天，西北曰幽天，西方曰颢天，西南曰朱天，南方曰炎天，东南曰阳天。”とある。名称はいさか異なるが、九分法で天界を分割する点では一致している。

天はただ一層に“九天”に分けられるだけでなく、何層にも分けることができる。《楚辞》にはたびたび“九天”が出てくるが、「九層の天」のことのようである。

ここでいう「九層之天」は一層だけの区分からでは理解することができない。叶舒宪・田大宪(1995)では、以下のように言っている。中国の古代の文化的観念では「九」は天数と陽数の究極であり、到達し得ないほど高さの神話的空間を象徴しており、一層だけの区分の範囲として計数の概念と統一し、そこを超越して何層にも分けることで広大な立体空間を無限にむなしくすることもできる。神話的思考における“九天”はまさに「九」の神秘的用法を援用している。さらに一步進んで細かく検討すれば、“九天”が決して「九」の唯一の神話的空間ではないことがわかる。《楚辞》を例にとれば、“九重”、“九关”、“九霄”などが“九天”と同様の概念を表している。四字熟語“九霄云外”、“九天玄女”などはその意味の出典となっている。一方、日本語においても似た意味の四字熟語「九天直下」、「九仞^②之谷」などがある。

中国における陰陽概念では「九」は究極の陽数であり、使いさえすれば神聖、豊富という巫術的なものとなるとみなしたようである。南方の少数民族の間に広く伝わる“九阳”を主体とする多日月神話もこのような背景で誕生したと考えられる。例えば、ナシ族の民

謡には“天上有九个太阳，九个月亮。九个太阳，晒得人没处藏。”とあり、ミヤオ族の故事にも九個の太陽と八個の月が交代で現れ、万物を殺しすというのである。そこに“羿射九日”という四字熟語があり、人民のために害を除くなど英勇的な行為を喻えている。

また、数字「九」と「陽」の深い結びつきにより、「重陽節」が年中行事となった。重陽節は「重九節」とも言う。《易经》は「九」を陽数とし、九が二つ重なれば「重九」となり、「重陽」とは実は「重九」のことである。中国では《西京杂记》で“九月九日，佩茱萸，食蓬饵，饮菊花酒，云令人长寿。”と述べているように、かつてこの日に入びとは茱萸で飾り、文人墨客はともに山水に遊び、高台に登り、菊花の酒を手に詩を詠じた。

一方、この風習が日本に伝わり「重陽の節句」となった。飯倉(2007)によると、重陽の風習はすでに天武天皇の時代には伝わっていたと言われ、平安時代には重陽節として宮中の正式な行事となった。当時の宮中では「菊花の宴」が催され、菊酒を飲み交わし、天皇の長寿を祝った。なぜ菊酒かと言えば、古代中国では菊は不老長寿の靈草と信じられていたからである。そのため、重陽の日の前夜、綿に菊の香や露をしみ込ませ、翌日の朝にそれで体を拭くと長生きできるとも言われている。こうした風習から「菊の節句」ともよばれていた。

中国において数字「九」は「久」と発音が同じであり、字形も似ており、より一層崇拜されたが、日本においてはその発音が人々の価値とまったく逆方向のものであるから、忌み避けられた。日本人にとって奇数は吉祥の象徴であり、人に物やお金を贈る時、一般に奇数を贈り、結婚式なども奇数の日を選ぶことが多い。しかし、同じ奇数でも「九」だけは避けられたそうである。なぜなら、日本語の数字「九」の発音が「苦痛」、「苦しい」の「苦」につながり、数字「九」は苦痛、苦難など不吉なことを連想しやすいからである。同じ数字「九」でも、発音により、日中両言語において異なる概念を生み出している。

日本語において、数字「九」が含まれた番号なども縁起が悪いと見なされている。例えば「49」は「四苦」（仏教の中で人生の四種の根本的な苦しみ、生、老、病、死の総称）につながり、「4989」は四字熟語「四苦八苦」につながるなどである。

X. 数字「十」



1. 日中両言語における数字「十」の意味分析

1.1 日本語の場合

日本語における数字「十」の意味を調べるためにあたって、『広辞苑』(1998)、『大辞林』(2006)、『国語大辞典』(1993)、『日本語大辞典』(1991)、『大辞泉』(2012)、『岩波国語辞典』(2011)、『国語辞典』(2006)、『新明解国語辞典』(2005) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 7 項になる。

基本義：

- ① 数の名。九の次、十一の前の数。

派生義：

- ② 十つ目、十番目。
- ③ 十度、十回。
- ④ 多い、たくさん。
- ⑤ すべて、完全、満ちたりて不足のこと。
- ⑥ 垂直に交わる形。
- ⑦ 十歳。

1.2 中国語の場合

中国語については主に《现代汉语大词典》(2000)、《新华词典（修订版）》(2001)、《现代汉语辞海（全新版）》(2003)、《现代汉语词典》(2012)、《新现代汉语词典》(1992)、『簡約現代中国語辞典』(1996)、『中国語大辞典』(1994) を参照した。基本義及び派生義の二つの部分に分けてまとめると、以下の 8 項になる。

基本義：

- ① 数目、九加一所得的数。

派生義：

- ② 序数、第十。

- ③ 十次。
- ④ 多数。
- ⑤ 完滿，完备，齐全。
- ⑥ 表示垂直相交状的物象。
- ⑦ 杂。
- ⑧ 特指十月。

上から見られるように、日本語における数字「十」の意味は7項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が6項ある。これに対して、中国語における数字“十”の意味は8項あり、プロトタイプ的意味、即ち基本義が1項で、拡張された意味が7項ある。

以下で日中両言語における数字「十」に関する意味的分析を試みる。

1.3 数字「十」のプロトタイプに関する比較対照

日中両言語における数字「十」のプロトタイプ、つまり数える数量的概念として、意味は一致している。

(1) 法律のことならこの刑事より江藤の方が、十倍もよく知っている。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「青春の蹉跌」』)

訳文：当然，论起法律，江藤贤一郎比这个便衣警察多懂十倍。

(2) 前一回还是十斤两吊四，今天就要两吊六。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈彷徨〉』)

訳文：この前まで十斤で二千四百文だったのに、今日は二千六百くれというのよ。

例(1)と例(2)は数字「十」のプロトタイプ的意味に基づいた例である。例(1)は基本的な数の名を表し、例(2)は助数詞と連用する場合である。例(2)における“十斤”は「斤の十倍の重さ」という意味を指している。

1.4 数字「十」の意味拡張に関する比較対照

派生義②から⑥までは、日中両言語においては意味は共通している。

(3) 僕は今日、朝の十時頃に大森へ寄ったら浜田に遇ったよ。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「痴人の愛」』)

訳文：我今天早晨十点来钟去了趟大森，遇见浜田了。

(4) 十念と一念は、『無量寿經』において、特に重要な思想です。(机械工业出版社《日汉大辞典》)

訳文：十念和一念是《无量寿经》中特別重要的思想。

(5) 真是十死莫赎。(大修館書店『中日大辞典』)

訳文：本当に十度死んでも償えない。

例(3)は日中両言語における共に派生義②に基づいて、数字「十」の順序、十つ目を表している例である。例(3)には「十時」深夜一時から十番目の時のことと指している。例(4)と例(5)はいずれも日中両言語における数字「十」の派生義③に基づいて、「十たび」という意味を表している例である。例(4)における「十念」は仏教用語である。阿弥陀仏の相好を十度觀想すること、または「南無阿弥陀仏」を十度唱えることを指している。例(5)における“十死”は「十回死ぬ」という意味を表している。

(6) 十目所視，十手所指，大家都学习了，了解了，就不容许干部乱干了，对整个领导有好处。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈邓小平文选第一卷〉』)

訳文：十目の視る所、十手の指さす所の言葉どおり、みなが学び、身につけたなら、幹部の無茶を許さなくなり、指導全体にとって有益である。

(7) そう思われるに十分な古町の印象だった。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「雪国」』)

訳文：这个十分古老的村镇所给他的印象。

(8) 姑娘们一听说干的是这一行，十有八九皱眉头，哪怕面前站的是十全十美的小伙子，回答也是两个字：“不成！”(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈丹凤眼〉』)

訳文：娘たちはその職業をきくと十中八、九は眉をひそめ、目の前に立っているのが十全十美の若者であっても、答えはきまって「嫌よ」の一言。

例(6)は日中両言語における派生義④に基づいて、数字「十」が「たくさんの、多い」という意味を表している例である。“十目所視，十手所指”は人の目や口は多いもので、隠れて悪いことをしてもすぐばれること、多くの人に見られて指さされることを意味している。例(7)と例(8)は日中両言語における派生義⑤に基づいて、数字「十」が「すべて、完全、満ちたりて不足のないこと」という意味を表している例である。例(7)における「十分な古町」は、「完全な古町」のことを指している。例(8)における“十全十美”は完全で全く欠点のないこと、すべてがそろって完全なことを意味している。「十全」は完全なこと、少しの欠点もないことを指しており、「十美」も完璧で、非の打ちどころのないことを指している。

(9) 菊の紋章が十字で消された銃を下から支えるのは、美しい私の左手である。(北京日

本学研究センター『中日対訳コーパス「野火」』)

訳文：枪上的菊花标志被十字叉抹去了，托枪的手正是我美丽的左手。

(10) 叶赫那拉氏和李鸿章这些民族的罪人，被永远钉在了耻辱的十字架上。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈我的父亲邓小平〉』)

訳文：葉赫那拉氏(西太后を出した満州族の一族)や李鴻章のような民族的罪人は永久に屈辱の十字架に張り付けられたのである。

例(9)と例(10)は日中両言語における派生義⑥に基づいて、数字「十」は「垂直に交わる形」という意味を表している例である。例(10)における“十字架”はイエス・キリストが磔刑に処されたときの刑具であり、十字に交わる架のことを指している。これらの意味においては日中両言語における数字「十」の意味が共通している。

(11) お父さんがまだ生きてはった、あんたはまだ十か十一やった頃に、うちは何ぼ、あんたのお母はんになろと思うことがあったやしれしまへん。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「越前竹人形」』)

訳文：你父亲在世的时候，那时你还只有十岁、十一岁，我是多么想做你的母亲哪！

(12) 你十岁跟上我，到如今整整十五年，在这人世上，独有你最摸我的底儿。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈金光大道〉』)

訳文：おめえは十の時におれんとこへ来て、もうまる十五年になんなあ、だからこの世でおめえほどおれのことを知ってる者はいねえ。

例(11)と例(12)は日本語における派生義⑦に基づいて、数字「十」の「十歳」という意味を表している例である。これに対して、中国語における数字「十」はこの意味までは拡張されていないようである。

(13) 旅僧も私と同じくその鮓を求めたのであるが、蓋を開けると、ばらばらと海苔が懸つた、五目飯の下等なので。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「高野聖」』)

訳文：一打开盖子，是很次级的十锦饭，稀稀落落地撒着几片紫菜。

(14) 来盒十锦糖。(小学館『中日辞典』)

訳文：詰め合わせのキャンディーをください。

例(13)と例(14)は中国語における派生義⑦に基づいて、数字「十」の「雜、混じる」という意味を表している例である。“十锦”はいろいろな材料を使い、また多種類のものを取り合せた料理、食品を指している。これに対して、日本語における数字「十」はこの意味までは拡張されていないようであるが、数字「五」が「多い、たくさん」という意味を

表すことができ、日本語に訳す場合には、例(13) “十锦饭”は「五目飯」と訳すのがよいと思われる。また、例(14)のように、“十锦”糖は「詰め合わせ」のキャンディーと訳すこともよいであろう。

(15) 过阴历年，过清明，过端午，过中秋，不过“十一”和“五一”。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<金光大道>』)

訳文：陰暦で正月、清明節、端午節、中秋節を過ごすが、十月一日や五月一日は祝わない。

(16) 然而，在“文革”打倒一大片的狂潮之中，不知怎么的，他们偏幸存，并在“五一”、“十一”一类的盛典中，仍能接到上天安门城楼的通知。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<金光大道>』)

訳文：「文化大革命」の中ではあれほど大勢の人がやられたが、その人は無傷だった、メーデーや国慶節に天安門広場でパレードがあると、そのつど城楼への案内状が送られてきた。

例(15)と例(16)は中国語における派生義⑧に基づいて、数字「十」が特定的に「十月」という意味を表している例である。“十一”は特定的に十月一日を指しており、国慶節とも呼ばれる中国の建国記念日であり、法定休日の一つである。この日をはさむ約一週間が大型連休となる。これに対して、日本語における数字「十」はこの意味までは拡張されていない。日本語に訳す場合には、例(15)のように意味的に「十月一日」と訳すか、例(16)のように、直接に「国慶節」と訳すのが妥当である。

なお、その他の用法についてはごく限られている特殊なものと考えられるため、ここでは取り上げないこととする。

2. 日中両言語における数字「十」を含む四字熟語の全体像

ここでは「出典元」と「構成」、この二つの方面において、日中両言語における数字「十」を含む四字熟語の全体像を把握する。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にまとめてみる。

2.1 日中両言語における数字「十」を含む四字熟語の出典考察

2.1.1 日本語の場合

三省堂の『新明解四字熟語辞典』第二版(2013)によると、数字「十」を含む四字熟語42例が取り上げられている。出典元によって分析して見ると、主に日本を出典とする四字熟語、他国を出典とする四字熟語、仏教または仏教に関連するものを出典とする四字熟語、

出典元不明な四字熟語という四つに分けられる。日中両国における四字熟語についての交流をさらに明確に比較するため、他国を起源とした四字熟語の中から特別に中国を起源とした四字熟語の一項を設ける。

2.1.1.1 中国を起源とした数字「十」を含む四字熟語

中国を起源とした四字熟語は主に古代典籍と詩歌、または詩歌評論集の二つに分けることができる。

(1) 古代典籍から

古代典籍を起源とした四字熟語は「一欠十求」(房玄龄《晋书》より)、「三十而立、四十不惑、五十知命、六十耳順、十五志学」(《论语》より)、「一目十行」(姚察《梁书》より)、「一夜十起、五倫十起」(范晔《后汉书》より)、「十寒一暴、一暴十寒」(《孟子》より)、「一饋十起」(刘安《淮南子》より)、「五風十雨」(王充《论衡》より)、「三十六計、三十六策」(梁萧子《南齐书》より)、「十羊九牧」(《隋书·杨尚希传》より)など、19例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集から出てきた四字熟語は「七十古稀」(杜甫《曲江》より)、「十風五雨」(陆游《村居初夏》より)、「十日一水」(杜甫《戏题王宰画山水图歌》より)、「十日之菊」(郑谷《十日菊》より)、「十年一劍、十年磨劍」(贾岛《剑客》より)など、7例ある。

2.1.1.2 日本を起源とした数字「十」を含む四字熟語

日本を起源としたものには「常命六十」(福山藩《俚言集覽》より)、「十人十色」、「十中八九」の3例がある。

2.1.1.3 他国を起源とした数字「十」を含む四字熟語

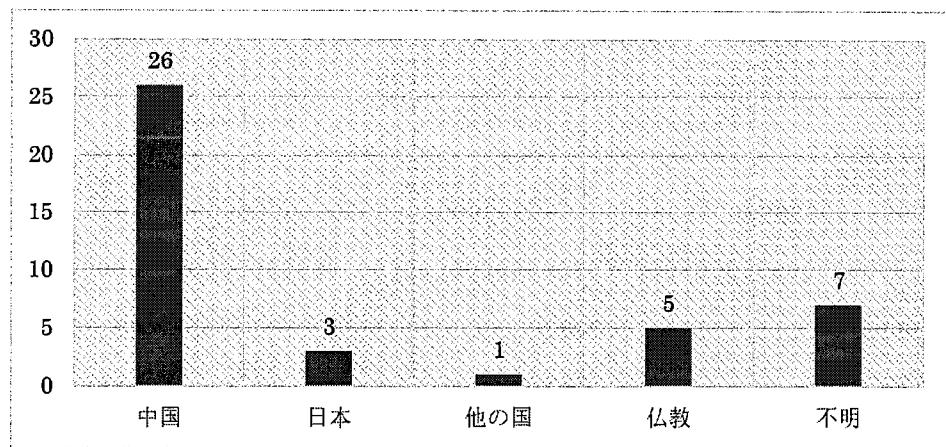
他国を起源としたものは「十字砲火」の1例のみである。「十字砲火」は英語のクロスファイアから訳された四字熟語である。機関銃のような自動火器を使用した戦術の一つであり、二つの火器から放たれる火線が交差するところから、こう呼ばれている。

2.1.1.4 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「十」を含む四字熟語

仏教または仏教に関連するものを起源としたものは「十進九退」、「十万億土」、「十逆五惡」、「十惡五逆」、「十誠五倫」など、5例ある。

以下の図1は日本語における数字「十」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図1 日本語における数字「十」を含む四字熟語の出典元



上の図1からも分かるように、日本語における数字「十」を含む四字熟語の中で中国からのものが26例あり、総数の61.90%を占めている。以下、中国以外の他国からのものが1例、2.38%、日本からのものが3例、7.14%、仏教または仏教に関するものからのものが5例、11.90%、また出典不明な四字熟語が7例となっている。日本語における数字「十」を含む四字熟語の中で中国からのものが最も多く、総数の半分以上占めている。

2.1.2 中国語の場合

商務印書館の《成语大词典》第二版(2012)に収録されている数字「十」を含む四字熟語は43例である。出典元によって分析して見ると、主に中国を起源とした四字熟語、他国を起源とした四字熟語、仏教または仏教に関連するものを起源とした四字熟語という三つに分けられる。

2.1.2.1 中国を起源とした数字「十」を含む四字熟語

中国を起源とした数字「十」を含む四字熟語は、主に古代典籍から、詩歌または詩歌評論集からと、伝説、劇曲及び小説などの文学作品からの三つに分かれる。

(1) 中国古代典籍から

中国の古代典籍からのものは「一以当十、以一当十、用一当十」(劉向《战国策》より)、「一目十行、十行俱下、目下十行」(姚察《梁书》より)、「一曝十寒、一曝十寒、十寒一曝」(《孟子》より)、「闻一知十、三十而立」(《论语》より)、「十二金牌」(《宋史·岳飞传》より)、「五风十雨」(王充《论衡》より)、「十羊九牧」(《隋书·杨尚希传》より)、「十室九空」(黄宪《外史·将才》より)、「十恶不赦」(《隋书·刑法志》より)、「驽马十驾」(《荀子》より)など、23例ある。

(2) 詩歌または詩歌評論集から

詩歌または詩歌評論集からのものは「五光十色」(江淹《丽色赋》より)、「十五五」(郭茂倩《乐府诗集》より)、「十年寒窗、十载寒窗」(刘祁《归潜志》より)など、4例ある。

(3) 伝説、劇曲及び小説等の文学作品から

伝説、劇曲及び小説などの文学作品からのものは「一五一十」(施耐庵《水浒传》より)、「指一说十」(李绿园《岐路灯》より)、「得一望十」(冯梦龙《醒世恒言》より)、「七老八十」(凌濛初《初刻拍案惊奇》より)、「十万火急」(冯玉祥《我的生活》より)、「十全十美」(冯梦龙《警世通言》より)、「十步芳草」(刘向《说苑》より)、「十里洋场」(矛盾《健美》より)、「十指连心」(汤显祖《南柯记·情尽》より)など、13例ある。

2.1.2.2 仏教または仏教に関連するものを起源とした数字「十」を含む四字熟語

中国語における数字「十」を含む四字熟語の中で、仏教または仏教関連のものを起源としたものは「十字街头」(釋普济《五灯会元》より)、「十进九退」、「十恶五逆」の3例のみである。

以下の図2は中国語における数字「十」を含む四字熟語の出典元の詳細である。

図2 中国語における数字「十」を含む四字熟語の出典元

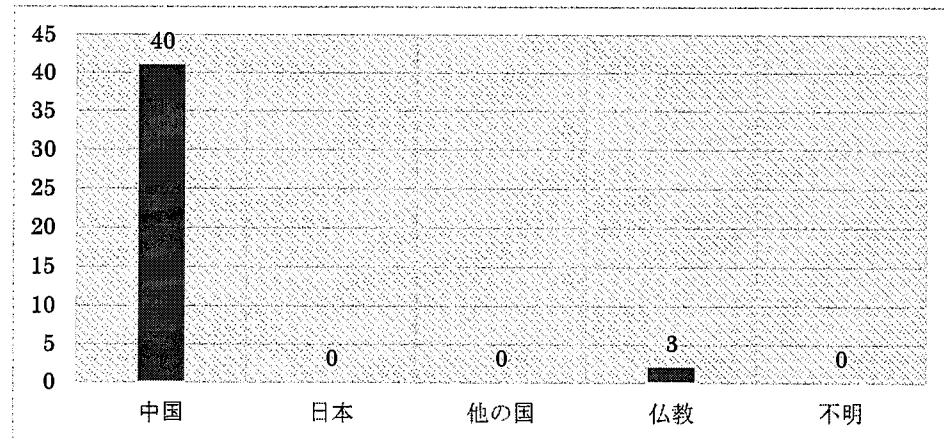


図2からわかるように、中国を起源とした四字熟語が40例あり、総数の93.02%を占めており、仏教または仏教関連のものを起源としたものが3例、6.98%を占め、日本を起源としたものと日中以外の他国を起源としたものはない。中国語における数字「十」を含む四字熟語の出典元がほとんど中国となっている。

2.1.3 数字「十」を含む四字熟語の出典に関する比較対照

日中両言語における数字「十」を含む四字熟語の出典元から見れば、日本語における数

字「十」を含む四字熟語は日本以外の国（特に中国）を起源としたもの、日本を起源としたもの、仏教または仏教関連のものを起源としたものと出典元が幅広い。これに対して、中国語のほうは中国と仏教または仏教関連のものを起源としたものしかなく、総数の93.02%は中国を起源としたものである。

2.2 日中両言語における数字「十」を含む四字熟語の構成考察

2.2.1 日中両言語の四字熟語における数字「十」の現れる位置考察

四字熟語における数字「十」の現れる位置とは四文字において、数字「十」が何番目の文字であるかということを指している。例えば、数字「十」の現れる位置が三番目のみの四字熟語とは「聚散十春」、「駕馬十駕」など、数字「十」の現れる位置が一番目と三番目共起の四字熟語とは「十全十美」などである。

2.2.1.1 日本語の場合

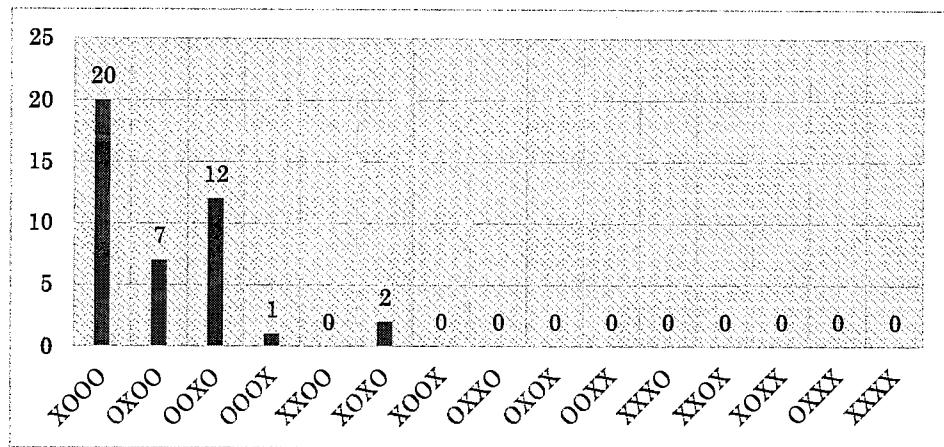
日本語の四字熟語における数字「十」の現れる位置については以下のとおりである。

- ・一番目のみ……20例
- ・二番目のみ……7例
- ・三番目のみ……12例
- ・四番目のみ……1例
- ・一番目と三番目に共起……2例

個数からみれば、最も多いのは数字「十」が一番目のみに現れるもので、総数の47.62%を占めている。以下、三番目のみに現れるもの、28.57%、二番目のみに現れるもの、16.67%、一番目と三番目に共起するもの、4.76%、四番目のみに現れるものは2.38%をとっている。

図3に「X」、「0」によって数字「十」の現れる位置を表示する。「X」は数字「十」を表し、「0」は数字「十」以外の文字を表す。例えば、数字「十」は一番目の位置と三番目の位置に共に現れる四字熟語「十全十美」は「XOXO」で表示する。

図3 日本語の四字熟語における数字「十」の現れる位置



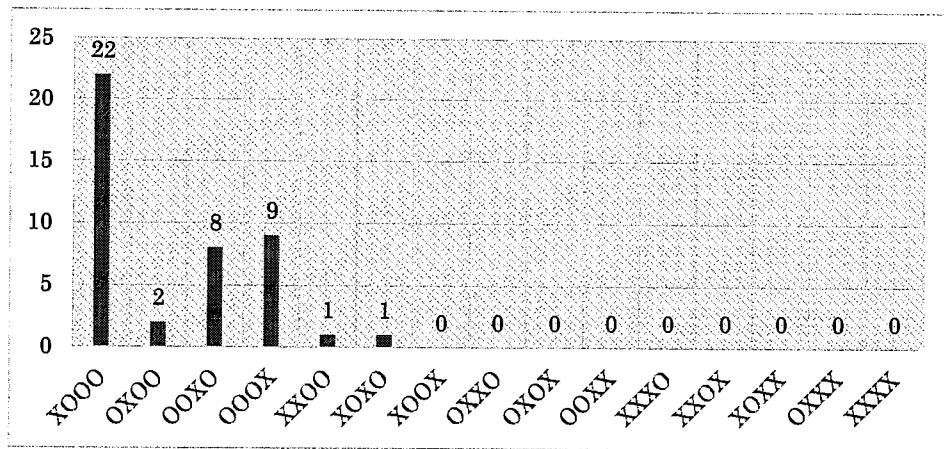
2.2.1.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「十」の現れる位置については以下の通りである。

- ・一番目のみ……22例
- ・二番目のみ……2例
- ・三番目のみ……8例
- ・四番目のみ……9例
- ・一番目と二番目に共起……1例
- ・一番目と三番目に共起……1例

個数から見れば、数字「十」が一番目のみに現れるものが最も多く、総数の 51.16%を占めている。以下、四番目のみに現れるもの、20.93%、三番目のみに現れるもの、18.60%、二番目のみに現れるもの、4.65%、一番目と二番目に共起するもの、一番目と三番目に共起するものはそれぞれ総数の 2.33%を占めている。詳細は図 4 の通りである。

図 4 中国語の四字熟語における数字「十」の現れる位置



2.2.1.3 四字熟語における数字「十」の現れる位置に関する比較対照

日中両言語の四字熟語における数字「十」の現れる位置については中国語においても、日本語においても、一番目のみの位置に現れるケースが最も多い。また、中国語において、数字「十」が二番目のみに現れる四字熟語は2例のみであるが、日本語においては二番目のみに現れるものは少なくない。

2.2.2 日中両言語の四字熟語における数字「十」と他の数字との共起関係考察

日中両言語における数字「十」を含む四字熟語には他の数字と共起するケースが少なくない。その中で、他の数字との共起関係はどうなるのか、どのような数字と共起する場合が最も多いのか。以下ではこれらについて見てみることとする。

2.2.2.1 日本語の場合

日本語の四字熟語における数字「十」と他の数字との共起関係に関する詳細を図5にまとめる。

図5 日本語の四字熟語における数字「十」と他の数字との共起関係

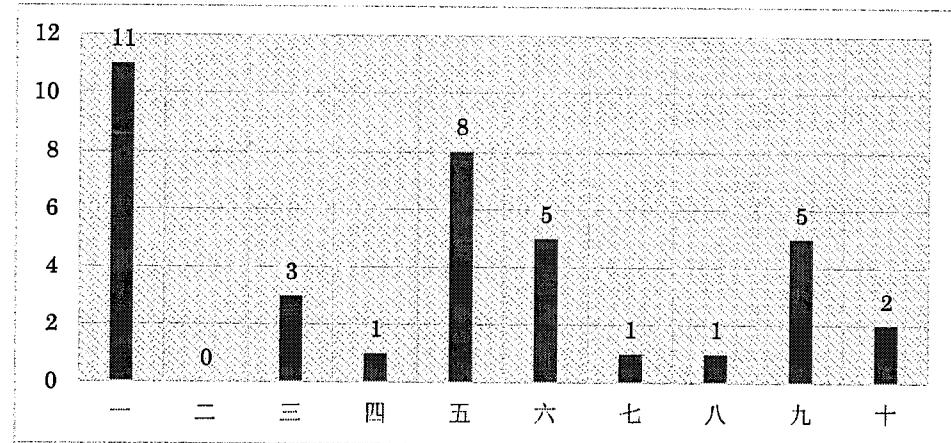


図5から分かるように、日本語における数字「十」を含む四字熟語の中には、数字「十」が数字「十」自体と共に起するものは2例あり、総数の5.71%を占めている。以下、数字「一」と共起するものが11例、29.73%、数字「三」と共起するものが3例、8.11%、数字「五」と共起するものが8例、21.62%、数字「六」、「九」と共起するものが共に5例、それぞれ13.51%、数字「四」、「七」、「八」と共起するものが共に1例、それぞれ2.70%、数字「二」と共起するものはない。

割合から見ると、日本語における数字「十」を含む四字熟語の中で、数字「一」と共起するケースが最も多く、次に数字「五」、「六」、「九」、「三」、「十」、「四」、「七」と「八」の順となる。

2.2.2.2 中国語の場合

中国語の四字熟語における数字「十」と他の数字との共起関係に関する詳細は図6の通りである。

図6 中国語の四字熟語における数字「十」と他の数字との共起関係

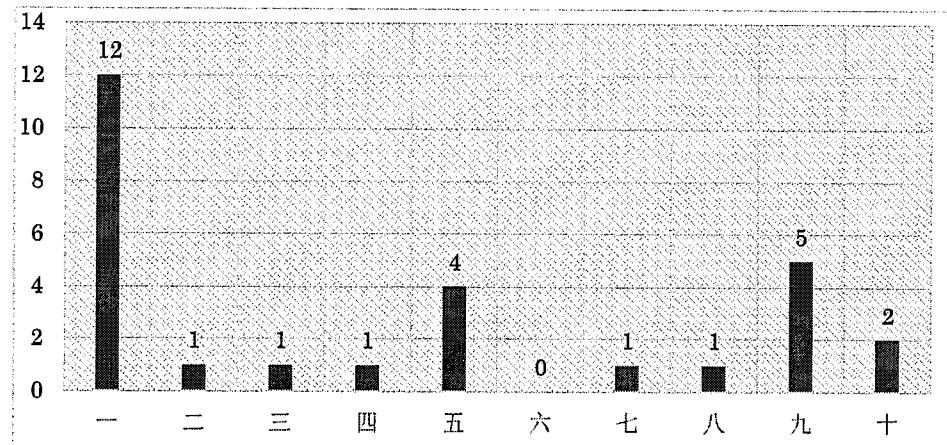


図 6 から分かるように、中国語における数字「十」を含む四字熟語の中には数字「十」自体と共に起するものが 2 例あり、総数の 7.14% を占めている。以下、数字「一」と共起するものが 12 例、42.86%、数字「九」と共起するものが 5 例、17.86%、数字「五」と共起するものが 4 例、14.29%、数字「二」、「三」、「四」、「七」、「八」と共起するものが共に 1 例、3.57%、数字「六」と共起するものはない。

割合から見ると、中国語における数字「十」を含む四字熟語の中には数字「一」と共起するケースが最も多く、次に数字「九」、「五」、「十」、「二」、「三」、「四」、「七」と「八」の順となる。

2.2.2.3 四字熟語における数字「十」と他の数字との共起関係に関する比較対照

ここでは日中両言語の四字熟語において、数字「十」と各数字と共に起して表す意味を分類し、提示し、具体例をあげる。

(1) 数字「一」と共起する場合

A: 鮮明な対比

日：一目十行 一暴十寒

中：一目十行 闻一知十 以一当十 一暴十寒

B: 最大限、極めて

日：十死一生

中：十死一生

(2) 数字「五」と共起する場合

A: 実際の数量

日：十逆五悪 十惡五逆

中：十恶五逆

B：さまざま多彩

日：なし

中：五光十色

(3) 数字「九」と共起する場合

A：ほとんど、多数を占める

日：十進九退 十羊九牧 十室九空

中：十羊九牧 十室九空 十拿九稳

B：多い

日：なし

中：十亲九故 十病九痛 九十其仪

(4) 数字「十」と共起する場合

A：完全、完璧

日：十全十美

中：十全十美 十荡十次

日中両言語における数字「十」を含む四字熟語において、数字「十」と他の数字との共起関係については数量から見ると、日本語においても、中国語においても、数字「一」と共起するケースが最も多い。また、日本語においては数字「二」と共起するケースはない。これに対して、中国語においては数字「四」、数字「六」と共起するケースはない。

数字「十」が数字「九」までと共起する場合については先に述べたので、ここでは数字「十」自身と共起する場合を見ることとする。数字「十」と数字「十」が共起する場合、日中両言語において、表す意味は共通している。共に、「完全、完璧」という意味が見られる。

3. 数字「十」を含む四字熟語の対照考察

ここでは以下の三つに分類し、日中両言語における数字「十」含む四字熟語を比較対照することとする。①両言語とも「十」を含み、同義・類義を表すもの、②両言語とも「十」を含み、異義を表すもの、③一方の言語で「十」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの。

3.1 両言語とも「十」を含み、同義・類義を表すもの

十中八九 // 十有八九

(17) この子は、幼稚園に入れても、十中八九は登園拒否になるか、幼稚園にいってもお母さんの洋服の裾をしっかりと握って、けっして離れようとしないだろうと推測できます。
(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「ひとりっ子の上手な育て方」』)

訳文：这个孩子即使送到幼儿园去，十有八九不去，或到了幼儿园里也是死死抓住母亲的衣角不放。

(18) 你可不知道，但凡死者家属是上岁数的，又没文化，十有八九难对付。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス〈盖棺〉』)

訳文：ごぞんじないだろうが、だいたい死んだやつの家族というのは、年を取っていて、教育を受けたこともなく、十中八九はあつかいにくくい。

日本語における四字熟語「十中八九」と中国語における四字熟語“十有八九”は共に十あるうちの八か九かの確率、高確率ということから、不確実な部分を少しは残すが、「ほとんど」や「おおかた」「ほぼ確実」という意味を表している。四字熟語「十中八九」の語源は定かではないが、坂本龍馬が江戸時代にすでに「事は十中八九まで自らこれを行い、残り一、二を他に譲りて功をなさむべし」と発言していたため、この言葉は江戸時代にはすでに用いられていたと考えられる。一方、中国の“十有八九”は唐・杜甫《负薪行》：“土风坐男使女立，男当门户女出入。十有八九负薪归，卖薪得钱应供给。”を出典とする四字熟語である。

十指之指 // 十目所视

(19) 十指之指の所、事故の責任は安全対策を怠った指導者にある。(黑龙江人民出版社《实用日汉成语词典》)

訳文：十目所视，事故的责任在于没抓住安全措施的领导。

日本語における四字熟語「十指之指」と中国語における四字熟語“十目所视”は共に西漢・戴圣《礼記・大学》：“曾子曰：‘十目所视，十手所指，其严乎。’”を出典とする四字熟語である。十目の視る所、十手の指す所、其れ厳なることから、誰もが認めるところ、多くの人が正しいと判断することを指している。中国語における“十目所视”は“十手所指”という形でも見ることもあるが、日本語の場合、「十指之指」のみで、「十目之视」というものは見られない。二つの四字熟語における数字「十」は共に「多い、たくさん」という意味を指している。

3.2 両言語とも「十」を含み、異義を表すもの

十字之道 ≠ 十字路口

(20) 看着被灼热的枪弹划破的混沌的空间和在死与生的十字路口犹豫不决的芸芸众生。

(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<紅高粱>』)

訳文：灼熱の銃弾に切り裂かれた混沌たる空間と、死と生の岐路にさまよう生きとし生けるものを眺めた。

(21) 往時、活気にあふれていた町も、いまでは市としては存続できるかどうかの岐道に立っているという。(北京日本学研究センター『中日対訳コーパス「日本列島改造論」』)

訳文：如今正处于能否继续以市的名义存在下去的十字路口。

日本語には「十字路」を表す四字熟語として「十字之道」がある。交差点のことを指し、互いに貫通して十字に交わっている二本の道路、またはその場所を指している。ここにおける数字「十」は垂直に交わる形という意味である。

一方、中国語における四字熟語“十字路口”は宋·叶梦得《避暑录话·下·旧说崔慎为瓦棺寺僧后身》“何以不待其末年，执十字路口，痛与百掘，方为快意。”を出典とする四字熟語である。日本語と同じように互いに貫通して十字に交わっている二本の道路のことを指す以外、そこから転じて、(重大な問題の)岐路、選択の分かれ道を喻え、メタファー的な意味に拡張されている。“十字路口”がメタファー的な意味を表す場合、日本語では「岐路」、「岐道」などに訳すのが妥当である。

聚散十春 ≠ 十年生聚

(22) 越十年生聚，而十年教训，二十年之外，吳其为沼乎！(東方書店『中国語成語辞典』)

訳文：越が今後十年間に民を殖やし財を蓄え、その後の十年間に教育、訓練を施せば、二十年後には、吳は沼地と化していることであろう。

日本語における四字熟語「聚散十春」は仲間と別れたあとに、あつという間に長い年月が過ぎ去ったということを表している。ここにおける「聚散」は人が集まつたあとに離れることを表し、「十春」は十回の春という意味から、十年のことを指し、メトニミーが働いていると考えられる。

一方、中国語における四字熟語“十年生聚”は”《左传·哀公元年》“越十年生聚，而十年教训，二十年之外，吳其为沼乎！”を出典とする四字熟語である。中国の春秋時代、吳王夫差が父のかたきの越王勾践を討とうとして、復讐を心に誓つて苦労するという物語から、軍民は心を一つにしながら、発奮することを喻えている。ここにおける数字「十年」は長い年月という意味を表している。

3.3 一方の言語で「十」を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すもの 十人十色 // 龙生九子

(23) 俗话说，龙生九子，各有不同。这兄弟五人的性格爱好差别可太大了。（《汉日双解熟语词典》吉林教育出版社）

訳文：俗に、人間は十人十色で、それぞれなっているが、かれら兄弟五人の性格と好みの違いといったらとても大きい。

日本語における四字熟語「十人十色」は夏目漱石の『我輩は猫である』から、多くの人が目にすることになったようで、猫もそう粗末には扱えない。猫には固有の特色などはないようであるが、猫の社会に入ると、そこはなかなか複雑で、「十人十色」という人間界の語がそのまま当てはまることがある。その後、人の考え方などはそれぞれ違っていることも喻えるようになった。

これに対して、中国語における四字熟語“龙生九子”は明・徐应秋《玉芝堂谈荟・龙生九子》“龙生九子不成龙，各有所好。”を出典とする四字熟語である。“龙生九子不成龙”ともいう。中国の伝説上の生物で、龍が生んだ九匹の子を指す。それぞれ姿形も性格も異なっている。各々の性格に合わせた場所で、各々の活躍を見せるが、親である龍になることはできなかつたという。また、兄弟でも性格が違う事を指す場合もこの四字熟語を用いる。

十冬腊月 // 寒空季節

(24) 虽是十冬腊月，一群青年工人却光着膀子在那里刨着一个破碉堡底座。（北京日本学研究センター『中日対訳コーパス<金光大道>』）

訳文：年の瀬の寒空季節だというのに、若い労働者たちが二の腕までむき出しにして、壊れたトーチカの台座を掘りかえしている。

中国語における四字熟語“十冬腊月”は周立波《暴风骤雨》三“头年炕没扒，老冒烟，烧不热，十冬腊月睡着乍凉乍凉的，我那老伴一夜哆嗦到天明，老睡不着……”を出典とする四字熟語である。旧暦の十月、十一月と十二月の年末近くの寒い季節を指している。ここにおける数字「十」は「十月」という意味を表している。中国語では旧暦の十一月を“冬月”とも言い、旧暦の十二月は“腊月”とも言う。この旧暦の十月、十一月、十二月が合わさると、四字熟語“十冬腊月”になる。

これに対して日本語における数字「十」は「十月」という意味までは拡張されていないようである。中国語における四字熟語“十冬腊月”と似た年末近くの寒い季節を表す場合、

日本語では四字熟語「寒空季節」を用いる。「寒空」は主に冬などにある寒々とした空のこと、あるいは冬の凜とした寒い天候そのものを指している。「寒天」や「冬天」とも呼ばれる。

十拿九稳 // 自信满满

(25) 按期完成这项任务是十拿九稳的。(東方書店『中国語成語辞典』)

訳文：期日どおりにこの任務を果たすのは自信满满である。

中国語における四字熟語“十拿九稳”は明・阮大铖《燕子笺・购幸》：“此是十拿九稳，必中的计较。”を出典とする四字熟語である。十のうち九は確かにあらうという意味から、十分に見込みがあつて保証できるという意味を表している。ここにおける数字「十」と数字「九」は組み合わせて、「ほとんど、多数を占める」という意味を指している。四字熟語“十羊九牧”、“十室九空”なども同じ組み合わせの例である。

これに対して日本語にはこのような四字熟語はないようである。日本語に訳す場合には四字熟語「自信满满」と訳すのが妥当である。

4. 数字「十」及びそれを含む四字熟語に関する日中文化

甲骨文字の造形で「十」の源を見てみると、最初は「一」の縦書き「|」とし、数字「十」を表す。しかし、甲骨文字は横書きと縦書きをはっきりと書き分けられるものではなかつたので、数字「一」との混同を避けるために、その後、「|」に「・」が付き、「・」が横の一線「—」となつた。そして、横の一線「—」が対称的である「|」と組み合わされて「十」という形になつたのである。

司马迁の《史記・律書》に、“数始于一，终于十。”とあり、《孔穎達疏》に、“十者，数之极。”とある。これらの記述は、初期の数概念では「十」が極大の数であったことを示している。さらに一步進めて数の誕生を探れば、《易经》には、“天一，地二；天三，地四；天五，地六；天七，地八；天九，地十”とあり、天地の数では奇数は天を象徴し、天数と言い、数字「九」が究極の天数である。一方、偶数は地を象徴し、地数と言い、数字「十」が究極の地数である上、《易经》の占筮における究極の“成数”でもあり、神秘的で円満であることを表している。数字「十」崇拜は多かれ少なかれ《易经》のこの種の数論の影響を受けている。数字「十」を究極の“成数”とする概念は現在でも依然として存在しており、数字「十」を多、久、遠などの意味とするさまざまな四字熟語が生まれている。特に数字「十」を時間の尺度にする四字熟語は少なくない。

例えば、四字熟語「十年一日」は長い年月の間、少しも変化せず、同じ状態であること

を指している。「十年一剣」（“十年一劍”）は長い間、武術の修練を積むことを指している。

「苦節十年」は長い間、物事がうまくいかなくとも、成功を信じて努力を続けることを指している。“十年寒窗”は長年苦労して勉学に励むことを指している。この四つの四字熟語における数字「十」はすべて「多、久、遠」という意味を指しており、「十年」は長い年月という意味を表している。このような四字熟語における「十」は大半が実際の数ではなく、誇張など修辞の機能を具えている。また、数字「十」が「億」、「万」や「千」と共起する例もよく見られる。例えば、四字熟語「十万億土」はこの世から阿弥陀仏がいるという極楽浄土に至るまでに無数にあるという仏土を指し、そこから転じて、極楽浄土のことを指している。また、四字熟語“十万火急”は大至急、差し迫っていることを誇張する表現である。

许慎《说文解字》に“十，数之具也。‘一’为东西，‘丨’为南北，则四方中央备矣。”とある。五行思想から見れば、数字「十」の字形は「東西南北中」という五つの方位を含み、立体的に宇宙を把握するという世界観・方位観と結びついている。

一方、日本の「十」の象徴的意義の源を溯ると、宗教からいくらか影響を受けているようである。具体的な運用の源についてはある宗教用語に言及しなければならない。それはあらゆる方角や全世界を意味する「十方世界」という四字熟語である。数字「十」の元來の意義に密接に繋がっている「十方」という概念は仏教に由來したものようである。日本は中国の方位観の思想と変わることなく、人と神の摂理の数を「十」とし、「十」は「完全」を表す数としているのである。かぶきの始祖となった出雲阿国の念仏踊は「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨(京大本奈良絵本「お国かぶき」)で始まる。「十方世界」はこの衆生の世界であり、「十方浄土」ともいう。

また、「十」は「拾」(合わせ集める)と同語源であり、一から九を合わせまとめたものをイメージし、すべてを包みこんだ完全なものを指す象徴的意味が生まれてきた。この意味においては日中両言語共に数字「十」が「完全」という意味を表す四字熟語がある。

例えば、日本語における「十全健康」は病気がなく、丈夫なさまを指している。ここにおける「十全」とは少しも欠けたところがないこと、十分に整っていて、危なげのなく万全であるという意味である。日中両言語における四字熟語「十全十美」は完全で全く欠点のなく、すべてがそろって完全であることを指している。ここにおける「十全」と「十美」はどちらも全てのものに欠点などなく、完璧であるということを指している。この意味においては日中両言語は共通している。

また、《汉书・律历志》に“元始有象一也，春秋二也，三统三也，四时四也，合而为十，成五体。”とある。これは非常に奥深く、捉えがたく、数字を演繹する遊戯のようであり、聖数「十」の象徴的な意味が構成する別の要素が暗示されている。すなわち、「十」は最初に生まれた四個の聖数である「一」、「二」、「三」、「四」の総和でもある。

前の節で説明した“太极、两仪、四象”などの語をふたたび、“太极生两仪，两仪生四象。”という命題に統合するとともに復元すれば、この命題が実際には太陽神話から来ていることを容易に見て取ることができる。叶舒宪・田大宪(1995)でも、以下のような記載が見られる。太陽(太極、一)は暗夜が終わると昇り、暗黒と光明が交代する二分した宇宙(兩義、陰、陽、二)と天、地、人の三才が並存する現実の世界をもたらし(二は三を生ず)、そして、太陽が東から南、西を経て北に至る運行規則によって、人類が四方の空間を認識する自然の基本的な尺度(四象、四)がもたらされたのである。太極つまり「一」を両儀(「二」)、三才(「三」)、四象(「四」)という発展の過程に合わせると、その数式はちょうど「一」+「二」+「三」+「四」=「十」になる。このことに着目すると、聖数「十」の由来は華夏文明の農耕者の太陽に対する依存、観測、推定と関係があるかもしれない。言い換えれば、「十」も太陽の数、あるいは太陽が運行する道の象徴とみることができる。

漢数字の「十」の形をみると、太陽に対する崇拜との密接な関係を見出すことができる。

古代ローマ人が使っていた「十月暦法」もローマ文化だけに限られてわけでは決してない。中国の雲南省、貴州省一帯のイ族も独特な「十月暦」を使っていることで有名である。その暦法によれば、一ヶ月は三十日ではなく三十六日であり、一年は十ヶ月に五日か六日の「過年日」(正月)を加え、あわせて三百六十五日と二十五日である。「月」という時を表す尺度は月の満ち欠けの周期をもとにしており、「月」と命名したこの尺度はまさに神話的思考が具体的な表示によって、この法則を抽象化したことを体現しているのである。イ族が三十六日を一ヶ月とするからには、もはやそれを「月」と呼ぶことはできない。というのは、この種の暦制は月の満ち欠けの循環の周期とは関係がないからである。それゆえ、「イ族十月暦」と言わず、「イ族太陽暦」と言う学者もいる。暦法の制定は人びとの生活や思想に最も基本的な時間的尺度をもたらすため、暦法の数字は社会的認識に必然的に大きく影響する。数字「十」が究極の数であることはイ族の文化でも裏づけることができる。

さらに、日中両国における人の美意識から見ると、差が明確であると言える。

中国人の美意識としては「十全十美」があるため、数字「十」は完成、円満、吉祥などの象徴として、大変好まれる。「十大名花」、「十大兵書」、「十大名寺」、「十大新聞」、「十佳

产品」など、「十」を基準にとするものは多い。

中国人が数字「十」を好む歴史は春秋時代に遡ることができる。当時は“天有十日、人分十等”（天は十日に、人間は十級に分けられる）と言う規定が定められていた。すなわち「一王、二公、三大夫、四士、五皇、六舆、七隶、八僚、九仆、十台」である。そして、誕生日の祝いから各種類の祭りまで「十」を単位として行われるのが、すでに中華民族の性格の重要な部分になった。

唐代の大書家は「十体」で世に知られている。四字熟語「玄度十体」は「古文、大篆、八分、小篆、飛白、倒薤、散隸、懸針、鳥書、垂露」のこと是指している。詩歌には「高古、清奇、遠近、双分、背非、虛無、是非、清潔、覆粧、闔門」という「十体」と「獅子返擲、猛虎踞林、丹鳳衍珠、毒龍顧尾、孤雁失群、洪河側掌、龍鳳交吟、猛虎投澗、龍潛巨浸、鯨吞巨海」とを合わせて、四字熟語「十体十勢」という。唐朝の初期の行政区画は「閩内道、河南道、河東道、河北道、山南道、隴右道、淮南道、江南道、劍南道、嶺南道」という「十道」に分けた。各道内の州、府を定め、「宋、亳、滑、許、汝、晉、洛、虢、衛、相」という十州を「十望」と呼ぶ。官制では太子衛士は「十率」を分置し、宿衛、邀巡、斥候などを主管させ、それぞれ左右衛率、左右内率、左右司御率、左右清道率、左右監門率に分け、「十率府」と総称した。また、音楽の面においては唐代の人には四字熟語「十部之樂」という伝世の遺産があった。杜佑の『通典』によれば十部樂とは燕樂、清樂、西涼、天竺、高麗、龜茲、安國、疏勒、高昌、康國を指している。確かに四字熟語「十惡不赦」関わると思われる「謀反、謀大逆、謀叛、惡逆、不道、大不敬、不孝、不睦、不義、内乱」という隋朝の制度を踏襲した法律があり、極めて重大な十種の犯罪を仏教用語の「十惡」を使って命名している例もあるが、数字「十」を基準としたものは「十大名花」、「十大兵书」、「十大名寺」、「十大新聞」、「十佳产品」など、数え切れないほどであり、その理由を追究すれば、やはり中国人が完全な美を好み、完全なイメージを象徴する数字「十」が好きであると考えられる。

これに対して、日本語にも「十全十美」という四字熟語があるが、「完全であり満ちている」ことが最も美しものとは思わなかったようである。建築家であり、プロダクトデザイナーでもある黒川雅之(2006)は「間」が日本の美意識にかかわるものと指摘している。日本人の「間」意識の根底には不完全なものを重視する美意識が存在すると言える。「余情」が大切にされている。文学作品はすべて言い尽くさず、言葉に表せないところで読者に美を感じさせようとする。日本の書道や絵画は非常に「余白」を重視し、見る人に想像の空

間を与え、情緒的な雰囲気が漂う。建築においても限りある空間を利用して、無限な広がりが感じさせる。このような「余白」における不完全な部分に日本人は無限の美を創造する。目の前にある姿や形の美しさだけを楽しむのではなく、そこに隠される意味や美しさを想像することで、見る人に深い感動を与える。

中国の場合、自然、建築及び文学作品などにそうした情緒あふれる部分は見られず、日本のように「間」を芸術の理念として高めることもない。日中間の美意識には相違点が見られるのである。日本人にとって花とはつぼみの時が最も美しいものだが、中国人にとって花とは満開の時が最も美しいものである。中国の建築は完璧な規則性、充実感を重んじるが、日本の建築はそうしたものと避ける傾向がある。要するに、不完全な美を楽しむ日本人に対して、中国人は完全な美を好むというわけである。

法隆寺の伽藍配置は東西・横並びで、中央が空白となっている。そこには日本独特の「空間の美」、「余白の美」がある。中国の宗教建築物や宮殿は中心に建物が威風堂々と存在し、充実感にあふれたものがほとんどであるが、法隆寺の真ん中は空白の状態なのである。また、茶室はある美的ムードをつくるための仮設のものを除けば、完全に「空」である。日本人にとって、人は異なるものを同時に鑑賞することはできない。美しいものを本当に理解するには、テーマに集中して初めて出来るようである。

さらに、中国人が「あふれるほどいっぱいの幸せ」を追求するのに対して、日本の代表的作家である村上春樹はエッセー集『うずまき猫のみつけかた』で日常の小さな喜びを表現したものを通じて、「小確幸」という小さい幸福感を以下のように説明している。

「生活中に個人的な「小確幸」（小さいけれども、確かな幸福）を見出すためには多かれ少なかれ自己規制みたいなものが必要とされる。たとえば我慢して激しく運動した後に飲むきりきり冷えたビールみたいなもので、「うーん、そうだ、これだ」と一人で目を閉じて思わずつぶやいてしまうような感興、それがなんといっても「小確幸」の醍醐味である。そしてそういった「小確幸」のない人生なんて、かすかすの砂漠のようなものにすぎないと僕は思うのだけれど。」

ちなみに、日本の美意識に影響され、現在、台湾でも「小確幸」という言葉が流行語になっている。

第四章 まとめ

本論では日中両言語における数字を含む四字熟語を研究テーマとし、主に「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を取り上げて考察を行なった。

第一章は序論として、日中両言語における数字を含む四字熟語をテーマとする研究背景、研究カテゴリー、研究目的及び研究方法を述べた。

第二章では日中両言語における数字及び数字を含む四字熟語に関する定義と先行研究を検討した。

言語学において、数字は「数詞」と称されるが、言語の一部分でもある数字は単なる数値の記号、数学の概念というだけではなく、世界観、哲学観、宗教観、価値観、さらには審美観など、人々のさまざまな面に影響を与え、象徴となってきた。従って、数字に対する崇拜は民族により、それぞれ異なるが、数字は神秘化されてきた。本論においては「数字」という概念を採用した。

日本語における「四字熟語」の概念や範囲規定については必ずしもはつきりせず、統一性に欠いている点は問題と言わざるを得ず、決まった類型を定めるのはなかなか難しいようである。本論での日本語の四字熟語は高島(2009)が指摘した狭い範囲での「四字熟語」を用いることとする。さらに詳しく言えば、主に『新明解四字熟語辞典』(2013)における四字熟語の分類、中国の典籍を典拠とするもの、仏典・仏教語に由来するもの、「之」が入って四字熟語とみなされるものと日本の古くからの成句・格言などからよく使われるものを中心とする。一方、中国語においては、“四字成语”(便宜上、本論では「四字熟語」に統一)という概念を採用する。統括的に「数字を含む四字熟語」という表現を用いて日中両言語間の対照研究を行うことにした。

日中両言語における数字及びそれを含む四字熟語に対する先行研究は大きく三つに分類することができる。①数字に対する通時的研究で、数字の語形や意味などの歴史的な変遷、即ち「数の語彙史」の研究;②数字に対する共時的研究で、主に言葉と文化の視点から、数字自体及び数字を含む四字熟語が表現上果たす比喩的・象徴的な役割や、それを通じて表わされる感情や物の捉え方などを考察したもの;③数字及びそれを含む四字熟語の日中対照比較を研究テーマとして取り上げた研究である。

全般的に見ると、日本語における研究では通時的研究が多く、研究内容を見ると、主に日本語における数字の発展史に関する研究である。数字を含む四字熟語について、その数

は少なく、あまり進んでいないようである。対照研究の面においては日英の比較対照がほとんどで、日中対照研究がテーマとして取り上げられたケースは少ない。これに対して、中国語では比較的以前から「数字を含む四字熟語」が研究テーマとして取り上げられ、研究は進んでいる。しかし、意味、用法の側面からのものがほとんどである。対照研究では日中対照研究をテーマとして取り上げるケースがいくつかあるものの、主に一つの数字、もしくは二、三個の数字に絞って行われたもので、数字全体を体系的に捉えているものはほとんど見当たらない。

第三章では日中両言語における「一」から「十」までの各数字を含む四字熟語に対して具体的な分析・比較対照を行った。

先ず、日中両言語における「一」から「十」までの数字の基本義と派生義を分析し、比較対照した上で、その共通点と相違点を指摘した。

また、「出典元」と「構成」については日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を分類、統計し、全体像を把握した。各方面の全体像を図式化し、比較対照図にした。

その上、言語学的及び認知的観点を合わせて、①両言語ともに同じ数字を含み、同義・類義を表すもの;②両言語ともに同じ数字を含み、異義を表すもの;③一方の言語で数字を含み、もう一方では異なる数字や文字で同義・類義を表すものの三つに分類し、日中両言語における数字を含む四字熟語が持っている意味用法をめぐって対照研究を行った。

さらに、日中両言語における「一」から「十」までの数字を含む四字熟語が日中両国の文化にどのように反映されているか。また、それぞれの歴史、習慣、発想などのいわゆる文化的要素がそれら四字熟語の意味に対して、どのように影響しているかについて究明し、結論を得た。

「一」から「十」までの数字を含む四字熟語の中で、量的な面から見れば、全般的に中国語の方が日本語より多く存在し、またより多種多様な意味とかかわっている。各数字別に見れば、数字「一」を含むものが他の数字を含むものより日中両言語共に圧倒的に多く見られた。

数字「一」

数字「一」が世界の本源、万物の始まりという認識に基づき、「最初、一番目」、「一つのものの全体、総体」、「ちょっと、わずか、少し」、「同一、同じ」などの意味を表す場合に「一」が現れる点は日中両言語に共通している。

日中両言語における数字「一」の基本義は同じではあるが、詳しく分析すると、強調する意味に少し違いが見られた。日本語における数字「一」の基本義を「自然数の最初の数」と解釈し、「最初」という意味を強調する。基本義から「物事の最初」に拡張されるが、中国語のほうはこの意味まで明確的に拡張されていない。普通は“最初”で表す。一方、中国語では数字「一」の基本義を“最小的正整数”と解釈する。“整数”は“整体”（全体）という意味を強調する。これは古代中国の哲学概念と関係があると思われる。中国には「大統一」という歴史があり、古代から数字「一」 = “整体”という思想がすでに定着していたのである。楊松華(2004)は、「大統一の国家政権とは一人の皇帝、一つの政府が中国の民族を一つ、つまり全体として行政管理する」と説明している。これは秦の始皇帝の国家統一から始まった中国の統治原理である。この考え方方に加え、中国には天下のもとに生活する人々すべてが、一つの整体、一つの家と考える“大同”的理想像が働いていると言える。

また、日本語において、数字「一」が「最高、最上、首位」という意味に拡張されている。そのため、日本では能力認定試験と項目評価において、「一級」が最上級とされる場合がほとんどである。これに対して、中国の漢字自身が持つ柔軟な拡張性によって、数字「一」の意味が「最上」や「最下」という間逆の方向に延び、中国における各試験において「一級」は最上級と最下級とされる場合が共に存在する。これは日中両国における共通項目、類似項目試験(評価)に表された等級の上下が逆になる場合と共通する場合の両方に存在するのが理由であると考えられる。しかもその中に、中国語における数字「一」の基本義「最小の正整数」によって、中国における各試験において「一級」は最下級とされる場合が多い。

一方、中国語では「動作、現象が突然に現れ」、「動詞と動詞の間にを入れて、動作が一回限りで、あるいはやってみることを表し、相手に軽く促す」などの意味が見られ、特に二つの数字が共起する場合、その意味は日本語よりさらに多彩である。例えば、数字「一」が「一」自体と共に起する中国語の四字熟語は日本語よりもやや少ないが、二つの数字「一」を同じ動詞と共に使うことにより、「動作の繰り返し」という意味が付与され、二つの数字「一」を同義の動詞と共に使うことにより、「動作の連續」という意味が付与される例も見られた。また、数字「二」と共起する中国語の四字熟語は日本語よりも遙かに多い。「繰り返し」、「列举」、「程度の高さ」など特殊的な意味を付与されている例も見られた。

さらに、日中両国における認識や捉え方が異なっているところとして、日本人は「一期一会」と言うように、その機会は二度と繰り返されることがない、一生に一度の出会いで

あるということを重んじ、一方、中国人は“一生二熟”（初対面は見知らぬ同士、二度目はもはや親しい仲間）一度目の出会いより、二度目の出会いをより重視するというように、数字「一」を含む四字熟語に付与されているイメージにも違いが見られた。

数字「二」

数字「二」は事物の対立、もしくは統一という認識に基づき、「同じではないこと、二種類、別のこと」、「対となる、並び称される」、「ちょっと、わずか、少し」、「二つ目、つぎ」などの意味を表す場合、「二」が現れる点は日中両言語に共通している。

中に偶数「二」の「対となる」、「対称する」といったプラスのイメージが中国人の生活の隅々にまで浸透しているのに対し、日本人は不規則な非対称を重んじ、偶数「二」に対しては分裂、別れ、対立などの意味を連想するようである。このように、数字「二」を含む四字熟語に付与されているイメージに大きいな違いが見られた。しかし、中国語においても、数字「二」が「背く」というマイナスの意味に拡張されているものも存在する。

また、両言語の四字熟語において、共に数字「二」は隣接する数字以外とは共起しにくいという傾向が見られた。数字「三」と共起する場合、両言語は共に「少なさ」、「変化」などの意味が見られる以外、中国語において、数字「二」を含む四字熟語には「多さ、頻繁」という独特の意味が付与されている。また、数字「六」と共起する場合、日本語において、共起する数字「二」と「六」の掛け算の結果から十二という、面白い用法も見られた。

数字「三」

中国古代の哲学観「一から二を、二から三を、三から万物を生む」という認識に基づき、「たびたび」、「多い」などの意味を表すのに「三」が表れる点は日中両言語に共通している。

数に関する認識が「一、二」のみから、数百、千、万などに至るのに伴って、「三」も「多い」から「少ない」に認知され、それにより、数字「三」に「短い、少ない」というような意味が付与されている例が日中両言語にある。特に昔の日本で生活に欠かせなかった草鞋を安っぽい象徴として「二足三文」と喻え、「三文の値打ち」が「少ない」を表す例は中国語より日本語の方が量的に上回っていることが分かった。

また、中国において周の時代から三つの脚の“鼎”が一番安定した神聖と権威の象徴とされ、数字「三」を含んで、安定、平安、穏かさを象徴する中国語の四字熟語は多数存在している。伝統的思想において、人は天と地の次に位置し、数字「三」に天地人という特

殊な意味が付与されている。また、中国語の「三」は“終”（ある期間の全体を示す、まるまるの）という意味も見られた。

さらに、日本語では仏の顔も三度までというように、「三」を超えて、四の五のを言われるとうるさく感じる。これに対して、中国語では「三」を含め、“说三道四”からがうるさく感じられる。数字「三」、「四」と共起する中国語の四字熟語は日本語よりずっと多い。多くは「あれ…これ…、雑、乱」という特殊なマイナスの意味が付与されている。また、数字「三」が「五」と共起する場合には「大体の数量」という意味が見られ、その倍数「六」や「九」と共起すると、「程度の高さ」という意味も見られた。

一方、日本語の四字熟語において、数字「三」が「七」と共起する場合、「割合」という意味が付与され、また、数字「三」、「九」と共起する場合、「三思九思」などのように、「繰り返し」という特殊な意味が見られ、中国語では“千思万想”を用いて表す。

数字「四」

数字「四」が空間を知覚する四つの方向の産物という認識に基づき、「多数」、「東西南北、前後左右の四つの方向」、「あちらこちら、いたるところ」などの意味を表すのは日中両言語に共通している。数字「八」は「四」の最小の倍数であり、極大や無限の意味を含んでいて、両言語における数字「四、八」の組み合わせは共に「すべてを含む、覆う」という意味が付与されている。

また、二つの数字が共起する場合には中国語において、数字「四」、「六」と共起する場合、中国古代から立体空間“六合”的宇宙観に影響され、「各方面」という特殊な意味が付与され、また、「少数と多数の割合」という意味も見られた。数字「四」、「八」と共起する場合、「程度の高さ」という意味が付与されている。

その一方、日本語では共起する数字「四」と「六」の掛け算の結果が二十四という意味用法が見られ、数字「四」が「四」自体と共に場合、「四角四面」は四つの角と面がはつきりとしていることから、メタファーによって、角が立ち、真面目すぎて融通が利かず面白みがない人に繋がっていると思われる。

さらに、発音的要因により、日中両国民が共に「四」という数が「死」を連想させる。このため、数字「四」は忌み嫌われるが、古代中国では八卦、風水などの思想で数字「四」を吉祥の象徴する場合もあった。

数字「五」

日中両言語に共通して、数字「五」は「五番目」、「いつたび」などの意味を表す。

中国人にとっては数字「五」は「五行」と密接に結びついているため、数字「五」を含む四字熟語も日本語より多く見られ、その意味もずっと多種多様である。特に数字「九」と共起する場合、数字「九」は最大の陽数として、数字「五」は他の八つの数を貫通する核心の数字として、組み合わせて四字熟語に「帝王を敬う」という特殊な意味が付与されている。

また、中国語では「五」は「午」に通じるため、「交差する」という意味に拡張されている。数字「五」が「八」及び「十」と共起する場合、「さまざま多彩」という新しい意味が付与されている。また、数字「五」、「六」と共起する場合、「反駁」、「否定」など数字「六」の拡張的意味用法に影響され、「変化する」と「あれ…これ…」というマイナスの意味も見られた。

一方、日本語における数字「五」は中国ほど高い関心が持たれていないようであり、数字「五」を含む四字熟語は仏教用語以外、主には体と関わっている。また、数字「五」が「五」自体と共に起する場合は「等比例」という新たな意味が付与されている。

数字「六」

日中両言語は共に「六番目」、「人を卑しめ、罵」などの意味を表している。

中国語には数字「六」が数字「七」及び「九」と共起する場合、「あらゆる」という特殊な意味が見られ、その一方、日本語では数字「八」と共起する場合、「多い」という意味が付与されている。

また、日中両国における認識や捉え方が異なっているところとしては、中国語における古来の思想は《易经》の中で数字「六」は順調を象徴するものとされ、漢字“祿”と発音も似ているため、帝王の制度から祭祀儀礼にいたるまで、“六六大順”と言うように、数字「六」に「順調」という象徴的な意味が付与されている。別の説では漢語の方言の“六”は一族の「充分」という言葉と発音が似ているため、贈られたものの多少にかかわらず、「六」があれば充分という意味が付与されている。これに対して、日本では「六曜星」などと関わっており、数字「六」は縁起がよいとまでは思われていないものの、重視されていると考えられる。

数字「七」

数字「七」に「何度も、たくさん」、「人が死んだ時、死後七日目ごとに行う仏事」などの意味が日中両言語に共通している。

中国語において、甲骨文の「七」は一本の縦の棒に横一本を付け加えるため、分割、切

るなど、忌み嫌う傾向があり、数字「七」を含む四字熟語の多くがマイナスの意味を表しているようである。哀しいという意味を含む文学作品の創作上の体裁や命名などに繋がるものが多く存在する。他の数字と共に起する場合、数字「八」と共起するケースが圧倒的に多く、「乱雑、揃っていない」という意味が付与されている場合が多い。

一方、日本ではキリスト教の影響もあり、数字「七」が「ラッキー7」として好まれているようである。他の数字と共に起する場合も、中国語と同様、数字「八」と共起するケースが多いが、プラスあるいは中性的な意味を表すものが多いようである。

数字「八」

数字「八」を含む四字熟語を全般的に見れば、日中両言語の間に「八の字の形」、「たくさん、多い」など、多くの共通点が見られた。

中国語の数字「八」には「大体の数字を示す」という意味が見られる一方、日本語では盜人仲間の隠語で、相手を呼ぶ時の仮の名として用い、賭博仲間の間で花札賭博の一種を八八と呼ぶことがあるという中国語には見られない用法が確認できた。

さらに、日中両国における認識や捉え方が異なっている点としては日本語では「八」という字形が上が狭く下が広いため、歩けば歩くほど道が広がり、事業がますます隆昌することを連想させる。また、中国語では「八」の発音が中国語の方言の一種である廣東語では“发”（儲かる、金持ちになる）と似ている。このようなことから、日中両国で数字「八」は共に縁起がよい数字と見なされ、プラスのイメージの四字熟語が多い。また、日本語では数字「八」に脅威を感じさせたり、力量に勝れているという特殊な意味も付与されている。

数字「九」

数字「一」から数字「十」の中で、「多数、多い」という意味を表す数字は「九」だけではない。しかし、数字「九」は極限を表す唯一のものだと言える。日中両言語において、共に数字「九」に「九度、九たび」、「数のきわまり、極めて数の多い」、「陽を象徴する数」など意味が付与されている。

中国語において、“数九寒天”的ように、冬至の当日（陽曆12月22日ごろ）からの9日間を“九”と言い、“九九”（81日目）まで続くという意味に拡張されている。また、中国語の数字「九」は“久”と発音が同じであり、字形も似ているため、縁起のよい数字と考えられ、それを含む四字熟語にはプラスの意味を表すものが多いことが分かった。しかし、“九泉”はかつて“黄泉”と呼ばれ、数字「九」に「地獄」というイメージも付与された

ことわざがあった。

一方、日本語においてはその発音が「苦痛」、「苦しい」の「苦」という人々の価値とまったく逆方向のものと繋がり、忌み避けられた。発音により、日中両言語において異なるイメージを生み出し、四字熟語に付与されている意味にも違いが認められた。

また、二つの数字を含む四字熟語には、数字「十」と共起する場合、両言語において共に「高い割合」という意味が付与される以外、中国語では「多い、たくさん」という意味も付与された。一方、日本語においてはこのような使い方は見られないようである。

数字「十」

数字「十」は日中両言語共に「すべて、完全、満ちたりて不足のないこと」、「垂直に交わる形」などの意味に拡張され、類似している点が多い。

中国語において数字「十」は《易经》の占筮において究極の“成数”であり、神秘的、かつ円満であることを表している。日本語の数字「十」も中国語と同じように《易经》の影響を受け、数字「十」を多い、長い、遠いなどの意味としたさまざまな四字熟語がある。特に数字「十」を時間の尺度にする四字熟語は多く見られるが、ここの「十」は大半が実際の数ではなく、誇張など修辞の機能を具えたものである。中国語において、「十」は“什”に通じるため、「雜、混じる」という意味に拡張され、“十錦”はいろいろな材料を使い、また多種類のものを取り合わせた料理、食品を指している。一方、日本語における数字「十」はこの意味までは拡張されていないようであり、“十錦飯”的場合、日本語では「五目飯」で表す。

また、数字「十」は「拾」(合わせ集める)と語源が同じであるため、「一」から「九」を合わせたものをイメージし、数字「十」を含む四字熟語に「すべてを包みこむ、完全」という象徴的意味が付与されている。日中両言語に共通する「十全十美」などがその例であり、中に潜んでいる日中両国民の美意識が類似しているが、日本では「間」意識である根底には不完全なものを重視する美意識も存在すると見え、「余情」が大切にされているようである。

以上、結論から言えば、本論はまず「一」から「十」までのそれぞれの数字の基本義と派生義を比較対照し、その共通点と相違点を明らかにした。

次に「出典元」と「構成」について、「一」から「十」までの数字を含む四字熟語を分類、統計し、その全体像を把握した。

その次に、数字を含む四字熟語の比喩的意味は主にそこに含まれている数字の拡張的意

味に多く見られ、それと深く関わっていることを明らかにした。

さらに、二つの共起する数字を含む四字熟語はそれらの数字によって新しい意味が付与されたことも明らかにした。

最後に、日中両国は一衣帶水の隣国である。両国には紀元前からの長い文化的交流の歴史があるため、日中両国の文化には類似したところ、共通したところが多数あった。

日中両言語における「一」から「十」の数字を含む四字熟語を考察対象として、それぞれ意味・用法の側面から対照研究を行ったところ、数字に対する認識が日中両国で非常に高い類似性を示し、それらを含む四字熟語においても、その意味、用法、そして認知において類似しているものが多数存在していることが確認できた。

しかし、その一方、長い交流の歴史があるとはいえ、地理的環境・歴史的背景・風俗習慣などが異なっているため、それぞれ異質な文化が形作られたことも極めて当然のことである。これは数字を含む四字熟語にも見られ、たとえ同じ数字であっても異なった理解、発想、そして捉え方をするものが存在する。数字を含む四字熟語の意味や用法、認知において、その違いが如実に反映され、多くの差異を確認することができたと言える。

注：

-
- ¹ 同じ数字を使うだけではなく、四字熟語の表記が完全に同じものも含む。
- ² 同じ数字を使って、完全に異なっているものと、一部異なっているところもあれば重ねている部分もあるものを含む。
- ³ 日中両言語の一方で数字を使い、もう一方では数字を使わない場合も含む。
- ⁴ 例えば、『ベネッセ表現・読解国語辞典』の「熟語」の項目には、「二字以上の漢字を結合して一語の漢語としたもの」と定義されている。
- ⁵ 南メキシコのジナカンタン(Zinacantan)では、この種の洗練された儀式は袋の中にある一定数のトウモロコシの粒に対応させて神聖な貯蔵物のコインの価値を数えることに基礎をおいて行われている。
- ⁶ 中国における“高等教育自学考试”とは、個人が自らの学習を通じて得た知識や技能を国が試験によって認定し、高等教育修了の学歴を与える制度。
- ⁷ 平安時代初期の弘仁5年(814年)に嵯峨天皇の命により編纂された日本初の勅撰漢詩集。
- ⁸ 江戸時代末期の彦根藩主井伊直弼(茶号/宗觀)の著による茶書である。茶道における「一期一会」の理念を広めており、茶の湯における主客の深い心構えを提唱している。
- ⁹ 鎌倉時代後期に書かれた日本の仏教書。
- ¹⁰ 1257年(正嘉元)にインド、中国、日本の147話を集録した仏教説話集。因縁を知ることの重要性を説くことが目的となっている。
- ¹¹ 大乗仏教の經典「サツダルマパンダリーカスートラ」(「正しい教えである白い蓮の花」の意)の漢訳の総称。
- ¹² 古代中国の占筮(細い竹を使用する占い)の書物。符号を用いて状態の変遷、変化の予測を体系化した古典である。中心思想は陰陽二つの元素の対立と統合により、森羅万象の変化法則を説く。著者は伏羲とされている。
- ¹³ 中国最古の類語辞典・語釈辞典。儒教では周公制作説があるが、春秋戦国時代以降に行われた古典の語義解釈を漢初の学者が整理補充したものと考えられている。訓詁学の書。
- ¹⁴ 中国最古の部首別漢字字典である。略して説文ともいう。後漢の許慎の作で、和帝の永元12年に成立し、建光元年に許慎の子の許沖が安帝に奉った。
- ¹⁵ 伊勢神宮の正殿の床下の中央に立てられた柱。忌柱、天御柱、天御量柱ともいう。神路山から料木をとるのに木本祭、奉建するのに心御柱祭を行い、特定の者だけが運搬、奉建に従事するなど、古来より神聖視されている。

- ¹⁶ 神祭具で、糸の字の象形をした紙垂をつけた縄を指す。標縄・七五三縄とも表記する。
- ¹⁷ 「仁王」とも言う。寺門の左右にあって、その忿怒の形相で仏敵を払う守護神。二神一対が一般的で、一体は口を開いた阿形、もう一体は口を閉じた吽形とする。
- ¹⁸ 大乗佛教經典の一つで、別名『不可思議解脱經』。サンスクリット原典とチベット語訳、3種の漢訳が残存する。漢訳は7種あったと伝わるが、支謙訳『維摩詰經』・鳩摩羅什訳『維摩詰所說經』・玄奘訳『說無垢稱經』のみ残存する。
- ¹⁹ 佛教用語で、相互に対立し矛盾する2つの極端な概念・姿勢に偏らない実践(仏道修行)や認識のあり方をいう。苦・樂のふたつを「二受」といい、魂や様々な存在物について恒常に「有る」、単純に消えてなくなるだけで「無い」というが、そのどちらにも囚われない、偏らない立場を中道という。
- ²⁰ 名前を「空海」、灌頂名を「遍照金剛」という。宝亀5年(774)6月15日に香川県善通寺市で誕生、幼名を真魚(まお)という。御宝号は「南無大師遍照金剛」。
- ²¹ 古代インドのマンダラの音写語。意味は多種あるようだが、集合と本質という意味が有力のようである。つまり仏の集まりを示すと共に悟りの本質を示すものである。
- ²² 金をかけて、さいころなどの目の数を当てる。その勝負により、かけた金を分配する。
- ²³ 前漢の始祖。秦を滅ぼし、項羽と天下を争う。野人なれども、不思議と人が懷き、「兵に将たらざるも、將に將たり」と称せられた。
- ²⁴ 前漢建国の功臣で、漢の三傑。参謀として劉邦の霸業を補佐。「謀を帷帳の中にめぐらし勝を千里の外に決す」と称された。漢成立後は恩賞を固辞して留という領地だけを拝領し、政治の一線から退いて暮らしたという。
- ²⁵ 中唐の詩人。字は樂天。号は醉吟先生・香山居士。
- ²⁶ 僧侶が集まり修行する清浄な場所。後に寺院または寺院の主要建物群を意味するようになった。サンスクリット語の音写で、「僧伽藍摩」、「僧伽藍」を略して「伽藍」と言わた。 「衆園」、「僧園」などと訳された例もある。
- ²⁷ 尺という文字は親指と中指を広げた形をかたどったものであり、元々は手を広げたときの親指の先から中指の先までの長さを1尺とする身体尺であった。日本における1尺が(10/33)メートル(約378.788mm)であるのとは異なり、中国における1尺は(1/3)メートル(約333.333mm)。
- ²⁸ 「九宮」は九つの方位を以って、上は天を分け、下は地を分ける。天は二十八宿と北斗九星に分けており、地は四方と四維と中央に分けている。

- ²⁹ 中国後漢末期から三国時代の蜀漢の政治家、軍人。字は孔明。蜀漢の建国者である劉備の創業を助け、その子の劉禅の丞相として補佐。伏龍、臥龍とも呼ばれる。
- ³⁰ 戦国時代中国の儒学者。姓は不詳、氏は孟、諱は軻、字は子輿。亞聖とも称される。儒教では孔子に次いで重要な人物であり、そのため「孔孟の教え」とも呼ばれる。
- ³¹ “若耶溪”を現在は“平水江”といい、中国浙江省紹興市東南の若耶山から発して、北流して運河に注ぐ川の名。唐代までは鏡湖が大きく、鏡湖に注いでいた。大禹陵前の湖水から会稽山の東側を流れる平水江から引いた運河があり、西側の南池江と繋がっている。昔、美女西施が紗を洗い、蓮の花を探ったという伝承のある有名な川。
- ³² 中国四大美女とは王昭君、貂蟬、西施、楊貴妃とされるが、貂蟬は『三国志』に登場する架空の人物であることから、詩人の世界では実在の4人として貂蟬に替えて虞美人を入れる。
- ³³ 「春風馬堤曲 十八首」は戻りで帰郷する少女に仮託して、毛馬堤(現、大阪市)の春景色を叙した、抒情性豊かな郷愁の詩である。
- ³⁴ 後漢末期から三国時代の武将、蜀漢の初代皇帝。字は玄徳。黃巾の乱の鎮圧で功績を挙げ、その後は各地を転戦した。諸葛亮の天下三分の計に基づいて益州の地を得て勢力を築き、後漢の滅亡を受けて皇帝に即位して、蜀漢を建国した。
- ³⁵ 戦国時代から安土桃山時代にかけての武将、大名、天下人、関白、太閤。氏は最初は木下で、その後、羽柴、豊臣と改姓。
- ³⁶ 戦国時代から安土桃山時代にかけての武将。初名は重虎、後に重治、通称は半兵衛。戦国時代を代表する軍師としても知られ、織田氏の家臣である羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)の参謀として活躍し、黒田孝高(黒田官兵衛)とともに「両兵衛」と称された。
- ³⁷ 能楽における能の流派の一つ。シテ方、小鼓方、大鼓方、太鼓方がある。
- ³⁸ 平曲、あるいは能の謡などの楽曲構成部分の名称の一つ。
- ³⁹ 古代中国神話に登場する神または伝説上の人物。伏羲、伏儀という表記も使われる。三皇の一人に挙げられる事が多い。姓は鳳姓である。兄妹または夫婦と目される女媧と同様に、蛇身人首の姿で描かれる。中国では中華民族人民の始祖として崇拝されている。
- ⁴⁰ 古代中国の伝承に登場する帝王。諸人に医療と農耕の術を教えたという。中国では“神農大帝”と尊称、医薬と農業を司る神とされている。世界最古の本草書『神農本草經』に名を残している。伝説によれば、神農の体は頭部と四肢を除き透明で、内臓が外からはっきりと見えたという。

⁴¹ 神話伝説上、三皇を継ぎ、中国を統治した五帝の最初の帝。また、三皇のうちに数えられることがある。

⁴² 中国神話に登場する君主。姓は伊祁、名は放勲。儒家により神聖視され、聖人と崇められた。

⁴³ 中国神話に登場する君主で、五帝の一人。姓は姚、名は重華。虞氏または有虞氏と称した。儒家により神聖視され、堯と並んで堯舜と呼ばれ、聖人と崇められた。

⁴⁴ 里は尺貫法における長さの単位。元々は古代中国の周代における面積の単位であり、300歩四方の面積を表していた。のちにこの1辺の長さが距離の単位となった。現在の中国では500m、日本では約3.9kmに相当する。

⁴⁵ 曜には縦横比が2:1になっている長方形の一曜サイズと、これを横半分にした正方形の半曜サイズの2種類がある。一般的な規格としては京間(本間)の一曜のサイズは3尺1寸5分×6尺3寸となる。主に近畿・中国・四国・九州と西日本の大部分で使用されている。中京間(三六間)の一曜のサイズは3尺×6尺のサイズとなる。主に愛知・岐阜県の中西部地方や福島・山形・岩手の東北地方の一部、および北陸地方の一部と沖縄、奄美大島で使用されている。江戸間(関東間、田舎間、五八間)の一曜のサイズはほぼ2尺9寸×5尺8寸のサイズとなる。関東、東北地方の一部、北海道と三重県伊勢地方の地域で使用されている。団地サイズの一曜にはいろいろあるが、2尺8寸×5尺6寸のサイズが中心である。公団住宅、アパート、マンション等、共同住宅や高層住宅のほとんどで使用されている。

⁴⁶ 現在中国において、一斤は五百グラムと定められている(ただし、台湾では一斤は六百グラム、香港とマカオでは一斤は604.78982グラムと定めている)。一方、日本においては一斤は三百四十グラムと定められている。現在の日本では「斤」は食パンの計量の単位としてのみ使われているようである。

⁴⁷ 易の卦を構成する基本記号。長い横棒(—)と真ん中が途切れた二つの短い横棒(--)の二種類がある。経では前者を剛、後者を柔と呼ぶが、伝では陽、陰とする。陽爻と陰爻は対立する二面性を表し、陽爻は男性・積極性などを、陰爻は女性・消極性などを表す。これら三つ組み合わせた三爻により八卦ができ、六爻により六十四卦が作られる。

⁴⁸ 政治史・政教を記した中国最古の歴史書。堯舜から夏・殷・周の帝王の言行録を整理した演説集。また一部、春秋時代の諸侯のものもあり、秦の穆公のものまで扱われている。

⁴⁹ 中国古代の礼書、三礼の一つ。三礼の中で最も早く成立したもののようにある。記述する儀式は士冠礼(成人式)・士昏礼(結婚式)・士葬礼(葬式)など士階層の人生の通過儀礼、鄉飲酒礼、鄉射礼など共同体の祭礼、聘礼、覲礼など官僚として他国や天子のもとに出張した際の礼儀作法など、全部で17編からなる。

⁵⁰ 中華人民共和国で改革開放政策が始動した1979年に始まった人口規制政策。正式名称は“计划生育政策”(計画生育政策)。この政策の効果によって中国国内では少子化が進行していたが、現在では条件付きではあるが中国全土で第2子が認められることになった。

⁵¹ 明治初年の書生社会の風俗と気質を映すことを主眼とし、下宿生活、牛肉屋、楊弓店などで書生らが遊ぶ様子をも描いた日本近代写実小説。

⁵² 中国雲南省大理ペー族(白族)自治州を中心に住む少数民族。大部分の人はシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派のペー語を話し、残りは主に中国語を使用。未婚女性が頭に巻き付ける白い羽根飾りが特徴的で、民族名の由来となっている。

⁵³ 漢代に形成された中国の韻文における文体の一つ。抒情詩的要素が少なく、事物を羅列的に描写する。事物の名前を列挙することを特徴とするため、日本では古来、数え歌と称された。

⁵⁴ 中国前漢の文人。淮陰(江蘇省)の人。最初、呉王劉濞に仕え、その叛意を諫めたが、聞き入れられなかった。晩年は郷里に隠棲、のち武帝に招かれ長安へ向う途中病死した。美文家として有名であり、その代表作の問答体で七段の構成をもつ「七發」はのち「七啓」、「七命」などの模倣作を生むことによって「七」という新形式を開くとともに、抒情的な楚辞から叙事的で華美な漢代の賦への転換のさきがけとなった。

⁵⁵ 中国南北朝の宋の劉義慶が編纂した、後漢末から東晋までの著名人の逸話を集めた小説集。『世説新書』とも呼ばれる。

⁵⁶ 中国後漢末から三国時代の魏の皇族。陳王に封じられ、謚が思であったことから、陳思王とも呼ばれる。唐の李白・杜甫以前における中国を代表する文学者として、「詩聖」の評価を受けた。建安文学の三曹の一人。

⁵⁷ 楠木正成の末期の台詞を曲解した後世の人間によって、英雄の虚像を被せられた河内国の土豪。一説によると関西弁を普及させたのは正成だと言われている。

⁵⁸ 日本の言語学者、考古学者。大学や公の研究機関には所属していない在野の研究者である。世界各国の古代言語や古代文字と日本語との関係を極めて大胆な発想で結びつける説を多数提唱している。

⁵⁹ 明の創始者、初代皇帝。廟号は太祖で、その治世の年号を取って、洪武帝と呼ばれる。生まれた頃の名は朱重八で、後に朱興宗と改名し、さらに紅巾軍に参加する頃に朱元璋と改名した。

⁶⁰ 天武天皇が684年（天武13）に新たに制定した「真人、朝臣、宿禰、忌寸、道師、臣、連、稻置」という八つの姓の制度。

⁶¹ 戦国時代末期、秦の呂不韋が食客を集めて共同編纂させた書物。その思想は儒家・道家を中心としながらも名家・法家・墨家・農家・陰陽家など諸学派の説が幅広く採用され、雑家の代表的書物とされる。

⁶² 中国古代の長さの単位。仞は両腕を広げた長さで、実際の長さについては上記『説文解字』に見えるように8尺とするものと、7尺とするものの両方がある。今日「仞」は単位としては用いられないが、非常に高い、あるいは深いことを表現するときに「百仞、千仞、万仞」などの語を使う。

参考文献

日本語の文献

- 愛知大学中日大辞典編纂所 (2010) 『中日大辞典』第三版 大修館書店。
- 相原茂 (2002) 『中日辞典』講談社。
- 相原茂 (2006) 『日中辞典』講談社。
- 阿部猛(2006) 『数の日本史事典』 同成社。
- アリスダイグナン(2010) 『コーパスを活用した認知言語学』、渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝訳、大修館書店。
- 飯倉晴武(2007) 『日本人数のしきたり』、76-79、105、117 青春出版社。
- 飯田朝子(2005) 『数え方もひとしお』 小学館。
- 飯田朝子(2006) 『数え方と単位の本⑥数を使ったことば』 学習研究社。
- 飯田朝子(2008) 『アイドルのウェストはなぜ 58 センチなのか』 小学館。
- 和泉新・佐藤保 (1992) 『中国語故事成語大辞典』 東京堂。
- 伊藤宗行(2002) 『「数」の日本史』 日経ビジネス人文庫。
- 稻葉通雄(1985) 『本、それはいのちあるもの』 影書房。
- 上野恵司(2011) 『ことばの散歩道III 日中故事ことわざ雑記』 白帝社。
- 牛島徳次 (1994) 『中国語成語辞典』 東方書店。
- 内林政夫(1999) 『数の民族誌—世界の数・日本の数』 八坂書房。
- 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 (1991) 『日本語大辞典』 講談社。
- 円満字二郎(2010) 『数になりたかった皇帝—漢字と数の物語』 岩波書店。
- 王青翔(1999) 『算木を超えた男』 東洋書店。
- 汪玉林(2002) 「中国語の中の数字文化」『明海日本語』第七号、33-35、明海大学日本語学会。
- 王永全・小玉新次郎 (1993) 『例解中国語熟語辞典』 東方書店。
- 大槻文彦 (2004) 『言海』 ちくま学芸文庫。
- 大野晋(1994) 『日本語の起源』 岩波新書。
- 大野晋(1997) 『一語の辞典〈神〉』、14、三省堂。
- 郭明輝・磯部祐子・谷内美江子 (2011) 『日中同形異義語 1500』 国際語学社。
- 加藤良作(1996) 『数詞ってなんだろう—「数える」ことの生き立ちを求めて』 ダイヤモンド社。

- 加納喜光(2001) 『三字熟語語源小辞典』 講談社。
- 川崎真治 (1991) 『謎の神アラハパキ—騎馬遊牧民族と古代東北王朝』 六興出版。
- 川本亨二(1999) 『江戸の数学文化』 岩波書店。
- 北村亮介 (2012) 『中国成語へのアプローチ』 風詠社。
- 窪薙晴夫(2011) 『数字とことばの不思議な話』 岩波ジュニア新書。
- 倉野憲司 (校注) (1963) 『古事記』 岩波文庫。
- 黒川雅之(2006) 『八つの日本の美意識』 講談社。
- 郡司正勝(1997) 『和数考』 白水社。
- 香坂順一 (1982) 『現代中国語辞典』 光生館。
- 香坂順一 (1996) 『簡約現代中国語辞典』 光生館。
- 小林功長(1998) 『数詞—その誕生と変遷』 星林社。
- 近藤いね子 (2001) 『プログレッシブ和英中辞典』 小学館。
- 崔文博(2006) 「日中数字に関する比較研究—『一』から『十』までを中心に」 修士論文、
大連海事大学。
- 笛川祥生・高橋喜一・信太周 (編集) (1988) 『曾我物語』 東洋文庫。
- 佐藤信夫(1978) 『レトリック感覚』 講談社。
- 三省堂編修所 (2013) 『新明解四字熟語辞典』 三省堂。
- J. V. ネウストロイ・宮崎里司(2002) 『言語研究の方法』 くろしお出版。
- 尚学図書 (1993) 『国語大辞典』 小学館。
- 小学館大辞泉編集部 (2012) 『大辞泉』 小学館。
- 小学館編集(1994) 『日本大百科全書』 小学館。
- 徐琴(2008) 「文化言語学における日本語数詞の研究」 修士論文、南京農業大学。
- 真藤健志郎(1985) 『「四字熟語」の辞典-活用引用自由自在』 日本実業出版社。
- 鈴木孝夫(1999) 『ことばと文化私の言語学』 岩波書店。
- セシリヤ・リンドクィスト著(2010) 『漢字物語』、遠山由美訳、木耳社。
- 相馬充・谷川清隆・河崎公昭・今江廣道(2003) 「日本中世の日月食データの吟味と地球自
転」『天体力学研究会集録』、267-281、国立天文台。
- 大東文化大学中国語大辞典編纂室 (1994) 『中国語大辞典』 角川書店。
- 高島俊男(2009) 『ちょっとヘンだぞ四字熟語 お言葉ですが…10』 文藝春秋。
- 高水徹(1999) 「数詞にみられる意味拡張—経験的基盤が言語に反映されることの一例」

- 『言語科学論集』5、75-87、京都大学総合人間学部基礎科学科情報科学講座。
- 田坂昂(1993) 『数の文化史を歩く』 風濤社。
- 田中清一郎 (1977) 『中国語熟語辞典』 白水社。
- 田部井文雄(2004) 『熟語辞典』 大修館書店。
- 張姫娜(2010)「数字から見た日中文化の特色」『東海大学福岡短期大学紀要』第44号、53-60。
- 丁秀山 (1983) 『中国語常用成語・熟語—日常会話例文集』 光生館。
- 陳アン・曹志偉(2005) 『中国語熟語 760 個日中双方向による攻略法—資格獲得の近道』 晃洋書房。
- 沈国威・紅粉芳恵・関西大学中国語教材研究会編 (2014) 『中国語成語ハンドブック』 白水社。
- 陳生保(2005) 『中国と日本—言葉・文学・文化』 麗澤大学出版会。
- 陳力衛(2008) 『日本の諺・中国の諺』 明治書院。
- 辻幸夫(2003) 『認知言語学への招待』 大修館書店。
- 辻本政晴(1995) 『数詞の発見—言葉の謎道を歩く』 新人物往来社。
- 坪内逍遙 (2006) 『当世書生気質』 岩波書店。
- 寺尾善雄(1982) 『中国文化伝来事典』 河出書房新社。
- 唐向紅・鷺尾紀吉(2010) 「中国と日本の数字文化における比較研究」『中央学院大学人間・自然論叢』2、67-83、中央学院大学。
- 唐須教光(1988) 『文化の言語学』 効草書房。
- ドゥニ ゲージ・藤原正彦(1998) 『数の歴史』 創元社。
- トーマス クランプ (1998) 『数の人類学』、高島直昭訳、3、48-50 法政大学出版局。
- 時田昌瑞(2000) 『岩波ことわざ辞典』 岩波書店。
- 飛田良文・呂玉新(1989) 『日本・中国慣用句対照辞典』 南雲堂。
- トビヤス・ダンツィク(1945) 『科学の言葉=数: 数学者でない教養ある人々のための批判的概観』、河野伊三郎訳、7、岩波書店。
- 富谷至(2012) 『四字熟語の中国史』 岩波新書。
- 中嶋嶺雄(2008) 『日本人と中国人ここが大違い』 PHP研究所。
- 中村明(1998) 『名文・名表現考える力読む力』 講談社。
- 中村元・田村芳朗・末木文美士(2002) 『岩波・仏教辞典』 岩波書店。
- 中村幸彦 (1982) 『角川古語大辞典』 角川書店。

- 中本敬子・李在コウ編・辻幸夫監修(2011)『認知言語学研究の方法』ひつじ書房。
- 夏目漱石(2003)『我輩は猫である』新潮文庫。
- 新村出(1998)『広辞苑』岩波書店。
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫(2011)『岩波国語辞典』岩波書店。
- 西谷裕子(2012)『「言いたいこと」から引ける慣用語 ことわざ・四字熟語辞典』東京堂出版。
- 仁田義雄(2010)『語彙論的統語論の観点から』ひつじ書房。
- 野内良三(2000)『レトリックと認識』日本放送出版協会。
- 野崎昭弘(1998)『一語の辞典一』三省堂。
- 莫邦富(2009)『鯛と羊』海竜社。
- 蜂屋邦夫(1996)『中国思想とは何だろうか』河出書房新社。
- 林知己夫(1995)『数字から見た日本人の心』徳間書店。
- 久島茂(2007)『はかり方の日本語』筑摩書房。
- F.C.エントレス・A.シンメル(1997)『数は何を語るのか』、橋本和彦訳、翔泳社。
- 福永武彦訳(2005)『日本書紀』河出文庫。
- 北京对外経済貿易大学・北京商務印書館・小学館共同編集(2002)『日中辞典』小学館/北京商務印書館。
- 北京日本学研究センター中日対訳コーパス開発班(2001)『中日対訳コーパス』。
- 楨咲志(2004)『数ことば連想読本』文元社。
- 松浦喬二(2013)『日本語と中国語の妖しい関係』日本橋報社。
- 松田修・下房俊一訳(1980)『陰徳太平記』教育社新書。
- 松村明(2006)『大辞林』三省堂。
- 松村明・山口明穂・和田利政(2006)『国語辞典』旺文社。
- 松本曜(2003)『認知意味論』、142、大修館書店。
- 三保忠夫(2006)『数え方の日本史』吉川弘文館。
- 宮地敦子(1972)『数詞の諸問題』明治書院。
- 宮園正光(1999)『四字熟語・名数録・難読漢字』明治書院。
- 麦倉達生(2004)『異文化理解へのアプローチ—ことばの窓から見る日独比較』株式会社大学教育出版。
- 村上春樹(2008)『うずまき猫のみつけた』新潮社。

- 村田了阿(1978) 『俚言集覽』 名著刊行会。
- 森郷水(1995) 『觀音經写経手本』 木耳社。
- 森重敏(1958) 「詞とその語尾としての助数詞」『国語国文』27 卷12号、1072-1093、中央図書出版社。
- 森睦彦(1999) 『数のつく日本語辞典』 東京堂出版。
- 山川正光(2004) 『絵でみるモノの数え方辞典—ことば百科』 誠文堂新光社。
- 山田忠雄(2005) 『新明解国語辞典』 三省堂。
- 山梨正明(2004) 『ことばの認知空間』 開拓社。
- 湯艶(2006) 「中国と日本における「数字」文化の比較—諺と慣用句を中心に」『佐女短研究紀要40』、31-38、佐賀女子短期大学。
- 葉舒憲・田大憲(1999) 『中国神秘数字』、鈴木博訳、青土社。
- 横山正校注・訳(1971) 『日本古典文学全集45・淨瑠璃集』 小学館。
- 吉岡修一郎(1968) 『数学ウラ話』 学生社。
- 吉野裕子(1983) 『陰陽五行と日本の民俗』、21、人文書院。
- 吉野裕子(1992) 『隠された神々—古代信仰と陰陽五行』 人文書院。
- 刘月华・潘文娱・顾韓(1988) 『現代中国語文法総覧』、相原茂訳、くろしお出版。
- 林翠芳(2013) 「中国語と日本語の数字に見る文化的要素に関する一考察」『愛知大学留学生教育』第7号、31-44。
- 林怡州(2012) 『中国語四字熟語慣用表現』 三修社。
- 郎旭(2011) 「日中両国における数字文化の比較研究」修士論文 延辺大学。
- ### 中国語の文献
- 艾平 2006. 「英汉数字词语文化内涵的比较研究」, 硕士学位论文, 武汉: 中南民族大学。
- 安美真 2005. 「数字与汉语成语」, 硕士学位论文, 天津: 天津师范大学。
- 白居易 1979. 『白居易集』, 北京: 中华书局。
- 班固 1962. 『汉书』, 北京: 中华书局。
- 班固 1990. 『白虎通德论』, 上海: 上海古籍出版社。
- 包央 2005a. 「中日数字文化漫谈(1)」, 『日语知识』第三期: 34-35页。
- 包央 2005b. 「中日数字文化漫谈(2)」, 『日语知识』第四期: 34-35页。
- 曹容 2006. 「中西数字的文化观比较」, 『四川理工学院学报』第一期: 101-104页。
- 曹雪芹・高鹗 1985. 『红楼梦』, 北京: 人民文学出版社。

- 曾沉 2009. 「英汉数字词应用对比与翻译」,『安顺学院学报』第五期: 57–59 页。
- 曾朴 2005. 『孽海花』, 天津: 天津古籍出版社。
- 陈璧耀 2004. 「从“七荤八素”说道汉语的数词成语」,『语文建设』第五期: 41–42 页。
- 陈晖 2004. 「谈谈含有数字的成语」,『语文天地』第二十二期: 22 页。
- 陈锦泉 2003. 「数词妙用探微」,『语文学刊』第三期: 73–75 页。
- 陈寿 1982. 『三国志』, 北京: 中华书局。
- 陈涛 1991. 『日汉大辞典』, 北京: 机械工业出版社。
- 成良斌 1995. 「中国数字崇拜与禁忌透视」,『华中理工大学学报:社会科学版』第二期: 92–97 页。
- 程放明 2008. 「中日“数”之中所蕴含的文化内涵」, 硕士学位论文, 成都: 西南交通大学。
- 大连外国语学院新日汉辞典(增订版)编写组 1997. 『新日汉辞典』(增订版), 沈阳: 辽宁人民出版社。
- 戴德撰 1985. 『大戴礼记』, 北京: 中华书局。
- 戴圣 1990. 『礼记选译』, 成都: 巴蜀书社。
- 道尔吉 2004. 「数字成语研究」, 硕士学位论文, 呼和浩特: 内蒙古大学。
- 邓清林 1992. 『实用日汉成语词典』, 哈尔滨: 黑龙江人民出版社。
- 丁秀菊 2003. 「数字成语的文化阐释」,『齐鲁学刊』第五期: 67–70 页。
- 杜甫 1996. 『杜甫全集』, 上海: 上海古籍出版社。
- 杜佑 1988. 『通典』, 北京: 中华书局。
- 范克春 1996. 「神秘的文化符号“九”」,『汉语学习』第四期: 42–46 页。
- 范晔 1965. 『后汉书』, 北京: 中华书局。
- 房玄龄 2000. 『晋书·束晳传』, 北京: 中华书局。
- 冯峰 2001. 「中日同源成语意义的异同」,『日语学习与研究』第一期: 77–79 页。
- 冯骥才 1995. 『三寸金莲』, 南京: 江苏文艺出版社。
- 冯英 2011. 『汉语义类词群的语义范畴及隐喻认知研究』, 北京: 北京语言大学出版社。
- 冯友兰 2012. 『中国哲学简史』, 北京: 北京大学出版社。
- 高旭 2010. 「数字文化义研究」, 硕士学位论文, 沈阳: 沈阳师范大学。
- 葛洪 2006. 『西京杂记』, 西安: 三秦出版社。
- 葛培岭注译评 2005. 『诗经』, 郑州: 中州古籍出版社。
- 顾宏义译 2009. 『景德传灯录译注』, 上海: 上海书店出版社。

- 顾炎武 1983. 『日知录』, 上海: 上海古籍出版社。
- 关汉卿 1988. 『关汉卿全集校注』, 石家庄: 河北教育出版社。
- 光未然 1990. 『光未然歌诗选』, 北京: 人民文学出版社。
- 郭才佳 2009. 「浅析中日数字文化差异」, 『文艺生活·文艺理论』第十一期: 42-43 页。
- 郭茂倩 1979. 『乐府诗集』, 北京: 中华书局。
- 郭璞注 2010. 『尔雅注疏』, 上海: 上海古籍出版社。
- 郭书春等校点 1998. 『算经十书』, 沈阳: 辽宁教育出版社。
- 郭忠新·阮智富 2000. 『现代汉语大词典』, 上海: 汉语大词典出版社。
- 郭竹平(注译) 2002. 『楚辞』, 北京: 中国社会科学出版社。
- 郭竹平注译 2002. 『楚辞』, 北京: 中国社会科学出版社。
- 韩陈其 1984. 「论汉语成语中的数词」, 『教学与进修』第三期: 64-69 页。
- 韩杰 2010. 『数字与色彩趣谈』, 上海: 上海古籍出版社。
- 韩愈 1991. 『韩昌黎全集·过鸿沟』, 北京: 中国书店。
- 汉语大词典编撰处 2008. 『汉语成语大辞典』, 上海: 上海辞书出版社。
- 郝易(整理) 2011. 『黄帝内经』, 北京: 中华书局。
- 何九盈·胡双宝·张猛 1995. 『中国汉字文化大观』, 北京: 北京大学出版社。
- 何南林·鞠小丽·闫林琼 2011. 『汉英数字认知表征对比研究』, 南京: 江苏大学出版社。
- 何自然 2012. 『语用学探索』, 广州: 暨南大学出版社。
- 贺孟钢 1983. 「浅谈日语谚语与汉语成语的关系」, 『外语学刊』第一期: 77-78 页。
- 贺永彬 1990. 「论成语中数的模糊性」, 『辽宁师范大学学报』第四期: 74-76 页。
- 侯继武 2005. 『数字的故事』, 北京: 中国文史出版社。
- 侯占彩 2005. 「日本人姓名中的数字」, 『日语知识』第一期: 18 页。
- 吉林大学汉日词典编纂部 1982. 『汉日词典』, 长春: 吉林人民出版社。
- 吉林大学汉日词典编纂部 1986. 『汉日词典』, 长春: 吉林教育出版社。
- 贾凤伦 2008. 「日语成语谚语汉译拾零」, 『日语知识』第一期: 44-45 页。
- 贾吉峰 2004. 「数字成语研究」, 硕士学位论文, 呼和浩特: 内蒙古大学。
- 贾谊 2012. 『新书』, 北京: 中华书局。
- 姜红·王宣琦 2006. 「中日数字短语的时代色彩探究」, 『湖南大学成人教育学院学报』第二期: 42-59 页。
- 姜亮夫 2003. 『姜亮夫全集十七·诗骚联绵字考』, 昆明: 云南人民出版社。

- 姜扬 2009. 「浅谈日本的数字文化」, 『黑龙江科技信息』第十一期: 109 页。
- 金履祥 1991. 『书经注』, 北京: 中华书局。
- 金治国 2007. 「英汉数词对比分析及翻译」, 『内江科技』第一期: 35–36 页。
- 靳卫卫 2008. 『走进日本: 透视日本的语言与文化』, 北京: 北京语言大学出版社。
- 鸠摩罗什 2003. 『维摩诘经今译』, 北京: 中国社会科学出版社。
- 具珉正 2005. 「汉语和韩语中数词非数量用法比较」, 硕士学位论文, 北京: 清华大学。
- 阚欣·杨晔 2000. 「日语中数字的文化内涵」, 『哈尔滨师专学报』第六期: 41–43。
- 老舍 1986. 『老舍文集』, 北京: 人民文学出版社。
- 老舍 1998. 『四世同堂』, 北京: 人民文学出版社。
- 黎靖德 1986. 『朱子语类』, 北京: 中华书局。
- 黎治娥 2003. 「数字“六”小议」, 『汉字文化』第一期: 9–11 页。
- 李白 1996. 『李白全集』, 上海: 上海古籍出版社。
- 李白 1996. 『李白全集』, 上海: 上海古籍出版社。
- 李大农 1994. 「成语与中国文化」, 『南开学报』第六期: 41–46 页。
- 李丹明 2000. 『惯用句』, 北京: 外语教学与研究出版社。
- 李锋传 2006. 「从日语谚语看日本人的国民性」, 『日语学习与研究』第二期: 52–56 页。
- 李开先 2007. 『李开先全集』, 北京: 文化艺术出版社。
- 李琼 2009. 「从汉日对译看中日数量词的变化倾向」, 硕士学位论文, 大连: 大连理工大学。
- 李筌 2004. 『太白阴经全解』, 长沙: 岳麓书社。
- 李汝珍 2003. 『镜花缘』, 合肥: 安徽文艺出版社。
- 李时珍 1988. 『本草纲目』, 北京: 中国书店。
- 李云逸校注 1998. 『卢照邻集校注』, 北京: 中华书局。
- 李贽 2000. 『李贽文集』, 北京: 社会科学文献出版社。
- 列御寇 2015. 『列子』, 北京: 商务印书馆。
- 林娟娟 2004. 「论中日数字文化的民族特性」, 『四川大学学报』S1 期: 280–284 页。
- 刘安等 (编) 1989. 『淮南子』, 上海: 上海古籍出版社。
- 刘凤娟 2007. 「谈日本的“七五三”节」, 『读与写』第四期: 29 页。
- 刘乐贤编 2009. 『孔子家语』, 北京: 北京燕山出版社。
- 刘培华 1995. 「成语与民族文化背景」, 『语言与翻译』第三期: 109–115 页。
- 刘清荣 2002. 「中外数字文化象征片论」, 『集美大学学报』第三期: 66–60 页。

- 刘喜萍 2007. 「漫谈日本数字文化」, 『和田师范专科学校学报』第六期: 156–157 页。
- 刘向 1998. 『列女传·母仪』, 沈阳: 辽宁教育出版社。
- 刘向集录 1985. 『战国策』, 上海: 上海古籍出版社。
- 刘昫等撰 1975. 『旧唐书』, 北京: 中华书局。
- 刘义庆撰 1999. 『世说新语』, 北京: 中华书局。
- 刘禹锡 1975. 『刘禹锡集』, 上海: 上海人民出版社。
- 刘照雄 1994. 『普通话水平测试大纲(修訂本)』, 长春: 吉林人民出版社。
- 刘志荣 2005. 「从数字的喜好看中日两国文化的异同」, 『日语知识』第七期: 27–28 页。
- 卢春生 1984. 「简论日语成语」, 『外语教学』第四期: 49–52 页。
- 卢永妮 2006. 「浅谈日本的数字文化」, 『科技信息』第十二期: 102 页。
- 鲁宝元 1999. 『汉语与中国文化』, 北京: 华语教学出版社。
- 鲁畅 2002. 「汉日四字熟语研究」, 『外语与外语教学』第五期: 17–18 页。
- 吕不韦 1989. 『吕氏春秋』, 上海: 上海古籍出版社。
- 吕叔湘·丁声树 2012. 『现代汉语词典』, 北京: 商务印书馆。
- 吕友仁·李正辉(注译) 2010. 『周礼』, 郑州: 中州古籍出版社。
- 马晶 2009. 「从“数字观”看日本文化特性」, 『文教资料』第二十一期: 68–69 页。
- 马林芳 1990. 「数词在成语中的一般用法与特殊用法」, 『语文学刊』第一期: 29–31 页。
- 马心丹·李梨 2002. 「日语谚语的探析」, 『日语学习与研究』第三期: 34–40 页。
- 孟郊 1995. 『孟郊诗集校注』, 北京: 人民文学出版社。
- 聂焱 2013. 『常用俗语熟词源头之趣』, 北京: 中国书籍出版社。
- 庞坚 1998. 『先秦诗鉴赏辞典』, 上海: 上海辞书出版社。
- 彭林宜 1988. 『汉日双解熟语词典』, 长春: 吉林教育出版社。
- 普济 1984. 『五灯会元』, 北京: 中华书局。
- 钱泳 1979. 『履园丛话』, 北京: 中华书局。
- 邱凌 2006. 「汉字中数字的文化研究」, 硕士学位论文, 重庆: 重庆师范大学。
- 屈原 1987. 『离骚九歌』, 北京: 人民文学出版社。
- 阮大铖 1986. 『燕子笺』, 上海: 上海古籍出版社。
- 商务印书馆辞书研究中心 2001. 『新华词典(修订版)』北京: 商务印书馆。
- 尚秉和 1980. 『周易尚氏学』, 北京: 中华书局。
- 沈经 1991. 「自然界为什么喜欢“三”」, 『百科知识』第十一期: 44–53 页。

- 施耐庵 1988. 『水浒全传』, 长沙: 岳麓书社。
- 司马迁 1959. 『史记』, 北京: 中华书局。
- 宋濂 2014. 『宋濂全集』, 杭州: 浙江古籍出版社。
- 宋兆麟 1893. 『中国原始社会史』, 北京: 文物出版社。
- 苏轼 1982. 『苏轼诗集·春宵』, 北京: 中华书局。
- 苏勇(点校) 1989. 『易经』, 北京: 北京大学出版社。
- 孙虹·赵国强 2000. 「来自汉语的日语成语溯源」, 『日语知识』第八期: 22-23页。
- 孙玉冰 2009. 「中国传统文化里的“数”」, 『广州城市职业学院学报』第一期: 28-31页。
- 唐圭璋编 1979. 『全金元词』, 北京: 中华书局。
- 唐书文撰 2012. 『六韬·三略译注』, 上海: 上海古籍出版社。
- 唐庶宜 2004. 『数字熟语词典』, 北京: 上海辞书出版社。
- 田小凤 2006. 「从数字观透析中日两国文化的异同」, 『渭南师范学院学报』第三期: 94-95页。
- 田小勇 2011. 「文学翻译模糊取向之数字视角」, 博士学位论文, 上海: 上海外国语大学。
- 童山东 2000. 「尽析其变合窥其端—张德鑫『数里乾坤』的语言学意义」, 『北京大学学报』第四期: 235-238页。
- 童晓燕 2010. 「汉语小数词及其翻译研究」, 硕士学位论文, 无锡: 江南大学。
- 万芳 2009. 「浅析日语中“三”的文化内涵」, 『读与写教育教学刊』第五期: 60-61页。
- 万红梅 2005. 「日语成语的文化阐释」, 『齐齐哈尔大学学报』第一期: 98-100页。
- 王纯 2002. 「中国的数字文化」, 『晋图学刊』第一期: 67-69页。
- 王德春 2008. 『常用惯用语词典』, 上海: 上海辞书出版社。
- 王菲·刘旭宝 2002. 「日汉成语对比研究」, 『西南交通大学学报』第四期: 113-116页。
- 王光民·魏晓艳 2005. 「日语数字读音趣谈」, 『日语知识』第一期: 16-17页。
- 王聚元 1999. 「数字吉凶联想的古今差异」, 『语文学刊』第一期: 13-14页。
- 王珂 1984. 「突厥语民族神秘数字“七”、“四十”探源」, 『民间文学论坛』第四期: 54-60页。
- 王利器撰 2014. 『颜氏家训集解』, 北京: 中华书局。
- 王宁山 2006. 「说“三”」, 『宁波工程学院学报』第一期: 83-85页。
- 王锐 2006. 「日语四字成语与汉语成语在词形、词义上的比较」, 『日语学习与研究』第四期: 43-48页。

- 王硕荃译 2002. 『古今韵会举要辨证』, 石家庄: 河北教育出版社。
- 王同亿 1992. 『新现代汉语词典』, 海口: 海南出版社。
- 王晓丽 2008. 「数字成语一、二、三」, 『中国学外教育』第十一期: 56 页。
- 王晓澎·孟子敏 2000. 『数字里的中国文化』, 北京: 团结出版社。
- 王岩 2012. 『汉语熟语的文化认知』, 郑州: 大象出版社。
- 王云五(编) 1969. 『尚书今注今译』, 台北: 台湾商务印书馆。
- 王忠武 2003. 「从语法看日语谚语」, 『日语知识』第一期: 15-16 页。
- 魏收 1974. 『魏书·阳平王传』, 北京: 中华书局。
- 魏收撰 1974. 『世说新语』, 北京: 中华书局。
- 魏晓燕 2005. 「日语数字读音趣谈」, 『日语知识』第一期: 16-17 页。
- 魏徵·令狐德芬撰 1973. 『隋书』, 北京: 中华书局。
- 吴承恩 2009. 『西游记』, 北京: 中华书局。
- 吴东平 2006. 『汉字的故事』, 北京: 新世界出版社。
- 吴海英 2009. 「英汉数字隐喻的文化认知」, 硕士学位论文, 北京: 中央民族大学。
- 吴慧颖 1995. 『中国数文化』, 长沙: 岳麓书社。
- 吴趼人 2010. 『二十年目睹之怪现状』, 上海: 百花洲文艺出版社。
- 吴敬梓 2002. 『儒林外史』, 上海: 百花洲文艺出版社。
- 吴义方·吴卸耀 2005. 『数字文化趣谈』, 上海: 上海大学出版社。
- 西周生 2014. 『醒世姻缘传』, 长沙: 岳麓书社。
- 萧统 1988. 『文选』, 上海: 百花洲文艺出版社。
- 萧统 2012. 『六臣注文选』, 北京: 中华书局。
- 笑笑生 1998. 『金瓶梅』, 北京: 中华书局。
- 徐辉 2010. 「试探中西方神秘数字“七”的文化根源」, 『大家』第三期: 278-279 页。
- 徐应秋 1993. 『玉芝堂谈荟』, 上海: 上海古籍出版社。
- 许慎 2004. 『说文解字』, 北京: 中华书局。
- 许啸天(编) 1988. 『老子』, 成都: 成都古籍书店。
- 许仲琳 1980. 『封神演义』, 广州: 广东人民出版社。
- 颜静·王宜杰 2010. 「从数字「七」看中西文化差异」, 『科教文汇』第七期: 51-52 页。
- 闫文文 2010. 「特殊数词“一”的研究」, 硕士学位论文, 长春: 东北师范大学。
- 扬雄 1998. 『太玄集注』, 北京: 中华书局。

- 杨彬·朱晓芳 2007. 「说“三”道“四”话成语」, 『中学语文教学』第五期: 62–63 页。
- 杨春 2007. 「从日语成语和谚语来源看日语文化」, 『安徽工业大学学报』第二期: 119–120 页。
- 杨伯峻今译 2008. 『论语』, 北京: 中华书局。
- 杨蕾 2011. 「数字成语研究」, 硕士学位论文, 西宁: 青海师范大学。
- 杨松华 2004. 『大一统制度与中国兴衰』, 北京: 北京出版社。
- 姚灯镇 2000. 「从日语谚语看日本人的传统婚恋观」, 『日语学习与研究』第二期: 26–31 页。
- 姚锡远 1998. 「熟语的种属地位及其定义域」, 『汉字文化』第二期: 38–42 页。
- 叶梦得 1985. 『避暑录话』, 北京: 中华书局。
- 叶舒宪·田大宪 1995. 『中国古代神秘数字』, 1、56、102、130、142–144、241, 北京: 社会科学文献出版社。
- 易兵 2001. 「中国古代模式数字“九”」, 『衡阳师范学院学报』第一期: 111–112 页。
- 于姝楠 2009. 「汉俄成语中数字的语义文化对比研究」, 硕士学位论文, 北京: 对外经济贸易大学。
- 愈绍宝 2002. 「释“五”与“六”」, 『巢湖学院学报』第一期: 70–72 页。
- 袁珂(校注) 1980. 『山海经校注』, 上海: 上海古籍出版社。
- 袁义达·邱家儒 2010. 『中国古今姓氏大辞典』, 南昌: 江西人民出版社。
- 臧晋叔编 1958. 『元曲选·罗李郎』, 北京: 中华书局。
- 张德鑫 1999. 『数里乾坤』, 北京: 北京大学出版社。
- 张桂芳 2007. 「中国数字文化发展的人文生态维度」, 『学习与探索』第一期: 53–55 页。
- 张虹然 2007. 「汉英语言中的数字禁忌—兼谈中西文化差异」, 『河北自学考试第十一期』: 28–29 页。
- 张久宣编 1987. 『圣经故事』, 北京: 中国社会科学出版社。
- 张清常 1990. 「汉语的十五个数词」, 『语言教学与研究』第四期: 54–82 页。
- 张笑梅 1997. 「日语数词使用及其汉语数词的异同」, 『沈阳师范学院学报』第二期: 59–61 页。
- 张秀华 2003. 「日本民族文化的圣数“八”探析」, 『南开学报』第六期: 72–75 页。
- 张秀华 2007. 「数字“三”在日语中的运用及其文化伴随意义」, 『解放军外国语学院学报』第二期: 105–109 页。
- 张艳萍·徐璐 2007. 「论日语谚语中的中国文化因素」, 『外语教学』第二期: 39–42 页。

- 张艳萍 2006. 「论中国文化对日语谚语的影响」, 『西北大学学报』第五期: 165–167 页。
- 张揖撰 1985. 『广雅』, 北京: 中华书局。
- 张涌等 2003. 『现代汉语辞海 (全新版)』, 北京: 中国书籍出版社。
- 张予娜 1993. 「日语成语、谚语、惯用语的分类」, 『湖南大学社会科学学报』第二期: 90–94 页。
- 张郁萍 1994. 「有趣的中日成语结构对比」, 『日语知识』第七期: 35–37 页。
- 张之翰 2009. 『張之翰集』, 长春: 吉林文史出版社。
- 赵军 2007. 「漫谈数字与文化」, 『北京城市学院学报』第二期。
- 赵雪丽 2005. 「语言教学中的文化与语言」, 『山西高等学校社会科学学报』第五期: 89–90 页。
- 郑亨奎 2006. 「汉日成语对比研究」, 『天津外国语学院学报』第一期: 22–25 页。
- 郑丽芸 2004. 「日汉对应成语对比研究」, 『语言教学与研究』第三期: 57–64 页。
- 郑玄注 1990. 『仪礼注疏』, 上海: 上海古籍出版社。
- 中华书局编辑部点校 1999. 『全唐诗』, 北京: 中华书局。
- 周彩莲 2002. 「现代汉语数词研究」, 硕士学位论文, 哈尔滨: 黑龙江大学。
- 周法高 1982. 『金文诂林补』, 北京: 中央研究院历史语言研究所。
- 周荐 2004. 「四字组合论」, 『汉语学报』第一期: 40–46 页。
- 周立波 1956. 『暴风骤雨』, 北京: 人民文学出版社。
- 朱桂元·吴肃民 1984. 『中国少数民族神话汇编开天辟地篇』, 308, 北京: 中央民族学院。
- 朱俊红 2011. 『建中靖国续灯录』, 海口: 海南出版社。
- 朱骏声 1984. 『说文通训定声』, 北京: 中华书局。
- 朱熹 1987. 『孟子集注』, 上海: 上海古籍出版社。
- 朱熹 2010. 『朱子全书·论语』, 上海: 上海古籍出版社。
- 祝鸿熹 1992. 「汉语四字成语的意义切分」, 『语文建设』第八期: 26–27 页。
- 庄周 1989. 『庄子』, 上海: 上海古籍出版社。
- 左丘明 1985. 『国语』, 上海: 上海古籍出版社。
- 左丘明 1988. 『左传』, 长沙: 岳麓书社。